

高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

## 多肥松林遺跡

2016. 2

香 川 県 教 育 委 員 会



S X 02 出土石器



I-1区SR03出土黑青土器



SD 19 出土瓦器碗

# 序 文

本書には、高松土木事務所新設事業に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥上町(たひかみまち)の多肥松林遺跡(たひまつばやしいせき)の報告を取録しています。

多肥松林遺跡からは平安時代前期末～中期初頭の墨書土器が多数出土しました。一遺跡からの出土数としては本県では最も多い出土量となります。「本」や「原」等の積文があり、水路の維持管理に伴う祭祀に用いられた可能性が高いと考えられます。本県では自然流路や出水を主な主水源として灌漑水路が整備されますが、平安時代にはその水量が少なくなり、水の確保が困難を極めました。それを解消するため大規模な水路整備が行われますが、水路だけではなく、主水源となる自然流路でも水を確保のための祭祀が行われており、今も変わらない水に対する切なる想いを垣間見ることができます。

多肥松林遺跡の調査成果が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成28年2月  
香川県埋蔵文化財センター  
所長 真鍋 昌宏

# 例 言

- 1 本報告書は、高松土木事務所新設事業に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥上町に所在する多肥松林遺跡(たひまつばやしせいせき)の報告である。
- 2 発掘調査は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。  
期間 平成6年10月1日～3月31日  
担当 文化財専門員 中川芳和、文化財専門員 北山健一郎、調査技術員 荒川靖子、調査技術員 福西由実子
- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。  
大久保徹也、大嶋和則、渋谷啓一、高上 拓、渡邊 誠、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合(順不同、敬称略)
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は松本和彦が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。  
SA 欄 SH 竪穴建物 SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑  
SD 溝 SR 流路 SX その他の遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 遺物の時期は主に次の文献を参照した。  
信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生時代中期から後期初頭の土器編年-凹線文期を中心にして-」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要I』香川県埋蔵文化財センター

- 信里芳紀 2011「弥生時代中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ（第19次調査）』香川県教育委員会ほか
- 片桐孝浩 2002「須恵器出現前後の土師器について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第43冊 極端遺跡』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(1) 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳具器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』香川県埋蔵文化財センター
- 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』
- 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』

12 石器のトーンは研磨ないし磨滅範囲を示し、矢印は潰れを示す。

※地図は国土地理院地形図を使用しました。

# 本文目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制・整理体制	3
第2章 立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	16
第1節 調査の方法	16
第2節 層序	22
第3節 遺構、遺物	38
第4章 自然科学分析	110
第1節 八稜鏡鉛同位体比分析	110
第5章 総括	117
第1節 多肥松林遺跡出土の石器について	117
第2節 多肥松林遺跡出土の墨書土器について	122
第3節 陸上交通路と物資流通拠点	137
第4節 遺構変遷	142

# 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第50図	I-4区 SX02 (SR01内) 出土遺物2	56
第2図	周辺道路復元図(地割の乱れからの復元)	4	第51図	I-4区 SX02 (SR01内) 出土遺物3	57
第3図	周辺遺跡位置図	6	第52図	I-4区 SX02 (SR01内) 出土遺物4	58
第4図	周辺遺跡居住施設等分布状況 (弥生時代中期中葉)	10	第53図	I-4区 SX02 (SR01内) 出土遺物5	59
第5図	周辺遺跡居住施設等分布状況 (弥生時代後期~終末期)	11	第54図	I-4区 SX02 (SR01内) 出土遺物6	62
第6図	高松平野における8~10世紀(古代)の遺跡	13	第55図	II-3区 SR01 出土遺物	64
第7図	高松平野における12~13世紀(中世)の遺跡	15	第56図	SR02・SR03 平面図及び土層位置図	65
第8図	調査区割図	16	第57図	SR02 出土遺物	66
第9図	遺構平面図	18	第58図	SR03 (SR02) 通し土層図	68
第10図	基本土層図1・2	20	第59図	SR03 (SD14) 通し土層図	69
第11図	基本土層図3・4	21	第60図	SR03埋積状況復元図	70
第12図	I-1区 北壁・東壁土層図	23	第61図	SR03 出土遺物(I-1区以外)	72
第13図	I-2区 北壁・東壁、I-1区 南壁土層図	24	第62図	I-1区 SR03 出土遺物1	73
第14図	I-2区 南壁、I-3区 南壁土層図	25	第63図	I-1区 SR03 出土遺物2	74
第15図	I-3区 北壁、I-4区 北・南壁土層図	26	第64図	IV-3・4区 SR02・03分岐部分 出土遺物	76
第16図	II-1区 北壁・西壁土層図	27	第65図	IV-2区 SD13 平・断面図	77
第17図	II-1区 南壁・東壁土層図	28	第66図	SR04 平面図	79
第18図	II-2区 南壁土層図	29	第67図	SR04 断面図	80
第19図	II-2区 西壁、II-3区 北壁土層図	30	第68図	IV-1区 SR04 出土遺物	81
第20図	III-1・2区 西壁土層図	31	第69図	I-3区 SX03 平・断面図	82
第21図	III-3区 西壁・南壁土層図	32	第70図	I-3区 SX04 平・断面図、出土遺物	82
第22図	IV-1区 南壁土層図	33	第71図	I-3区 SX05 平・断面図	83
第23図	IV-2・3区 南壁土層図	34	第72図	I-3区 SX06 平・断面図	83
第24図	IV-4区 東・南壁土層図	35	第73図	III-3区 SX10 断面図	84
第25図	V-1区 南壁土層図	36	第74図	III-3区 SX11 平・断面図	84
第26図	V-2区 北壁、I-4区・II-3区 東壁土層図	37	第75図	III-3区 SX12 平・断面図	84
第27図	III-3区 SB01 平・断面図	38	第76図	III-3区 SB04 平・立面図	85
第28図	III-3区 SB02 平・断面図	39	第77図	II-1区 SK06 平・断面・遺物出土状況図、 出土遺物	86
第29図	III-3区 SB03 平・立面図	40	第78図	III-3区 SK07 平・立面図	87
第30図	III-3区 SA01 平・断面図	40	第79図	V-1区 SD17・SD18 平・断面図、 出土遺物	87
第31図	V-1区 SP145・SD02・SD05 出土遺物	41	第80図	II-3区 SB05・SP08~SP13・SP25 平・立面図、出土遺物	89
第32図	V-1区 SX01 平面図	42	第81図	IV-1区 SP101~SP104 平・立面図、 出土遺物	90
第33図	V-1区 SX01 関連遺構立(断)面図	43	第82図	I-4区 SK08 平・立面図、出土遺物	90
第34図	V-1区 SK02 平・立面図	44	第83図	III-1区 SK09 平・断面図、出土遺物	91
第35図	V-1区 SK03 平・断面図	44	第84図	IV-1区 SK10 平・断面図	91
第36図	V-1区 SK04 平・立面図	44	第85図	II-3区 SD19 断面図	92
第37図	V-1区 SK05 平・立面図、出土遺物	44	第86図	II-3区 SD19 出土遺物1	94
第38図	III-3区 SD08 断面図、出土遺物	45	第87図	II-3区 SD19 出土遺物2	95
第39図	I-3区 SD09 断面図、出土遺物	45	第88図	II-3区 SD19 出土遺物3	96
第40図	II-1区 SD10 断面図	45	第89図	II-3区 SD20 断面図	96
第41図	IV-1区 SD11 断面図	45	第90図	IV-4区 SD21 断面図	96
第42図	IV-1区 SD12 平・断面図	46	第91図	I-4区 II-3区 SD22 断面図、 出土遺物	97
第43図	自然道路復元図	48	第92図	III-3区 SD23 断面図	97
第44図	SR01 平面図	49	第93図	IV-1区 SD24 断面図	97
第45図	SR01 断面図	50	第94図	IV-1区 SD25 断面図	98
第46図	I-3区 SR01 上層・層位不明 出土遺物	51	第95図	II-3区 SX13 平・断面図、出土遺物	98
第47図	I-3区 SR01 上層炭化材検出状況・中層 (炭化材包含) 平・断面図、出土遺物	52	第96図	IV-4区 SX14 平・断面図、出土遺物	99
第48図	I-4区 SR01 上層・下層・層位不明 出土遺物	53	第97図	V-1区 SX15 平・立面図、出土遺物	100
第49図	I-4区 SX02 (SR01内) 平・立面図、 出土遺物1	55	第98図	III-2区 SD26 断面図、出土遺物	100
			第99図	I-4区 SX16 平・断面図	101
			第100図	I-4区 SX16 出土遺物	102
			第101図	IV-1区 SX17 平・断面図、出土遺物	103

第102図	I-4区 SK11	平・断面図	105
第103図	I-4区 SK12	平・断面図	105
第104図	I-4区 SK13	平・断面図	106
第105図	I-4区 SK14	平・断面図	106
第106図	I-4区 SK15	平・断面図	106
第107図	II-3区 SK16	平・断面図	106
第108図	III-1区 SK17	平・断面図	106
第109図	III-3区 SK18	平・断面図	107
第110図	III-3区 SK19	平・断面図	107
第111図	III-3区 SK20	平・断面図	107
第112図	I-4区・II-3区 SD27	断面図、 出土遺物	108
第113図	III-2区 SX18	平・断面図	108
第114図	IV-2区 SX19・SX20	平・断面図	108
第115図	遺構外 出土遺物		109
第116図	比較対象遺跡位置図		117
第117図	石器分類別数量比 (11～50mm)		118
第118図	石器分類別重量比 (11～50mm)		119

第119図	石器サイズ別数量比 (11mm～)	121
第120図	多肥松林遺跡II 墨書土器集成	130
第121図	香川県墨書土器集成1	131
第122図	香川県墨書土器集成2	132
第123図	香川県墨書土器集成3	133
第124図	香川県刻印・刷印土器集成	134
第125図	香川県刻書土器集成1	134
第126図	香川県刻書土器集成2	135
第127図	多肥松林遺跡における墨書土器・漆申・ 木製模造品分布状況	136
第128図	土器・陶磁器組成グラフ	139
第129図	「さぬきの道者一円日記」に見る移動ルートの 遺跡分布	141
第130図	遺構変遷図1 (弥生時代中期～中期)	144
第131図	遺構変遷図2 (弥生時代後期～終末期)	145
第132図	遺構変遷図3 (平安時代前期末～中期初頃)	146
第133図	遺構変遷図4 (鎌倉時代前期)	147
第134図	遺構変遷図5 (中世後半～近世)	148

## 表目次

第1表	調査区一覧	2
第2表	平成6年度発掘調査体制一覧表	3
第3表	平成27年度整理作業体制一覧表	3
第4表	周辺の調査履歴 (高松市教育委員会2007を基に追記)	7
第5表	SR01出土サヌカイト一覧1	60
第6表	SR01出土サヌカイト一覧2	61
第7表	香川県墨書土器集成一覧1	126
第8表	香川県墨書土器集成一覧2	127
第9表	香川県刻印・刷印土器、刷書土器集成一覧	128
第10表	高松平野の港湾施設及び遺跡の 土器・陶磁器組成表	138
第11表	土器観察表1	151
第12表	土器観察表2	152

第13表	土器観察表3	153
第14表	土器観察表4	154
第15表	土器観察表5	155
第16表	土器観察表6	156
第17表	土器観察表7	157
第18表	土器観察表8	158
第19表	土器観察表9	159
第20表	土器観察表10	160
第21表	土器観察表11	161
第22表	瓦観察表	161
第23表	石器観察表1	162
第24表	石器観察表2	163
第25表	青銅器観察表	163

## 付図目次

多肥松林遺跡(高松土木) 遺構配置図 (S=1/200)

# 写真目次

図版 1	V-2区北壁土層断面 南西より	176
対象地遠景 南より	図版 13	
対象地遠景 東より	Ⅲ-3区SP51(52)(SD01)土層断面 北より	177
図版 2	Ⅲ-3区SP53(54)(SD01)土層断面 北より	177
対象地近景 南より	Ⅲ-3区SB02・SA01 西より	177
対象地近景 北より	図版 14	
図版 3	I-3区SR01 炭化材出土状況 北より	178
I-1区全景 南より	I-4区SX02(SR01内) サスカイト出土状況	178
I-2区全景 南より	I-4区SX02(SR01内) サスカイト剥片出土状況	178
Ⅱ-1区・I-3区全景 北より	図版 15	
図版 4	I-4区SX02(SR01内)	
I-3・I-4区全景 北より	サスカイト剥片出土状況 北より	179
Ⅱ-1区全景 北より	V-1区SX01 西より	179
I-3区・I-4区・Ⅱ-1区・Ⅱ-3区全景 南より	V-1区SX01 北より	179
図版 5	V-1区SX01中央ピット 北より	179
Ⅱ-3区SR01・SD19 南より	IV-1区SD11・12 北より	179
Ⅱ-3区全景 東より	I-1区SR03 遺物出土状況(130)	179
V-1区全景 東より	I-1区SR03 遺物出土状況(131)	179
図版 6	I-1区SR03 墨書土器出土状況(166)	179
Ⅲ-3区全景 南から	図版 16	
Ⅱ-3区南半全景 北から	IV-1区SR04 土器出土状況(209) 東から	180
Ⅱ-2区中央付近 北西より	Ⅱ-3区SB05 西より	180
図版 7	Ⅱ-3区SD19 全景 南より	180
Ⅲ-2区全景 南より	Ⅱ-3区SD19 断面 北より(f-f')	180
IV-1・2区全景 西より	Ⅱ-3区SD19 断面 南西から(g-g')	180
IV-2・3区全景 西より	I-4区SD22 南より	180
図版 8	V-1区SD17(偶蹄目足跡検出状況) 北より	180
I-1区南壁土層断面 北より	IV-1区SX17 北より	180
I-2区南壁土層断面 北より	図版 17 出土遺物 1	181
I-2区北壁土層断面 南東より	図版 18 出土遺物 2	182
図版 9	図版 19 出土遺物 3	183
I-3区南壁土層断面 北より	図版 20 出土遺物 4	184
I-3区南壁土層断面 北より	図版 21 出土遺物 5	185
I-4区南壁土層断面 北東より	図版 22 出土遺物 6	186
図版 10	図版 23 出土遺物 7	187
Ⅱ-2区南壁土層断面 北西より	図版 24 出土遺物 8	188
Ⅱ-3区北壁土層断面 南より	図版 25 出土遺物 9	189
IV-1区南壁土層断面 北西より	図版 26 出土遺物 10	190
図版 11	図版 27 出土遺物 11	191
IV-2区南壁土層断面 北より	図版 28 出土遺物 12	192
IV-3区南壁土層断面 北西より	図版 29 出土遺物 13	193
IV-4区中央部 北西より	図版 30 出土遺物 14	194
図版 12	図版 31 出土遺物 15	195
V-1区南壁土層断面 北西より	図版 32 出土遺物 16	196
V-1区南壁土層断面 北西より		

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

平成元年12月の新高松空港の開港、平成3年の四国横断自動車道（普通寺～高松間）の開通、平成5年の高松東道路の一部供用開始などの高速交通網の整備に伴い、県道改良工事等の公共事業が増大しつつある。香川県土木部土木監理課では、このような状況下、高松市花ノ宮町にある高松土木事務所の業務量と執務面積を勘案し、その移転先を郊外に求め、新設の高松桜井高校（平成7年4月開校）の南側隣接地をその移転先に決定した（事業面積は約1.8ha）。平成4年度末に土木監理課より県教育委員会文化行政課にその旨事前相談があり、協議を開始した。

先行して事業が開始されていた新設高校建設予定地では包蔵地が広範囲に展開しており、今回の対象地にも包蔵地が広がる可能性が高いと判断できるため、試掘調査を平成6年1月19日～22日に実施した。調査の結果、弥生時代の集落遺構、古代～中世の溝状遺構やピット群を検出した。検出遺構は北側に所在する多肥松林遺跡に酷似した内容であり、一部の遺構は連続することから、今回の事業対象地の全域を多肥松林遺跡の範囲に含め、文化財保護法に基づく事前の保護措置が必要と判断された。

その後、土木監理課と文化行政課は協議を重ね、構造物や水路が地下遺構に影響を与える深度に計画されているため、発掘調査が必要と判断され、平成6年度下半期の発掘調査の実施が予定された。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 調査の経過

調査は香川県教育委員会と(財)香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査の委託契約が締結され、平成6年10月から開始することになった。しかし、構造物の規模や配置の決定が遅れたため、配置が確定していた外周水路から調査を開始し、東水路(Ⅰ-4区東辺・Ⅱ-3区東辺)、西水路(Ⅲ-1・2区)、南水路(Ⅳ-1～3区)、東南水路(Ⅳ-4区)、西南水路(Ⅲ-3区)、東暗渠(Ⅴ-1～3区)と調査を進めた。その後、11月に構造物の位置が確定したため、構造物部分の調査に着手し(Ⅰ・Ⅱ区)、平成7年3月31日に調査を終了した。調査面積は5,900㎡を測る。

整理作業は平成27年4月1日より開始し、8月31日に終了した。

調査区名	調査面積(㎡)	備考(報告時調査区名)
外周水路	1,191	Ⅳ-4区、Ⅳ-1～3区、 Ⅲ-3区、Ⅲ-1・2区
暗渠部分	514	Ⅴ-1・2区
本館	2,380	Ⅱ-1～3区
付属棟	1,816	Ⅰ-1～4区
合計面積	5,900	

第1表 調査区一覧

### 第3節 調査体制・整理体制

香川県教育委員会事務局 文化行政課	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
<b>総括</b> 課長 高木 尚 主幹 小原 克己 課長補佐 高木 一義 <b>総務</b> 係長 源田 和幸 主査 星加 宏明(平成6年6月1日～) 主任主事 櫻木 新士(～平成6年5月31日) 主事 藤原 和子(～平成6年5月31日) 主事 高倉 秀子(平成6年6月1日～) <b>埋蔵文化財</b> 係長 藤好 史郎 主任技師 國木 健司 主任技師 森下 英治	<b>総括</b> 所長 松本 豊胤 次長 真鍋 隆幸 <b>総務</b> 係長 土井 茂樹(～平成6年5月31日) 係長 前田 和也(平成6年6月1日～) 参事 別枝 義昭 主査 西村 厚二 <b>調査</b> 参事 糸目 末夫 係長 大山 真充 文化財専門員 中川 芳和 文化財専門員 北山健一郎 調査技術員 荒川 靖子(～平成6年12月31日) 調査技術員 福西由実子(平成7年2月1日～) 調査補助員 田村 久雄

第2表 平成6年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<b>総括</b> 課長 増田 宏 副課長 小柳 和代 <b>総務・生涯学習推進グループ</b> 課長補佐 愛染伊知朗 副主幹 松下由美子 主事 和木 麻佳 <b>文化財グループ</b> 課長補佐 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重 文化財専門員 乗松 真也	<b>総括</b> 所長 真鍋 昌宏 次長 前田 和也 <b>総務課</b> 課長(兼) 前田 和也 主任 寺岡 仁美 主任 高木 秀哉 主任 中川 美江 主任 丸尾 麻知子 主任 岩崎 昌平 <b>資料普及課</b> 課長 森 格也 主任文化財専門員 松本 和彦

整理作業に携わった方々は次のとおりである。

青屋真理、大林真沙代、川井佐織、田中沙千子、中野優美

第3表 平成27年度整理作業体制一覧表

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

多肥松林遺跡は高松平野中央南寄りに位置する。巨視的には香東川を中心とした営力によって形成された扇状地上にあり、南から北に緩やかに傾斜し（周辺の標高は22～23m）、条里型地割が比較的良好に遺存する地域となる。

その一方、調査地周辺は地割の乱れが帯状もしくは網の目状に繋がり、旧河道の痕跡として認識できる（第2図）。なかでも、南北方向に直線的に延び、当遺跡の南方約350m付近で北東に屈曲する旧河道は高松平野中央部では極めて重要な主水源であり（旧河道Aと仮称）、遺跡の分布や現在まで続く灌漑システム等に大きな影響を与える。北東に屈曲した旧河道Aは当遺跡の真南で200mを上回る幅に広がり、北上する旧河道A1と埋没中洲を介して東北東方向へ延びる旧河道A2に分岐し、前者は調査地の中央部を縦断する。後者はさらに北東に延び下池へと連続する流路と分ヶ池（旧池台池）を経由して東に延びる流路に再分岐する。また、西ないし北西に延びる流路も地割の乱れ等から復元できる（旧河道A3）。当調査地内では旧河道部分は周辺地形より標高が低く谷状地形を呈し、ほぼ中央部には伏流水を利用した灌漑用の小規模な溜め井である出水を認める（V-3区）。

よって、当調査地では中央部を旧河道A1が縦断し、その両脇である西側と北東に安定した微高地状の扇状地が展開するという地理的環境が復元できる。



第2図 周辺流路復元図（地割の乱れからの復元）

## 第2節 歴史的環境

### 周辺の発掘状況

当該地周辺では発掘調査例が多く、県下では随一の進捗状況となる。遺跡名は行政が付与する略号ともいえるが、本県では小字名を遺跡名とするケースが比較的多い。周辺では現時点で4つの遺跡名があり、南北に延びる都市計画道路の東側が日暮・松林遺跡、その南東側が多肥宮尻遺跡、西側が多肥松林遺跡、さらにその西側が松林遺跡となる。本県では小字範囲が比較的に広いので、隣接地で遺跡が確認された場合には、遺跡名の付与が複雑になり、当該地周辺では同一集落のみならず、連続する遺構でさえも別遺跡名が冠せられる事態が生じている。近年ではその混乱を整理するため、遺跡名ごとに次で表記する試みもあり（高松市教育委員会2007）、本書でもそれを踏襲する（第3図、第4表）。

以下、各報告書に依拠し各遺跡の概要を記す。

**松林遺跡（1次、通学路）** 堅穴建物4棟を含む弥生時代中期中葉の遺構が展開する。震度6以上の地震による液状化現象が7箇所で見出され、噴霧への土器供献も認める。弥生時代後期に集落は連続せず、大溝を含む溝4条の確認に留まる。古代～中世期の居住域も確認できない。

**松林遺跡（2次、宅地造成）** 弥生時代中期中葉の遺構が数基検出され、調査地の北東隅に当該期の集落の南限が想定されている。1次と同様に噴霧も認める。中期後半～後期に集落は連続しないが（遺構は未検出）、中期後半～終末期までの遺物は出土する。古墳時代後期～奈良時代では条里施工以前の溝を含む溝が数条確認できる。奈良時代以降では周辺地割に合致した方位の掘立柱建物も認める。

**多肥松林遺跡（1次、桜井高校）** 当調査地の北に位置し、流路の一部は連続する。縄文時代晩期から近世期までの複合遺跡。縄文時代晩期は流路の検出に留まるが、続く弥生時代前期には中央を北上する旧河道から取水し、微高地を横断する大溝が確認でき、当該地周辺での初期開発の痕跡となる。集落域としての展開は続く中期中葉からとなる。中央を縦断する流路からは多量の木製品が出土し（旧河道A）、その両脇の微高地に集落域が広がる。東側では堅穴建物10棟弱と掘立柱建物5棟強、西側では堅穴建物の周囲に配された周溝が4基以上検出されている。さらに、東に所在する日暮・松林遺跡（1次、都市計画道路）では掘立柱建物を十数棟認め、中央流路（旧河道A1）の東側では掘立柱建物、西側では堅穴建物を主体とした集落構成が窺える。なお、西側微高地は当該期の洪水砂を認め、洪水被害を受けた状況が想定される。一定期間の空白期を経て弥生時代後期末～終末期の堅穴建物が東西微高地に点在するが（東側5棟、西側2棟）、中期中葉段階の占有面積が広い状況は想定できない。その後、9～10世紀に南西部を中心に60mを超える大型建物を含む掘立柱建物群を数棟認め、地形の平準化に伴って再び居住域が展開する。肩帯を杭と盛土で補強した6m幅の溝も開削され、多量の高串が出土し、祭祀との関連が指摘される。続く中世期には北端部に掘立柱建物を検出するが、大部分は小溝や鋤溝、畑痕跡等から耕作域としての利用が想定できる。

**多肥松林遺跡（3次、県道）** 未報告。本調査地の南に所在し、一部には連続する遺構も確認できる。4条の流路とその間隙に所在する微高地や埋没中洲が検出され、流路の一部は当調査地にも連続する。流路は弥生時代前期、中期後半～後期末ないし古墳時代後期、平安時代前半期の遺物を包含し、埋没後には平安時代後期～鎌倉期の遺構が展開する。また、流路内に弥生時代後期中葉以降に属し、板材・丸太材・自然木・木杭等からなる堰状遺構、水溜状遺構、溝状遺構のセット関係から構成された取水施設が検出されている。また、平安時代後期に属する掘立柱建物群が集中する箇所も認める。



第3図 周辺遺跡位置図

遺跡名	回数	調査期間	面積 (㎡)	調査機関	報告書
松林遺跡 (通学路)	1次	1995.5.19～ 1995.11.8	1,000	高松市教育委員会	1
松林遺跡 (宅地造成)	2次	2004.4.1～ 2004.4.12	800	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡 (桜井高校)	1次	1993.4.26～ 1994.9.6	17,600	(財)香川県埋蔵文化財 調査センター	3
多肥松林遺跡 (高松土木)	2次	1994.10.1～ 1995.3.31	5,900	(財)香川県埋蔵文化財 調査センター	本書
多肥松林遺跡 (県道)	3次	1997.4.1～ 1997.12.31	7,000	(財)香川県埋蔵文化財 調査センター	4
多肥松林遺跡 (高松南警察署)	4次	2003.12.1～ 2004.3.31	2,000	(財)香川県埋蔵文化財 調査センター	5
多肥松林遺跡 (電器店)	5次	2005.11.16～ 2005.11.28	320	高松市教育委員会	6
日暮・松林遺跡 (都市計画道路)	1次	1993.11.15～ 1995.9.29	11,600	高松市教育委員会	7
日暮・松林遺跡 (済生会)	2次	2002.5.12～ 2002.7.31	2,200	高松市教育委員会	8
日暮・松林遺跡 (農道)	3次	2004.5.12	70	高松市教育委員会	9
日暮・松林遺跡 (フィットネスクラブ)	4次	2004.12.1～ 2005.1.7	800	高松市教育委員会	10
日暮・松林遺跡 (共同住宅)	5次	2004.12.11～ 2004.12.13	124	高松市教育委員会	11
日暮・松林遺跡 (特養ホーム)	6次	2004.6.23～ 2004.8.27	1,500	高松市教育委員会	12
日暮・松林遺跡 (事務所)	7次	2006.10.10～ 2006.10.12	100	高松市教育委員会	13
日暮・松林遺跡 (共同住宅)	8次	2006.11.20～ 2006.12.2	490	高松市教育委員会	14
日暮・松林遺跡 (フィットネスクラブ増築)	9次	2007.3.1～ 2007.3.27	2,892	高松市教育委員会	未報告 (14)
多肥宮尻遺跡 (県道)	1次	1997.4.1～ 1999.9.30	12,245	(財)香川県埋蔵文化財 調査センター	15～17
多肥宮尻遺跡 (宅地造成)	2次	2004.7.5～ 2004.7.16	205	高松市教育委員会	18
多肥宮尻遺跡 (衣料品販売店舗)	3次	2005.11.21～ 2005.11.25	180	高松市教育委員会	19
弘福寺領讃岐国田岡調査区 (F地区)				高松教育委員会	20

第4表 周辺の調査履歴（高松市教育委員会2007を基に追記）

## < 報告書一覧 >

### 【松林遺跡】

- 1 大嶋和則編 1996「香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡」高松市教育委員会
- 2 大嶋和則編 2004「宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林遺跡(第2次調査)」高松市教育委員会

### 【多肥松林遺跡】

- 3 山下平重編 1999「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 4 西村尋文 1998「多肥松林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 5 宮崎哲治 2005「高松南警察署移転整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡」『香川県埋蔵文化財調査センター年報』平成15年度香川県埋蔵文化財センター
- 6 大嶋和則編 2006「多肥松林遺跡(電器店)」『電器店建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会

### 【日暮・松林遺跡】

- 7 山本英之・中西克也編 1997「都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡」高松市教育委員会
- 8 大嶋和則編 2003「香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(済生会)」高松市教育委員会
- 9 大嶋和則編 2005「日暮・松林遺跡(農道)」『高松市内遺跡発掘調査概報-平成15年度国庫補助事業-』高松市教育委員会
- 10 小川 賢編 2005「フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(フィットネスクラブ)」高松市教育委員会
- 11 大嶋和則 2005「日暮・松林遺跡(共同住宅)」『高松市内遺跡発掘調査概報-平成15年度国庫補助事業-』高松市教育委員会
- 12 大嶋和則編 2005「日暮・松林遺跡(済生会特養ホーム)」高松市教育委員会
- 13 小川 賢 2007「日暮・松林遺跡(事務所建設)」『高松市内遺跡発掘調査概報-平成18年度国庫補助事業-』高松市教育委員会
- 14 渡邊 誠編 2007「日暮・松林遺跡」『共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会

### 【多肥宮尻遺跡】

- 15 松本和彦ほか編 1998「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 16 植松邦浩ほか編 1999「多肥宮尻遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 17 小野秀幸ほか編 2000「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 18 小川 賢ほか編 2004「宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡」高松市教育委員会
- 19 大嶋和則編 2006「衣料品販売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡(衣料品販売店舗)」高松市教育委員会

### 【その他】

- 20 山本英之編 1999「讃岐国弘福寺領の調査」『第2次弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書』高松市教育委員会

**多肥松林遺跡（4次、高松南警察署）** 当調査地V-1区とⅢ-1・2区に接する箇所に位置し、連続する流路や溝状遺構を認める。弥生時代後期、平安時代に属する遺構・遺物を認め、前者は竪穴建物3棟、掘立柱建物4棟、後者は掘立柱建物1棟を含む溝・土坑等で構成される。

**多肥松林遺跡（5次、電器店）** 当調査地の西側に位置し、試掘調査の結果と合わせて流路の復元及び古墳時代後期～平安時代の集落跡が検出されている。

**日暮・松林遺跡（1次、都市計画道路）** 当調査地の東側に位置し、遺構の一部は連続する。弥生時代では、前期末～中期初頭の溝状遺構を認める程度だが、続く中期中葉には大規模に集落が展開する。掘立柱建物17棟を認め、集落の中心域を形成する。その後、空白期を経て弥生時代後期末～終末期に集落が再び営まれ、竪穴建物8棟以上が一定箇所に集中する。中期中葉の中心域とは地点が異なり、やや北側に移動する。また、多肥宮尻遺跡から連続する基幹水路が南端部で確認でき、古墳時代後期から緩やかに埋没した状況を呈し、中世段階での最終埋没が想定される。基幹水路は多肥宮尻遺跡（1次）SR02を主水源とし、日暮・松林遺跡（6次）SD1、日暮・松林遺跡（2次）SD1、日暮・松林遺跡（8次）SD002、日暮・松林遺跡（4次）SD01と連続する。弥生時代中期中葉までには開削された可能性が高く（信里2008）、おそらくは古墳時代後期まで維持・管理がなされる。中世期には溝状遺構が中心となり、一部にはため池状の水溜め施設も認め、耕作域としての利用が想定できる。なお、当調査地から連続する溝や基幹水路からは和泉型瓦器が多量に出土する。

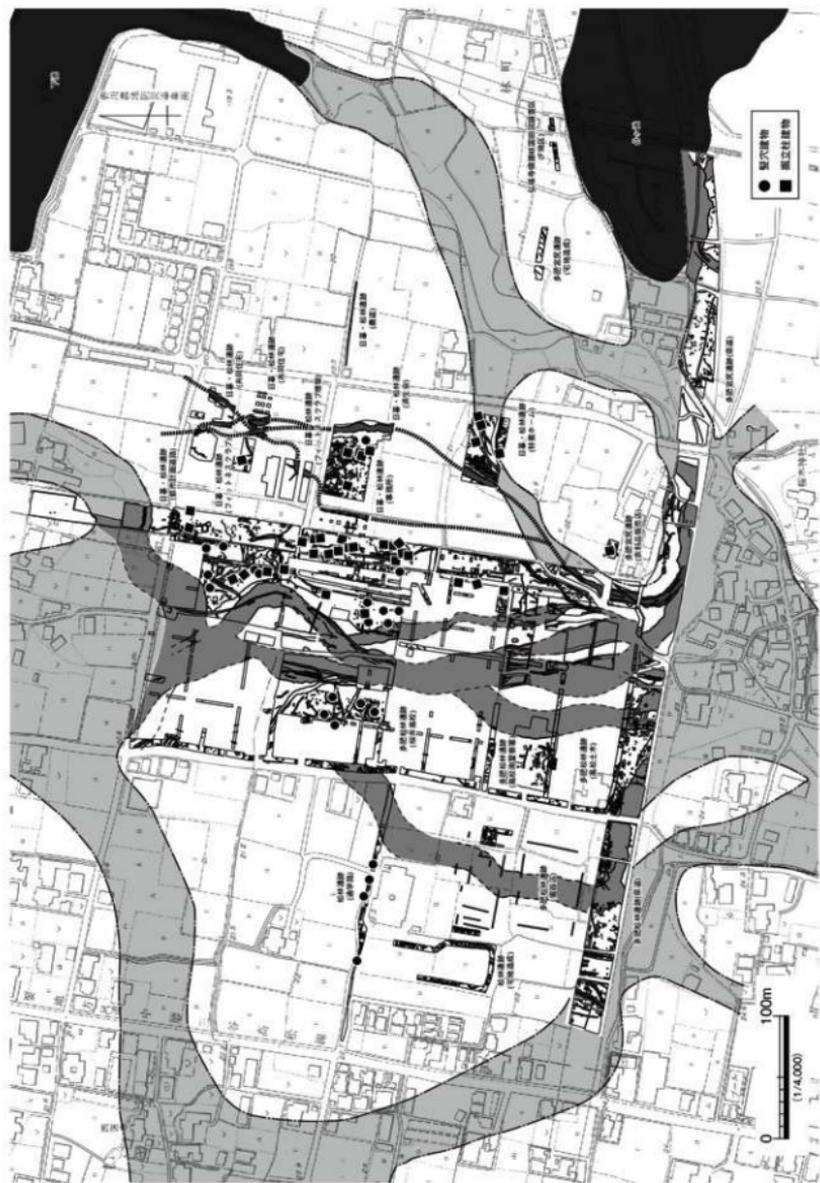
**日暮・松林遺跡（2次、済生会）** 弥生時代中期中葉の掘立柱建物が5棟以上検出されており、竪穴建物を構成する可能性があるピットもあり、日暮・松林遺跡（1次、都市計画道路）で認める集落の縁辺部を形成するとともに、東辺には多肥宮尻遺跡から続く基幹水路を認める。弥生時代中期中葉、後期、古墳時代後期の遺物を包含し、その開削は中期中葉まで遡る可能性が高い。その後一定の空白期を経て、弥生時代終末期の竪穴建物が展開するようになるが、遺構密度は高くない。また、古墳時代後期の掘立柱建物が1棟検出されるが、やはり散漫な分布となる。

**日暮・松林遺跡（4次、フィットネクラブ）** 弥生時代中期中葉まで遡る可能性が高い掘立柱建物1棟、終末期に属する土坑、溝等が検出されている。削平の度合いもあるが遺構密度は高くない。また、北東隅では多肥宮尻遺跡から続く基幹水路を認め、弥生時代中期中葉、終末期に属する遺物が埋土から出土し、さらにその被覆土から古代に属する須恵器も出土する（機能停止は古代）。

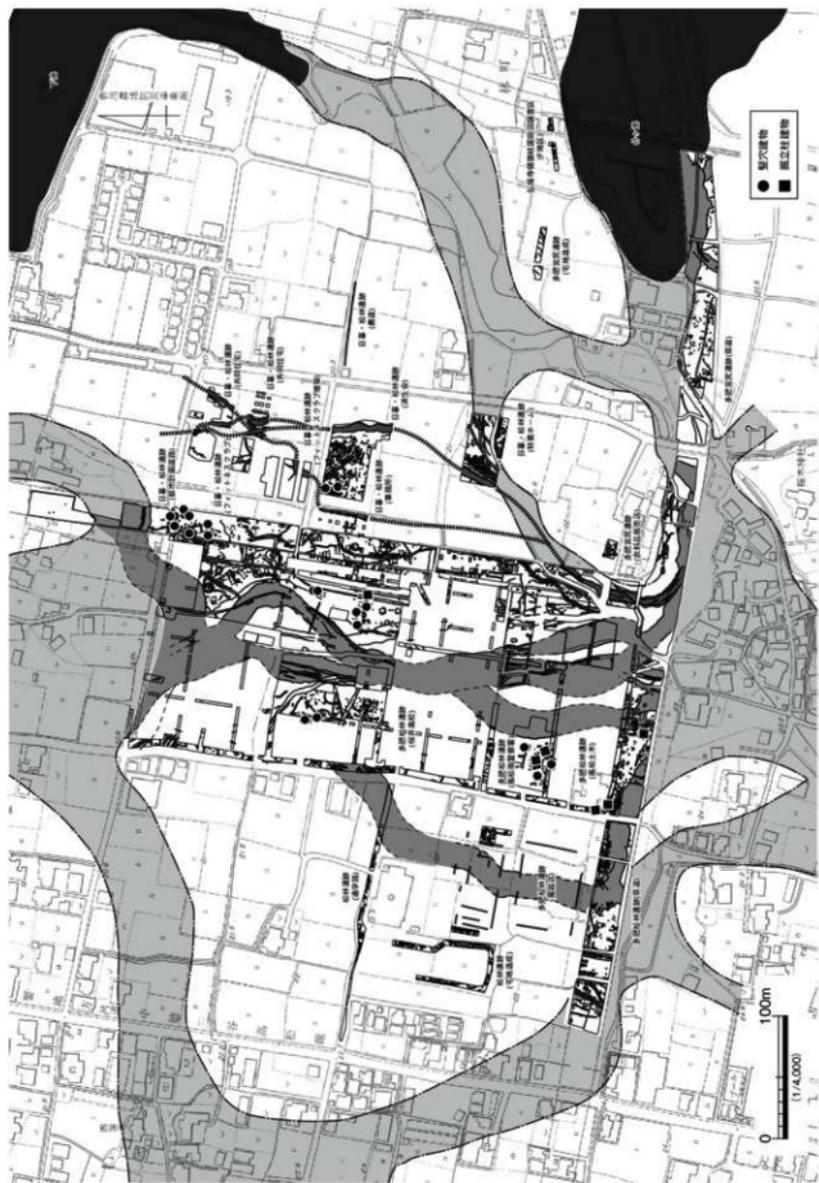
**日暮・松林遺跡（5次、共同住宅）** 溝状遺構が数条検出され、西端部の溝は多肥宮尻遺跡から続く基幹水路となる。溝最下層出土遺物は弥生時代後期後半が多く、8・9世紀代の遺物が少量混じるが、連続性や機能を考慮すると、弥生時代中期中葉まで遡る可能性を想定しておきたい。さらに、東端部で検出された溝は微高地を縦断して開削された溝状遺構であり、灌漑水路として重要な意味を持つ。出土遺物や連続性から遅くとも弥生時代後期後半には開削されていたと考えられる。

**日暮・松林遺跡（6次、特養ホーム）** 調査区東半が旧河道A2内にある埋没中洲の縁辺部に相当し、西半は旧河道A2内となる。前者には弥生時代中期中葉に属する掘立柱建物が4棟以上展開し、後者には複数条の溝を認める。溝の一部は多肥宮尻遺跡から続く基幹水路で、7世紀代の埋没が想定される。弥生時代中後期～終末期の土器を認め、開削が弥生時代中期まで遡ることを示唆する。その他の溝群は8～9世紀代の遺物が主体を占め、10世紀初頭には埋没するものと考えられる。

**日暮・松林遺跡（7次、事務所）** 日暮・松林遺跡1次と2次の間隙に位置する。構造物の基礎部分の調査が主体となるため、調査面積は少ないが、溝状遺構が数条検出される。SD1は微高地を縦断す



第4図 周辺遺跡居住施設等分布状況 (弥生時代中期中葉)



第5図 周辺遺跡居住施設等分布状況（弥生時代後期～終末期）

る溝で、5次の溝に連続する。弥生時代中期中葉が主体を占め、後期末～終末期の土器を少量含む。

**日暮・松林遺跡（8次、共同住宅）** 構造物基礎部分のみの調査となるため、調査面積は少ないが、数条の溝状遺構が検出される。SD1は多肥宮尻遺跡から連続する基幹水路で、弥生時代中期中葉頃の土器を少量含む。さらに、微高地を縦断し、日暮・松林遺跡（5次）に連続する溝状遺構も認める。

**多肥宮尻遺跡（1次、渠道）** 未報告。東側では南から広がる微高地、西側では埋没中洲の縁辺部を認め、それを取り巻くように6条の流路が流れる。流路は縄文時代晩期、弥生時代前期中葉～後期、弥生時代中期～後期・古墳時代後期・古代、古墳時代中期末・古代と包含する遺物の時期がそれぞれ異なる。流路からは弥生時代に属する多数の木製品も出土する。流路の一部は総延長450m以上に及ぶ基幹水路（大溝）となる。また、東側の一部では瓦器碗が比較的多く出土するピット群を認めるが（鎌倉期）、概して居住施設は稀薄である。

**多肥宮尻遺跡（2次、宅地造成）** 分ヶ池の北西に位置し、数条の溝状遺構3条、流路が検出されている。溝状遺構2条は下層に弥生時代前期末～中期初頭の土器を含み、当該期の開削、弥生時代後期の埋没が想定できる。もう1条の溝は弥生時代後期の開削、8世紀代の最終埋没が想定されている。

**多肥宮尻遺跡（3次、衣料品販売店舗）** 旧河道A2内に所在する埋没中洲に位置する。弥生時代前期末の土器を含む南北方向の溝を1条認め、周辺に弥生時代に属するであろうピットが散漫に分布する。古墳時代後期～古代に属する遺構は確認できないが、遺物は一定量出土するようである。

周辺遺跡の状況を踏まえると、当調査地周辺における弥生時代から古墳時代の遺跡動向を下記のようにまとめることができる。

縄文時代晩期は刻目突帯を施す深鉢等が多肥松林遺跡（1次・2次）、多肥宮尻遺跡（1次）で出土するが、いずれも流路資料となり、集落の形成には至っていない。続く弥生時代前期も同様に多肥松林遺跡（1次、桜井高校）で前期中葉頃に溝状遺構が開削されるが、居住施設は確認できない。多肥宮尻遺跡（1～3次）、日暮・松林遺跡（1次）では前期末～中期初頭の溝状遺構を認めるが、やはり明確な居住域は認められない。ただし、溝は灌漑水路に関連する可能性が高く、集落域は未確認ながら縄文時代晩期とは様相が異なる。

集落が形成されるのは中期中葉となる（第4図）。日暮・松林遺跡（1次）、多肥松林遺跡（1次）を中心とした多肥遺跡群では微高地A・Bの比較的大範囲に集落が展開する。微高地Bでは掘立柱建物、微高地Aでは堅穴建物を主体とした集落構成が窺える。多肥松林遺跡（1次）では微高地Aが当該期に洪水被害を受けた状況が想定され、松林遺跡（1次）では震度6以上の地震が当該期にあった可能性が指摘される。中期中葉の集落は中期後半には継続せず、自然環境変化の影響が一要因と考えられる。その後、後期中葉頃から集落形成が再び認められ、後期末～終末期には多肥松林遺跡（1次）、日暮・松林遺跡（1次）で中心となるような集落が再出現する（第5図）。中期中葉段階のように大範囲を占有するような分布ではなく、小規模な集落域が点在する状況となる。集落は古墳時代前期には継続せず、古墳時代中期末～後期になり、ようやく流路ないし溝から当該期の遺物が出土するようになる。日暮・松林遺跡（2次）で当該期の可能性のある掘立柱建物跡が確認された以外、居住施設は未確認となる。

その一方、灌漑水路の維持・管理との関係は留意すべき問題となる（渡邊2007、信里2008）。多肥宮尻遺跡（1次）SR02を主水源とし、日暮・松林遺跡の各調査地の溝を經由して、総延長は450m以上に達する。弥生時代中期中葉には開削されており、おそらくは古墳時代後期まで維持・管理がなされ

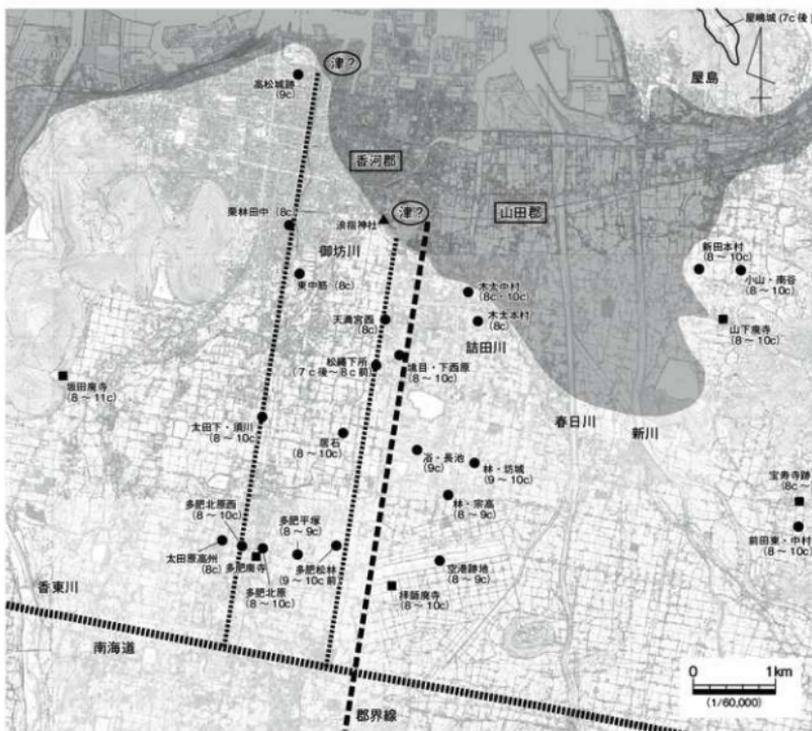
た基幹水路である。こうした状況は集落の動向とは異なるものであり、主水源と基幹水路を基調とした高松平野における複雑な集団関係が背後に存在するものと推測できる。

古代以降については、多肥松林遺跡（1次）や当遺跡で9世紀末～10世紀前葉に灌漑水路が比較的大規模に整備された状況を認める。主水源の水量減少に伴う再整備と理解でき、第5章第2節で検討するように、斎串や木製模造品等を用いて水路維持に伴う祭祀が執り行われた状況が復元でき、当遺跡で多数出土した墨書土器も祭具の一つであった可能性が高い。

### 高松平野の古代の遺跡分布

当調査地（多肥松林遺跡（高松土木））では10世紀初頭の墨書を認める須恵器・黒色土器が19点出土しており、現時点では県内で墨書土器の出土数が最も多い遺跡となる。ここでは、遺跡の性格や位置付けとも関連するため、高松平野における古代の遺跡の状況を概観したい（第6図）。

主として8～10世紀の遺跡を概観するが、直前の屋嶋城は看過できない存在となり、その後の遺跡の動向に大きな影響を与える。特に、古・高松湾の東側の古高松エリアに所在する小山・南谷遺跡、新田本村遺跡は屋嶋城との関連性が指摘され、高松平野の条里型地割とは異なる地割の施工、圍足礎、土馬、



第6図 高松平野における8～10世紀（古代）の遺跡

墨書土器等、官衙的色彩の強い遺物が数多く出土する。その南には前田東・中村遺跡が所在する。斎串・人形・刀形の木製祭祀具、帯金具、土馬、硯、墨書土器、陶印、緑釉・灰釉陶器等、官衙的色彩が強く、公的施設の存在、祇所との関連が想定される。

一方、古・高松湾の西側及び高松平野中央部にも比較的多くの遺跡が展開する。木製祭祀具は太田下・須川遺跡、折石遺跡、木太本村遺跡、多肥松林遺跡（1次、桜井高校）、硯は多肥松林遺跡、多肥北原西遺跡、空港跡地遺跡等で確認できる。水田遺構が居石遺跡や浴・長池遺跡、天満・宮西遺跡等で検出されており、付近には弘福寺領讃岐国田岡の比定地も存在する。また、陸上交通路の解明も進展しつつある。平野南部を東西に直線的に横断する南海道の検出例は稀薄だが、近年平野を東西、南北に走る道路遺構の確認例が増加する。南北道では松縄下所遺跡で7世紀後半に開削され、8世紀後半まで機能した道路遺構とそれに合致した主軸方位の掘立柱建物や欄列が検出されている（開削時期は8世紀前葉まで下る可能性が高い）。南北に延伸した箇所所在する遺跡では道路遺構は未検出だが、南海道から直線的に延びると仮定すると、当調査地の東に所在する日暮・松林遺跡（1次、都市計画道路）、松縄下所遺跡、天満宮西遺跡と続き、海浜部に至る。周辺には波指神社があり、御坊川河口付近に所在する津の存在も想定される箇所であり（石上1992）、海上交通路の拠点となる津と陸上交通路の拠点となる南海道を直線的に直結させた幹線道路的性格を付与することもできる。さらに、多肥北原西遺跡では南北、東西道路のみならず、交差部分も検出されている。道路が機能した時期は8～10世紀となる。このうち、南北道路について、南海道を起点に多肥北原西遺跡を経由して北に延伸すると、太田下・須川遺跡で側溝の可能性のある溝に連続し、その延長線上には高松城跡築城以前の古代遺構・遺物集積地があり、本南北道路の目的地であったと指摘されている（乗松2015）。古代の津の状況は明らかではないが、古代末～中世初頭に属する港湾施設に近接しており（高松城跡（東町奉行所跡）、小川2005）、先に見た南北道路と同様の性格を持った幹線道路と評価できる。

#### 高松平野の中世の遺跡分布

本調査地SD19からは多量の瓦器碗が出土する。高松平野では高松城跡の下層遺構として古代末～中世期初頭の港湾施設が確認され、和泉型瓦器碗の二次的集積地という評価がなされており（佐藤2003）、集積地と集落の関係が踏まえた瓦器碗の流通状況を考える上では重要な地域となる。ここでは港湾施設と遺跡の状況を整理しておく（第7図）。

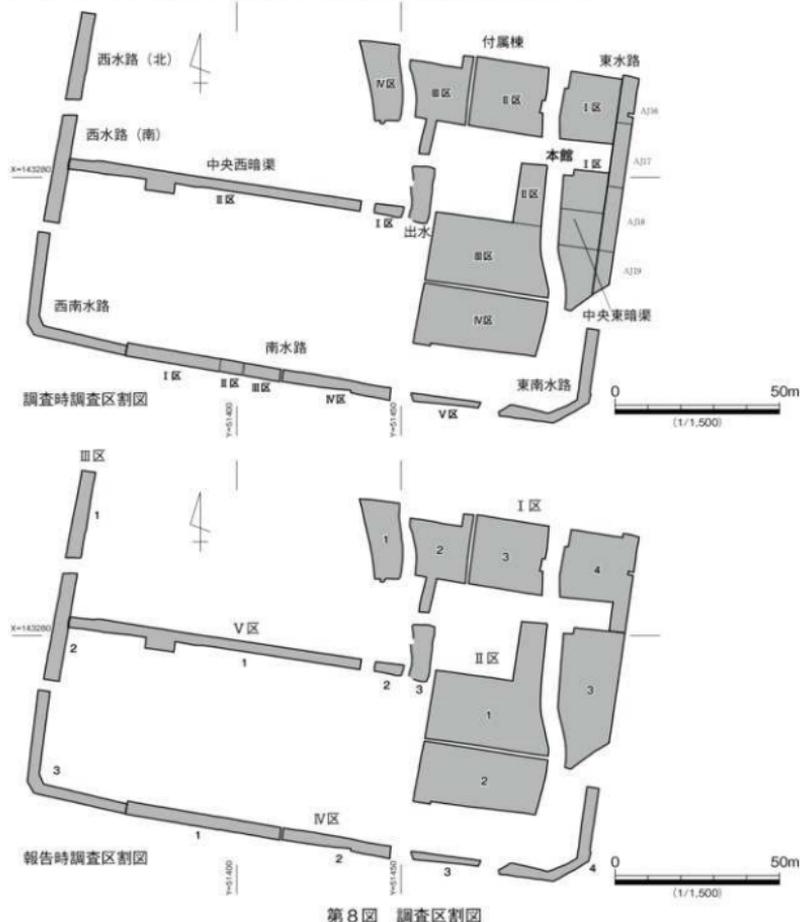
近世の干拓事業以前、高松市街地には高松城跡が所在する地点と庵治岬を両突端とし、間口約4km、奥行き3km前後を測る大きく湾入した入江が存在した（古・高松湾）。これまで「兵庫北関入船納帳」に記された高松城跡築城以前の野原港の実態は明らかではなかったが、平成7年から調査を開始した駅前再開発に伴う発掘調査で汀線に沿って敷設された礫敷遺構や杭と横木を組み合わせた係留施設等を整備した港湾施設が確認された。細長く東西に延びる砂堆と背後に形成される潟湖という自然地形が利用される。礫敷遺構からは多量の中世土器が出土し、非在地系土器・陶磁器組成が高く、なかでも和泉型瓦器の比率が極めて高い状況であった。器表面や高台底面に摩耗痕跡が認められず（未使用）、積み荷として荷揚げされた瓦器の破損状況を確認し、破損品を廃棄したものと考えられ、前述したように検出された港は和泉型瓦器の二次的集積地であったと評価される。同様に、高松城跡（東町奉行所跡）でも舟入状の施設を整備した状況が想定でき、高松城跡（西の丸町地区）と同様に高い瓦器組成比率を示し、未使用品を多く認めることから、港湾施設の存在が推測できる。高松城跡の下層から検出された両港湾

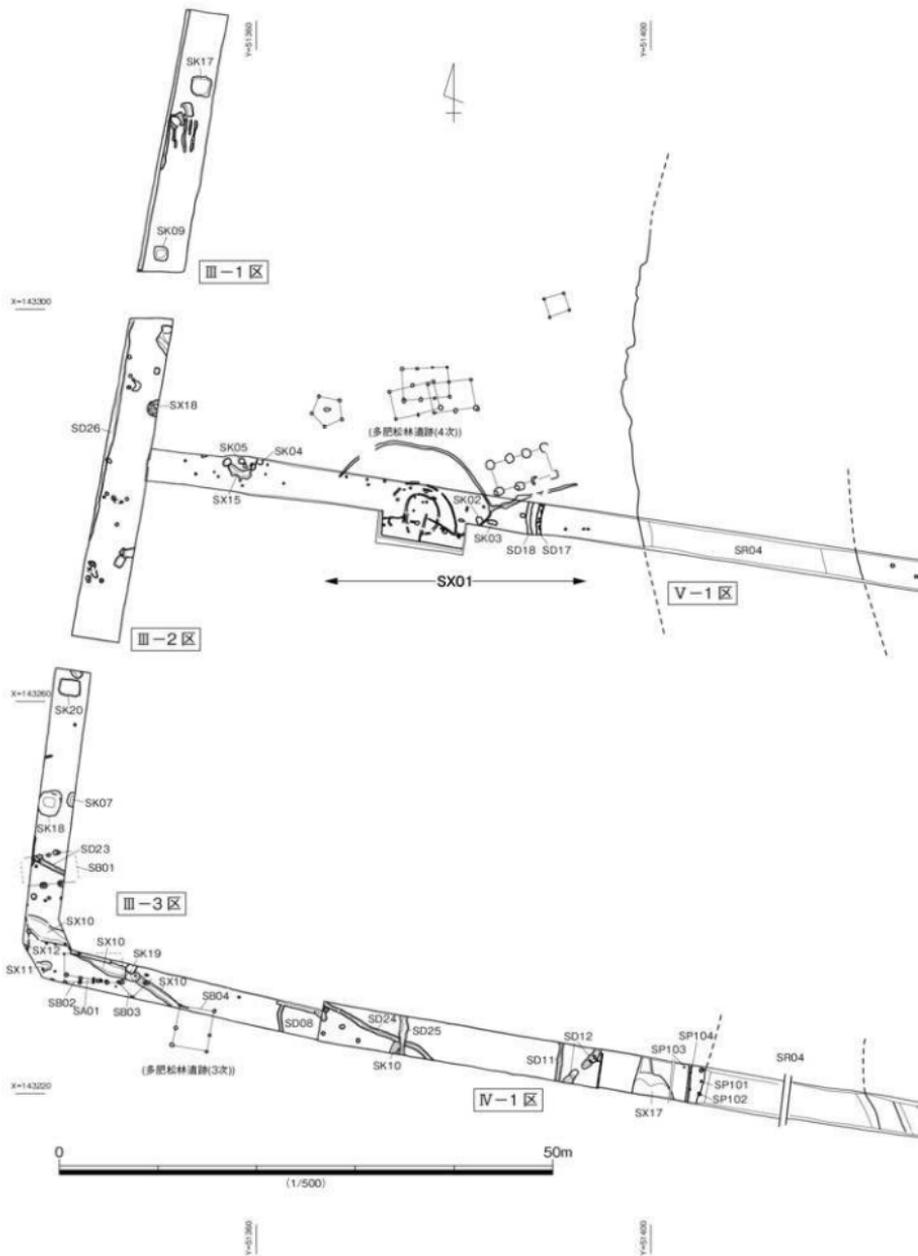


### 第3章 調査の成果

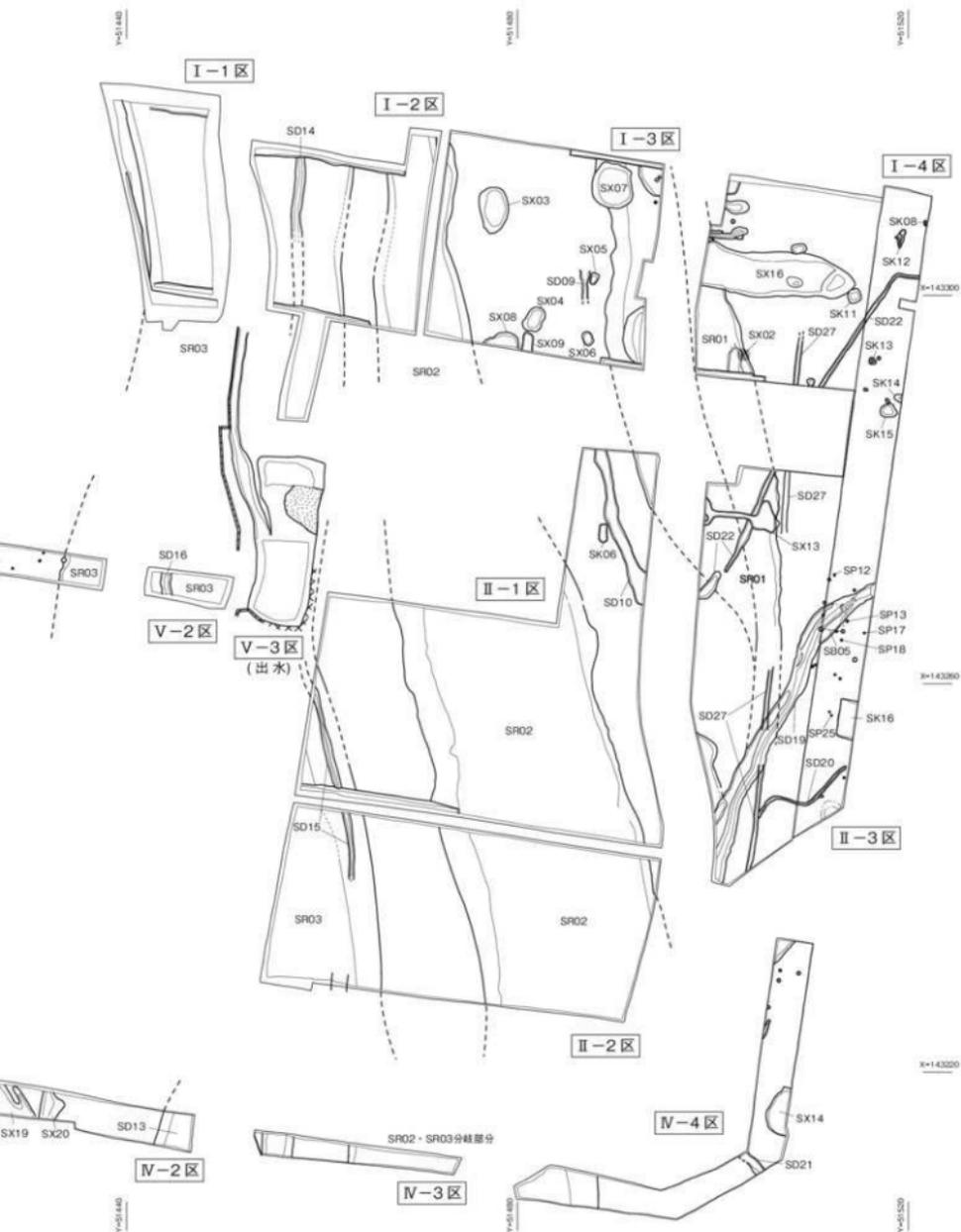
#### 第1節 調査の方法

前述したように、平成6年9月から調査を開始したが、構造物の規模や配置の決定が遅れたため、配置が確定していた外周部分の水路から調査を開始した。北側の新設高校建設予定地の調査が先行しており（多肥松林遺跡（1次、桜井高校）、外周部分であるⅢ・Ⅳ区等の調査内容と合わせて、当初は調査予定地の全容把握に努めた。その後、構造物の規模・配置が確定したため、11月からⅠ・Ⅱ区の調査を実施した。なお、第8図に調査時と本報告時の調査区割対応図を示した。





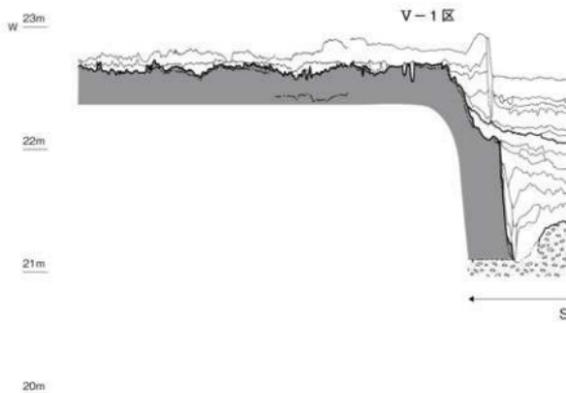
第9図



構造平面図

■基本土層図①

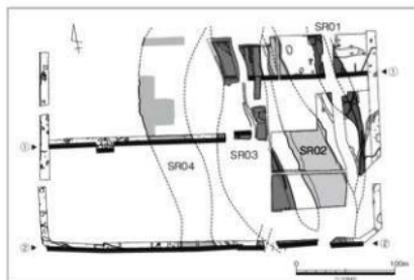
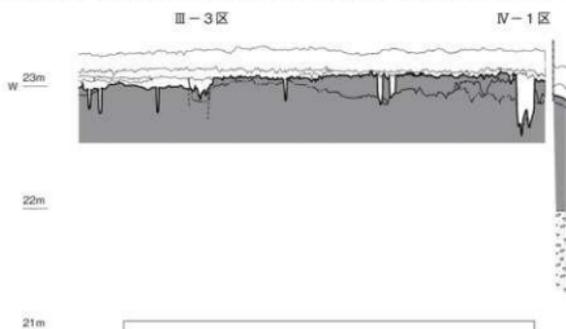
(V-1区~I-1~4区)



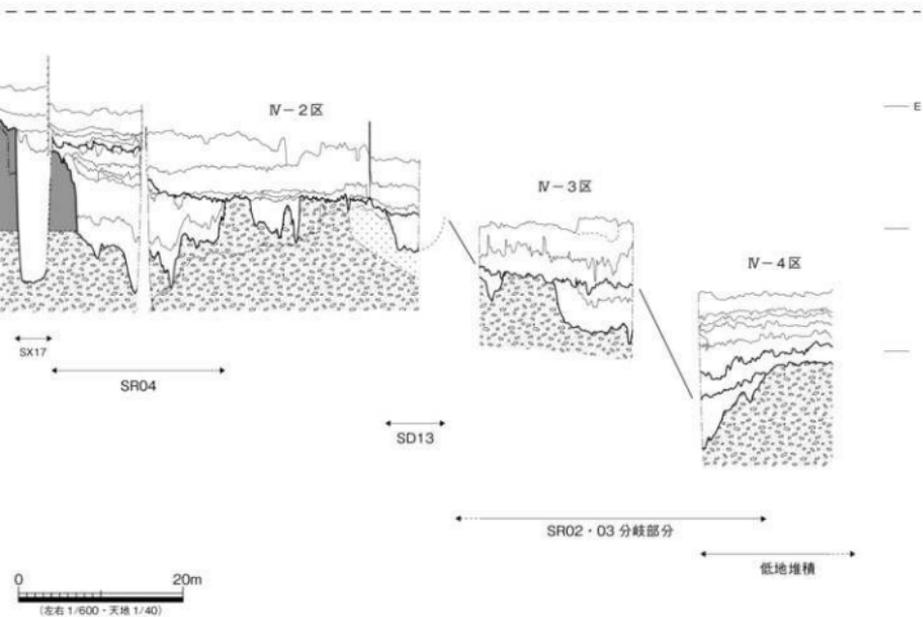
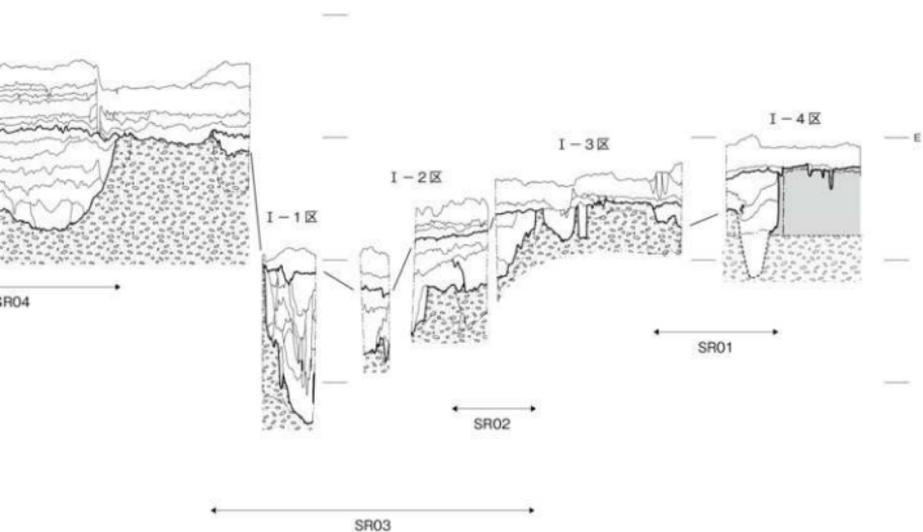
トーン	基礎層名	土質
	I層	灰色砂礫
	II層	黄褐色礫まじり粘質土
	III層	明黄色粘土
	IV層	淡灰黄色細砂
	V層	明黄色砂質土

■基本土層図②

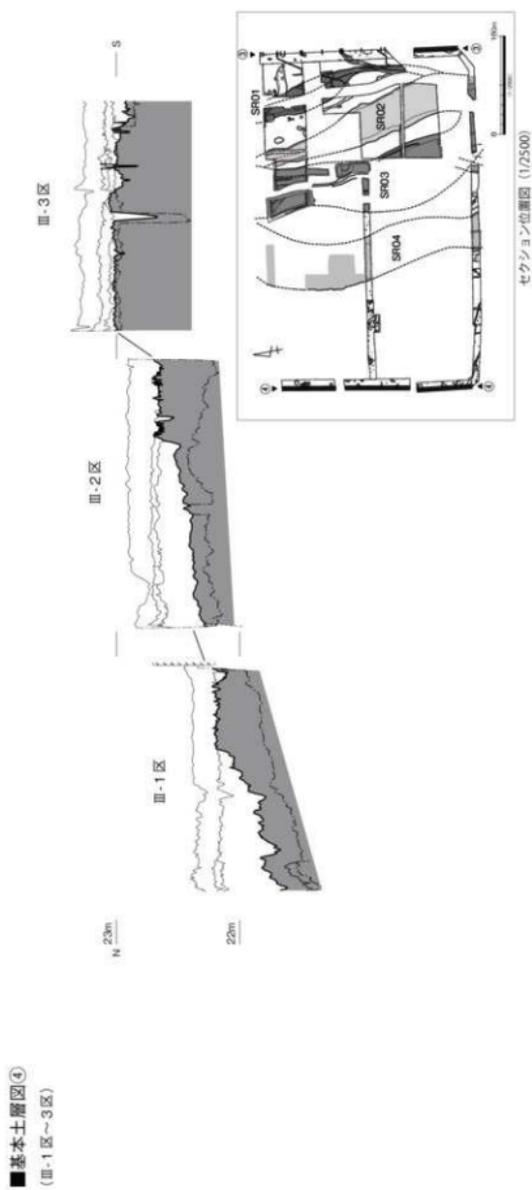
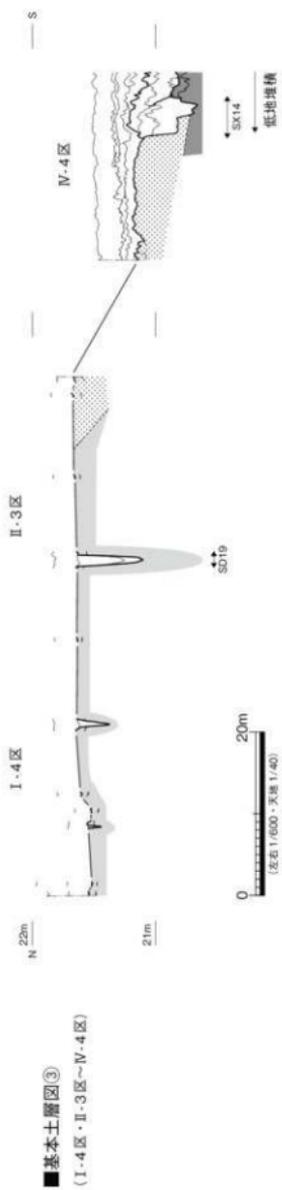
(III-3区~IV-1~4区)



セクション位置図 (1/2500)



本土層図 1・2



第11図 基本土層図3・4

## 第2節 層序

第10・11図に各調査区の基軸となる壁面土層図を南北方向、東西方向ともに2ライン抽出し、左右1/600、天地1/40で作図した図面を示した。以下、これに基づく、微高地と旧河道の概要を記す。

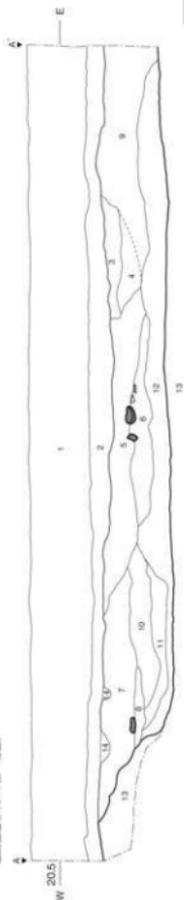
**微高地** 当調査地は中央部を旧河道が縦断し、その両脇に安定した微高地が展開する（西側を微高地A、東側を微高地Bと仮称）。両微高地間の遺構検出面の比高差は0.8mを測り、微高地Aが高く安定する。比高差は微高地Bの縁辺部のみを検出に起因するものではなく、隣接する日暮・松林遺跡（1次、都市計画道路）では遺構検出面が標高21.7m前後となり、総じて東側微高地の遺存状況が良好であったと判断できる。南北方向では北に向けて緩やかに傾斜し、西辺では調査地内での南北比高差は1.1mを測る。東側では対象地が微高地に斜行するため、傾斜は微弱で、逆に南に旧河道が存在するため、南端部は南に傾斜する。微高地を構成する基盤層は微高地Aが黄褐色礫混じり粘質土（基盤層Ⅱ）、微高地Bが明黄色粘土（基盤層Ⅲ）ないし淡灰黄色細砂（基盤層Ⅳ）となり、砂礫（基盤層Ⅰ）は認められない。なお、微高地上の基盤層上面には造成土、耕作土・床土ないし旧耕作土・旧床土の可能性が高い層位をわずかに認める程度であり、上面は後世の削平を受けた状況が推測できる。

**旧河道** 微高地間には旧河道A1となり、部分的に重複しながら微高地間の低地部分の流れ、調査では4条の流路として検出した。微高地間の最も幅が広い地点で東西幅110mを測り、微高地Aと最深部（SR03）の比高差は2.9mを測る（基本土層図①では直線的なセクション図の選定が困難であったため、最深部は約30m北のセクション図を採用した。そのため、実際の比高差は2.5m前後となる）。後述するように、当調査地南辺部は4条の流路のうち2ないし3条の分岐前の合流部分に相当し、厳密には東側の流路ラインは検出できず、微高地Aの東縁辺部から少なくとも100m以上は東に低地が広がる。東端部のⅣ-4区が最深部となり、微高地Aとの比高差は2.8mを測る。流路の基盤は微高地を構成する基盤層の下位にある灰色砂礫が主体となる（基盤層Ⅰ）。

また、流路は100m以上の幅がある低地部分で検出したため、元来の流路埋土と流路埋没後の低地堆積土の識別が困難であった。Ⅰ-1～4区では流路上面には耕作土・床土のみ、Ⅱ区では耕作土・床土、礫による造成土（近現代期）、旧耕作土・床土を認めるに留まるが、最も低地となるⅤ-1・2区、Ⅳ-2～4区では耕作土・床土、旧耕作土・床土に加え、低地堆積土を認める。Ⅳ-4区では流路埋土の識別が困難を極めるが、壁面土層⑨-7～11層を低地堆積土と判断した。そのうち8～11層は12世紀後半～13世紀前葉の瓦器碗を包含するSX14を被覆しており、中世初頭以降の埋積と考えられ、低地部分の最終的な平準化は中世期以降と推測できる。さらに、近現代期における礫による造成（客土）を考慮すると、近世期までは低地部分は窪みであったと考えられる。

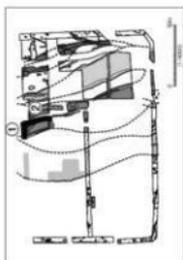
なお、遺構の大多数は基盤層上面で検出したが、Ⅰ-4区・Ⅱ-3区のみSR01上面で検出した。

御膳土層①(1-1区 北壁)

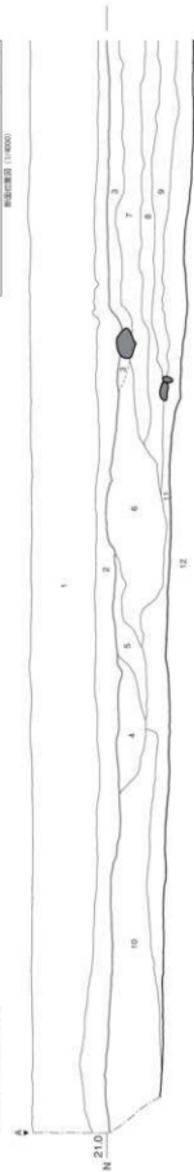


- 1 腐成土
- 2 腐成土層上<S903層土、単位1>
- 3 腐成土層上(中層)<S903層土、単位2>
- 4 灰色砂状土(中層)<S903層土、単位2>
- 5 灰色砂状土(下層)<S903層土、単位4>
- 6 腐成土層上<S903層土、単位4>
- 7 灰色砂状土(中層)<S903層土、単位3>

- 8 腐成土層上<S903層土、単位5>
- 9 腐成土層上(中層)<S903層土、単位5>
- 10 腐成土層上(下層)<S903層土、単位5>
- 11 腐成土層上<S903層土、単位7>
- 12 腐成土層上(中層)<S903層土、単位7>
- 13 腐成土層上(下層)<S903層土、単位7>
- 14 腐成土



御膳土層②(1-1区 東壁)

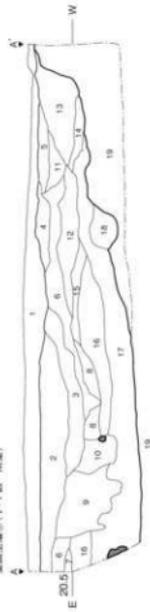


- 1 腐成土
- 2 腐成土層上<S903層土、単位1>
- 3 腐成土層上(中層)<S903層土、単位2>
- 4 腐成土層上(下層)<S903層土、単位2>
- 5 灰色砂状土<S903層土、単位2>
- 6 灰色砂状土<S903層土、単位2>
- 7 腐成土層上<S903層土、単位3>
- 8 腐成土層上(中層)<S903層土、単位3>
- 9 腐成土層上(下層)<S903層土、単位3>
- 10 腐成土層上(中層)<S903層土、単位4>
- 11 腐成土層上(下層)<S903層土、単位4>
- 12 灰色砂状土<S903層土、単位7>



第12図 I-1区 北壁・東壁土層図

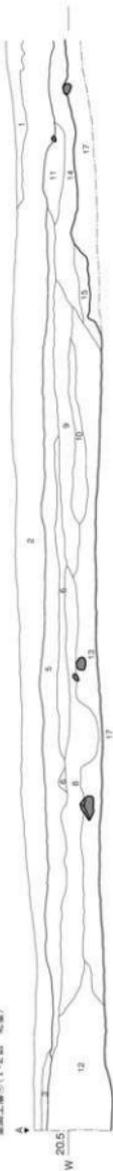
壁土層形(1-1区 南壁)



- 1 耕作土
- 2 灰化C層土<S903層土、単位1>
- 3 灰化B層土(肥分含量1.7%以下)＜S903層土、単位1>
- 4 灰化B層土(肥分含量1.7%以上)＜S903層土、単位1>
- 5 灰化B層土(肥分含量1.7%以下)＜S903層土、単位1>
- 6 灰化B層土(肥分含量1.7%以上)＜S903層土、単位1>
- 7 灰化B層土(肥分含量1.7%以下)＜S903層土、単位1>
- 8 灰化B層土(肥分含量1.7%以上)＜S903層土、単位1>
- 9 灰化C層土(肥分含量1.7%以下)＜S903層土、単位3>
- 10 腐植層(腐植質15.0%以上)＜S903層土>

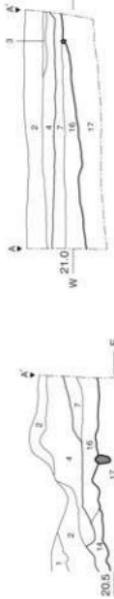
- 11 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 12 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 13 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 14 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 15 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 16 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位5>
- 17 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位7>
- 18 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 19 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>

壁土層形(1-2区 北壁)

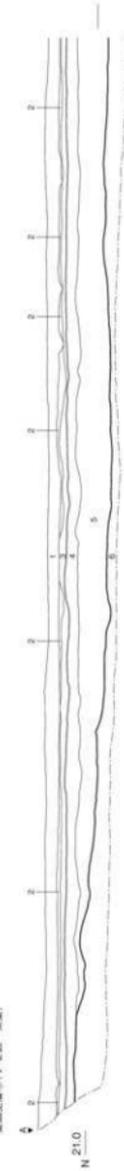


- 1 耕作土(腐植質15%)
- 2 耕作土
- 3 土(腐植層(腐植質15%以下))
- 4 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位1>
- 5 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位1>
- 6 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位1>
- 7 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位1>
- 8 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位3>
- 9 灰化C層土(腐植質15%以下)＜S903層土、単位5>
- 10 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 11 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位5>
- 12 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位7>
- 13 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位4>
- 14 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位5>
- 15 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位7>
- 16 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位10>
- 17 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位1>

壁土層形(1-2区 東壁)



壁土層形(1-2区 西壁)



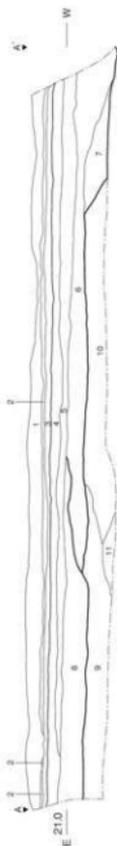
- 1 耕作土
- 2 土(腐植層(腐植質15%以下))
- 3 土(腐植層(腐植質15%以上))
- 4 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土、単位1>
- 5 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>
- 6 腐植層(腐植質15.0%以下)＜S903層土>



(1/600)

第13図 I-2区 北壁・東壁、I-1区 南壁土層図

壁部土層形(1-2区 南壁)



- 1 壁内土
- 2 赤色粘質土
- 3 赤土
- 4 褐色粘質土<SR03壁土、単位1>
- 5 赤色粘質土<SR03壁土、単位2>
- 6 淡紅色砂質土<壁土><SR03壁土、単位3>
- 7 淡紅色粘質土<SR03壁土、単位4>
- 8 赤色粘質土<SR03壁土、単位5>
- 9 赤色粘質土<壁土>
- 10 赤色粘質土<壁土>
- 11 赤色粘質土<壁土>

壁部土層形(1-2区 南壁)



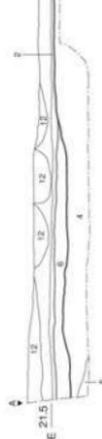
- 1 赤土
- 2 赤土
- 3 赤色粘質土
- 4 赤色粘質土<SR03壁土、単位1>
- 5 <SR03壁土、単位2>
- 6 赤色粘質土<SR03壁土、単位3>
- 7 赤色粘質土<SR03壁土、単位4>
- 8 赤色粘質土<SR03壁土、単位5>
- 9 赤色粘質土<壁土>

壁部土層形(1-2区 南壁)



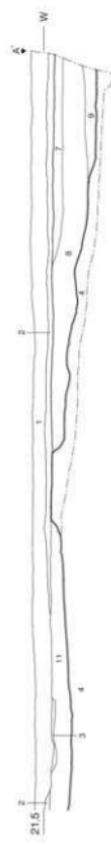
- 1 赤土
- 2 赤土
- 3 赤色粘質土
- 4 赤色粘質土<SR03壁土、単位1>
- 5 赤色粘質土<SR03壁土、単位2>
- 6 赤色粘質土<SR03壁土、単位3>
- 7 赤色粘質土<SR03壁土、単位4>
- 8 赤色粘質土<SR03壁土、単位5>
- 9 赤色粘質土<壁土>

壁部土層形(1-3区 南壁)

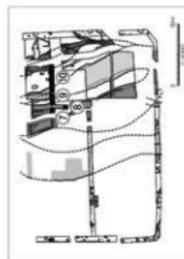


- 7 褐色粘質土
- 8 褐色粘質土<SR02壁土>
- 9 褐色粘質土<SR02壁土>
- 10 褐色粘質土<SR02壁土>
- 11 褐色粘質土<SR02壁土>
- 12 褐色粘質土<SR02壁土>

- 1 壁内土
- 2 赤色粘質土
- 3 赤土
- 4 赤色粘質土
- 5 赤色粘質土<SR01土層>
- 6 赤色粘質土<SR01土層>



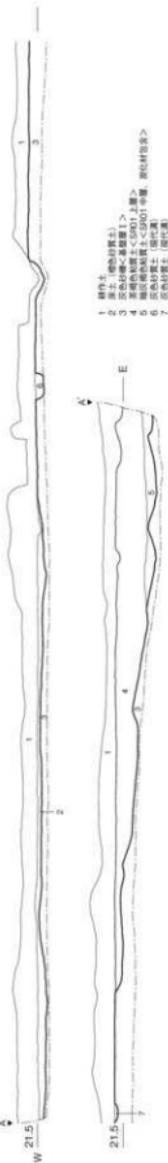
- 1 赤土
- 2 赤土
- 3 赤色粘質土
- 4 赤色粘質土<SR03壁土、単位1>
- 5 赤色粘質土<SR03壁土、単位2>
- 6 赤色粘質土<SR03壁土、単位3>
- 7 赤色粘質土<SR03壁土、単位4>
- 8 赤色粘質土<SR03壁土、単位5>
- 9 赤色粘質土<壁土>
- 10 赤色粘質土<壁土>
- 11 赤色粘質土<壁土>



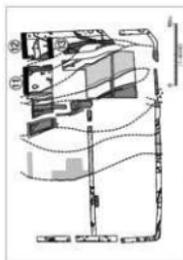
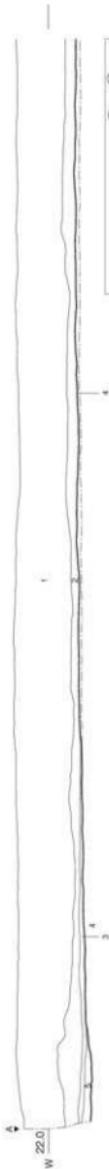
壁部土層形(1-3区)

第14図 I-2区 南壁、I-3区 南壁土層図

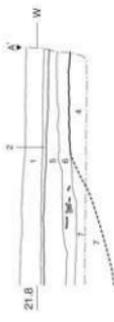
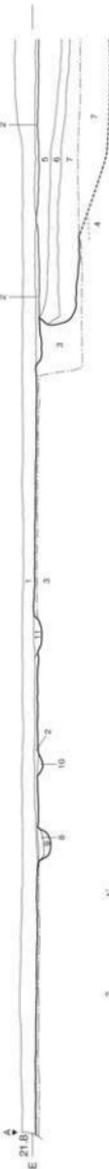
壁面土層①(1-3区 北壁)



壁面土層①(1-3区 北壁)



壁面土層①(1-4区 南壁)



- 7 腐植土<SR01>層  
 8 腐植土  
 9 腐植土  
 10 腐植土  
 11 腐植土

- 1 腐植土  
 2 腐植土  
 3 腐植土  
 4 腐植土

- 1 腐植土  
 2 腐植土  
 3 腐植土  
 4 腐植土



(1/60)

第15図 I-3区 北壁、I-4区 北・南壁土層図

壁面土層図(B-1区 北壁)



- 1 雑草土
  - 2 灰色砂礫土<SP600層土>
  - 3 赤色砂礫土<SP600層土>
  - 4 腐植土(厚さ約100層土)
  - 5 腐植砂礫土(厚さ約100層土)
  - 6 腐植砂礫土<SP600層土>
- 壁面の土層はSP600層土の可能性が高い。

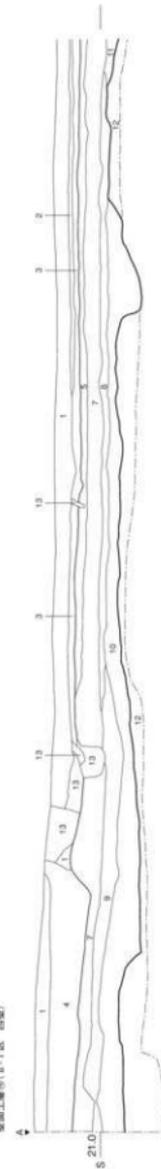
壁面土層図(B-1区 西壁)



- 1 雑草土
- 2 赤土 (灰色砂礫土)
- 3 赤土 (腐植砂礫土)
- 4 腐植砂礫土(厚さ約100層土)
- 5 腐植砂礫土(厚さ約100層土)
- 6 腐植土

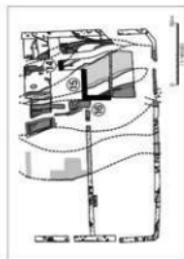


壁面土層図(B-1区 西壁)



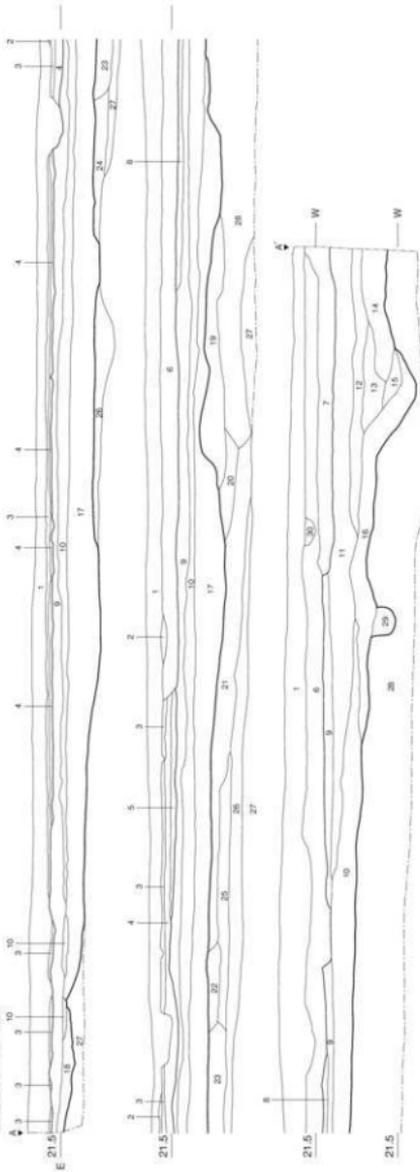
- 8 腐植砂礫土<SP600層土>
- 9 腐植砂礫土<SP600層土>
- 10 赤色砂礫土(厚さ約100層土)
- 11 赤色砂礫土(厚さ約100層土)
- 12 腐植土(厚さ約100層土)
- 13 腐植土

- 1 雑草土
- 2 赤土 (腐植砂礫土)
- 3 赤土 (腐植砂礫土)
- 4 腐植土(厚さ約100層土)
- 5 腐植土(厚さ約100層土)
- 6 腐植砂礫土<SP600層土>
- 7 腐植砂礫土<SP600層土>



第16図 II-1区 北壁・西壁土層図

東壁土層II(Ⅱ-1区 南壁)



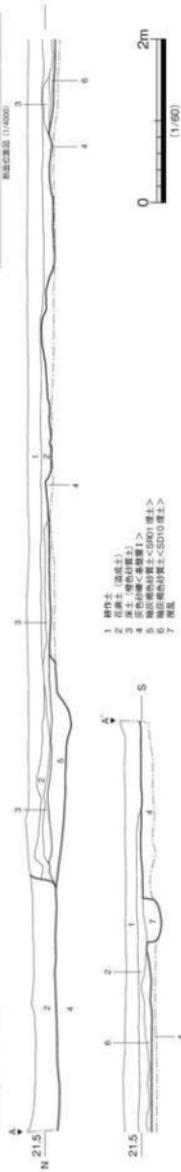
- 1 耕作土
- 2 腐植土
- 3 腐植土層II土<SP02層土>
- 4 腐植土層II土<SP03層土>
- 5 腐植土層II土<SP04層土>
- 6 腐植土層II土<SP05層土>
- 7 腐植土層II土<SP06層土>
- 8 腐植土層II土<SP07層土>

- 9 腐植土層II土<SP08層土>
- 10 腐植土層II土<SP09層土>
- 11 腐植土層II土<SP10層土>
- 12 腐植土層II土<SP11層土>
- 13 腐植土層II土<SP12層土>
- 14 腐植土層II土<SP13層土>
- 15 腐植土層II土<SP14層土>
- 16 腐植土層II土<SP15層土>
- 17 腐植土層II土<SP16層土>

- 18 腐植土層II土<SP17層土>
- 19 腐植土層II土<SP18層土>
- 20 腐植土層II土<SP19層土>
- 21 腐植土層II土<SP20層土>
- 22 腐植土層II土<SP21層土>
- 23 腐植土層II土<SP22層土>
- 24 腐植土層II土<SP23層土>

- 25 腐植土層II土<SP24層土>
- 26 腐植土層II土<SP25層土>
- 27 腐植土層II土<SP26層土>
- 28 腐植土層II土<SP27層土>
- 29 腐植土層II土<SP28層土>
- 30 腐植土層II土<SP29層土>

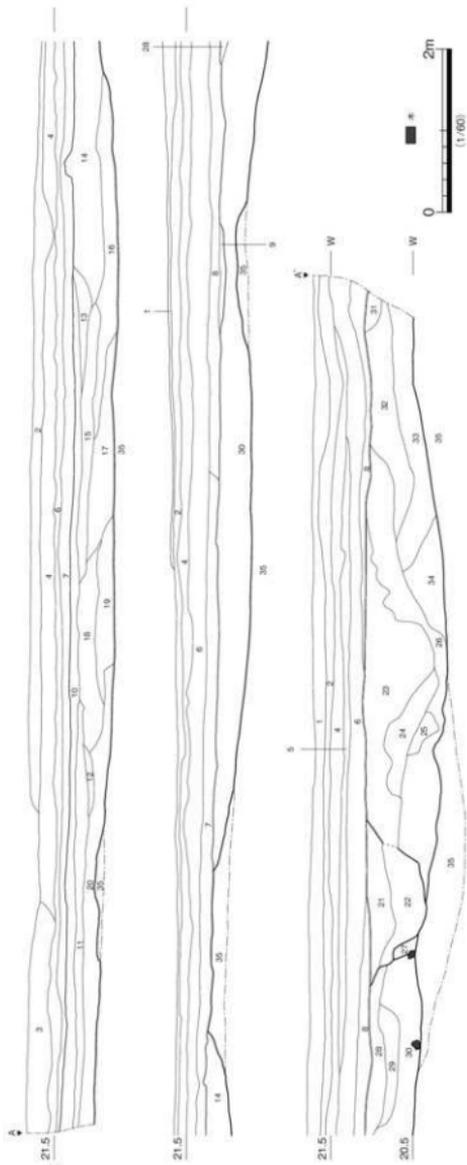
東壁土層II(Ⅱ-1区 東壁)



- 1 耕作土
- 2 腐植土
- 3 腐植土層II土
- 4 腐植土層II土<SP01層土>
- 5 腐植土層II土<SP02層土>
- 6 腐植土層II土<SP03層土>
- 7 腐植土層II土<SP04層土>

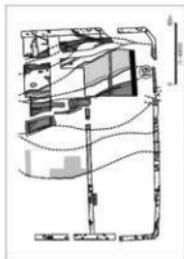
第 17 図 Ⅱ-1 区 南壁・東壁土層図

望土層台 (E-2区 南側)



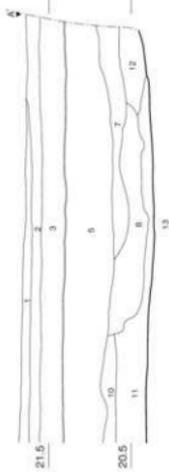
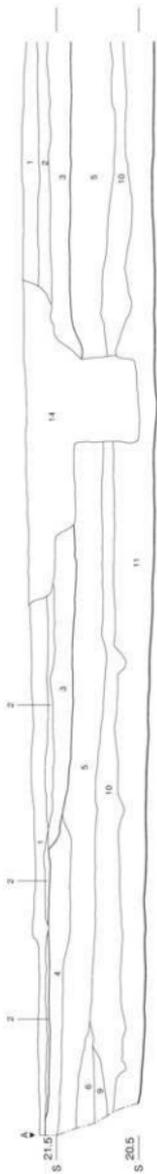
- 1 粘土
- 2 明礬色砂質土 (小礫多量)
- 3 砂質土
- 4 砂質黒色粘質土
- 5 質粘黒色粘質土
- 6 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 7 質粘砂質土 (厚層層状土層多量あり)
- 8 質粘砂質土 (厚層層状土層多量あり)
- 9 質粘シルト (厚層層状土層多量あり)
- 10 質粘シルト (厚層層状土層多量あり)
- 11 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 12 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 13 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 14 中層土 SH02 質土
- 15 中層土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 16 小層土 SH02 質土
- 17 灰色粘質土 SH02 質土
- 18 中層土 SH02 質土

- 19 灰色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 20 質粘砂質土 SH02 質土
- 21 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 22 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 23 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 24 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 25 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 26 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 27 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 28 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 29 灰黄色粘質土 (厚層層状土層多量あり)
- 30 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 31 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 32 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 33 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 34 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 35 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)
- 36 質粘砂質土 SH02 質土 (厚層層状土層多量あり)

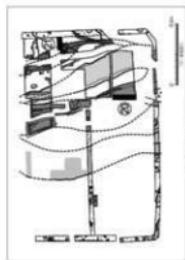


第18図 II-2区 南端土層図

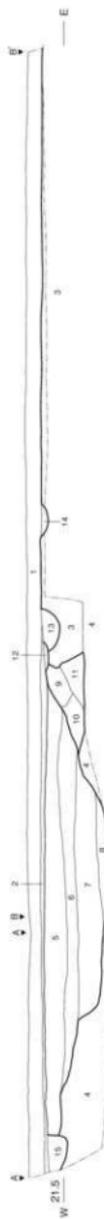
壁土層①(II-2区 西壁)



- 1 砂内土
- 2 腐 葉土・腐成土
- 3 埋 戻り土
- 4 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 5 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 6 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 7 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 8 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 9 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 10 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 11 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 12 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 13 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>
- 14 埋戻り砂質土・10層厚土 <S303 埋土>



壁土層①(II-3区 北壁)



- 1 埋 戻り土
- 2 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 3 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 4 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 5 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 6 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 7 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 8 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 9 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 10 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 11 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 12 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 13 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 14 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 15 埋 戻り土 <S303 埋土>

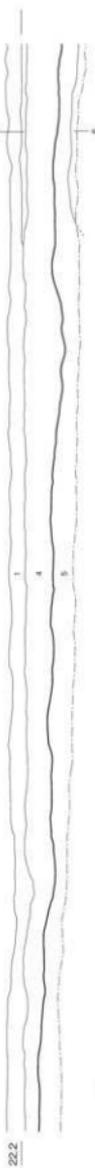
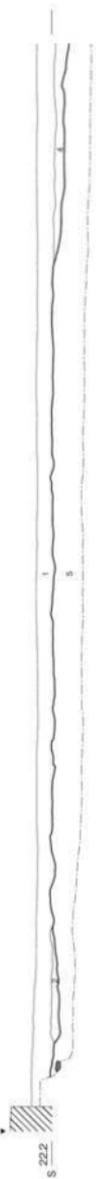
- 1 埋 戻り土
- 2 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 3 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 4 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 5 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 6 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 7 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 8 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 9 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 10 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 11 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 12 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 13 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 14 埋 戻り土 <S303 埋土>
- 15 埋 戻り土 <S303 埋土>



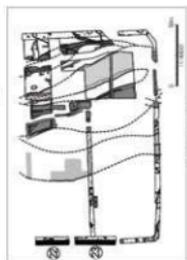
(1:40)

第19図 II-2区 西壁、II-3区 北壁土層図

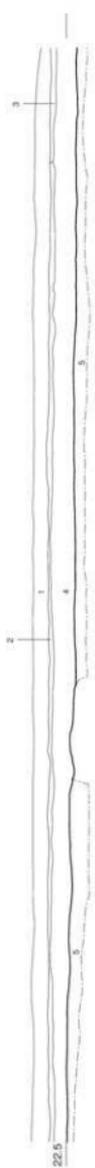
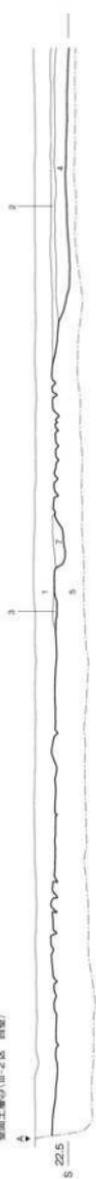
壁面土層図(Ⅲ-1区 西壁)



- 1 耕植土  
 2 腐植質土層(文字範囲8m以下)  
 3 腐植質土層(文字範囲8m以上、地下水位線以下)＜基礎層Ⅱ＞  
 4 腐植質土層(地下水位線以上、地下水位線以下)＜基礎層Ⅲ＞  
 5 腐植質土層(地下水位線以上、地下水位線以下)＜基礎層Ⅳ＞  
 6 腐植質土層(地下水位線以上、地下水位線以下)＜基礎層Ⅴ＞



壁面土層図(Ⅲ-2区 西壁)

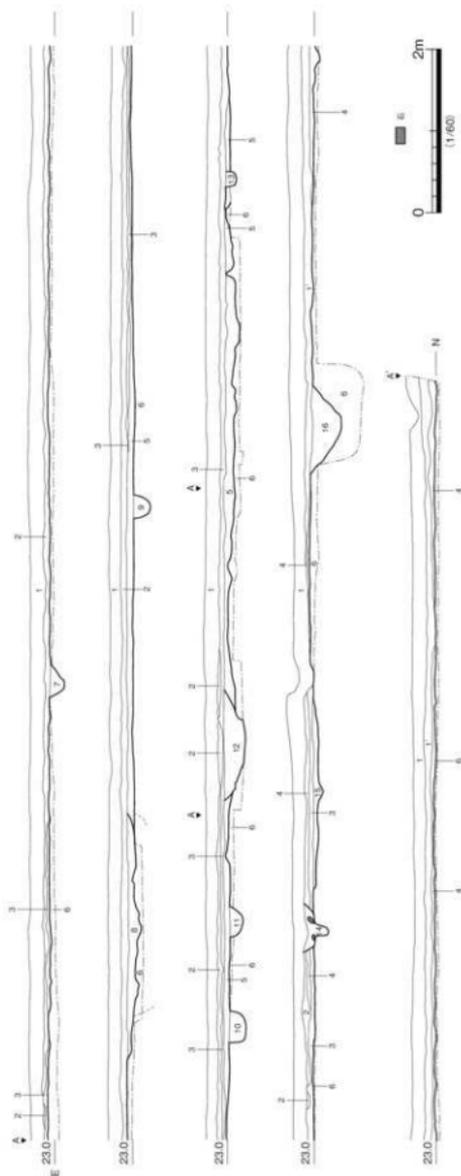


- 1 耕植土(腐植質層)  
 2 コルゲート層  
 3 腐植土(2区層位ともおおよそに異なる)  
 4 腐植質土層(文字範囲8m以下)＜基礎層Ⅴ＞  
 5 腐植質土層(文字範囲8m以上)＜基礎層Ⅵ＞  
 6 砂礫土層(基礎層Ⅶ)  
 7 腐植質土層(基礎層Ⅷ)  
 8 腐植質土層(基礎層Ⅸ)



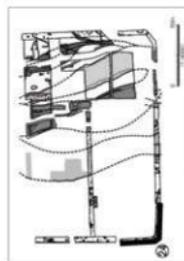
第20図 Ⅲ-1・2区 西壁土層図

壁面土層図(Ⅲ-3区 西壁～南壁)



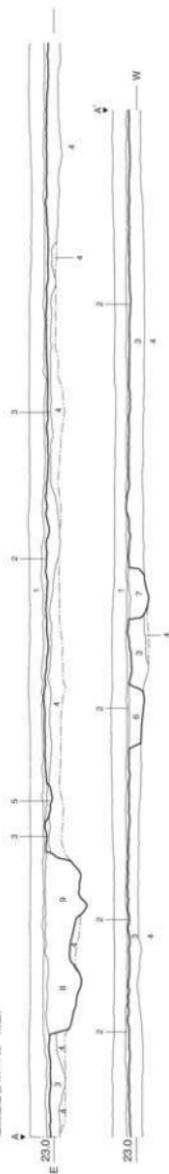
- 1 雑草土 (1' 6m作土)  
 2 砂土 (埋積土)  
 3 砂土 (埋積土)  
 4 砂土 (埋積土)  
 5 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに含む赤土(埋積土面層)  
 6 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに含む赤土(埋積土面層)  
 7 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに含む赤土(埋積土面層)  
 8 赤褐色粘質土、(下部に薄層層)ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)

- 9 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 10 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 11 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 12 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 13 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 14 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 15 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)  
 16 赤褐色粘質土、灰褐色粘質土、ロームをまばらに少量認めらる赤土(埋積土面層)



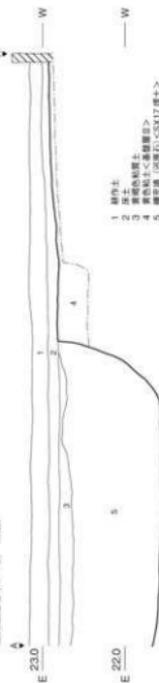
第21図 Ⅲ-3区 西壁～南壁土層図

壁面土層⑨ (IV-1区 南壁)

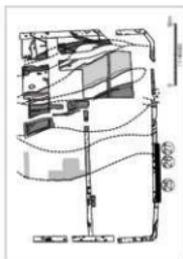


- 1 緑内土
- 2 粘土 (赤褐色) <S205土層>
- 3 黄褐色粘土 <S205土層>
- 4 黄褐色粘土 <S205土層>
- 5 黄褐色粘土
- 6 黄褐色粘土 <S205土層>
- 7 黄褐色粘土 <S205土層>

壁面土層⑩ (IV-1区 南壁)

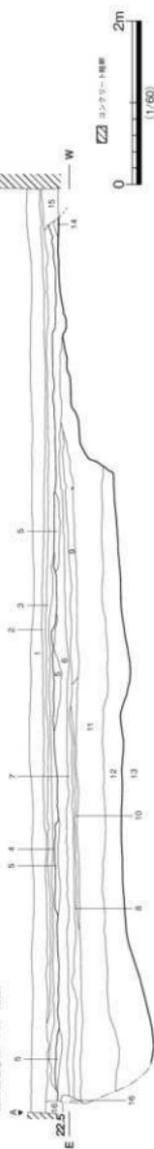


- 1 緑内土
- 2 粘土
- 3 黄褐色粘土
- 4 黄褐色粘土
- 5 黄褐色粘土 <SK17土層>



断面位置図 (1/400)

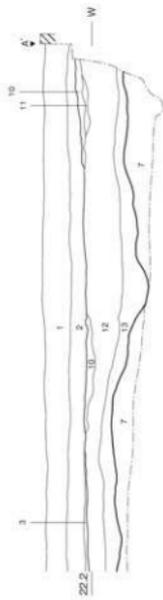
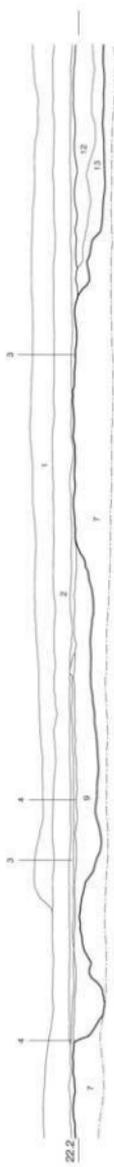
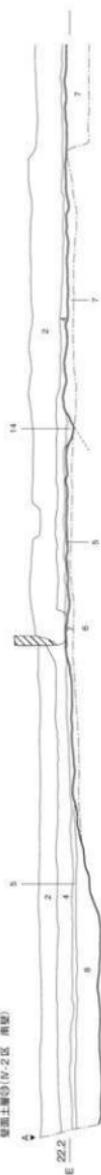
壁面土層⑪ (IV-1区 南壁)



- 1 緑内土
- 2 粘土 (赤褐色)
- 3 黄褐色粘土 <S204土層>
- 4 黄褐色粘土 <S204土層>
- 5 黄褐色粘土 <S204土層>
- 6 黄褐色粘土 <S204土層>
- 7 黄褐色粘土 <S204土層>
- 8 黄褐色粘土 <S204土層>
- 9 区画貯留土 (黄褐色) <S204土層>
- 10 黄褐色粘土 <S204土層>
- 11 黄褐色粘土 (硬質) <S204土層>
- 12 黄褐色粘土 <S204土層>
- 13 黄褐色粘土 <S204土層>
- 14 黄褐色粘土 <S204土層>
- 15 黄褐色粘土 <S204土層>
- 16 区画

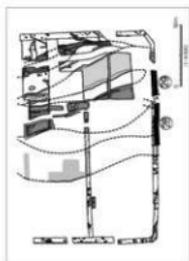
第22図 IV-1区 南壁土層図

壁面土層①(N-2区 南壁)

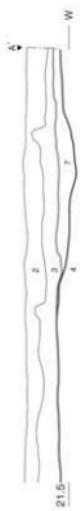
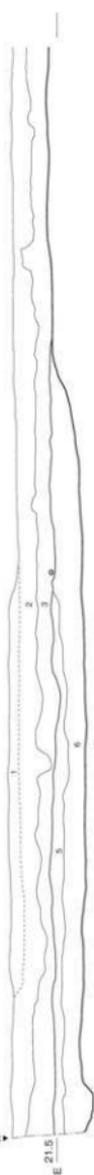


- ① 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ② 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ③ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ④ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑤ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑥ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑦ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑧ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑨ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑩ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑪ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑫ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑬ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)

- ① 砂内土  
 ② 砂内土  
 ③ 砂内土  
 ④ 砂内土  
 ⑤ 砂内土  
 ⑥ 砂内土  
 ⑦ 砂内土



壁面土層②(N-3区 南壁)

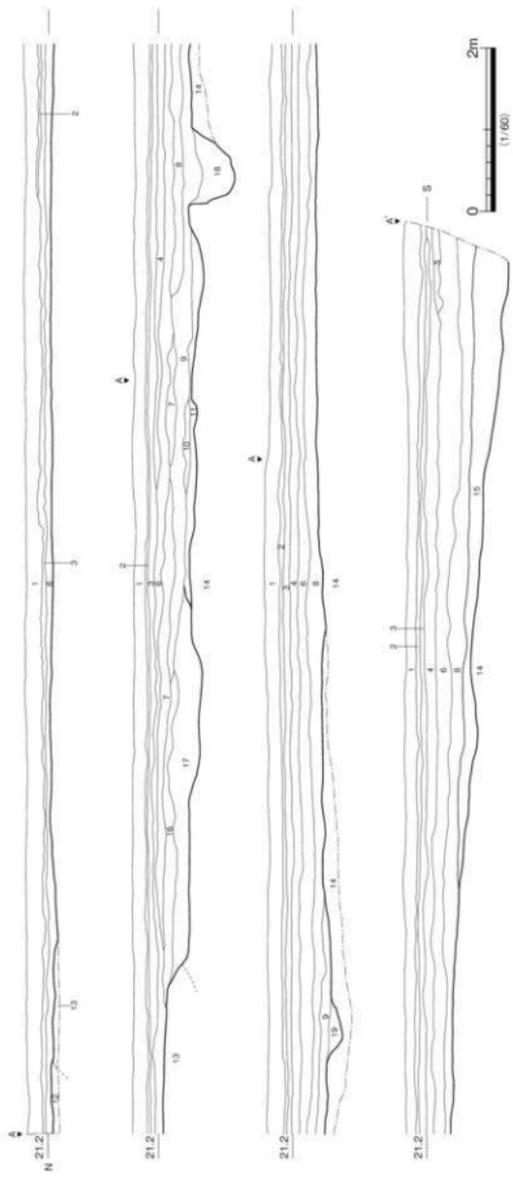


- ① 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ② 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ③ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ④ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑤ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑥ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)  
 ⑦ 黒色粘質土、(海水が湧き少量赤化、黒褐色粘質土でロウも若干に少量赤化)



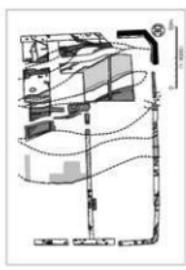
第23図 N-2・3区 南壁土層図

壁面土層図(Ⅳ-4区 東壁～南壁)



- 1 壁作土
- 2 床土
- 3 土
- 4 石灰地盤改良土(構内)
- 5 石灰地盤改良土(構外)
- 6 腐植土層(1.00m厚)
- 7 腐植土層(1.00m厚)
- 8 腐植土層(1.00m厚)
- 9 腐植土層(1.00m厚)
- 10 腐植土層(1.00m厚)
- 11 腐植土層(1.00m厚)
- 12 腐植土層(1.00m厚)
- 13 腐植土層(1.00m厚)
- 14 腐植土層(1.00m厚)
- 15 腐植土層(1.00m厚)
- 16 腐植土層(1.00m厚)
- 17 腐植土層(1.00m厚)
- 18 腐植土層(1.00m厚)
- 19 腐植土層(1.00m厚)

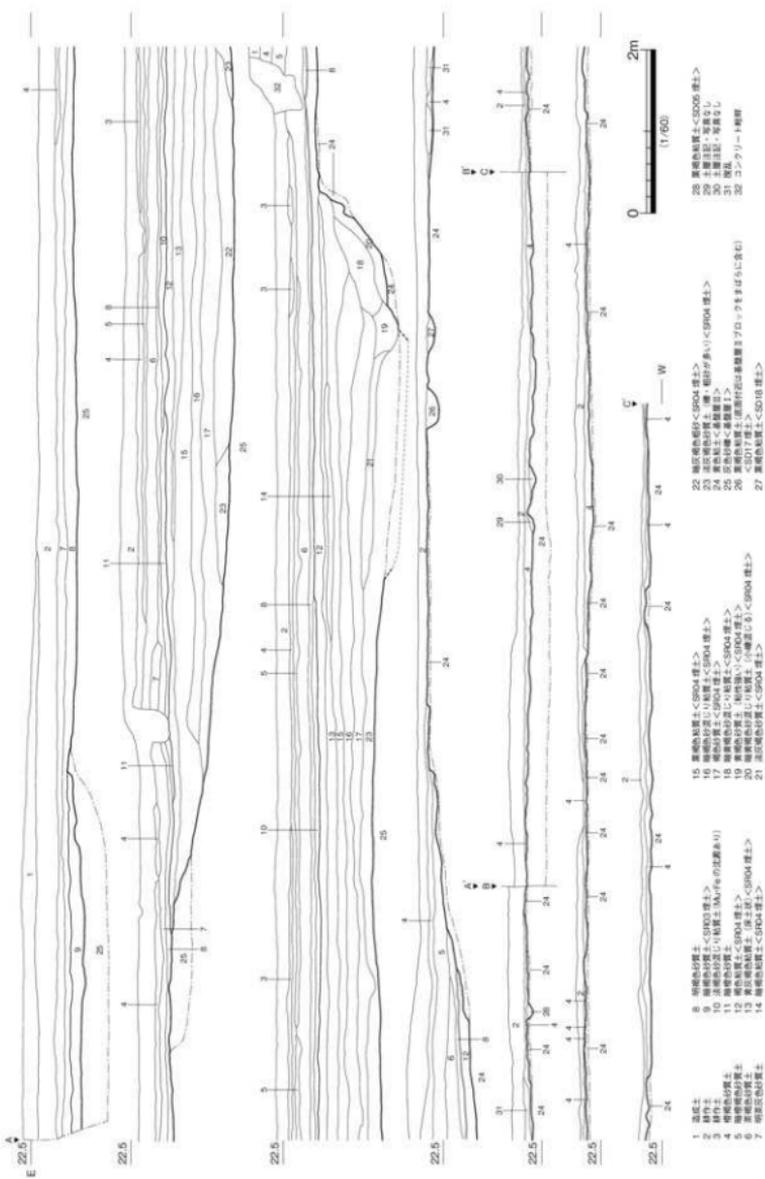
- 1 壁作土
- 2 床土
- 3 土
- 4 石灰地盤改良土(構内)
- 5 石灰地盤改良土(構外)
- 6 腐植土層(1.00m厚)
- 7 腐植土層(1.00m厚)
- 8 腐植土層(1.00m厚)
- 9 腐植土層(1.00m厚)
- 10 腐植土層(1.00m厚)
- 11 腐植土層(1.00m厚)
- 12 腐植土層(1.00m厚)
- 13 腐植土層(1.00m厚)
- 14 腐植土層(1.00m厚)
- 15 腐植土層(1.00m厚)
- 16 腐植土層(1.00m厚)
- 17 腐植土層(1.00m厚)
- 18 腐植土層(1.00m厚)
- 19 腐植土層(1.00m厚)



壁面土層図 (1/1000)

第24図 Ⅳ-4区 東～南壁土層図

盤面土層のV-1区 (南壁)



22 黒色粘り土<S1005 層>  
23 黒色粘り土  
24 土層(注記)等厚なし  
25 赤土層  
26 赤土層

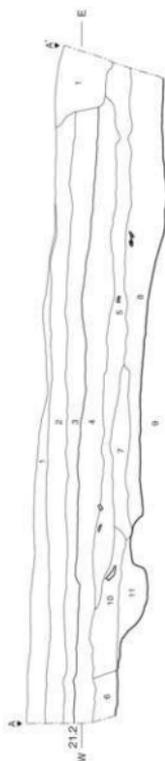
22 黒色粘り土<S1004 層>  
23 赤土層  
24 赤土層  
25 赤土層  
26 赤土層  
27 黒色粘り土<S1018 層>

10 黒色粘り土<S1004 層>  
11 赤土層  
12 赤土層  
13 赤土層  
14 赤土層  
15 赤土層  
16 赤土層  
17 赤土層  
18 赤土層  
19 赤土層  
20 赤土層  
21 赤土層

8 黒色粘り土<S1003 層>  
9 赤土層  
10 赤土層  
11 赤土層  
12 赤土層  
13 赤土層  
14 赤土層

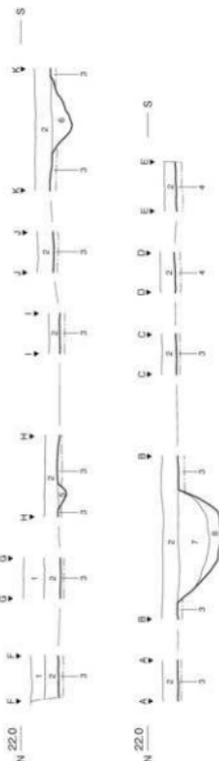
第25図 V-1区 南壁土層図

東壁土層①(V-2区 北壁)

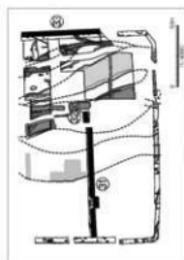


- 1 瓦葺
- 2 赤土
- 3 赤土
- 4 白色シフト(北壁)・西側壁及び<SPO3層土>
- 5 赤色シフト<SPO3層土>
- 6 赤色シフト<SPO3層土>
- 7 赤色シフト<SPO3層土>
- 8 赤色シフト<SPO3層土>
- 9 赤色シフト<SPO3層土>
- 10 赤色シフト<SPO3層土>
- 11 赤色シフト<SPO3層土>

東壁土層①(1-4区・8-3区 東壁)



- 1 瓦葺(瓦葺土)
- 2 褐色粘質土(粘質土)
- 3 褐色粘質土(粘質土)
- 4 褐色粘質土(粘質土)
- 5 褐色粘質土(SO220層土)
- 6 褐色粘質土(SO220層土)
- 7 褐色粘質土(SO220層土)
- 8 褐色粘質土(SO220層土)



東壁土層①(1-4区)

第26図 V-2区 北壁、I-4区・II-3区 東壁土層図

### 第3節 遺構、遺物

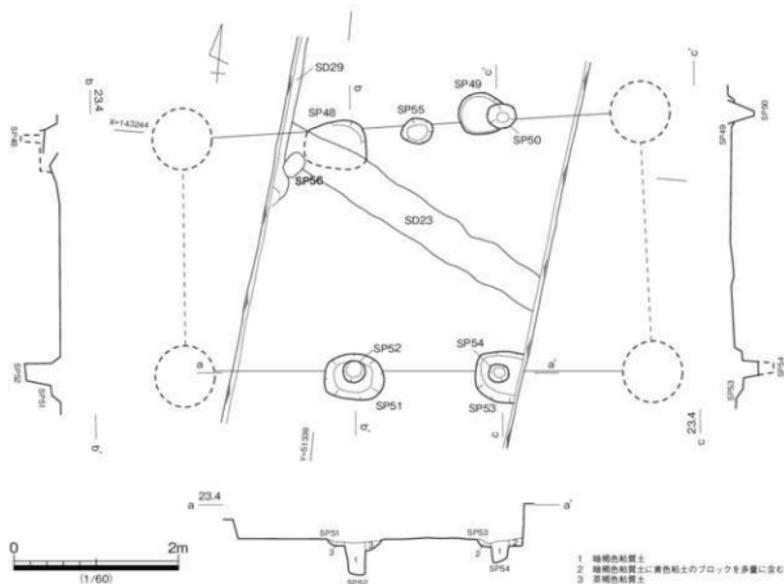
#### 1. 弥生時代

旧河道Aを構成する4条の自然流路が調査地中央を縦断し、東西に安定した微高地が広がる。SR 01～03は遅くとも弥生時代中期中葉、SR 04は弥生時代前期には流下しており、その幅は110 mを測り、東西に安定した微高地が広がる。西側の微高地Aでは稀薄ながらV-1区、Ⅲ-3区では弥生時代後期末頃に属する居住施設を認める。東側の微高地Bでは当該期に属する遺構は展開しないが、微高地Bの縁辺部に位置するSR 01からは石器製作後に一括廃棄されたサヌカイト剥片を認める。

なお、自然流路からは弥生時代、古墳時代、平安時代前期末～中期初頭の遺物が出土するが、当該期で一括して報告する。

#### Ⅲ-3区SB 01（概報時：SB 01）

調査時には掘り方であるSP 51・53・48・49と柱痕であるSP 52・54・50を別遺構としていたが、SP 51-52、SP 53-54、SP 48-消失、SP 49-50を掘り方と柱痕と捉え、1間×2間以上の掘立柱建物跡と判断した。桁行の柱間間は18 m、梁間間は3 mを測る。調査時の断面写真では掘り方は未完掘と考えられ（図版13）、南北桁行のズレは調査精度の問題で解決される可能性が高い。主軸方位はN 85° Eを測り、おおむね東西軸となる。弥生土器と思われる細片が少量出土するが、時期決定には至らない。



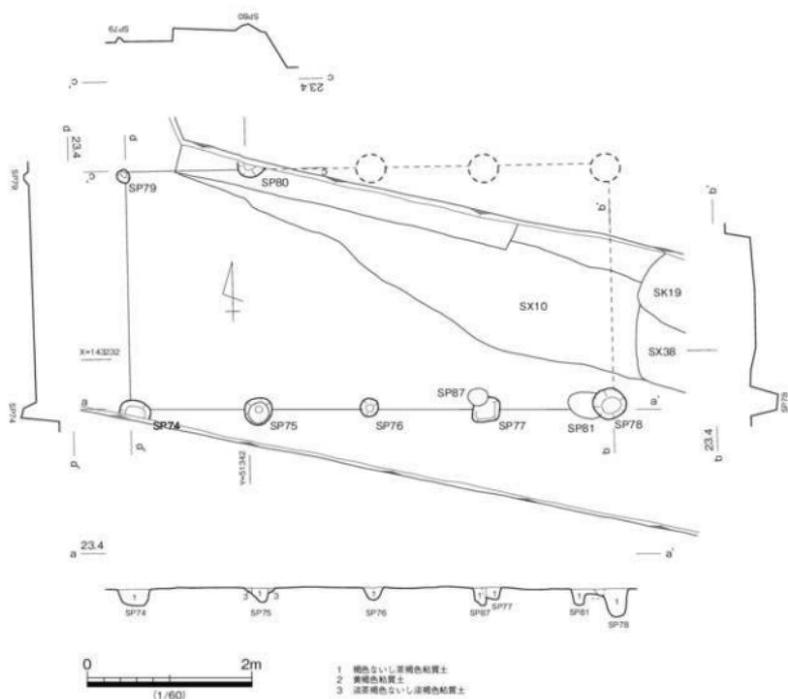
第27図 Ⅲ-3区 SB01 平・断面図

帰属時期は埋土が暗褐色ないし茶褐色を呈し、中世初頭に属するSD 23に先行し、弥生土器と考えられる出土遺物から、弥生時代後期の所産と考えたい。なお、主軸方位は周辺で検出された弥生時代中期中葉ないし後期の掘立柱建物の主軸方位のブレ幅に収まり、規模・構造は多肥松林遺跡（4次、高松南警察署）のSB 01に酷似する。

### Ⅲ-3区SB 02（概報時：SB 03）

梁間が延長する可能性を残すが、1間×4間の掘立柱建物跡と判断した。概報時にはピットの重複関係から建て替えが想定されていたが、本報告ではSB 02とSA 01に細分した。梁間約3m、桁行約6mを測り、桁行の柱間間は約1.5mを測る。大部分が柱痕のみの検出となるが、SP 75では掘り方を認める。埋土は褐色系粘質土で、SB 01に酷似する。主軸方位はN 90° Eを呈し、正確に東西方位を指向する。重複関係ではSA 01に先行し、SA 01が掘立柱建物を構成する可能性が高いことから、ほぼ同一地点での建て替えが想定できる。弥生土器と思われる細片が出土するが、時期決定には至らない。

帰属時期は埋土が褐色系の色調を呈し、弥生土器と考えられる出土遺物の存在から弥生時代後期の所産と考えたいが、東西方位を指向する点にはやや躊躇を覚える。

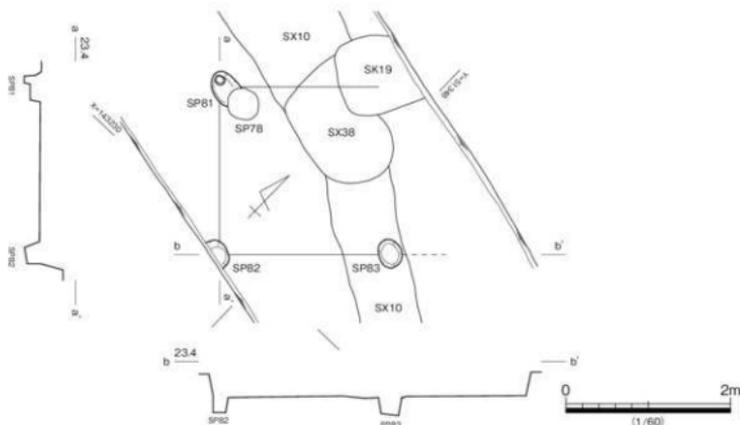


第28図 Ⅲ-3区 SB02 平・断面図

### Ⅲ-3区SB03

3基のピットが直角に配置されることから、掘立柱建物跡と判断した。柱間間が約2mを測り、重複関係から調査区内で検出されるべき1基は確認できないが、主軸方位はN 36° Eとなる。

出土遺物はなく、帰属時期は不明だが、重複関係からSB02に先行するため、弥生時代後期の所産と考えておきたい。

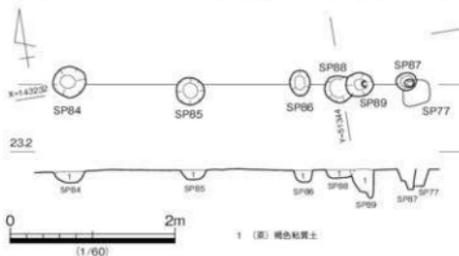


第29図 Ⅲ-3区 SB03 平・立面図

### Ⅲ-3区SA01 (概報時：SB02)

ピットが直線的に並ぶことから横列と判断したが、調査区幅が狭長であるため、概報時での報告どおり掘立柱建物を構成する可能性が高い。検出長約4mを測り、柱間間は1.5mと等間隔である。主軸方位はN 98° Eとなる。埋土は褐色系粘質土を呈し、重複関係からSB02に後出する。主軸方位はやや異なるが、ほぼ同一地点で検出しており、SB02からSA01への建て替えを想定しておきたい。なお、概報では柱間間に所在するピットの重複関係から建て替えが想定されているが、本遺構を構成するピットではないと判断できることから、否定しておきたい。

出土遺物はないが、褐色系埋土、SB02との位置関係から弥生時代後期の所産と考えておきたい。



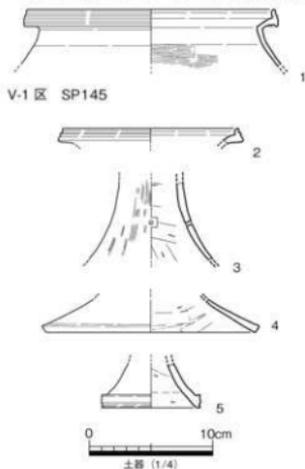
第30図 Ⅲ-3区 SA01 平・断面図

### V-1区SX01 (概報時: SH01)

V-1区中央西で検出した不明遺構である。幅0.1~0.2m、深度0.05mの溝状遺構が楕円形に巡り(SD01、4m×3.2m)、外側にもう1条溝が巡り(SD02~04)、南端部は分岐し、多肥松林遺跡(4次、高松南警察署)のSD02・07に連続し、さらに外側を圍繞する。その一部はさらに分岐して直線的に延び(SD05)、SD06に連続する。同心円状に巡る3条の溝は幅0.2m以下で、深度も極めて浅いが、SD05は幅0.7m、深度0.3mと安定する。周辺にはピットが点在するが、堅穴建物を構成する規則的な配置や中央土坑は認められない。

出土遺物は総じて稀薄であり、図化が可能な遺物は限られる。1はSP145から出土した弥生土器甕である。SX01の東辺に位置するが、図化が可能な唯一のピット出土遺物となる。弥生時代後期前葉。2~5はSD02・05出土遺物である。2は弥生土器甕である。3~5は弥生土器高坏である。4は香東川下流域産土器。3・4は後期末頃、5は中期後半に位置付けられる。なお、第31図に示した範囲に所在する遺構のうち、SD18のみが須恵器の出土を認め、図化し得ない遺物の大多数は弥生時代の所産と考えられる。

堅穴建物の壁溝と周溝の可能性を考慮したが、支柱穴や中央土坑は確認できず、積極的に居住施設と評価することは困難であるが、直線的に延びるSD05は示唆的な内容を示す。4次調査SB01に沿って配置されており、関連性を認める。さらに、SX01の北西には4次調査SH02が所在しており、V区西側からⅢ-3区にかけてのエリアは弥生時代後期末頃の居住域と考えられる。こうした状況から、SX01は居住施設関連遺構と考えておきたい。帰属時期は判然としませんが、弥生時代後期末頃と考えておきたい。



V-1区 SD02・05

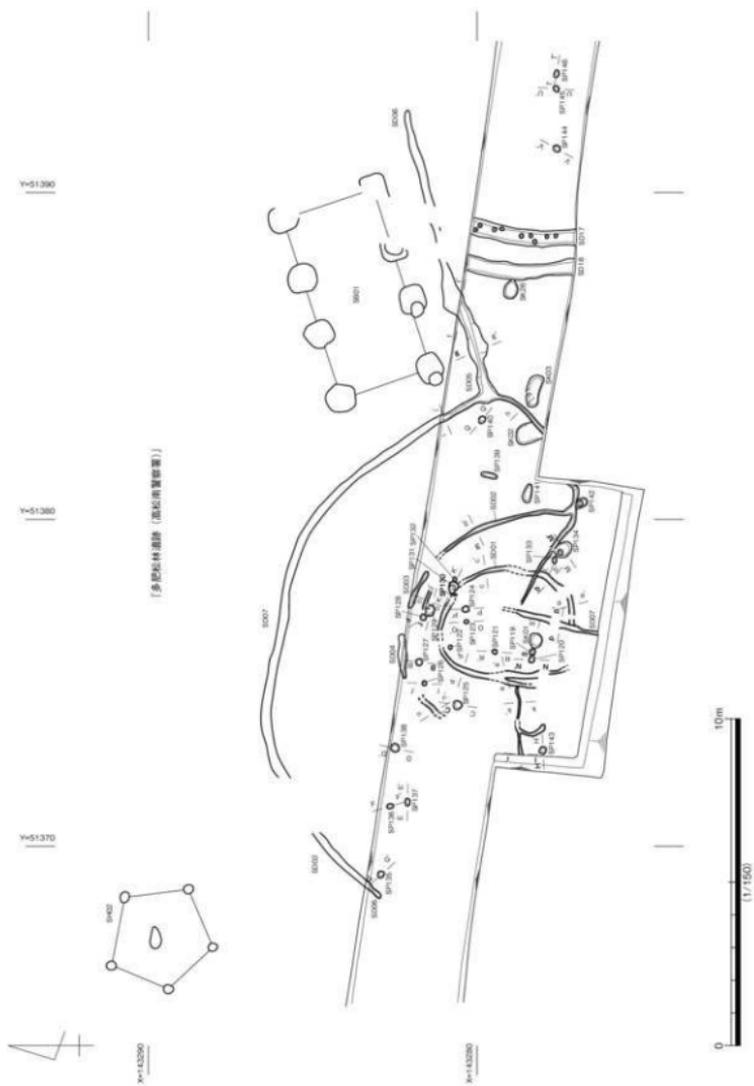
第31図 V-1区 SP145・SD02・SD05 出土遺物

### V-1区SK02

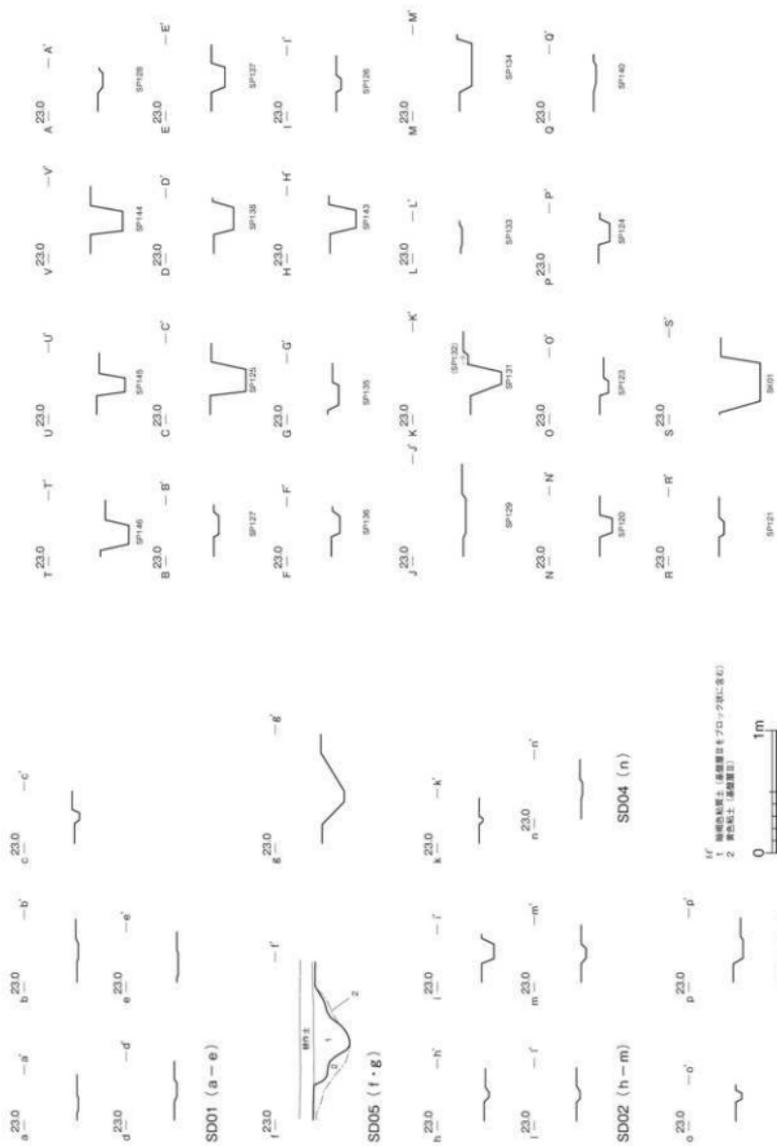
SX01内に所在する土坑である。重複関係ではSD02に先行する。検出約0.8m、最大幅約0.6mを測り、深度は0.1mに満たない。出土遺物はないが、遺構の重複関係から弥生時代後期の所産と考えられる。(第34図)

### V-1区SK03

SX01内に所在し、SK02に近接した位置で検出した土坑である。浅いU字形の断面形状を呈し、暗褐色粘質土を埋土とする。出土遺物はないが、位置関係や埋土の特徴から弥生時代後期に属するものと考えられる。(第35図)



第 32 图 V-1 区 SX01 平面图



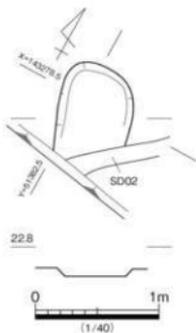
第33図 V-1区 SX01 開運橋構立(断面図)

### V-1区SK04

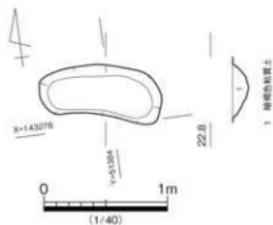
V-1区西部で検出した土坑である。径約0.65mを測り、北辺は調査区外へ延長する。約0.4mの深度を有し、ピットの可能性も残すが、北接する4次調査区で検出された遺構との掘立柱建物等の組み合わせは困難である。弥生土器と思われる細片が出土しており、周辺遺構の状況から、弥生時代後期の所産と考えたい。(第36図)

### V-1区SK05

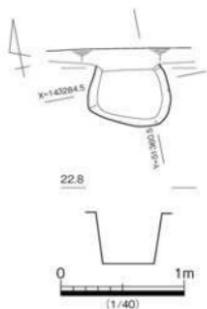
V-1区西部で検出した土坑である。深度が浅いため、柱穴ではないと判断できる。6はサヌカイト製の石庖丁である。破損面は古く、使用に伴う破損後に廃棄したものと考えられる。弥生土器と思われる細片も出土するが、図化は困難であった。帰属時期は出土遺物や周辺遺構の状況から弥生時代後期と考えられる。(第37図)



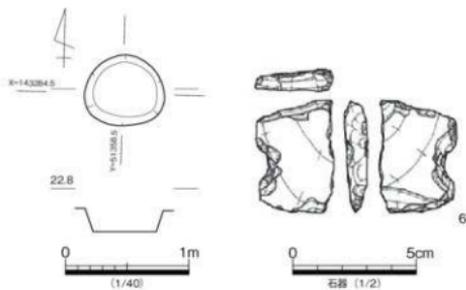
第34図 V-1区 SK02 平・立面図



第35図 V-1区 SK03 平・断面図



第36図 V-1区 SK04 平・立面図



第37図 V-1区 SK05 平・立面図、出土遺物

### Ⅲ-3区SD08

Ⅲ-3区東部で検出した溝状遺構である。主軸方位は南北方位を呈し、くの字状にわずかに屈曲する。幅0.4m、深度0.15mを測り、埋土は淡褐色砂質土となる。

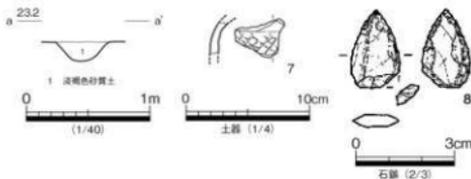
7・8はSD08出土遺物である。7は弥生土器甕である。外面には帯状に刻み目を認める。8はサカイト製の石鏃である。基部は破損しており、未製品の可能性も残す。

帰属時期は周辺地割に合致した方位を呈するが、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。(第38図)

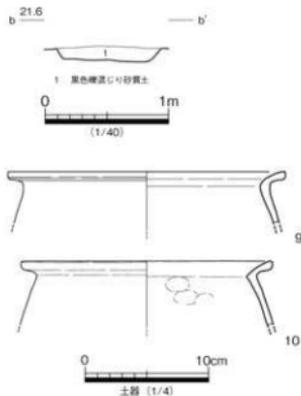
### I-3区SD09

I-3区で検出した溝状遺構である。幅0.4m前後を測り、黒色礫泥じり砂質土を埋土とする。延長方向はいずれも消失するが、南に延伸した箇所にはII-1区SD10が所在しており、連続する可能性が高い。9・10はSD09出土遺物である。いずれも弥生土器甕で、くの字形に短く屈曲し、内側に比較的に明瞭な稜線を残す。(第39図)

出土遺物から弥生時代中期中葉の帰属時期が想定できる。



第38図 Ⅲ-3区 SD08 断面図、出土遺物

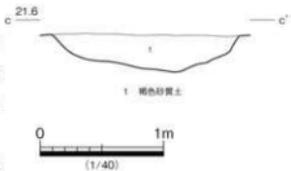


第39図 I-3区 SD09 断面図、出土遺物

### II-1区SD10

II-1区で検出した溝状遺構である。幅1.5m、深度0.3mを測り、船底状の断面形状を呈する。褐色砂質土を埋土とし、流水痕跡を認める。SR01の西に沿うように位置し、延長線上にはSD09が所在し、連続するものと考えられる。

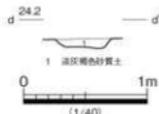
図化していないが、弥生時代中期中葉に属する土器を少量認め、当該期の帰属時期が想定できる。



第40図 II-1区 SD10 断面図

### IV-1区SD11

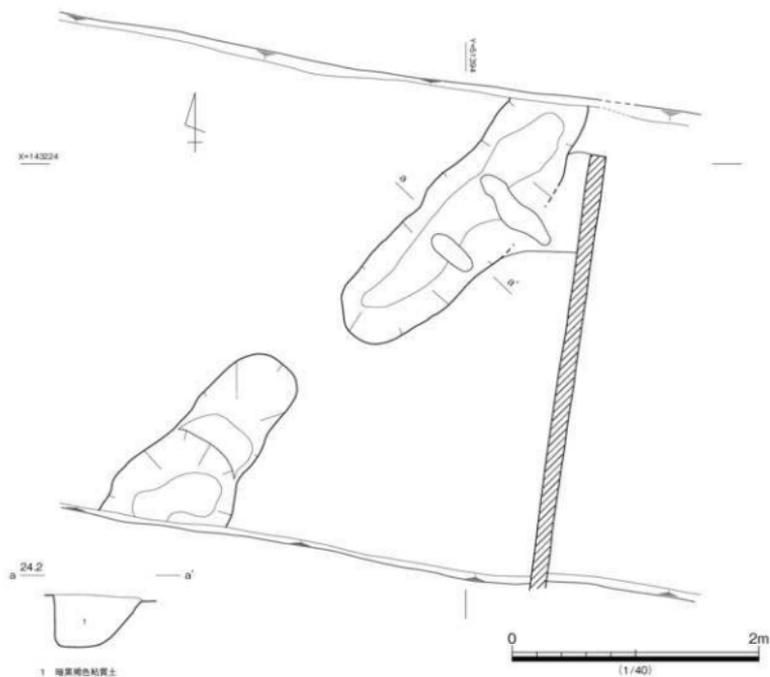
IV-1区中央部で検出した溝状遺構である。溝幅0.5mを測り、浅い皿状の断面形状を呈する。埋土は淡灰褐色砂質土で、SD08と酷似する。弥生土器と思われる細片が出土するが、図化は困難であった。周辺地割に合致した主軸方位だが、出土遺物とSD08との埋土の共通性から弥生時代中期中葉の所産と考えたい。



第41図 IV-1区 SD11 断面図

#### IV-1区SD12

IV-1区中央部で検出した溝状遺構である。主軸方位をN45°E。溝幅は0.5～1mと安定せず、途中で途切れる等、溝とするには問題を残すが、調査時の判断に従って溝として報告する。ただし、南接する多肥松林遺跡（3次、県道）では連続する遺構は確認できない。埋土は暗黒褐色粘質土となり、出土遺物はないが弥生時代の所産と考えておきたい。



第42図 IV-1区 SD12 平・断面図

## 自然流路

当調査地では4条の自然流路を検出した。東からSR 01、02、03、04として報告する。第2図に条里地割の乱れから想定される旧河道を復元したように、大局的には南から北へ流れ、当調査地南で分岐し、北上する旧河道A1と東ないし東北東へ延びる旧河道A2に分岐する。周辺の流路検出状況を第43図に示したが、検出したSR 01～04はいずれも北上する旧河道A1に相当し、その両脇に微高地が展開することが分かる。東接する日暮・松林遺跡（1次）では、旧河道A2に相当するSR 02が検出されており、微高地Bの南限を画する。各流路は後述するが、ここで注視すべきは流路の主水源である。大局的には南からの流れを復元したが、SR 02・03は東から西へ流れる多肥宮尻遺跡（1次）SR 01から連続・分岐したものであり、地表面では確認できない旧河道が存在することを示唆する。以下、各流路について報告する。なお、報告遺構名は概報時の流路名を踏襲する。

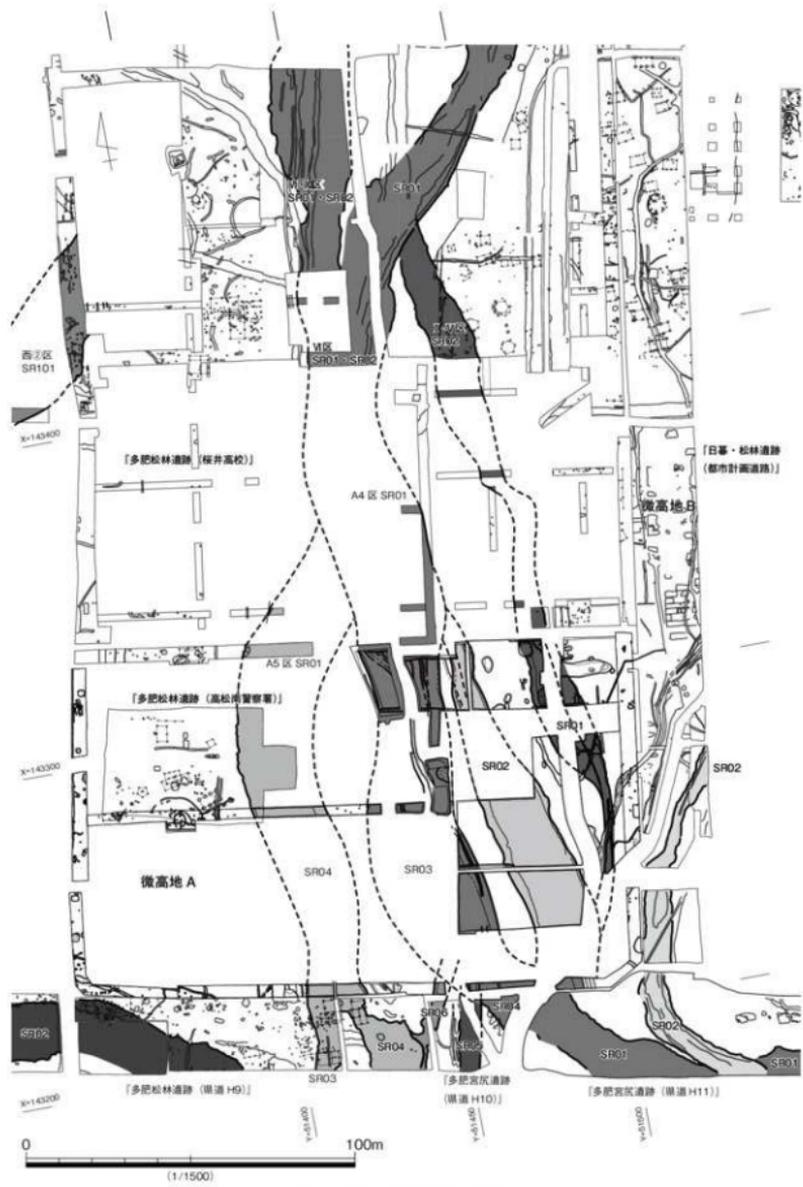
### SR 01（I-3・4区）

I-3・4区、II-1・3区で検出した自然流路である。北北西に流下し、多肥松林遺跡（1次）のI-V区SR 02に連続する。中世期に属する溝の存在もあり、南への連続性は判然としませんが、SR 02・03が分岐する付近に繋がる可能性が高い（調査時には未検出）。最大幅は15mに達するが、第45図の断面図が示すように、西側の肩部は立ち上がり緩やかで、深度は約0.5mに満たない。東側は肩部から幅5m程度は0.8m近い深度を有し、流路本体部分となる。C-C' 3層、D-E' 3・4層、F-F' 1層で粗砂ないし砂質土を埋土としており（下層）、緩やかな埋積ではなく、一定量の流水があったと推測できる。西側の緩やかな肩部に沿って茶褐色粘質土が堆積するが（A-A' 1層・B-B' 1層、上層）、東側では最上位の埋土は砂質土となり（中層）、最終埋積の直前にも一定の流水があったと推測できる。D-E' 5～6層は基盤層ブロックを含む粘質土系埋土であり、肩部の挟れ部分に堆積した層位と理解できる。局所的であるため断言できないが、緩やかに埋積が進行した後、東側の砂質土が示す流水があり、最終的には東側の茶褐色粘質土が示す湿地化した状況が復元できる。なお、I-3区北東部、SR 01西側肩部付近では炭化材が集中する箇所を認める（第47図）。調査時には堅穴建物の可能性も想定されていたが、主柱穴や中央土坑は未検出であり、かつ周辺の遺構分布状況から最終的にはSR 01埋土上層と判断した。

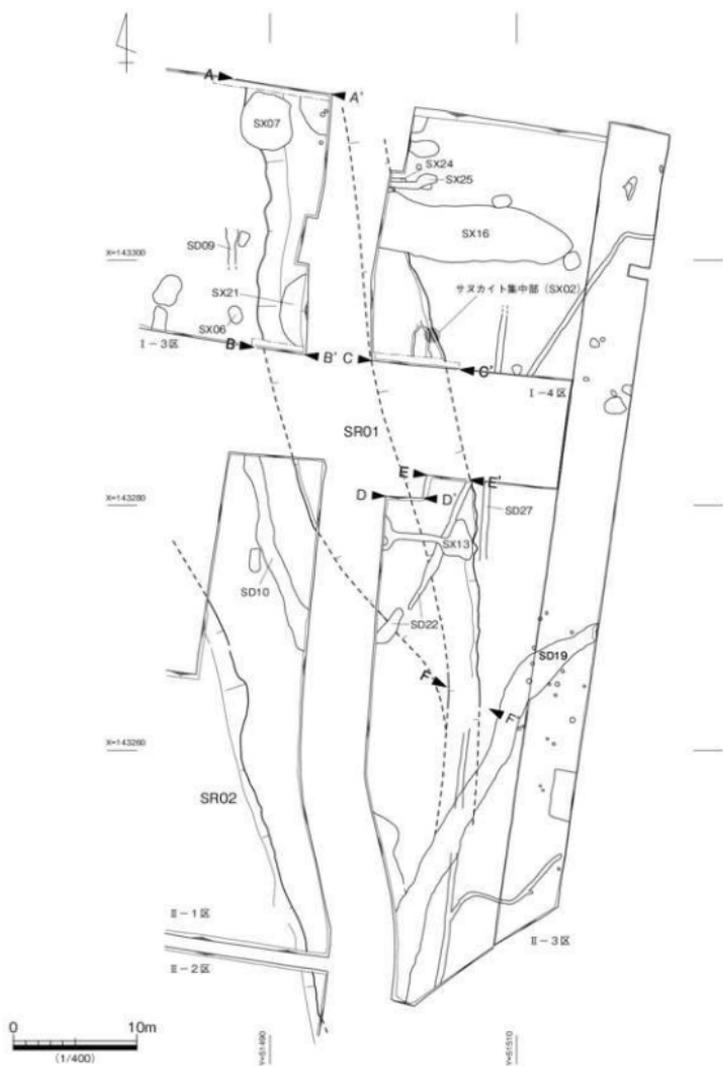
後述するが、I-4区SR 01上層、C-C' 1層対応部分で一定範囲に接合資料6点を含むサスカイト剥片が集中する状況があり（I-4区SX 02）、石器製作後に流路上面に一括投棄された状況が想定できる。

11～104はSR 01出土遺物である。層位別の取り上げがなされていないため、層位不明遺物が多く、調査区別に提示し、可能な限り層位別に報告する。

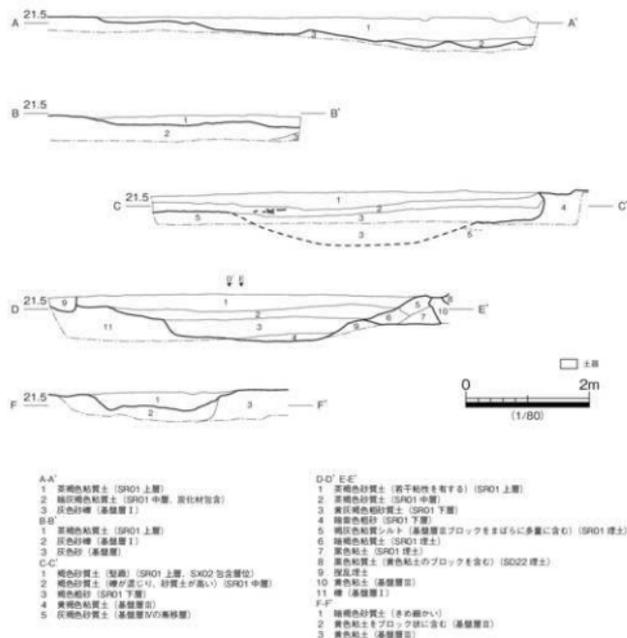
11～42はI-3区SR 01出土遺物であり、11・12は上層、13～34は層位不明、35～42は炭化材包含層出土となる。11は弥生土器壺である。外面には2条の突帯を認める。12は弥生土器甕である。短く屈曲し、端部を小さく摘み上げる。13～15は弥生土器直口壺である。13の外面には櫛状工具による波状文を認める。16は弥生土器壺である。口縁部は内湾気味にラッパ状に開き、外面には2条の突出の弱い突帯を認める。17は弥生土器広口壺である。頸部には穿孔を認める。18は刻目突帯を認める弥生土器壺頸部である。19～24は弥生土器甕である。口縁部は短く屈曲し、端部を丸く取め、内側に



第 43 図 自然流路復元図



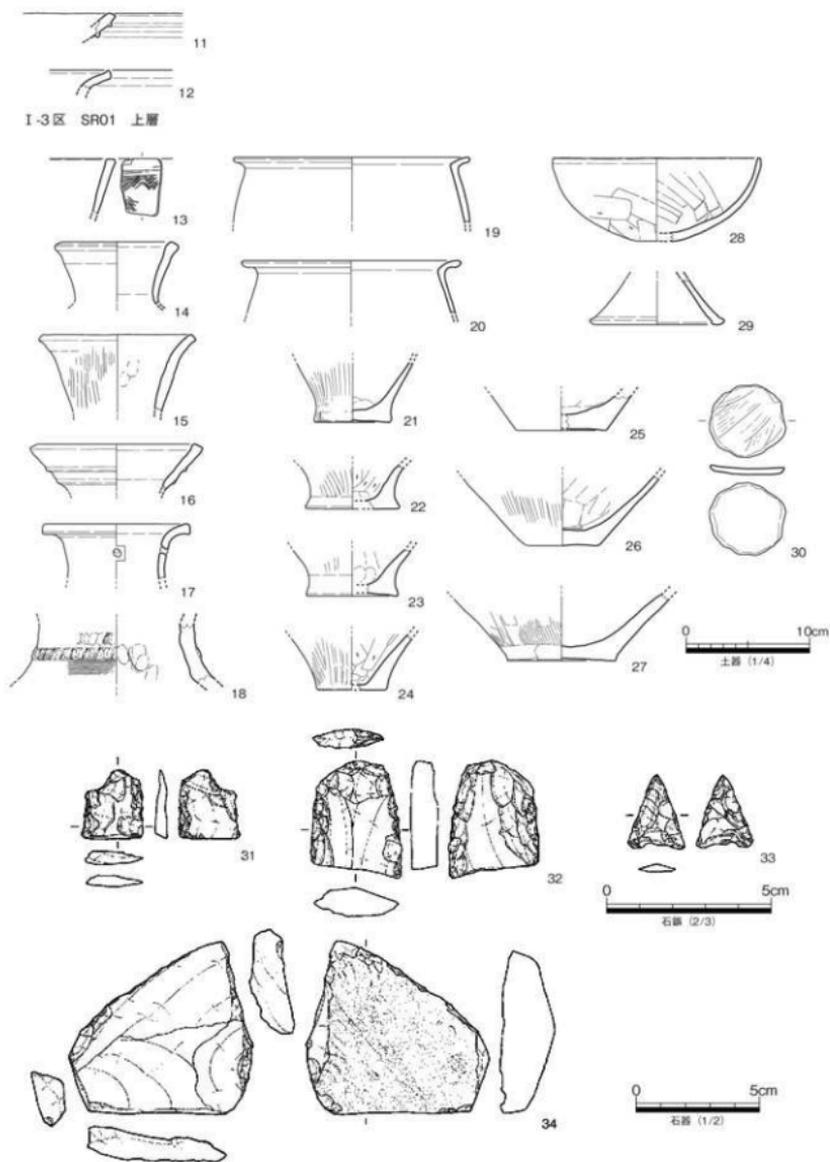
第44図 SR01 平面図



第 45 図 SR01 断面図

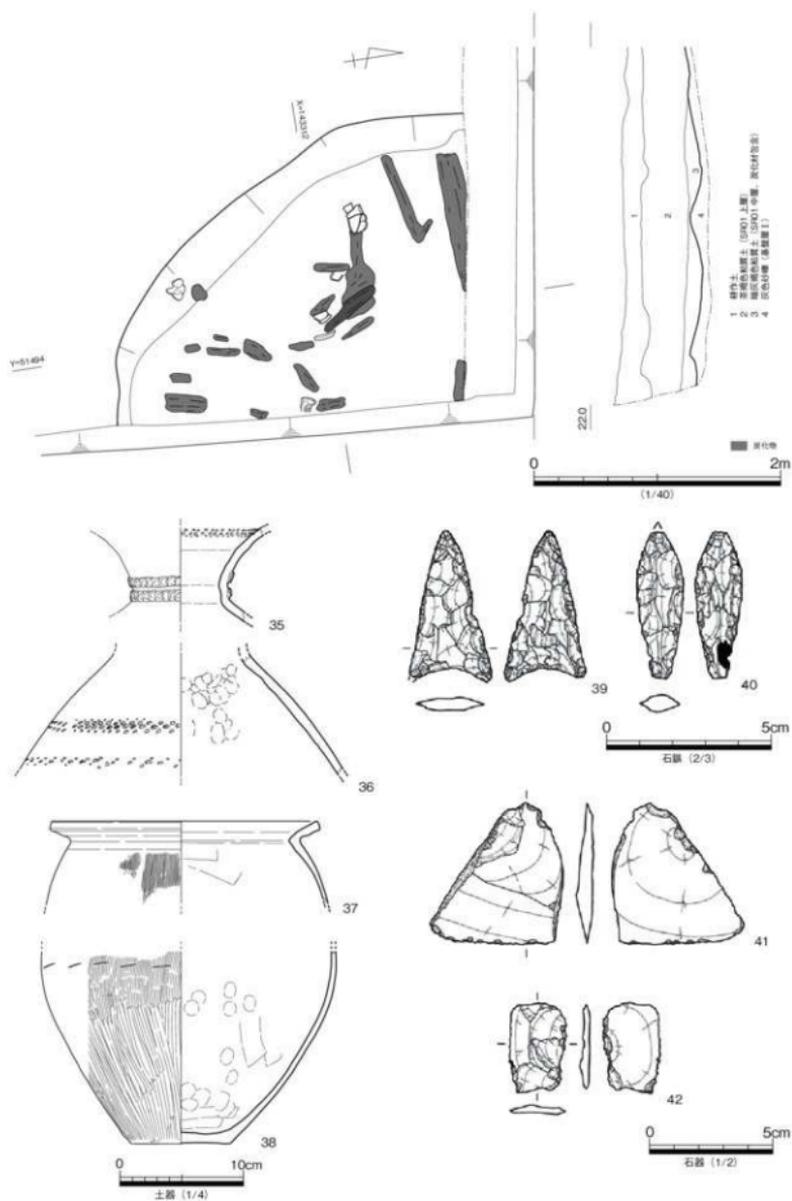
は明瞭な稜を認める。底部はいずれも外面はミガキ、内面にはケズリ調整を認める。25～27は弥生土器壺底部片である。28は弥生土器鉢である。角閃石を少量含む。丸底を呈し、端部は丸く取める。弥生時代終末期ないし古墳時代初頭に位置付けられる。29は弥生土器高坏脚部である。30は弥生土器を転用した円盤状土製品である。31は石鎌未製品と考えた。基部は折れ面を認める。32は石剣未製品と考えた。材質は不明だが、粘板岩系の石材となる。33はサスカイト裂石鎌である。34は石核である。自然面を残す。35・36は弥生土器壺である。同一個体の可能性が高い。口縁部は大きく開き、内面に連続刺突を施し、頸部には2条の刻目突帯を認める。肩部外面には口縁部内面と同じ意匠の連続刺突文を2段配する。37・38は弥生土器甕である。同一個体の可能性が高い。口縁部は短く屈曲し、内側に明瞭な稜を残す。端部は平坦に取める。外面下半のミガキは卓越し、胴部最大径部分には連続する圧痕文を認める。39・40はサスカイト裂石鎌である。39は自然面をわずかに残す。41はスクレイパー未製品とした。42は石鎌未製品とした。両極打法による剥片を利用し、調整を試みるが最終的には廃棄されたと考えられる。

以上、I-3区SR01出土遺物は、上層出土遺物が弥生時代中期中葉、層位不明遺物は28を除き、弥生時代中期中葉、炭化材包含層位共伴遺物も弥生時代中期中葉に属する。

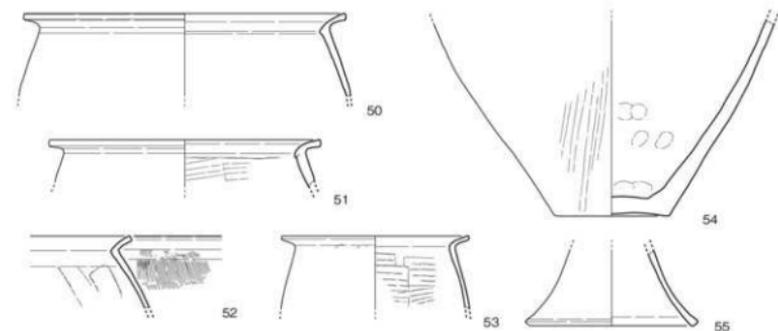
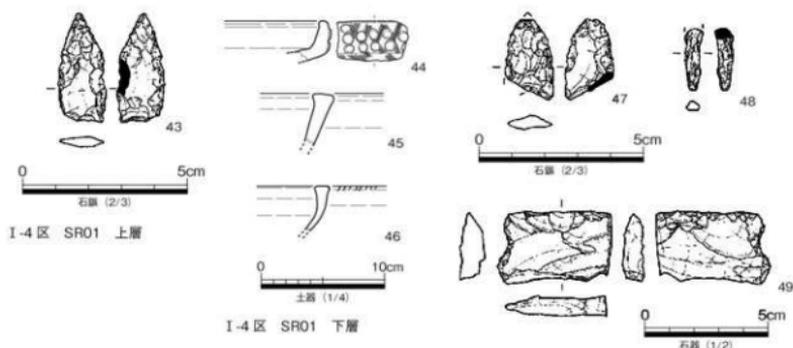


I-3区 SR01 層位不明

第46図 I-3区 SR01 上層・層位不明 出土遺物



第 47 図 I-3 区 SR01 上層炭化材検出状況・中層 (炭化材包含) 平・断面図、出土遺物



I-4区 SR01 層位不明

第48図 I-4区 SR01 上層・下層・層位不明 出土遺物

43～55はI-4区SR01出土遺物であり、43は上層、44～49は下層、50～55は層位不明となる。56～88はSR01上面で検出した一括廃棄資料であり、SX02として抽出した。本来であればI-4区SR01上層として報告すべきだが、出土状況と合わせて後述する。

43はサヌカイト製石鏃である。44は弥生土器壺である。口縁端部を上方に屈曲させた端面に斜格子文を施し、円形浮文を貼付する。天地が逆となり、口縁端部を垂下させた壺の可能性も残す（弥生時代中期中葉）。45・46は弥生土器鉢である。45は端部を小さく拡張させ、上端面は水平となる。46は口縁部をくの字状に屈曲させ、端面外面に刻み目を施す。47はサヌカイト製石鏃である。48はサヌカイト製石鏃である。49はサヌカイト製石庖丁未製品である。2側面に折れ面を認める。50～53は弥生土器甕である。口縁部は短く屈曲し、内側には明瞭な稜を認める。53は端部を丸く収めるが、他は端面を認める。54は弥生土器壺底部である。55は弥生土器高坏脚部である。

以上、I-4区SR01出土遺物は、44の帰属時期は不明であるが、下層、層位不明ともに弥生時代中期中葉に属する。

#### I-4区SX02 (SR01内)

I-3区SR01の上面で検出したサヌカイト廃棄遺構である。厳密にはSR01埋土となるが、一括性を重視し、SX02とした。第49図によると、径1mの範囲にサヌカイト剥片が分布し、径0.6mの範囲に集中する。さらに、エレベーションでは径0.6m部分ではサヌカイトの重なりを認めるが、全体的には同一面に分布することが分かる。図版14・15には出土状況写真を示した。SR01埋土との関係では第45図C-C' 1層上面での検出となる。上面の削平状況は明らかではないが、SR01の東側肩部付近に位置し、埋積がかなり進行した段階で一括投棄された状況が復元できる。SR01の東側は安定した微高地Bが広がり、弥生時代中期中葉、弥生時代後期末～終末期に属する日暮・松林遺跡が存在する。前述したように、SR01出土土器は弥生時代中期中葉に限られ、その上面で検出したことから、同時期ないしそれ以降の所産と考えられ、周辺の遺構分布や同時期に属する遺構のサヌカイト共伴関係等から、SX02は弥生時代中期中葉に位置付けたい。

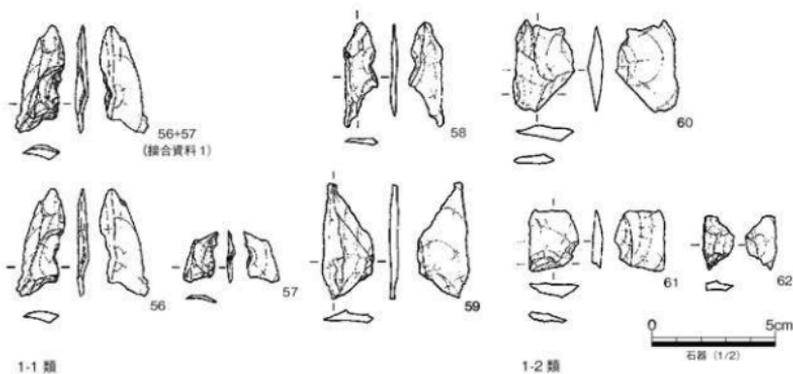
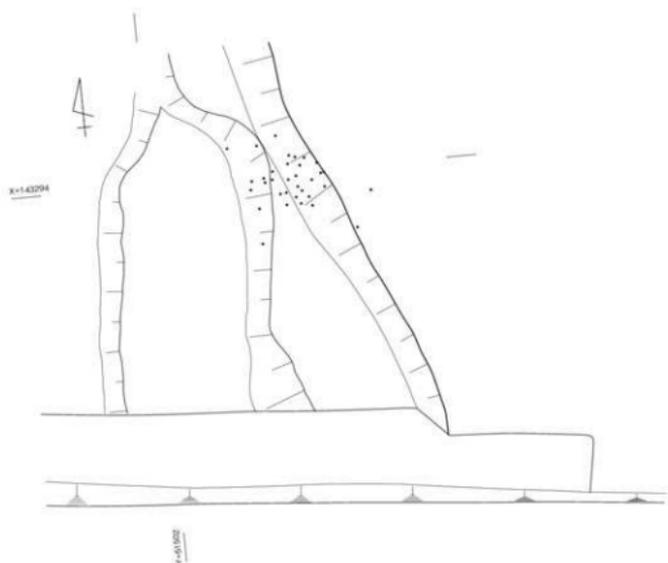
56～88はSX02出土遺物である。6点の接合資料を認める。直接打法による剥片のうち、底面を認める等打面調整剥片を1-1類とし、打面調整剥片以外の直接打法による剥片を1-2類、両極打法による剥片を2類、分類不明を3類、4類が石核、5類が製品・未製品として分類した上(註1)、分類別に代表的なものを抽出図化した。なお、総量や分類別の点数等は第5・6表にまとめた。同表にはSX02以外のI-4区SR01出土サヌカイト剥片の分類別の数量計測も掲載した。

56～59は打面調整剥片である(1-1類)。56・57は2度の打面調整を認める(接合資料1)。56・57と58は同一母岩の可能性が高い。打面と底面(剥離面)は平行に近いが、厳密には平行ではなく、接合資料2が示すように、目的剥片を底面に近い鋭角で剥出した状況が想定できる。60～62は直接打法による剥片である(1-2類)。

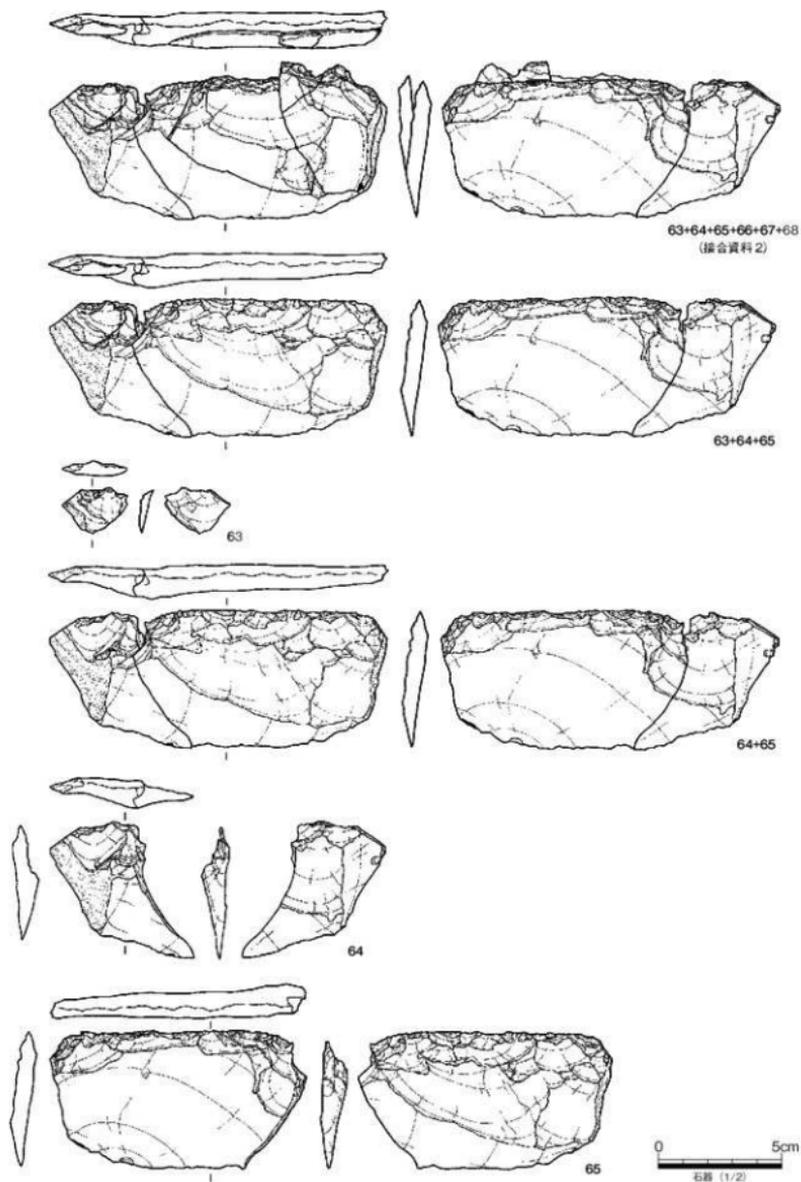
63～68は横長剥片を主体とした接合資料であるが(接合資料2)、それ自体が石核ともなる。両側面に自然面を認め、その幅は約14cm、厚みは1.6cmを測る。接合関係を5箇所で見認める(以下、接合関係1～5と仮称)。接合関係1は63～65と66～68の接合であり、石核となる63～68から66～68の横長剥片を剥出した状況が復元でき、接合関係2(66と67・68)、接合関係3(67と68)から意図した目的剥片が取れず、破損した可能性も考えられる。66は背部調整を認め、製品製作を試みたが最終的には投棄される。石核となる63～65の剥離面に伴う打点は66～68の目的剥片を得るための打点とは逆方向にあり、金山型剥片剥離技術(森下2002、2005)による連続した横長剥片の剥出は復元できず、潜在的な割れ等の複雑な要因を想定する必要がある。63～65には背部調整が加えられ、おそらくは石砲丁を製作していくが、64と65に破損する(接合関係4)。63と64・65の接合関係は背部調整によるものと考えられる(接合関係5)。69・70はスクレイパー未製品と剥片の接合資料である(接合資料3)。69・70は一側面に自然面を認め、最大幅は約13cmを測る。背部調整を認め、スクレイパー製作がなされたが、剥離ミスで70が剥出され、再度69の背部を調整するが、最終的には投棄される。

71～77は両極打法による剥片である(2類)。接合資料が2点あり、71・72には自然面を認める。接合資料4(71・72)には直接打法による剥離も認め、残核や剥片を両極打法で加工し、さらに小型品を製作した状況も推測できる。各分類の比率は後述するが(第5章第1節)、SX02では両極打法による剥片が直接打法による剥片の2倍以上を占める。

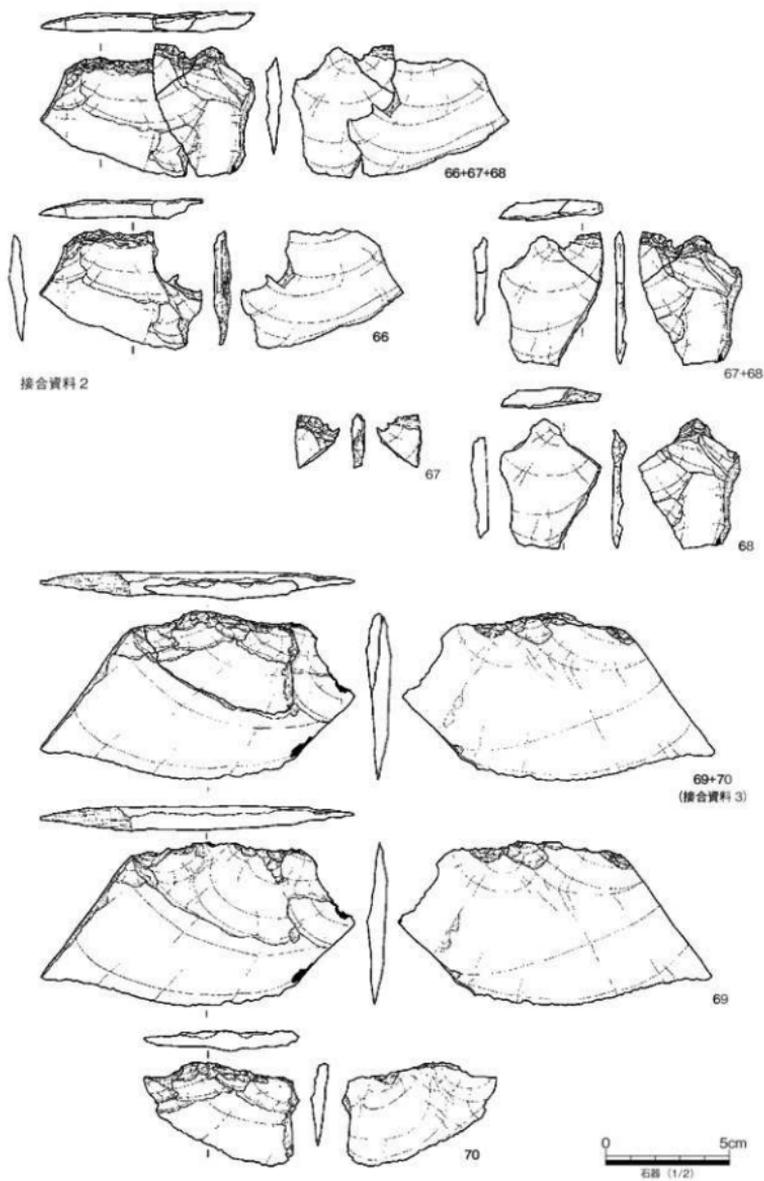
78～80は石核としたが(4類)、その数は極めて少なく、抽出は困難であった。



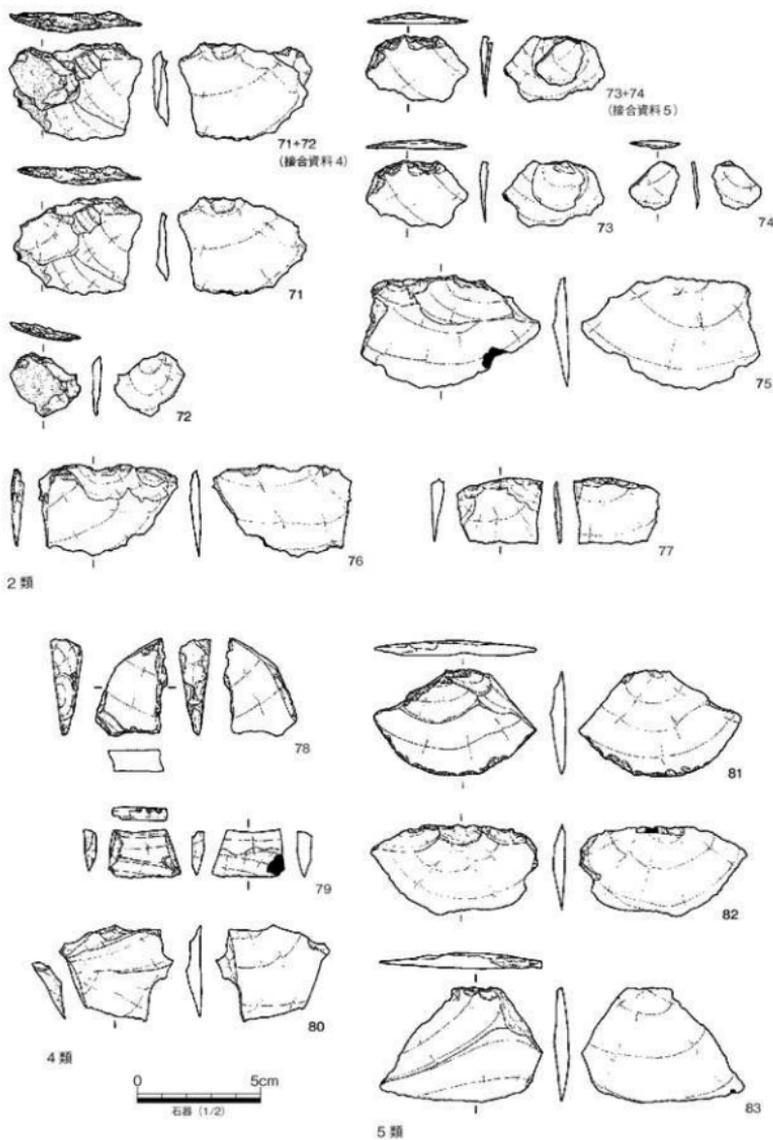
第49図 I-4区 SX02 (SR01内) 平・立面図、出土遺物1



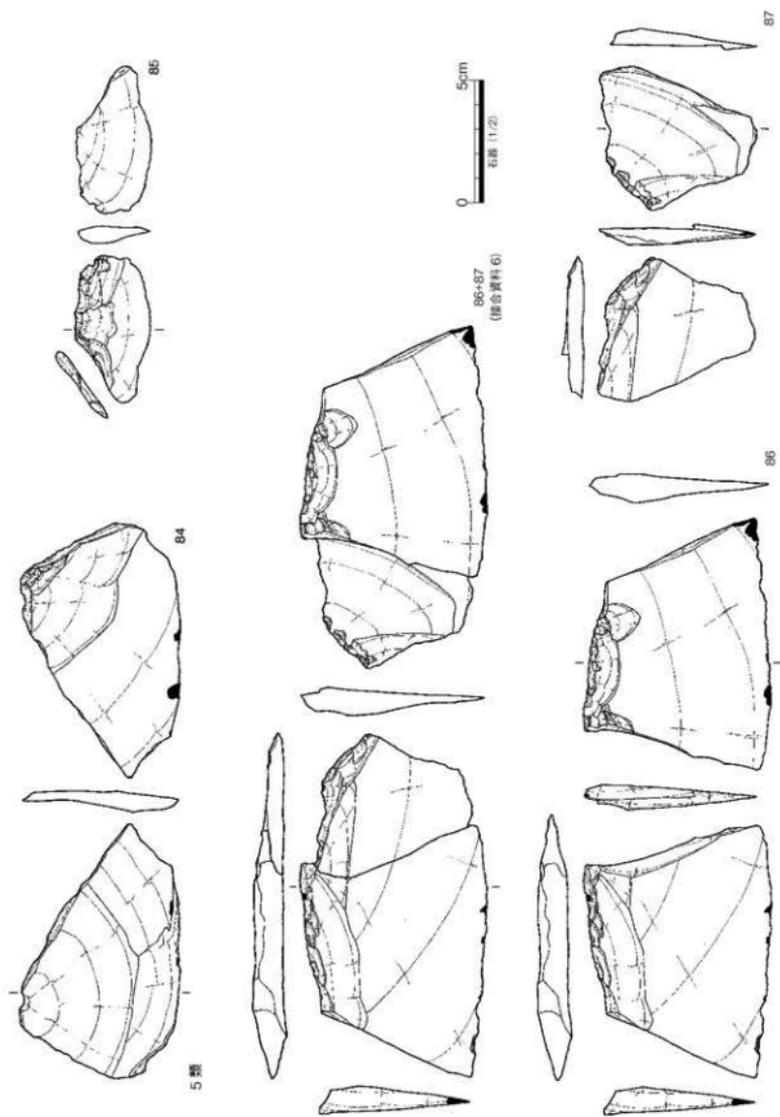
第 50 图 I-4 区 SX02 (SR01 内) 出土物 2



第 51 図 I-4 区 SX02 (SR01 内) 出土遺物 3



第 52 図 I-4 区 SX02 (SR01 内) 出土遺物 4



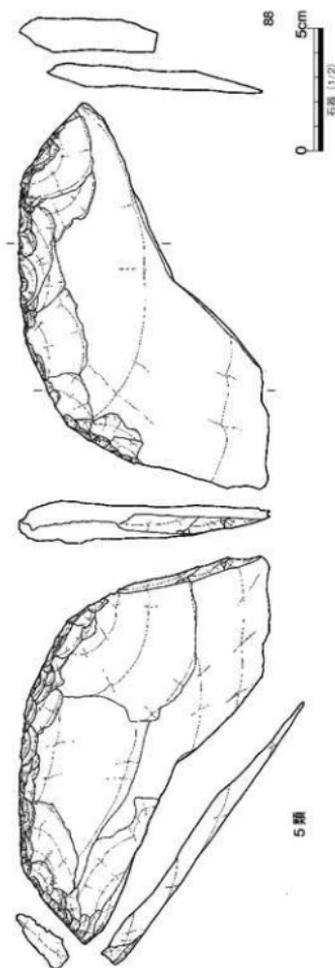
第 53 図 I-4 区 SX02 (SR01 内) 出土遺物 5

建設番号	キヤビ	石山調整		調整行法		調整行法		石山調整		キヤビ	調整行法		調整行法		石山調整		建設	
		点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数		点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数		点数
	調整D17																	
	11 ~ 20mm	1	0.67	10	5.72	19	10.39											
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm	1	3.94	2	8.45	8	45.05	12	65.09									
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	

建設番号	キヤビ	石山調整		調整行法		調整行法		石山調整		キヤビ	調整行法		調整行法		石山調整		建設	
		点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数		点数	原入 点数	点数	原入 点数	点数	原入 点数		点数
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	
	調整D17																	
	11 ~ 20mm																	
	21 ~ 30mm																	
	31 ~ 40mm																	
	41 ~ 50mm																	
	51 ~ 60mm																	
	61 ~ 70mm																	
	71 ~ 80mm																	
	81 ~ 90mm																	
	91 ~ 100mm																	
	101 ~ 110mm																	
	111 ~ 120mm																	
	121 ~ 130mm																	

第5表 SR01 出土ササカイト一覧1





第54図 出土遺物6 SX02 (SR01内) 区I-4区

81～85はスクレイパー未製品である。製品として完成したものであるが、未使用の状態で投棄されており、未製品として報告する。いずれも背部に調整が施され、下端を刃部とする。81は刃部にも細かな調整を加える。83・84の側面には自然面を認め、84は自然面の特徴から63～68（接合資料2）と同一母岩の可能性が極めて高い。84は81程度の大きさのスクレイパーを剥出したと思われる剥離面を認める。86・87は最大幅約14cmを測り、横長の目的剥片を剥出時に破損し（接合資料6）、86にのみ背部調整を施す（スクレイパー未製品）。

88は未製品である（5類）。両側面と下端には折れ面を認め、その最大幅は約17cmを測る。SX02出土サヌカイトのなかで最大となる。上端部の調整を丁寧に施し、一部は潰れ状を呈する。

以上、SX02出土サヌカイトは石器製作後の廃棄一括資料と考えられる。幅14cm程度の素材、おそらくは板状素材から石慮丁やスクレイパーを主に製作した状況が復元できる。接合資料を6点含み、出土状況を考慮すると、短期間の石器製作に伴う廃棄と想定できる。所属時期は弥生時代中期中葉と考える。総重量は2,813gを量り、1cm以下の剥片を除く総点数は1,002点となる。自然面の特徴から少なくとも2つの板状素材があり、板状素材1は63～68（接合資料2）、71・72（接合資料4）、83、84、板状素材2は69・70（接合資料3）となる。素材の幅は約14cmを測り、最大の厚みは1.6cmとなる。板状素材1は残核や剥片を両極打法で再利用していく状況も復元できる。SX02に小型未製品は確認できないが、同一調査区のSR01出土遺物には未製品を認め（31、42）、南接するII-3区SR01からも石鏃や石錐の未製品が出土する（99～101、104）。当初、接合資料

2は金山型剥片剥離技術による連続する目的剥片の剥出を想定していたが、63～65の剥離面が逆方向からの剥離であるため立証できなかったが、潜在的な割れ等の不測の事態も想定でき、同剥離技術が用いられた可能性は高い。SX02出土遺物ではないが、II-3区SR01出土の横長剥片において、同剥離技術を認める（98）。

## S R 01 (Ⅱ-3区)

89～104はⅡ-3区S R 01出土遺物であり、89～101は層位不明、102～104はS R 01に帰属する可能性が極めて高い。

89は弥生土器大口壺である。口縁端面に斜格子文を施す。90は弥生土器直口壺である。91は弥生土器甕である。口縁部はにぶく短く屈曲し、端面はかすかに凹む。92は弥生土器甕底部である。平底。93・94は焼土である。木舞等の痕跡はないが、指押さえを認める。砂粒等の混じりは少なく、比較的精良な胎土となる。95は扁平片刃石斧である。基部に敲打痕、刃部を中心とした表面には擦痕を認める。96はチャート製の火打石である。外縁部を中心に不定方向の剥離を認める。混入品か。97・98は横長剥片である。いずれも一側面に自然面を残す。97は背部調整を認め、おそらくは石甕製作中に破損、廃棄されたものと考えられる。98は金山型剥片剥離による剥離と考えられ、明瞭な底面や打面調整面を認める。背部調整があり、製品の可能性もある(スクレイパー)。99～101は石鏃未製品とした。側面に細かな剥離調整があり、99は凹基式、100は凸基式と判断しているが、石鏃の可能性もある。99は折れ面を認め、石刺の可能性も残す。102・103はササカイト製石鏃である。102は平基式、103は凹基式となる。104はササカイト製石鏃未製品である。基部は方柱状を呈する。

以上、Ⅱ-3区S R 01層位不明遺物は、土器は弥生時代中期中葉に属し、共存する石製品も96を除き、同時期の所産と考えられる。

## S R 02

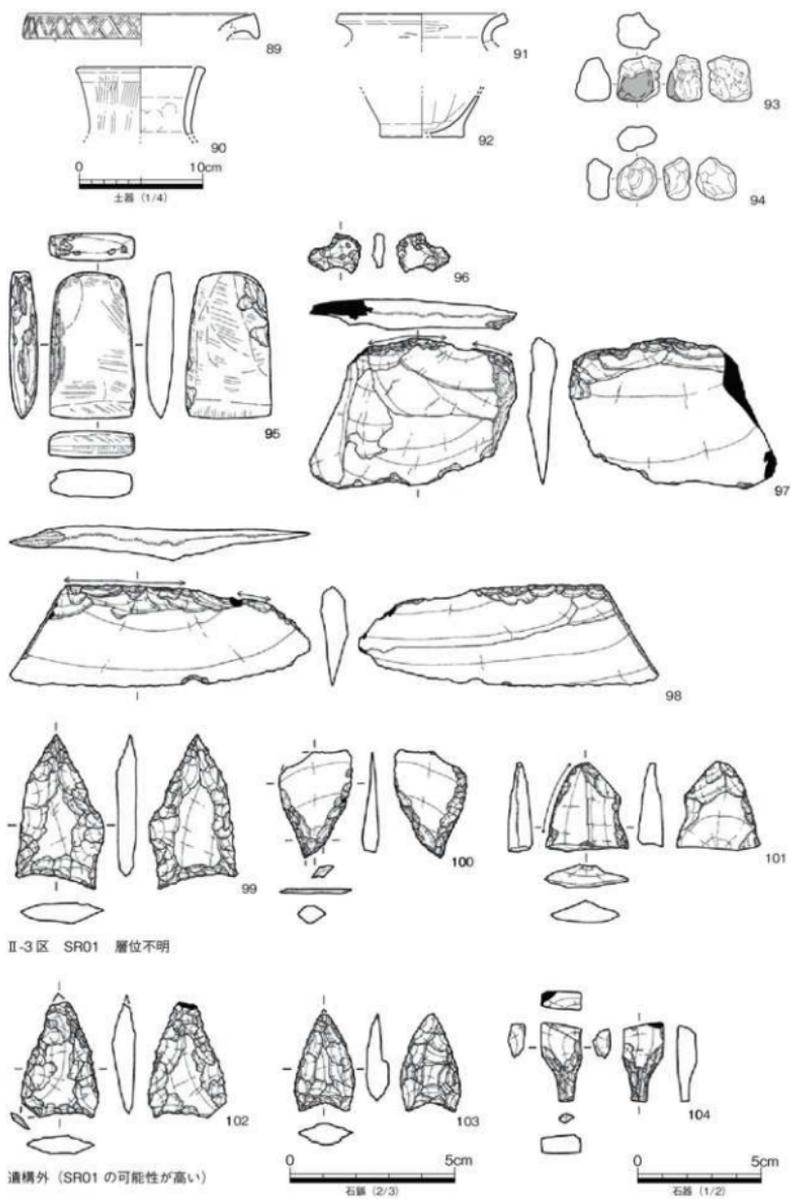
I-2・3区、Ⅱ-1・2区で検出した自然流路である。北北西に流下し、多肥松林遺跡(1次)のA4区S R 01に合流する可能性が高い(第43図)。南への連続性は明らかではないが、延長上にはⅣ-4区では明瞭な肩部は検出されていない。第59図流路通し断面Cによると、Ⅳ-4区の基盤レベルはかなり低く、かろうじて平面で検出した肩部に対応する層位を認めるが(S R 02・03分岐部分)、その上部には中世期初頭以降の低地堆積土を認め、本来の広がりは判然としなない。多肥松林遺跡(1次)S R 01が分岐し、その一方がS R 02に連続する可能性が高い。

流路幅はI区が7～10m、Ⅱ区が18～20mとかなり広いが、深度は最深度で0.5mと浅い。埋土はⅡ-1区では3層に大別でき(第17図、壁面土層⑰)、下層には礫混じりの黒色粘土、中層に暗黒灰色粘質土、上層に暗褐色混砂粘質土を認める。Ⅱ-2区では層序が異なり(第18図、壁面土層⑱)、下層に黒褐色粘質土(20層)、中層に礫混じり層(14～19層)、上層に粘質砂ないし粗砂(10～13層)を認める。流路北半部には礫混じり層は確認できず、合流・分岐部分である南側において礫を包含しており、その差異は溝幅や深度にも反映される。合流・分岐部分ではかなりの水量を伴う激しい流水があったが、北側では緩やかになり、滞水化した状況が想定できる。水田面等の存在は確認されていない。

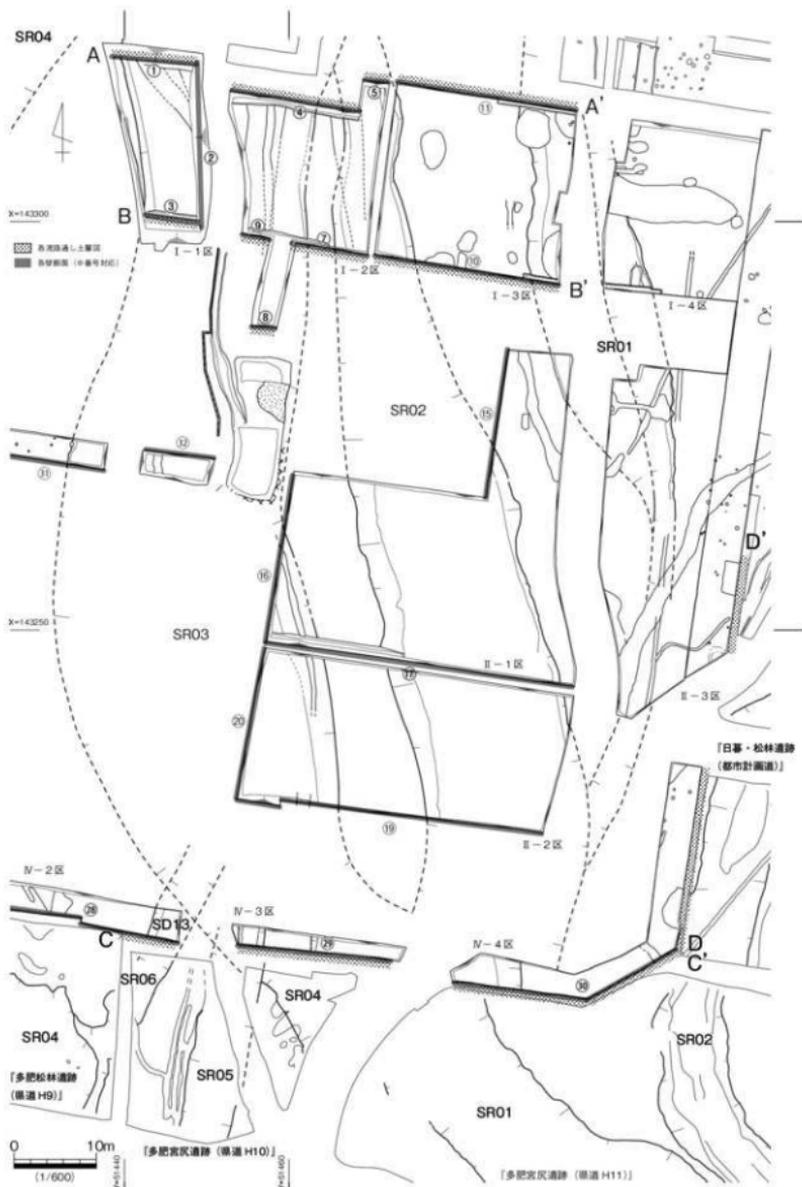
なお、後述するように、S R 03とは同時に流下した状況も想定できる。

105～111がS R 02出土遺物である。105・106はI-2区、107・108はI-3区、109・110はⅡ-1区、111はⅡ-2区出土となる。

105は縄文土器深鉢である。器表面の磨減は激しいが、口縁端部下に刻目突帯を認める。縄文時代晩期。106は弥生土器壺である。口縁部は直線的に開き、外面には2条の突帯を認める。107は弥生土器甕である。端部を欠くが、内側には明瞭な稜を認める。108は弥生土器甕底部である。平底。109は弥



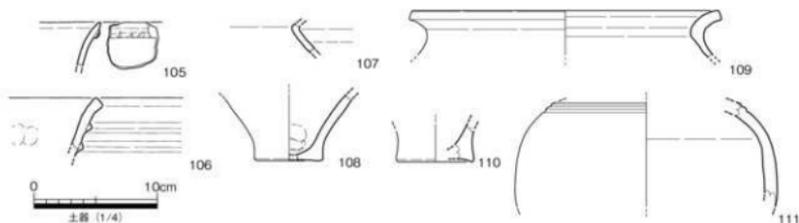
第 55 図 II-3区 SR01 出土遺物



第 56 図 SR02・SR03 平面図及び土層位置図

生土器甕である。短く屈曲し、端面を認める。110は弥生土器甕底部である。111は弥生土器甕である。傾きに問題を残すが、削り出し突帯を認める。前期中葉。

以上、SR02出土遺物は縄文時代晩期、弥生時代前期中葉、弥生時代中期中葉に帰属する土器を認め、未報告遺物を含めても、中期中葉の土器が主体を占める。



第57図 SR02 出土遺物

### SR03

I-1・2区、V-1~3区、II-1・2区で検出した自然流路である。北ないし北北西に流下し、多肥松林遺跡（1次）VI区SR01・02に連続し、さらに分岐していく（第43・56図）。南側は多肥宮尻遺跡（1次）SR01・04にスムーズに連続することから、IV-3・4区では明瞭な肩部は検出されていないが、多肥宮尻遺跡からSR02・03分岐部分を経て、連続すると判断できる。なお、IV-2区東端部で検出した肩部は、調査段階はSR03と理解されていたが、南側の多肥松林遺跡から連続するSR06に合致した検出ラインであることから、本報告書ではSD13として報告する。また、V-3区は旧河道Aの伏流水を利用した出水であり、周辺の水田への主水源としての利用が想定できるが、調査ではわずかに重機で掘り下げたに留まり、十分な記録は作成し得ていない。

流路幅はI区では約20m、II・V区では25m以上を測り、検出した4条の流路のなかでは規模が最も大きく、旧河道Aの主流となる。最深部の深度はI-1区では12mを測る。埋土は土質や含有物、層序関係等から10単位に大別でき、第58・59図にSR02・03の通し断面図を提示するとともに、第56図にSR03の壁面土層番号を示した。第60図に層序関係と各層位の位置関係から想定されるI区での流路の変遷を示した。本来であれば層位別の取り上げに基づき、埋没過程の提示が必要だが、遺物は各調査区別に一括取り上げられている。よって、以下で復元した単位はあくまで層序や重複関係に基づく変遷過程となり、各単位の時期は言及できない。

**単位9・10** I-2区の東側肩部の落ち際で検出した灰色細砂ないし粗砂である。層序関係から確認できる層位では最も古い段階に埋積した層位となる。一定量の水量を伴う流水が確認できる段階の埋土となり、下位に細砂、上位に粗砂が堆積する。想定されるSR03の幅は27mを測る。

**単位7・8** 流路底に堆積した礫混じり粗砂～細砂（単位8）、黒色シルト（単位7）である。重複関係は確認できないが、単位8→7の埋積が想定できる。単位8は礫を包含する粗砂ないし細砂であり、相当量の水量が想定でき、逆に単位7は緩やかな環境下での埋積となる。当段階の想定される流路幅は16～18mとなる。

**単位6** 単位7埋積後に開削ないし流下する溝状遺構である（SD14）。東側の流路肩の落ち際で検

出しており、Ⅰ区を縦断し、Ⅱ-1・2区SD 15に連続する可能性が高い。幅0.7m、深度0.2mを測り、舟底状の断面形状を呈する。灰黒色シルトを埋土とする。

**単位5** Ⅰ区SR 03のほぼ全面に埋積する黒灰色粘土ないしシルトである。単位6(SD 14)を被覆し、粗砂ラミナ堆積や礫を認め、一定の水量を伴う埋積が想定できる。当該階で想定される流路幅は25m前後となる。

**単位4** Ⅰ-1区東壁、Ⅰ-2区西壁で確認した層位である。茶灰～暗灰色シルトないし粘質土を埋土とし、幅約5m、深度は0.5mと深い。Ⅰ-1・2区間の現水路に沿って確認できる。また、単位5を割り込み、単位1で被覆される層序関係からSR 02の検出された埋土は当該階に属する可能性が高い。

**単位3** 黒～灰色礫混じり粘質土ないし砂質土を埋土し、当該階の流路幅15～18mのほぼ全域で確認できる。Ⅰ-2区では単位4を切り込み、埋土の特徴から一定量の水量を伴う流下が想定できる。なお、Ⅰ-1区では単位4との層序関係が逆転するが、調査時の誤認と考えたい。

**単位2** Ⅰ-1区北壁及び東壁で検出した溝状の落ち込みである。幅1.5m、深度0.8mを測り、黒灰～灰色砂ないし砂混じり砂礫を埋土とし、一定量の水量を伴う流下が想定できる。単位4と同様に、Ⅰ-1・2区間の現水路部分から西側流路肩部方向に流下する。

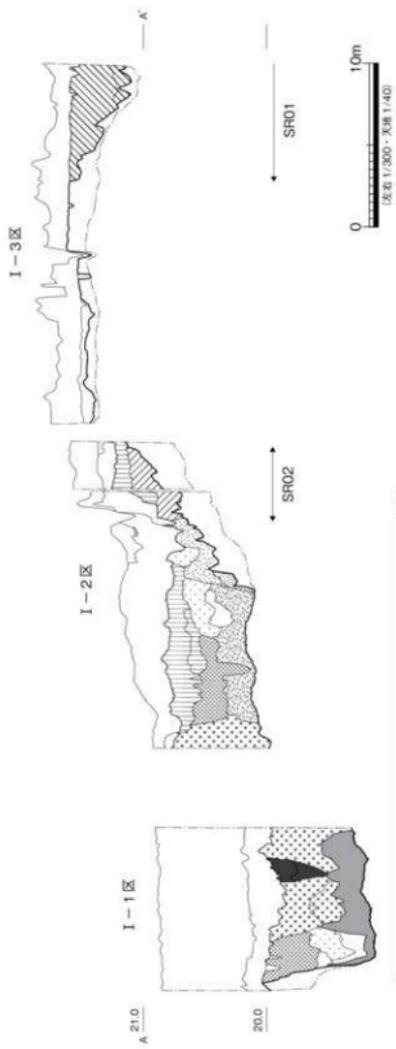
**単位1** 検出した限りでは最終埋積土となる。黒灰～暗茶色粘質土を呈し、部分的にラミナを認めるが、緩やかな埋積となる。SR 02を被覆しており、その幅は35mに達する。

以上、SR 03の埋積状況を復元したが、複数回の流下、埋積を繰り返した状況が想定でき、段階ごとに流路の位置や幅や深度が異なる。

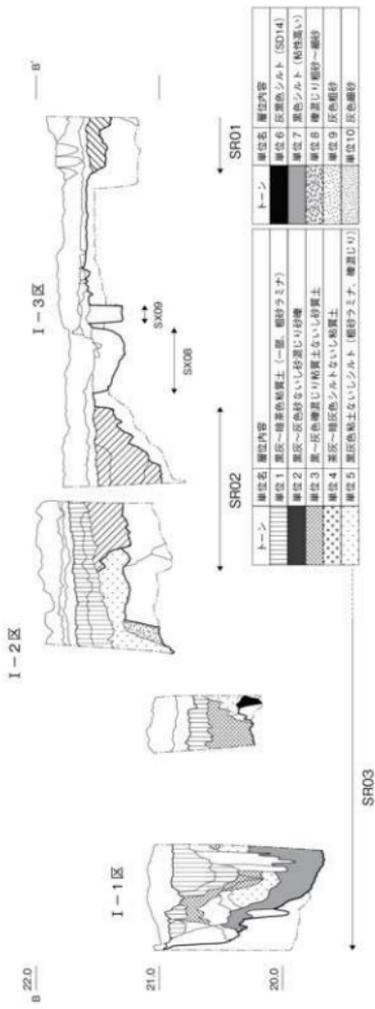
112～192はSR 03出土遺物である。Ⅰ-2区、Ⅱ-2区から出土し、時代別に一括して掲載した。なお、古代に属する遺物はいずれもⅠ-1区出土となる。

112～126は弥生土器、127～129は製塩土器である。112～118は壺である。112・113は広口壺である。112は頸部が短く直線的に立ち上がり、口縁部は大きく開く。弥生時代後期後半。113は頸部が比較的長く立ち上がり、体部は球球形を呈する。弥生時代中期中葉。114は口縁部がラッパ状に大きく開き、口縁部外面に突帯を1条施す壺である。端部を小さく摘み上げる。115は体部が無花果形を呈し、中位やや上方が最大径となる。体部下半には縦方向、最大径部分には横方向のミガキが丁寧に施される。平底。弥生時代中期中葉。116は壺頸部である。太く短く立ち上がり、体部境に突帯を巡らす。弥生時代後期後半～終末期。117は無頸壺である。口縁部を肥厚させ、端部に平坦面を有する。端部下0.8cmの位置に2つの円孔を認め、残存部位ではその間隔は3.6cmを測る。外面には1条凹線による加飾を認める。弥生時代中期中葉。118は直口壺とした。口縁部は短く内傾し、外面に数条の凹線を施す。全面に二次焼成の痕跡を認める。弥生時代中期中葉ないし中期後半。119～121は甕である。口縁部は短く屈曲し、119・120には痕跡的な頸部を認め、119・121には沈線状の凹線を認める。弥生時代中期中葉。122は壺底部片である。平底。123～125は鉢である。123は片口を有し、端部は上方に摘み上げて、端面を認める。内面にはミガキを施す。帰属時期不明。124は大型品で、口径47cmに復元できる。弥生時代終末期。125は端部内外面に凹線を施して端部を内外に小さく突出させ、外面には凹線を認める。弥生時代中期後半。126は壺ないし器台とした。端部に加飾帯を貼付し、外面には上下2段の山形文を施す。127～129は製塩土器脚部である。ハの字形に小さく開く。備讃Ⅱ式。128・129は二次焼成によ

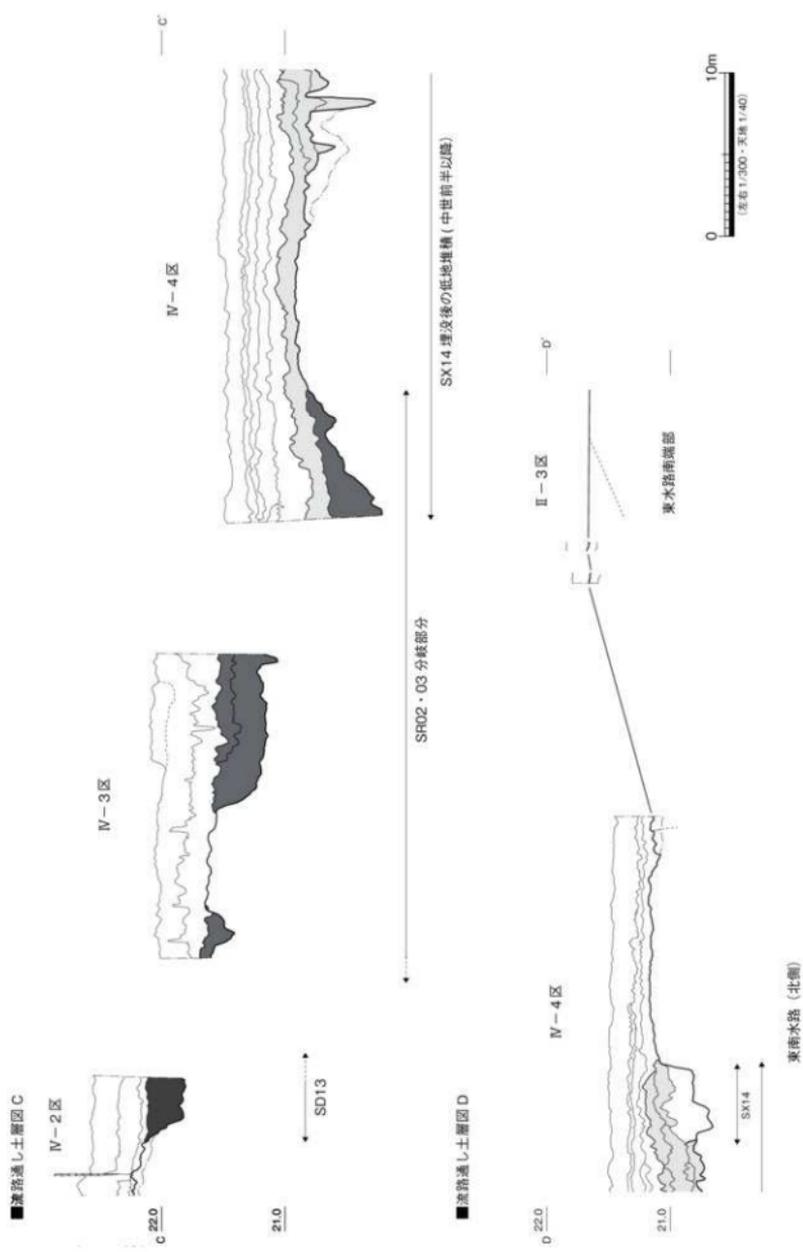
■道路通し土層図A



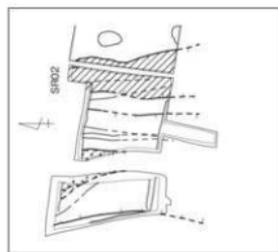
■道路通し土層図B



第58図 SR03 (SR02) 通し土層図

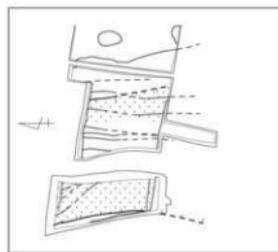


第 59 図 SR03 (SD14) 通し土層図

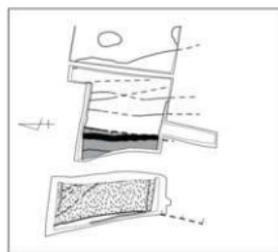


単位 4

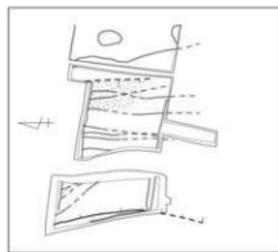
(※本断面への注視ラインは本段階)



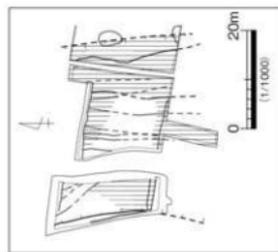
単位 5



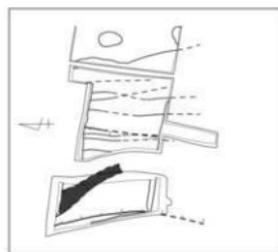
単位 8 → 単位 7 → 単位 6  
(SD14)



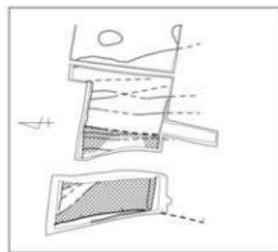
単位 9・10



単位 1



単位 2



単位 3

トーン	単位
■	単位 1
▨	単位 2
▩	単位 3
▪	単位 4
▫	単位 5
■	単位 6
▨	単位 7
▩	単位 8
▪	単位 9
▫	単位 10

※トーンは第 59・59 頁に対応  
※トーンは土曜日から埋立した各層の平均分率

第 60 図 SRC03 埋積状況復元図

り赤変する。127は胎土中に角四石を含む。製塩土器は体部片の確認に努めたが、未報告遺物には含まれない可能性が高い。

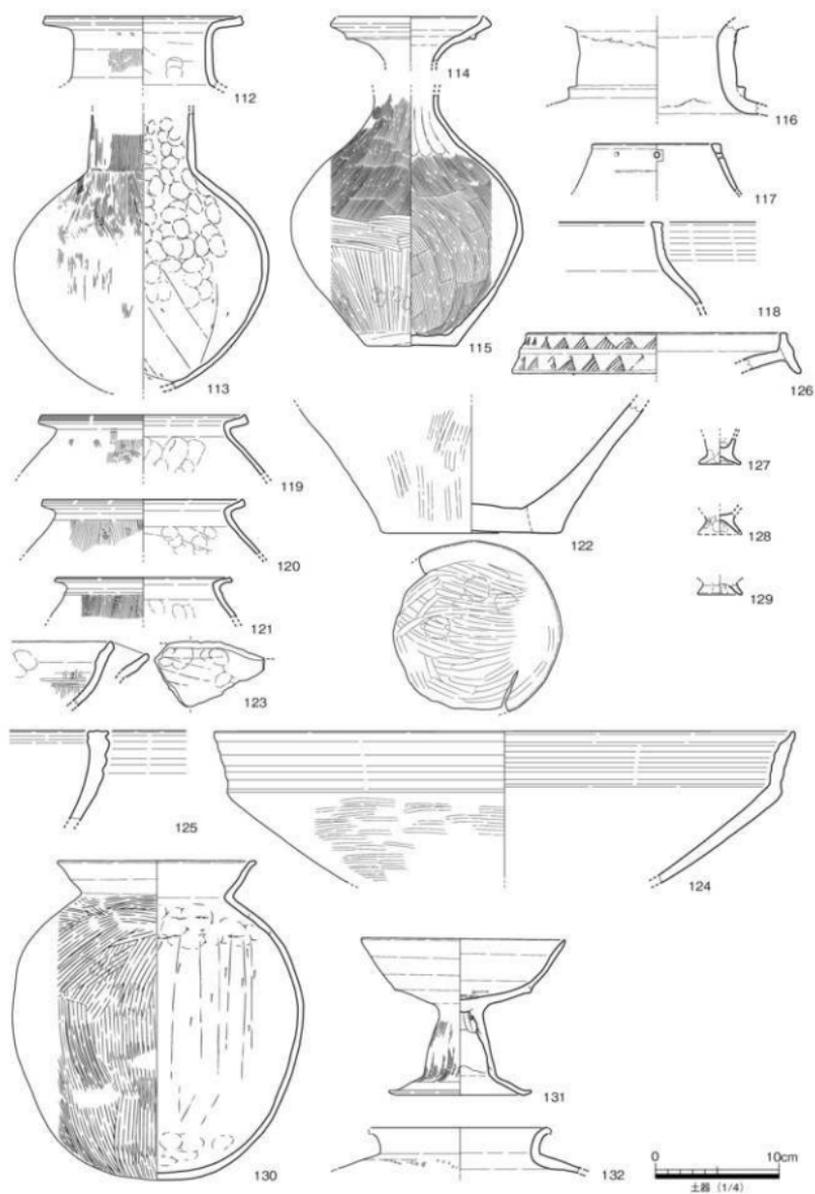
130・131は土師器、132は須恵器である。いずれもⅠ-1区出土となり、帰属時期も近似し、層位別取り上げはなされていないが、まとまりを認める。130は甕である。体部は長胴気味で、丸底となる。外面全面に煤が付着する。131は高坏である。坏部は口縁部と底部の接合部分に稜を認め、完形に接合復元できるが、口縁部と底部境で剥離したように破損する。体部は軸部と裾部境が強く屈曲し、脚端部は小さく横方向に擠み出す。132は須恵器甕である。口縁部は短く外傾し、端部を欠くが小さく外方に突出する。外面にはナデ調整前の格子叩き痕跡を認め、内面は無文となる。焼成は堅緻で、胎土も緻密である。いずれも古墳時代中期前葉に位置付けられ、須恵器出現直後の所産と考えられる。

133～187は古代に属する須恵器・土師器であり、いずれもⅠ-1区出土となる。133～149、179は須恵器坏とした。底部から口縁部が強く開き、直線的に延び、口径12cm弱、底径7cm前後、器高3.5cm前後を測る一群(133～135)、口縁部は直線的に延びるが開きが弱く、口径13cm弱、底径8cm前後を測る一群(136～137)、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口径12.6cm、底径7cm、器高3cmを測る一群(138)に大別できる。138は胎土が精良で、器壁も薄く、器表面の色調が淡黄色を呈する等特徴的な一群であり、底部片の143はその特徴に酷似する。残りの底部片は133～135の一群に対応する可能性が高いが、小破片が多く緻密ではない。焼成状況はばらつきがあり、セピア色を呈する堅緻(133、136)、灰色でやや堅緻(134・135・138・139・143・148)、灰白色で焼成不良気味となる(137・140～142・144～147・149)。底部外面に墨書を認める坏が11点あり、141が「本」、139・140・143・146が「本」の可能性が高く、134・135・142・144・145・149が釈文不明となる。179は須恵器坏Bである。当初は壺の可能性を想定したが、坏Bとして報告する。高台径は7.5cmを測り、底部外縁に接するように高台を貼付する。唯一の坏Bとなる。

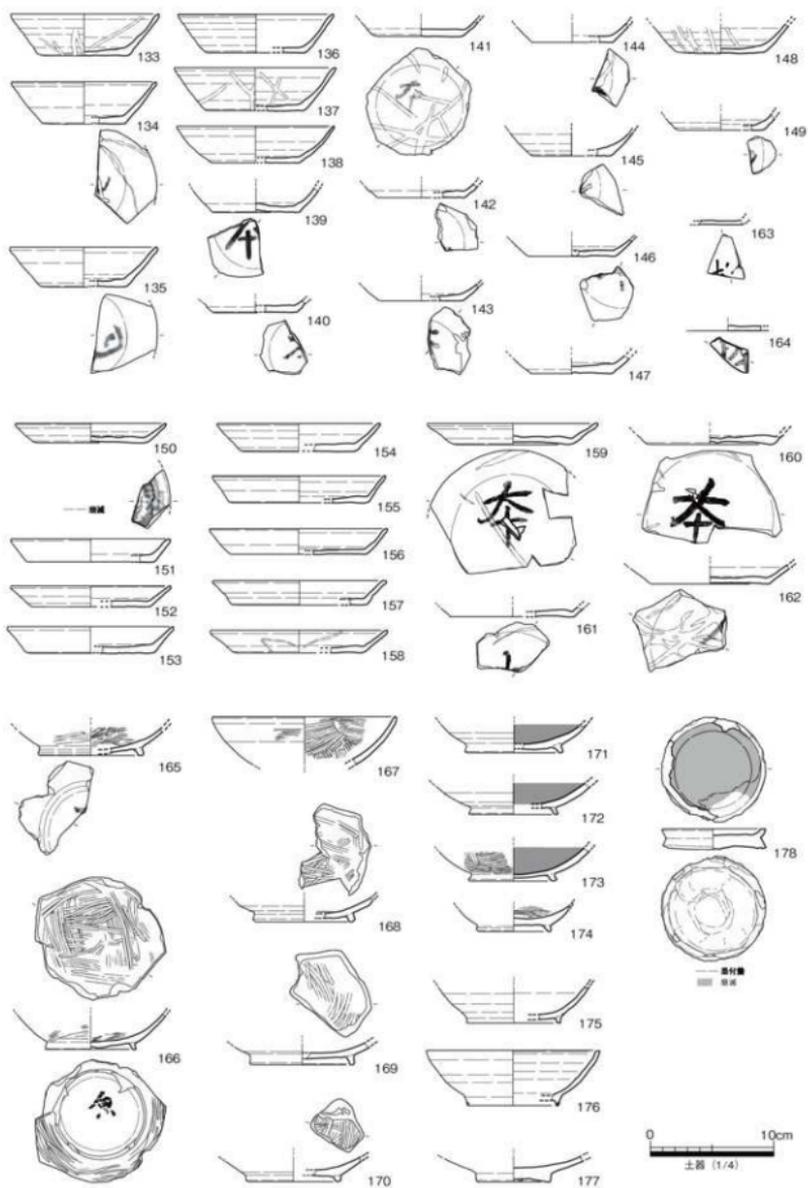
150～162は須恵器皿である。150は口径12cm、底径8.6cmとやや小振りだが、その他は口径12.8～14.4cm、底径10～11cmの幅に収まる。焼成はセピア色を呈する堅緻な一群(150、151)、灰色でやや堅緻な一群(155、157)、灰白色で焼成不良気味の一群を認める(152～154、156、158～162)。底部外面に墨書を認める皿が4点あり、159・160は「本」、161は「本」の可能性が高く、162は釈文不明となる。159と169の筆跡は異なるが、本ではなく、「本」という文字が選択される。151は内面に墨と思われる痕跡を認め、内底部が摩耗しており、視に転用された可能性を残す。163・164は須恵器坏なし皿である。底部外面に墨書を認め、163は「松」の可能性が高く、164は「本」の脇に縦線を認める。

165～174が黒色土器A類碗である。口縁部まで遺存する個体は少なく、大多数は底部片となる。高台は磨減が著しい174を除いて細くて高い形状を呈し、高台径6.7cm～8.5cmを測るが、174は6cmとかなり小さい。口縁部形態は167で認め、浅い皿状を呈する。口径は14.8cmに復元できる。内外面には単位の抽出が困難な程ヘラミガキを入念に施す。165・166は底部外面の高台内に墨書を認め、165は釈文不明、166は「原」と考えられる。

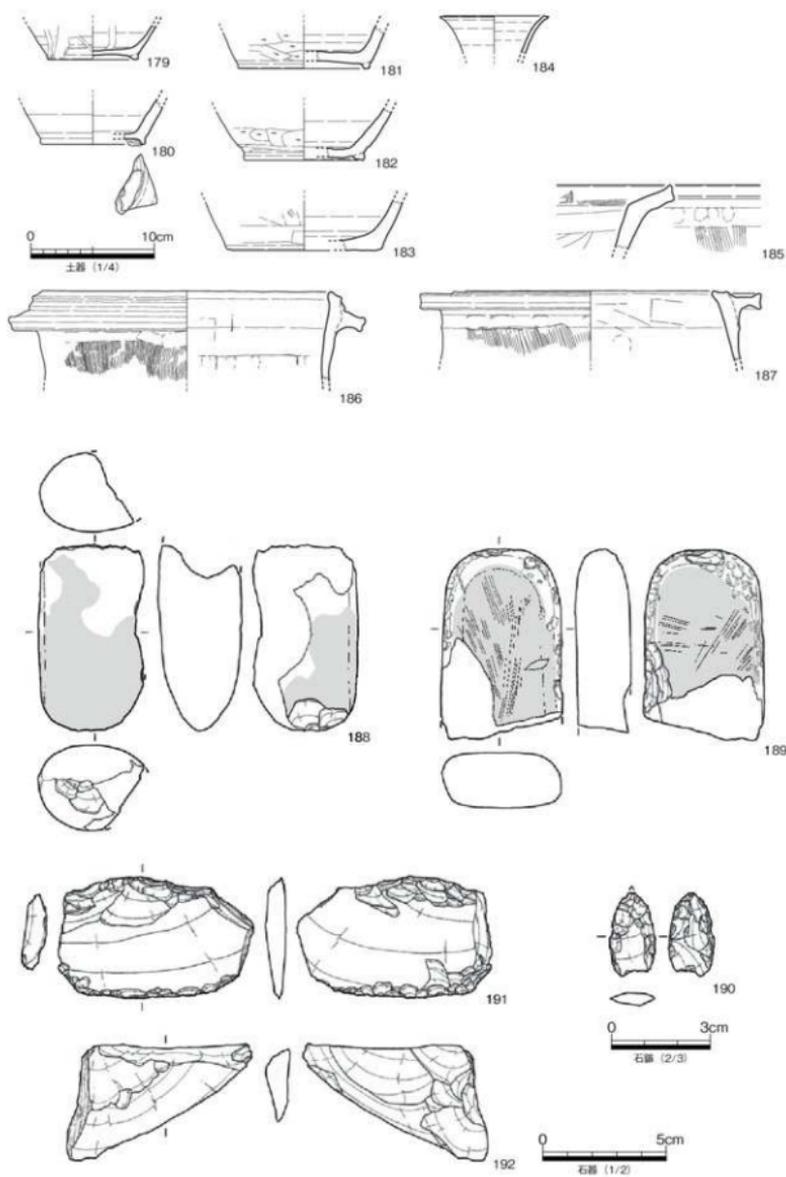
175・176は須恵器碗である。高台径は6.4～7.6cmと口径に比して大きい。形状は安定せず、細く矮小である。176は高台外面の底部との接合痕が明瞭に遺存する。口縁部は立ち上がりが緩やかに端部を四角く収め、上端部と口縁部外面のみ黒化する。胎土は精良。177は緑軸陶器碗である。高台は削り込みの浅い輪高台となり、底部を除く全面に薄く緑軸を施す。胎土は精良で、極めて堅緻な焼成となる。



第61图 SR03 出土遗物 (I-1区以外)



第62图 I-1区 SR03 出土遺物1



第63图 I-1区 SR03 出土遗物2

178は須恵器転用硯である。高台を有する壺底部を転用したもので、底部外面を硯面とし、体部下端部を打ち欠いて内底部を設置面（底面）とする。硯面である底部外面は磨滅により平滑化し、壺製作時の底部調整は確認できない。磨滅範囲はほぼ底面全面に及び、その範囲と呼応するように墨が付着する。

180～183は須恵器壺である。180～182は高台を有し、183は平底となる。184は須恵器平瓶とした。口縁部はラッパ状に開き、端部を横方向に引き出す。

185は土師器鍋である。器壁が厚く、口縁部はくの字に屈曲し、内側に明瞭な稜を残す。内外面全面に煤痕が見られる。186・187は土師質土器羽釜である。内側に摘み出した口縁端部直下に短い銚を巡らし、端部を上下に引き出す。内外面は板ナデ調整を施し、外面にはタテハケが明瞭に残る。内外面には煤が付着する。

188～192は石製品である。188は太刃蛤刃石斧である。緑色片岩。刃部と一側辺は遺存するが、基部は欠損する。刃部は破損による剥離面を認める。189は砥石とした。頁岩か。広面の表裏に顕著な磨滅を認め、線条痕を認める。側面にはあばた状の凹みがみられる。190はサスカイト製石鏃である。小型品。191は使用痕跡がなく、折れ面を認めることから、石庖丁未製品と判断した。192は横長剥片とした。自然面を一部に残す。

以上、SR 03出土遺物は、弥生時代、古墳時代中期前葉、平安時代（9世紀末～10世紀前葉）の遺物を含み、仮に総体を10とすれば、弥生時代：古墳時代：平安時代＝3：0.5：6.5程度の比率となる。弥生土器は中期中葉、後期後半、終末期に属し、中期中葉の出土量が最も多い。古墳時代中期前葉に属する遺物は数点に留まるが、一時期の所産の可能性が高い。平安時代に属する遺物はすべてI-4区出土であり、時期的なまとまりを認める。供膳具が多く、墨書土器を多く認め、転用硯も出土し、現存しないが概報記載から斎串が出土した可能性もある。

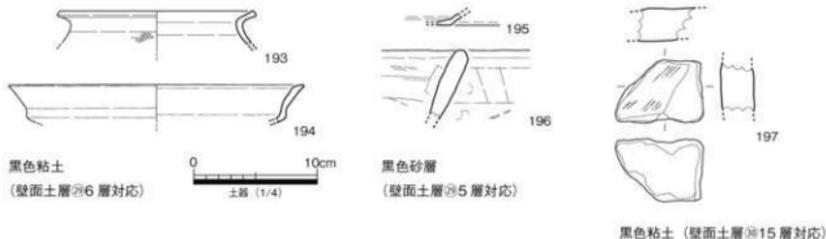
## SR 02・03 合流部

前述したように、SR 02・03は多肥宮尻遺跡（1次）SR 01・06がIV-3・4区付近で分岐したと考えられるが、調査区内では明瞭な肩部は検出できない（第43図）。多肥宮尻遺跡（1次）のSR 05も合流し、さらに同SR 02のオーバーフローした埋土の存在、現水路の合流等、複雑な状況を呈する。呼応して当該部分は第10・59図が示すように、IV-4区が最も低地となり、中世期初頭以後にも埋積が進行しており、分岐部分を特定することは困難である。なお、IV-3区西端部底面で検出した溝状の凹みは多肥宮尻遺跡（1次）SR 05から連続する可能性もある。

193～197はSR 02-03合流部出土遺物である。193・194はIV-3区、第23図壁面土層㉓の6層（下層）、195・196はIV-3区、同5層（上層）、197は第24図壁面土層㉔の15層（最下層）出土遺物となる。

193は弥生土器甕である。口縁部は短く屈曲し、端部を四角く収める。弥生時代中期中葉。194は弥生土器高坏である。口縁部は外反し、端部を外上方に突き出す。弥生時代終末期の所産か。195は須恵器坏である。小片であるが、SR 03出土遺物との関係から、10世紀初頭頃の所産と考える。196は土師器で器種不明とした。胎土は極めて粗く、多量の砂粒を含有する。197は平瓦である。磨滅が激しいが、凸面には平行叩き、凹面には布目を認める。二次焼成により赤変した可能性が高い。中世遺物を包含しないことから、古代に属すると思われる。

以上、出土遺物はIV-3区では下層に弥生土器、上層に古代に属する遺物を認めるが、IV-4区では層位レベルがIV-3区より低く、最下層から古代に属する遺物が出土する。IV-4区最も低地に相当し、SR 03で復元した複数回に及ぶ流水・埋積が顕著な箇所であることに起因したものと考えられる。

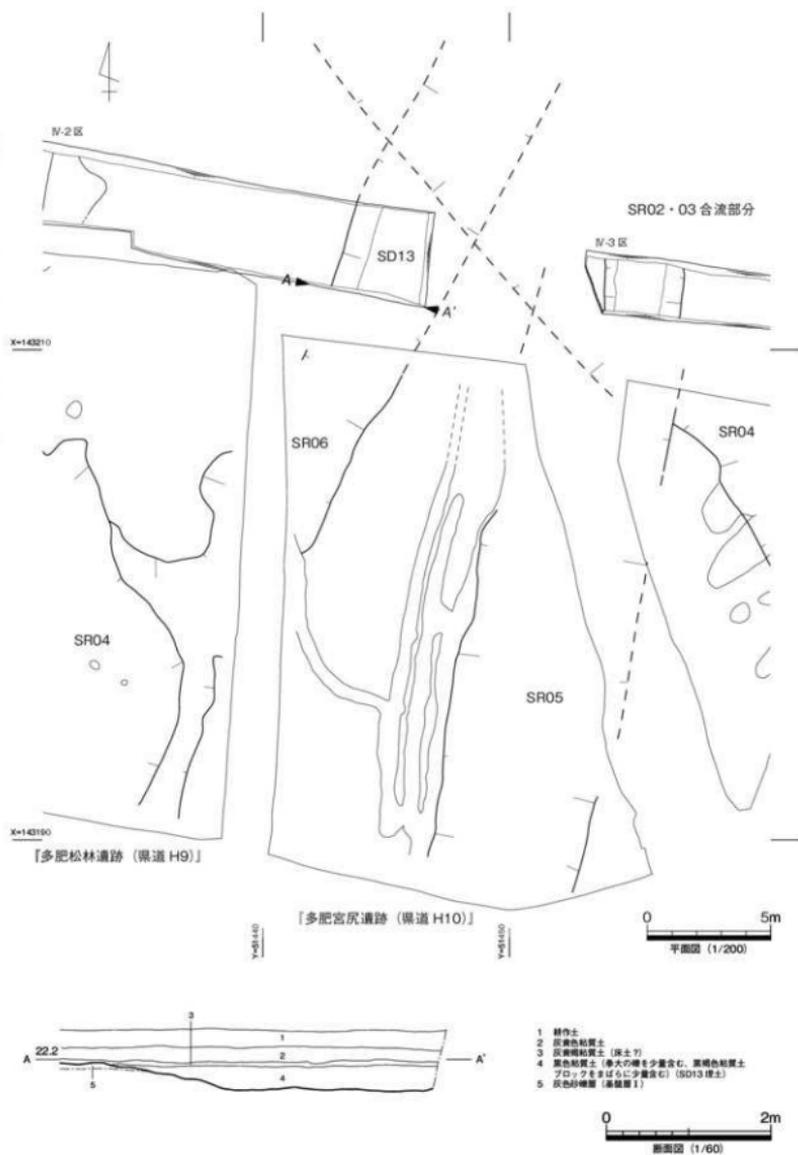


第64図 IV-3・4区SR02・03分岐部分 出土遺物

## IV-2区SD 13

IV-2区東端部で検出した溝状遺構である。調査時にはSR 03の西屑と認識されたが、多肥宮尻遺跡（1次）SR 06から連続するため、本報告書ではSR 03とは区分し、SD 13として報告する。検出幅は4mを超え、断面は浅い皿状を呈し、底面はフラットとなる。最深部の深度は0.3mを測り、第59図の流路通し土層ⅢCが示すように、SD 13の最深部とIV-3区SR 02・03分岐部分の埋土上面との比高差を認める（0.1m）。埋土は黒色粘質土となり、拳大の礫を少量包含する。多肥松林遺跡（3次）SR 04から導水ないし排水機能を有した溝状遺構と考えられる。

IV-2区SR 03出土遺物として取り上げられた遺物は小袋で1袋あるが、図化が可能な遺物はない。須恵器や土師質土器はなく、弥生土器と思われる破片を認める。



第65図 N-2区 SD13 平・断面図

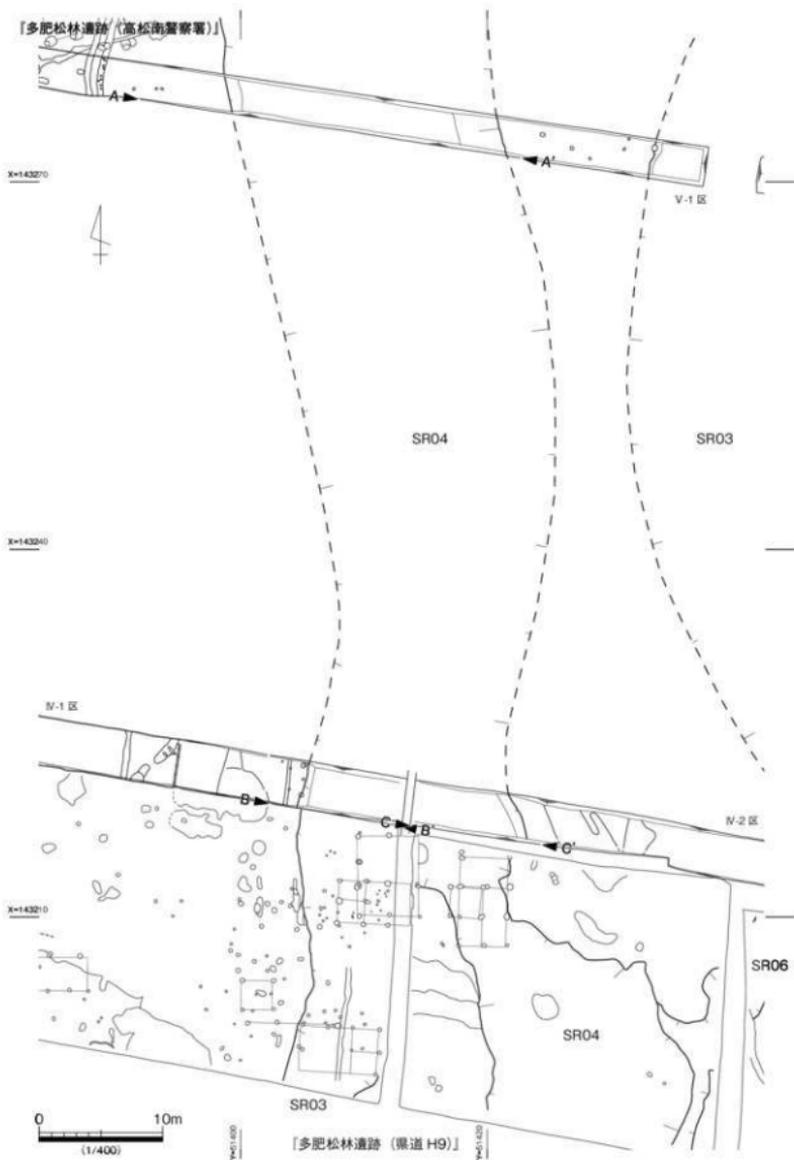
## SR04

V-1区、IV-1・2区で検出した自然流路である。第43図に示したように、北は多肥松林遺跡(4次)SR01、多肥松林遺跡(1次)A5区SR01に繋がり、さらに北側で当調査地SR03の延長部分に合流する(A4区SR01)。南は多肥松林遺跡(3次)SR03・04が当調査地直近で合流し、IV-1・2区の検出ラインに繋がる。

流路幅はV-1区では約21m、IV-1・2区では約19mを測る。東側の立ち上がりは緩やかだが、西側は逆台形状に立ち上がり、流路の流れに起因した形状を呈する。埋土は一様ではないが、おおむね3層に大別でき(第67図)、IV-1・2区では下層に黄灰色ないし黒色砂層(B-B'8層、C-C'4層)、中層に黒褐色粘土ないし黒色粘質土(B-B'7層、C-C'3層)、上層に黄灰色系砂質土を認める(B-B'1~6層、C-C'1・2層)。V-1区では層序が異なり、下層に礫・粗砂を多く包含する灰褐色系砂質土(A-A'13~19層)、中層に暗褐色粘質土(A-A'10~12層)、最上層に連続する水田層を認める(A-A'8・9層)。なお、多肥松林遺跡(4次)SR01では埋土は上下2層に大別され、下層に濁灰青色細砂・シルト、上層に暗茶褐色粘質土が堆積し、下層から弥生時代前期~中期前半に属する土器が出土する(香川県埋蔵文化財調査センター2005)。多肥松林遺跡(3次)SR03・04では下層に灰色系砂、上層に黒色系粘質土が堆積し、下層より弥生時代前期・後期、上層より弥生時代中期後半~後期末頃の遺物が出土する(香川県埋蔵文化財調査センター1998)。さらに、流路埋没後は平安時代後半期の掘立柱建物群が展開する。主軸方位を揃えた5棟以上が一定範囲にまとまり、重複関係から2時期に分かれる。よって、当調査地のSR04は下層が一定量の流水に伴う埋積、中層は緩やかな環境下での埋積が想定でき、上層は最終埋没土、最上層は中世中期以降の低地部分の水田利用と評価できる。

198~215はSR04出土遺物である。調査区別にレイアウトし(198~209がIV-1区、210~213がIV-1ないし2区、214・215はV-1区)、出土層位を示した。出土層位は198がB-B'8層、199~208・210~213はB-B'7層、209・214・215は層位不明である。よって、198は下層、199~208・210~213は中層、209・214・215は層位不明と判断できる。

198~202は弥生土器壺である。端部を上下に小さく拡張し、凹縁を施す。頸部下半には連続する圧痕文を認める。弥生時代中期後半~後期前葉。202は端部を小さく上下に拡張し、内面に格子文による加飾を施す。弥生時代中期中葉か。203は須恵器坏底部である。底径5.8cmを測る。9世紀末~10世紀前葉。204は須恵器甕である。ケズリ調整で口縁端部帯を成形し、端面を平たく収める。端部と内面に厚い自然釉を認める。205は罌と窓から土師質土器移動式かまど上部と判断した。206は緑釉陶器碗である。2cm角程度の小片である。素地は精良な胎土が選択され、濁黄白色の色調を呈する。軟質。207・208は和泉型瓦器碗である。外面にからうじてヘラミガキを認め、尾上編年Ⅲ-1ないし2期の所産となる。12世紀後半~13世紀前葉。209は須恵器壺である。十瓶壺産。口縁部を1/2程度欠損するが、体部は完存する。底部は平底で、体部は胴張りで張りのない肩部から口縁部は外傾し、端部付近で小さく開く。口縁端部は小さく上方に積み上げる。底面の磨減はみられない。体部下半のみ回転ヘラケズリ調整、体部上半以降は回転ナデ調整となる。10世紀前葉~中葉。210は緑釉陶器碗である。貼り付け高台で、高台高は低い。坏部の焼成は良好でセピア色を呈するが、高台部分は焼成不良気味で、卵黄色となる。緑釉は高台底面を除く全面に微弱に認める。10世紀前半の所産か。211は黒色土器A類碗である。表面の磨減が激しく、ヘラミガキ等の調整は確認できない。212は瓦器碗である。外面にはからうじてヘラミ

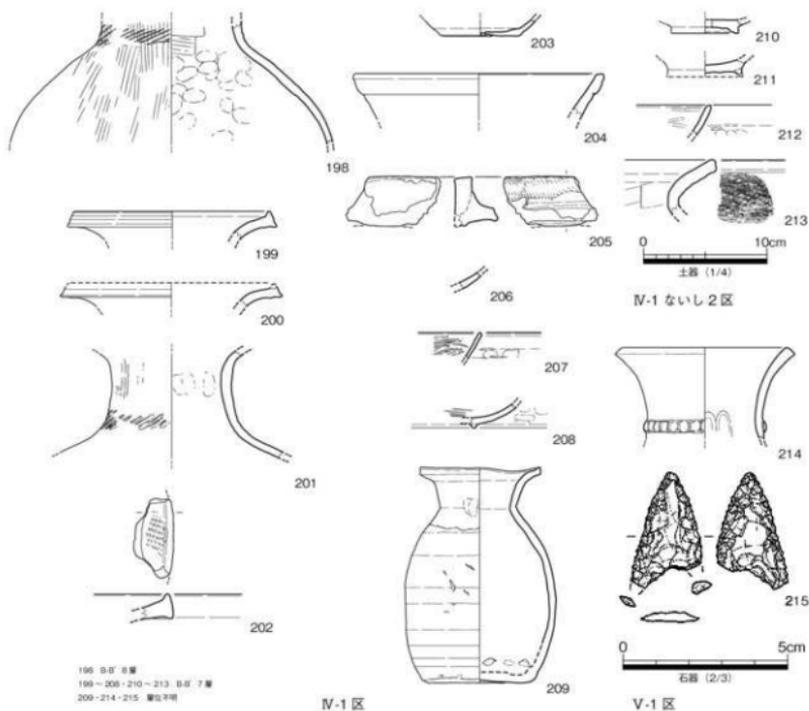


第66図 SR04 平面図



ガキを認める。213は須恵器甕である。口縁部はくの字形に屈曲し、端部を上方に折り上げる。外面にはナデ調整前の格子叩きを認め、体部と口縁部が連続することから、亀山窯産須恵器の可能性が高い。12世紀後半頃の所産か。214は弥生土器直口壺である。口縁部はラッパ状に開き、頭部下端に押圧突帯を施す。弥生時代中期中葉。215はサヌカイト裂石鏃である。凹基式。基端はいずれも折れ面を認める。

以上、SR04出土遺物は下層出土が弥生時代中期後半～後期前葉、中層出土遺物は弥生時代中期中葉、中期後半～後期前葉、9世紀末～10世紀前葉、12世紀後半～13世紀前葉に属する。IV-4区ではSR02・03分岐部分の埋没後の低地部分に中世初頭以降の埋積が確認でき、流路が所在する低地に中世期に属する遺物を含む可能性は想定できるが、南接する多肥松林遺跡（3次）では流路埋没後に平安時代の掘立柱建物群が展開する。加えて、他地点での同流路調査では弥生時代の埋積が想定されている。よって、9世紀末～10世紀前葉、12世紀後半～13世紀前葉に属する遺物は流路上面で検出すべき遺構埋土に包含された遺物と判断し、SR04は弥生時代中期後半～後期前葉の埋没を想定したい。当調査地では9世紀末～10世紀前葉に属する遺構は確認できず、SR03出土の墨書土器や転用硯を含む遺物と同時期ないしやや後出する時期の遺構がIV-1・2区を中心に展開し、かつ南接する多肥松林遺跡（1次）の掘立柱建物群がIV-1・2区まで広がると判断できる。



第 68 図 IV-1 区 SR04 出土遺物

### I-3区SX03

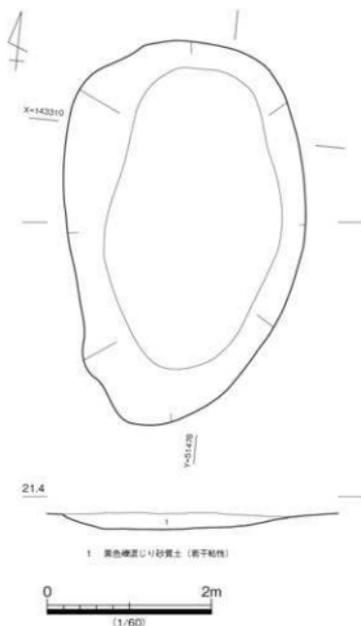
I-3区、SR01・02間に位置する不明遺構である。幅約3m、長さ4.7mを測り、浅い舟底状の断面形状を呈する。埋土は黒色礫混じり砂質土である。埋土の特徴や検出位置から、元来はSR02内に所在した窠みであり、削平により流路埋土が消失し、深い部分のみが遺存したと考えられる。後述するSX04やSX08・09とともに、SR02に東肩に沿って確認でき、削平を受ける前の流路肩部付近の帯状の窠みと理解できる。図化していないが、弥生時代前期末～中期初頭と中期中葉に属する遺物がごく少量出土する。

帰属時期は出土遺物とSR02との関係から、弥生時代中期中葉と考えたい。(第69図)

### I-3区SX04

I-3区、SR01・02間に位置する不明遺構である。幅約3m、長さ4.7mを測り、浅い舟底状の断面形状となる。幅1.7m、長さ2.7mを測り、浅い舟底状の断面形状となる。埋土は黒色礫混じり砂質土である。216は弥生土器甕である。くの字形に短く屈曲し、内側に明瞭な稜を認める。弥生時代中期中葉の所産か。SX03と同様に、削平を受ける前の流路肩部付近の帯状の窠みと理解できる。弥生土器と思われる細片が出土する。

帰属時期は出土遺物とSR02との関係から、弥生時代中期中葉と考えたい。また、I-3区南壁沿いで検出したSX08・09も同内容の遺構と考えられる。(第70図)



第69図 I-3区 SX03 平・断面図



第70図 I-3区 SX04 平・断面図、  
出土遺物

### I-3区SX05

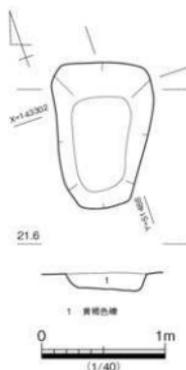
I-3区、SR01・02間に位置する不明遺構である。幅0.7m、長さ1.2mを測り、逆台形状の断面形状を呈する。埋土は黄褐色礫となる。SR01の西肩際に位置し、削平を受ける前の流路肩部付近の窪みと理解でき、土坑等の遺構ではないと判断できる。弥生土器と思われる細片が出土するが、図化は困難であった。

帰属時期はSR02との関係から、弥生時代中期中葉と考えたい。(第71図)

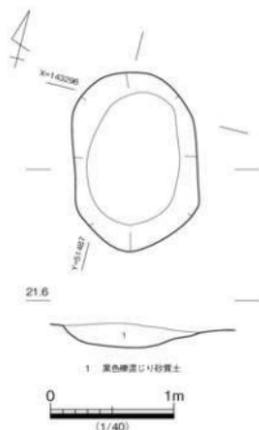
### I-3区SX06

I-3区、SR01・02間に位置する不明遺構である。幅1m、長さ1.5mを測り、舟底状の断面形状を呈する。埋土は黒色礫混じり砂質土であり、サヌカイト片が2点出土した。SR01の西肩際に位置し、削平を受ける前の流路肩部付近の窪みと理解でき、土坑等の遺構ではないと判断できる。弥生土器と思われる細片が出土するが、図化は困難であった。SD09とSD10のライン上に位置し、SR01に平行する溝状遺構の可能性が高い。

帰属時期はSD09・10との関係から、弥生時代中期中葉と考える。(第72図)



第71図 I-3区 SX05 平・断面図

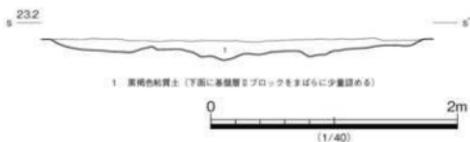


第72図 I-3区 SX06 平・断面図

### III-3区SX10

III-3区屈曲部で検出した溝状に延びる不明遺構である。N60°Wを主軸とし、周辺地割とは合致しないが、12世紀後半～13世紀中葉に属するSD23・24に平行しており、その幅は6mを測る。幅約3m、検出全長約18mを測る。浅く窪む断面形状となり、底面は安定せず、それに呼応して黒褐色粘質土埋土の下面には基盤層ブロックをまばらに少量認める。土器細片が出土するが、時期は特定できない。

南接する多肥松林遺跡(3次)SR02際に位置し、同流路を主水源とした導水路の可能性が高い。帰属時期はSB02・03との重複関係からそれ以後出する可能性が高く、弥生時代後期以降の所産となり、須恵器が出土しない点を最大限評価し、弥生時代後期～終末期の所産と考えたい。



第73図 Ⅲ-3区 SX10 断面図

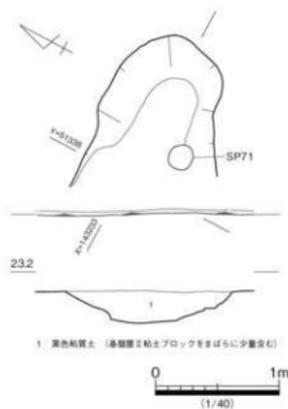
### Ⅲ-3区 SX 11

Ⅲ-3区屈曲部で検出した不明遺構である。西端部は調査区外へ延び、幅1m、検出最大長1.5mを測る。断面形状は舟底状を呈し、黒色粘質土を埋土とする。図化できないが、弥生土器細片が出土しており、隣接するSB 01～03、SA 01との関係から弥生時代後期の所属時期を想定したい。(第74図)

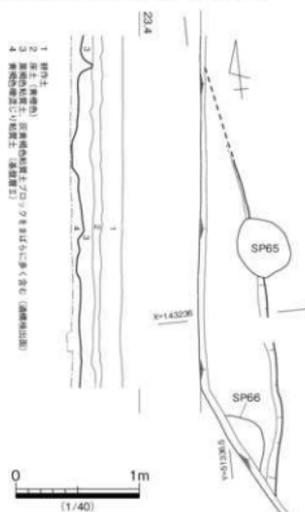
### Ⅲ-3区 SX 12

Ⅲ-3区屈曲部で検出した不明遺構である。検出最大幅0.6m、検出最大長3.5mを測り、黒褐色粘質土を埋土とする。壁面土層⑤では5層に対応し、SX 10に先行する重複関係となる。南接する多肥松林遺跡(3次)SR 02の縁辺部でもあり、オーバーフローし、基盤層の凹みに埋積した層位と考えられる。弥生土器と考えられる土器を少量含む。

帰属時期は明らかではないが、重複関係から弥生時代後期以前と考えられる。(第75図)



第74図 Ⅲ-3区 SX11 平・断面図



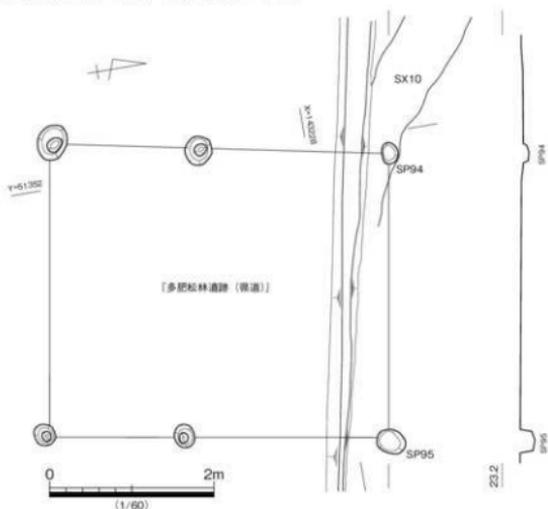
第75図 Ⅲ-3区 SX12 平・断面図

## 2. 平安時代

前述したように、SR 03から墨書土器が19点出土し（第62図）、1遺跡からの出土点数では県内で最も多い数となる。出土状況は判然としませんが、9世紀末～10世紀前半に属し、流路出土ながら時代的一括性がみられ、転用硯も共伴する。積文は「本」が最も多く、「原」、「松カ」も認める。一方、居住施設等の検出は一部に留まる。南接する多肥松林遺跡（3次）、北接する多肥松林遺跡（1次）では当該期の掘立柱建物群が集中する地点を認めるが、当調査地ではその状況は確認できない。ただし、南端部のⅣ-1・2区SR 04からは当該期に属する遺物を数点検出しており、流路の埋没時期を考慮すると、流路上面から開削された遺構が存在した可能性が高く、当調査地南端部の一画は多肥松林遺跡（3次）の掘立柱建物群の一部を形成したと考えられる。また、八稜鏡と管玉が共伴した土坑も認める。

### Ⅲ-3区SB 04

Ⅲ-3区で検出した掘立柱建物跡である。南接する多肥松林遺跡（3次）で検出されたピットと組み合う。1間×2間、床面積は約14.4㎡を測る。主軸方位は周辺地割に合致し、N10°Eにとる。埋土に関する上方は残されていない。図化できる遺物はないが、弥生土器と思われる細片が出土するが、主軸方位を重視し、条里施工後の所属時期が想定できる。



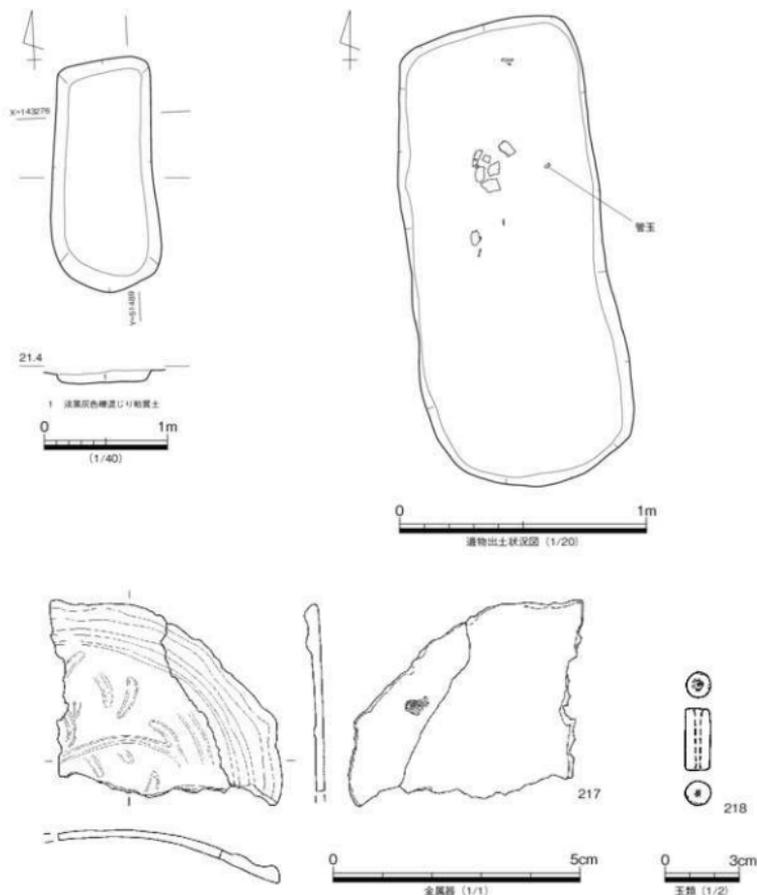
第76図 Ⅲ-3区 SB04 平・立面図

### Ⅱ-1区SK 06（概報時：SK 01）

Ⅱ-1区で検出した土坑である。幅0.8、長さ1.9mを測り、北辺部は隅丸方形、南辺部は楕円形を呈する。逆台形の断面形状を呈し、底面は平坦である。埋土は淡黒灰色礫混じり粘質土の単一層となる。八稜鏡、管玉のほか、土師器鍋が出土する。調査概報では八稜鏡は上面で検出し、管玉と土器は埋土中

から出土したとある。土器は弥生土器として報告されるが、外面のタテハケは卓越するが、内面は板ナデ状で刷毛目を認めず、口縁部がくの字形に屈曲する厚手の土師器鍋の可能性が高い。

217は八稜鏡である。小片かつ破損し、全体の2/8程度の残存率となり、全体に湾曲する。かろうじて周縁の一部が花卉状に突出した状況が窺え、内側には圏線を認める。文様は磨減により突線は平滑だが、かすかな起伏を認め、草花を表現した可能性が高い。保存処理中に鏡面の一部に0.5cm角程度の布片と考えられる有機質片が付着していることが判明した。肉眼での識別が困難なほど細かな単位の繊維で構成される。木箱等の有機物の存在も考慮すべきだが、破損した鏡を布で包んで埋納した可能性を想定しておきたい。なお、成分分析では平安時代の国内産銅製品と鉛同位体比が酷似し、平安時代に典型的な国内産の銅材料で製作されたことが指摘されている（第4章参照）。



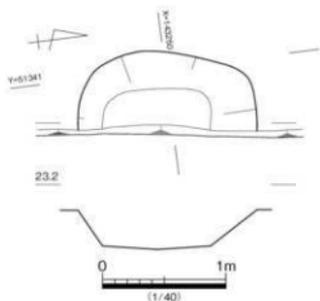
第77図 II-1区 SK06 平・断面・遺物出土状況図、出土遺物

218は碧玉製管玉である。長さとの比率は2.5:1となる。上端孔径0.3cm、下端孔径0.1cmを測り、上端から下端への一方向からの穿孔となる。色調は暗緑色で、4.16gを量る。

八棱鏡は古代、管玉は弥生～古墳時代の所産と考えられ、共存関係に問題を残すが、図化し得ていない土器器竈の存在から、9～10世紀の帰属時期が想定できる。棺痕跡等のみならず、積極的に墓等の性格を付与することはできない。また、管玉の混入の可否は即断できないが、布で包んだ鏡等、祭祀的な側面を考慮し、共存する可能性を想定しておきたい。

### Ⅲ-3区SK07

Ⅲ-3区の北側で検出した土坑である。東半は調査区外へ延び、南北検出長約1.45m、東西検出長0.6mを測る。埋土は不明だが、完掘後の断面形状は逆台形を呈する。小片であるが、須恵器が出土しており、古代の所産の可能性が高い。

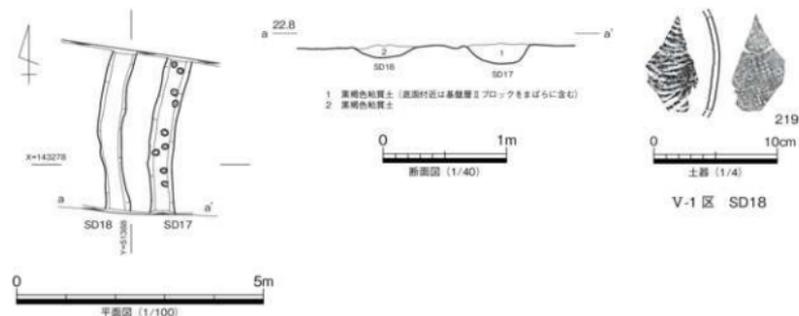


第78図 Ⅲ-3区 SK07 平・立面図

### V-1区SD17・SD18

V-1区中央部で検出した2条の平行する溝状遺構である。周辺地割に合致した方位を呈する。溝幅は0.5m前後を測り、浅いU字形の断面形状を呈する。溝間の幅は0.6m前後となる。埋土は黒褐色粘質土を呈し、SD17には底面付近のみ基盤層ブロックをまばらに含み、底面に偶蹄目類の足跡を認める(第79図でピット状に表現した部分、図版16参照)。また、両溝は北接する多肥松林遺跡(4次)SD04・05に連続する。219は須恵器甕である。外面には格子叩き、内面にはあて具痕(青海波文)を認める。不掲載遺物となるが、SD17からは弥生土器が出土し、SD18からは古代に属する須恵器が出土する。

両溝の位置関係から同一時代の所産と考えられ、主軸方位や出土遺物から古代以降の所産と考えられ、帰属時期は限定できないが、当該期の遺構としておきたい。



第79図 V-1区 SD17・SD18 平・断面図、出土遺物

### 3. 鎌倉時代初頭（12世紀後半～13世紀中葉）

当該期の遺構は調査地の東部（Ⅰ-4区、Ⅱ-3・4区）、南端部の一部（Ⅳ-1区）で確認できる。対象地東端部で掘立柱建物跡を含む当該期のピット群が展開し、小規模な居住域を形成するが、漕漕水路となるSD19も隣接ないし重複する。同溝は東接する日暮・松林遺跡（1次）に連続した後、分岐派生しており（居住域は未確認）、周辺は耕作域であった状況が看取できる。SD19からは多量の和泉型瓦器が出土し、その組成は60%に達する。日暮・松林遺跡（1次）の流路出土遺物も和泉型瓦器の組成比率が高く、かつ両遺跡ともに完形に近い瓦器碗を多く認める。高松城跡築城以前の海浜部や古・高松湾の最奥部で和泉型瓦器碗の二次的集積地が確認されており（佐藤2003、松本2003）、そこから高松平野の各集落に和泉型瓦器が搬出されていくが、高松平野の各集落でこれほど突出した和泉型瓦器の組成比率はみられず、特筆すべき内容となる。

また、当該期には対象地の中央を縦断する旧河道Aは埋積がほぼ完了するが、総体的に低地部として遺存しており、Ⅳ-3・4区では中世初期頭以降も緩やかに埋積が進行する。

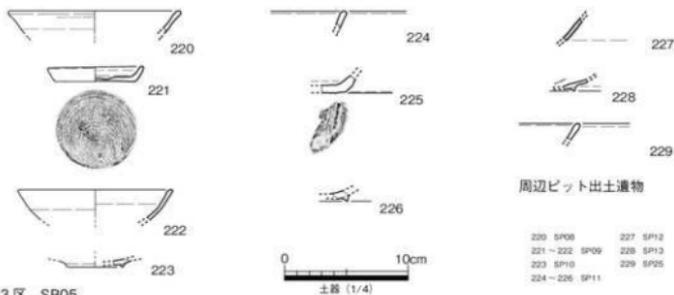
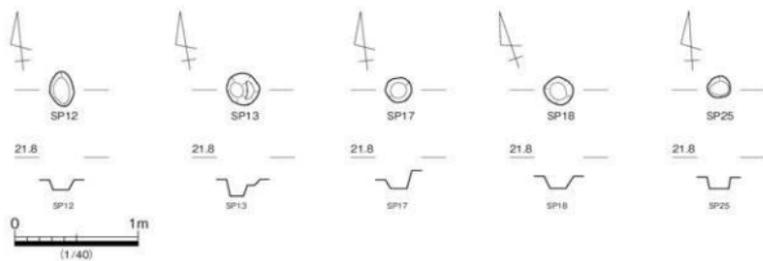
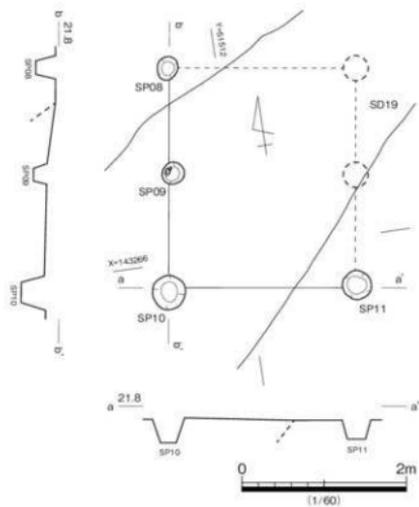
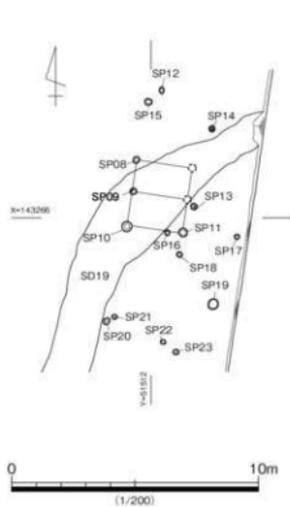
#### Ⅱ-3区SB05

Ⅱ-3区で検出した掘立柱建物跡である。1間×2間、推定床面積6.2㎡。周辺地割に合致した主軸方位を呈する。重複関係ではSD19に後出する。埋土は上面検出段階では淡灰褐色粘土を呈する。

220～226はSB05を構成するピット出土遺物である。220は須恵器碗である。221は土師質土器小皿である。口径7.8cmを測り、底部は回転糸切り調整となる。222は土師質土器碗である。色調はクリーム色を呈し、粗い砂粒を含むため、吉備系土師器碗の可能性も残す。223は瓦器碗である。高台は矮小化が著しく、断面形状は三角形となる。224は土師質土器碗である。225は土師質土器坏底部とした。226は瓦器碗である。

以上、SB05出土遺物はおおむね12世紀後半～13世紀中葉の所産となる。SD19との重複関係や土師質土器小皿（221）の存在から、13世紀中葉の帰属時期を想定したい。

なお、掘立柱建物の復元はできなかったが、周囲はピットが比較的集中する箇所となる。年代観がある程度判明するピット出土遺物も合わせて掲載した。227はSP12から出土した中国産輸入磁器白磁片である。228はSP13から出土した瓦器碗である。矮小化した断面三角形の高台が付く。229はSP25から出土した須恵器碗である。以上、周辺ピット出土遺物もおおむね12世紀後半～13世紀中葉の所産となる。



周辺ピット出土遺物

- |                |          |
|----------------|----------|
| 220 SP08       | 227 SP12 |
| 221 ~ 222 SP09 | 228 SP13 |
| 223 SP10       | 229 SP25 |
| 224 ~ 226 SP11 |          |

II-3区 SB05

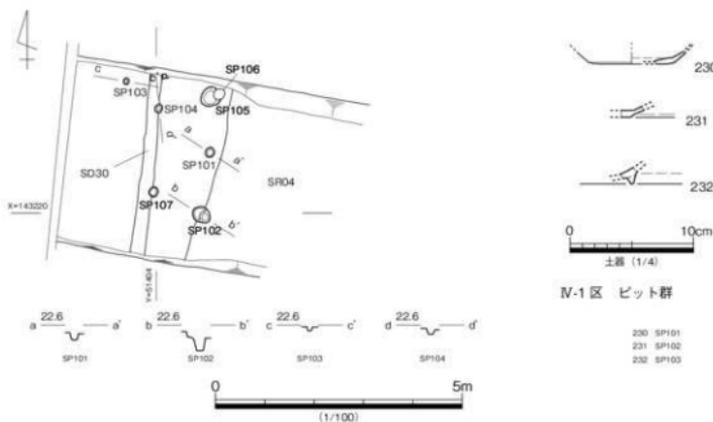
第80図 II-3区 SB05・SP08～SP13・SP25 平・立面図、出土遺物

#### Ⅳ-1区SP101～SP104

Ⅳ-1区、SR04西側沿いで検出したピット群のうち、所属時期が特定できるピットを報告する。

230はSP101から出土した土師質土器小皿底部である。顕著な二次焼成により赤変・黒変する。231はSP102から出土した土師質土器小皿底部である。232はSP103から出土した黒色土器A類椀である。高台が細く高いため、古代の所産の可能性が高い。

以上、Ⅳ-1区ピット群のうち、SP101・102は12世紀後半～13世紀中葉、SP103は9世紀末～10世紀前葉に位置付けられ、ピット群は出土遺物の年代観が示す帰属時期に属する。前述したように、Ⅳ-1・2区SR04出土遺物のうち、9世紀末～10世紀前葉、12世紀後半～13世紀前葉に属する遺物はSR04上面で検出すべき遺構埋土に含まれた遺物と判断したが、Ⅳ-1区SP103出土遺物はそれを補強する。

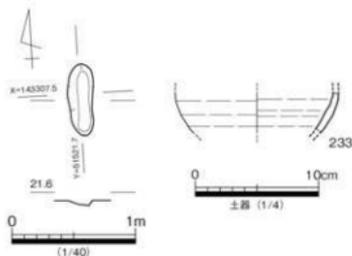


第81図 Ⅳ-1区 SP101～SP104 平・立面図、出土遺物

#### Ⅰ-4区SK08

Ⅰ-4区北東隅で検出した土坑である。幅0.2m、長さ0.45mを測り、深度は極めて浅い。出土遺物は図化した1点のみである。233は須恵器袋物である。胎土はボソボソとし、灰白色の色調を呈する。古瀬戸の可能性を残す。

帰属時期は明らかではないが、周辺遺構との関係等を考慮し、13世紀中葉に位置付けたい。



第82図 Ⅰ-4区 SK08 平・立面図、出土遺物

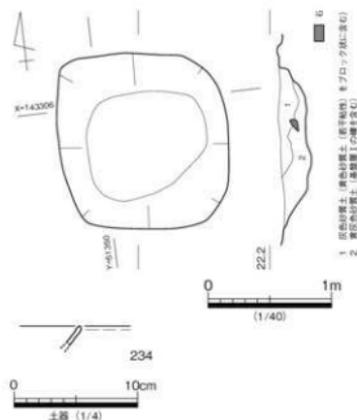
### Ⅲ-1区SK09

Ⅲ-1区南端部で検出した土坑である。一辺1.4m程度の隅丸正方形を呈し、断面形状は舟底状を呈する。埋土は灰白色ないし青灰色砂質土となる。出土遺物は1点のみの出土となる。234は土師質土器である。二次焼成を受けわずかに赤変する。

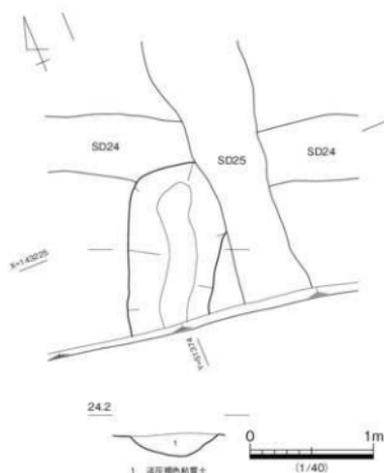
帰属時期は明らかではないが、12世紀後半～13世紀中葉頃と考えたい。(第83図)

### Ⅳ-1区SK10

Ⅳ-1区西部で検出した土坑である。SD24に後出し、SD25に先行する重複関係を認める。南端部は調査区外へ延長する。幅0.8m、検出長約1.5mを測り、舟底状の断面形状を呈する。出土遺物はないが、重複関係から13世紀中葉の帰属時期を想定したい。(第84図)



第83図 Ⅲ-1区 SK09 平・断面図、  
出土遺物



第84図 Ⅳ-1区 SK10 平・断面図

### Ⅱ-3区SD19 (概報時:SD03)

Ⅱ-3区で検出した溝状遺構である。北北東に延び、北端部で北東方向に緩やかに屈曲し、東接する日暮・松林遺跡(1次)SD43に繋がりを、さらに分岐していく。南端部は調査地外へ延びるため不明であるが、Ⅱ-3区・Ⅳ-4区間～Ⅳ-3・4区間にある現水路下に連続する可能性が高い。溝幅1.4～1.9mを測り、逆台形ないし舟底状の断面形状を呈する。埋土は2層に大別でき、e-e'の2層と3層、f-f'1層と2～4層、g-g'1層と2層がそれぞれ対応する。さらに、f-f'とg-g'断面が示すように、大別した2層は掘り直しの痕跡と理解でき、f-f'4層は灰白色細砂のラミナが混じり、再掘削前の流水痕跡と理解できる。溝底は南から北に緩やかに傾斜しており、導水路としての

性格が想定でき、主水源が問題となる。当該期には自然流路の多くは埋没しているが多肥宮尻遺跡 S R 05 は概報では近世末の最終埋没が想定されており、その候補となる。ただし、当調査地に S R 05 に連続する流路はみられない。

なお、調査段階の検出状況では S R 01 が S D 19 に重複する手前から緩やかに湾曲する。しかし、写真等で判読した限りでは、S D 19 を超えて南に延びることは明白であり、概報にも下層より弥生時代後期（中期中葉の誤認）に属する土器やサヌカイト裂石鏝や石庖丁が出土したと記述されており、それを裏付ける。

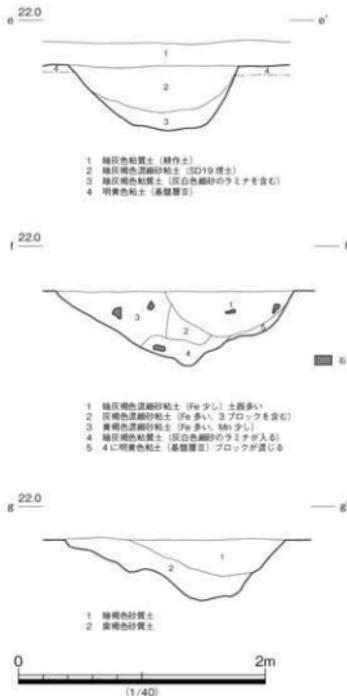
235～288 が S D 19 出土遺物である。遺物の大多数は掘り直し後の埋積土から出土し、和泉型瓦器は北端部から南へ 5 m の範囲内に集中する。

235～242 は土師質土器小皿である。いずれも底部は回転ヘラ切りとなる。235～241 は口径 9～10 cm を測る。底部内面中央部が内底部より 1～2 mm 程度円柱状に突出しており、内面の回転ナデ調整時に生じた製作者のくせ的な痕跡と考えられる。いずれもクリーム色の色調を呈する。242 は口径 8.2 cm を測り、口縁部の立ち上がりが短く、外面底口縁部境に明瞭な凹線を認める。色調も明赤灰褐色を呈し、235～242 とは異なるタイプとなる。236 は内外面ともに煤痕を認め、重ね合わせて燈明皿として使用した可能性がある。

243～251 は土師質土器坏である。243 は口径 11 cm を測る小型品で、口縁部には幅狭の丁寧な回転ナデ調整を施す。内外面に煤痕跡を認め、内底部は赤変する。244 は口径 13 cm を測り、外面底口縁部境に明瞭な段を認め、底部は突出する。245 は口径 14 cm を測る。全体的に厚手で、口縁端部は肥厚する。246 は口径 13.6 cm を測り、底部に丸味を有し、器高も高い形態を呈する。底部外面に煤が付着する。247～249 は口径 15 cm 前後を測り、外面の底口縁部境が不明瞭で、口縁部は大きく開く。248 は被熱によるわずかな赤変を認める。250・251 は丸味を帯びた底部で、外面には指押さを認める。京都系土師器の可能性が高い。内外面ともに煤が付着し、器表面が赤変ないし黒化する。坏は小皿の均一な状況とは異なり、形態差が著しい。252 は土師質土器碗である。大きく開く坏部に高い高台が付く。高台高 1.6 cm。碗形態、胎土・色調は 247～249 の坏に酷似する。

253・254 は須恵器碗とした。焼成不良で還元されず、色調は二次焼成を受けて赤変した土師質土器に酷似する。口径 16 cm を測り、口縁部は内湾することなく、直線的に開く。高台は粗雑に貼付され、内面の接合調整は施されない。内面には板ナデ痕跡を認める。西村窯産。

255～273 は和泉型瓦器である。S D 19 出土遺物の組成は後述するが、瓦器の組成が 60% を超える。



第 85 図 II-3 区 SD19 断面図

さらに完形に復元できる個体も多く、その性格が問題となる。高台底面が摩耗していない個体もわずかに認めるが、断面三角形の高台はすべて摩耗する。260は二次焼成を受け、一部赤化しており、未使用な状態で廃棄は考えられない。255・256は同一個体と考えられる瓦器皿である。見込みにはヘラミガキを認め、一部は輪状を呈する。257～273は瓦器椀である。口径15cm前後を測り、口縁部は内湾気味に立ち上がり、碗形態を呈する個体が多いが、大きく開く形態も認める(263・273)。高台形は方形と三角形があり、前者が後者の2倍程度の比率を占める。内面のヘラミガキは比較的密に施される個体(257・259～262・265・268・270)、やや粗雑で隙間を認める個体がある(258・263・264・266・267・269・271～273)。見込みのヘラミガキは斜格子文(257・258)、平行線上文ないしジグザグ文(259～271)、連結輪状文(272)、渦巻き状文を認める(273)。外面のヘラミガキは磨滅で確認できない個体もあるが、上半部を中心に散漫に施される。尾上編年Ⅱ-3期～Ⅲ-1期が主体となり、わずかにⅢ-2期を含むものと理解できる。

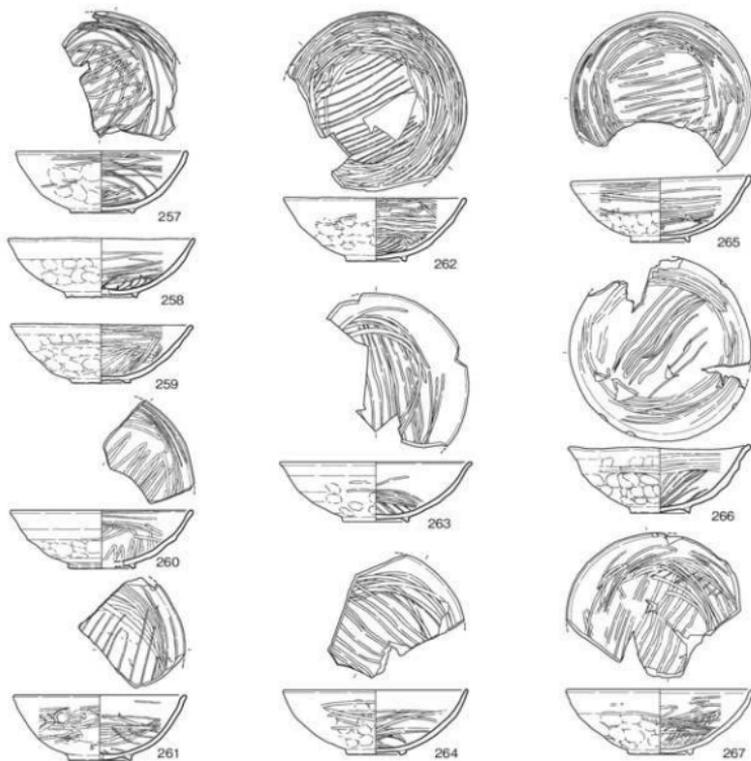
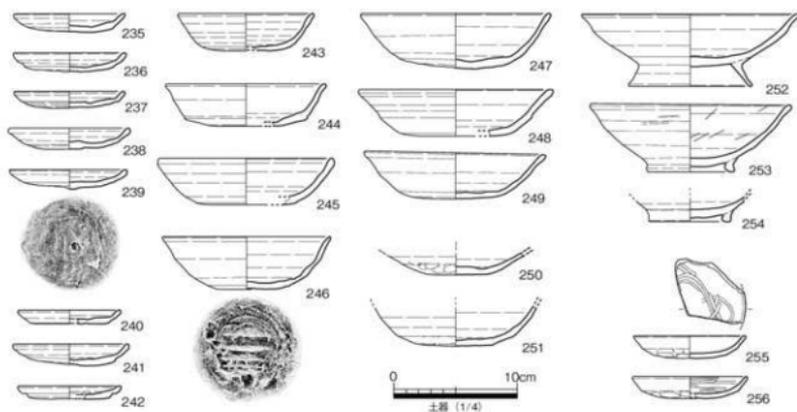
274～276は中国産輸入磁器白磁碗である。274・275は白磁Ⅳ類、276はⅡないしⅣ類となる。274は白磁がクリーム色を呈し、貫入が激しいが、275は青灰色を呈する。276は胎色となる。

277は東播系須恵器鉢である。胎土が粗く、内外面ともに回転ナデ調整が施される。端部は小さく上方に摘み上げ、端面のみ色調が濃く、重ね積みの痕跡と理解できる。278は須恵器壺である。広口壺の肩部と考えられ、外面には格子叩きを認める。十瓶窯産。279・280は須恵器甕である。外面には格子叩き、内面には無文のあて具痕を認め、十瓶窯産須恵器と考えられる。

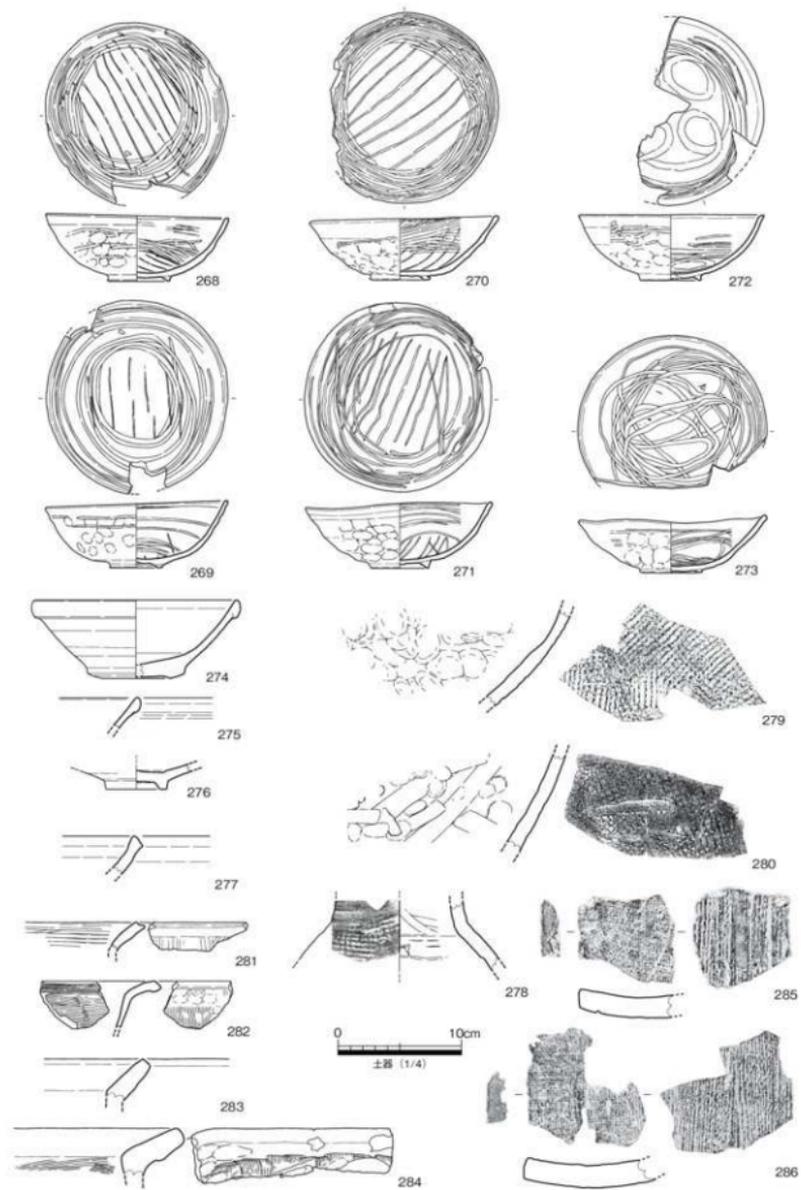
281・282は吉備系土師器鍋である。くの字形に屈曲する口縁部にボール状の体部が付く形態を呈し、口縁部は強く横に引き出す。内面及び体部外面のハケ調整は卓越する。胎土中に角閃石を包含する。外面には煤が多く付着する。283は土師質土器甕である。くの字形に屈曲し、体部は直立気味となる。284は土師質土器甕としたが、移動式のかまどの可能性も残す。内外面には煤痕が付着する。285・286は平瓦である。凸面には縄目叩き、凹面には布目を認める。

287はサヌカイト製石鏝である。基部に折れ面を認める。288は砥石である。方柱状を呈し、各面は研磨による顕著な磨滅を全面に認め、無数の線条痕を認める。上面には研磨痕はないが、線条痕を認める。

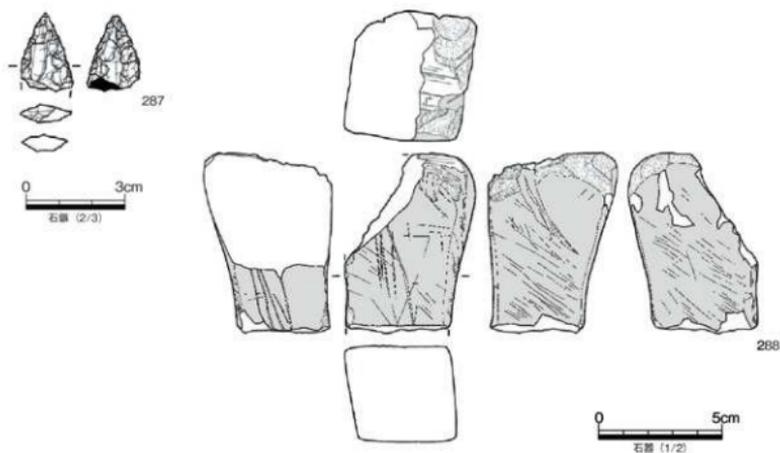
以上、SD 19出土遺物は12世紀後半～13世紀前葉に位置付けられる。和泉型瓦器が多量に出土する一方、在地産の西村窯産須恵器椀はごく少量の出土となり、対照的な状況呈する。また、土師質土器小皿・坏に煤痕を認める個体を認め、燈明皿としての使用が想定できる。当該期の讃岐では官衛的施設や寺院以外での小皿を燈明皿に用いる例は稀であり、遺跡の性格を反映する可能性が高い。なお、287・288は検出面となるSR 01に包含された遺物が混入した可能性が高い。



第 86 图 II-3 区 SD19 出土遺物 1



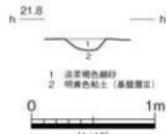
第 87 图 II-3 区 SD19 出土遺物 2



第88図 II-3区 SD19 出土遺物3

#### II-3区SD20

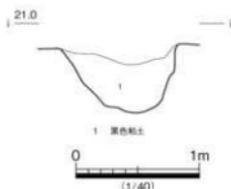
II-3区南端部で検出した溝状遺構である。検出状況は近現代期に属するSD27から派生し、屈曲しながら北東に流下するが、元来はSD19から分岐した可能性が高い。溝幅約0.3mを測り、浅いU字形の断面形状を呈する。埋土は淡茶褐色細砂となり、図化し得ないが12世紀代に属するであろう土師質土器が数点出土する。SD19と同時期の帰属時期を想定することができる。



第89図 II-3区 SD20 断面図

#### IV-4区SD21

IV-4区屈曲部で検出した溝状遺構である。主軸方位は北西方向となる。溝幅約0.9m、深度約0.5mを測り、黒色粘土を埋土とする。図化は困難であったが、中世期に属する須恵器が出土しており、帰属時期はSD19と同時期に想定したい。



第90図 IV-4区 SD21 断面図

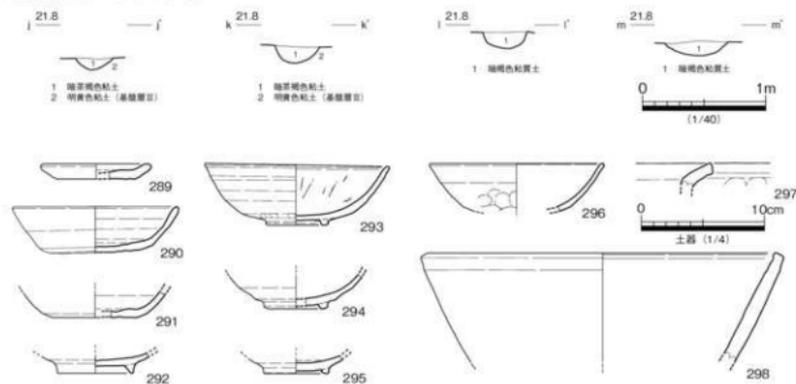
#### I-4区・II-3区SD22 (概報時: SD02)

I-4区からII-3区にかけて検出した溝状遺構である。北東方向に流下した後、屈折して日暮・松林遺跡(1次)SD45に連続する。溝底深度から南から北へ流下した状況が復元できる。溝幅は0.3~0.5mを測り、浅いU字形の断面形状を呈する。埋土は暗褐色ないし暗茶褐色粘土となり、SD19に共通する。遺物はすべて検出南端部の溝幅が広い箇所からの出土となる。

289~298はSD22出土遺物である。

289は土師質土器小皿である。口径9cmを測り、口縁部は短く開く。290・291は土師質土器杯である。口径13.2cmを測り、底口縁部境はやや不明瞭となる。292は土師質土器碗底部である。高台は断面三角形で、クリーム色の色調を呈する。吉備系土師器碗の可能性が高い。293～295は須恵器碗である。293は口径15cm、高台径5cm強を測り、外面に回転ヘラミガキをかりうじて認め、内面には板ナデの痕跡を残す。高台は矮小化傾向にあり、径は小さく、断面形状も丸い。293・294は西村窯産須恵器碗となる。293の内面には板ナデ痕跡を認める。296は瓦器碗である。内外面のヘラミガキは消失する。297は土師質土器鍋である。298は須恵器鉢である。口縁端部は四角く取め、小さく内側に引き出す。十瓶窯産。

以上、SD 22 出土遺物は12世紀後半～13世紀中葉に属し、須恵器碗から13世紀中葉頃の帰属時期を想定することができる。

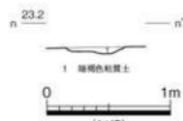


II-3区 SD22

第91図 I-4区・II-3区 SD22 断面図、出土遺物

### III-3区SD 23

III-3区で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺の条里地割には合致せず、N 62°Wを呈する。延長線上にはIV-1区SD 24が存在し、連続する溝の可能性が高い。溝幅0.5m前後を測り、浅い皿状の断面形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土となる。図化できる遺物はないが、土師質土器を数点認め、12世紀後半～13世紀中葉の帰属時期を想定したい。

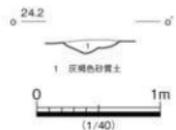


第92図 III-3区 SD23

断面図

### IV-1区SD 24

IV-1区西端部で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺地割には合致しない。III-3区SD 23の同一の溝である可能性が高い。溝幅は0.5m前後を測り、断面形状は舟底状を呈する。埋土は灰褐色砂質土となる。図化可能な遺物はないが、中世期に属する遺物を数点認める。帰属時期は明確ではないが、SD 23との関係から、12世紀後半～13世紀中葉に位置付けたい。

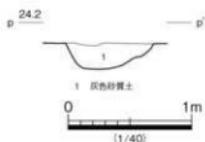


第93図 IV-1区 SD24

断面図

#### IV-1区SD25

IV-1区西部で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺の条里地割に合致した南北方位となる。SD24に後出する重複関係を有する。溝幅は0.7mを測り、断面形状は逆台形ないし舟底状を呈する。埋土は灰色砂質土となる。図化可能な遺物はないが、12世紀後半～13世紀中葉に属するであろう土師質土器小皿を認める。帰属時期は出土遺物と重複関係から13世紀中葉頃を想定したい。



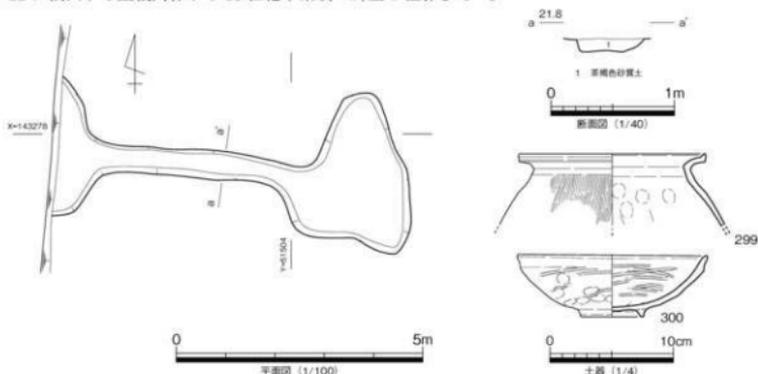
第94図 IV-1区 SD25 断面図

#### II-3区SX13

II-3区北西隅で検出した不明遺構である。平面形は両端に不定形な土坑状の落ち込みがあり、それを溝状遺構で連結させる。溝幅は0.6m前後を測り、深度0.1mに満たない。両サイドの落ち込みの深度も溝深度と同等である。埋土は茶褐色砂質土となる。検出面はSR01上面となる。

299・300はSX13出土遺物である。299は弥生土器甕である。300は和泉型瓦器碗である。口縁部は大きく開き、端部のみ直立気味になる。内外面にはヘラミガキを認める。尾上編年Ⅲ-2期の所産か。

弥生土器は混入と考えられ、瓦器碗の年代観から12世紀末～13世紀初頭の年代観が想定できるが、SD22に後出する重複関係から13世紀中葉頃の所産と理解したい。



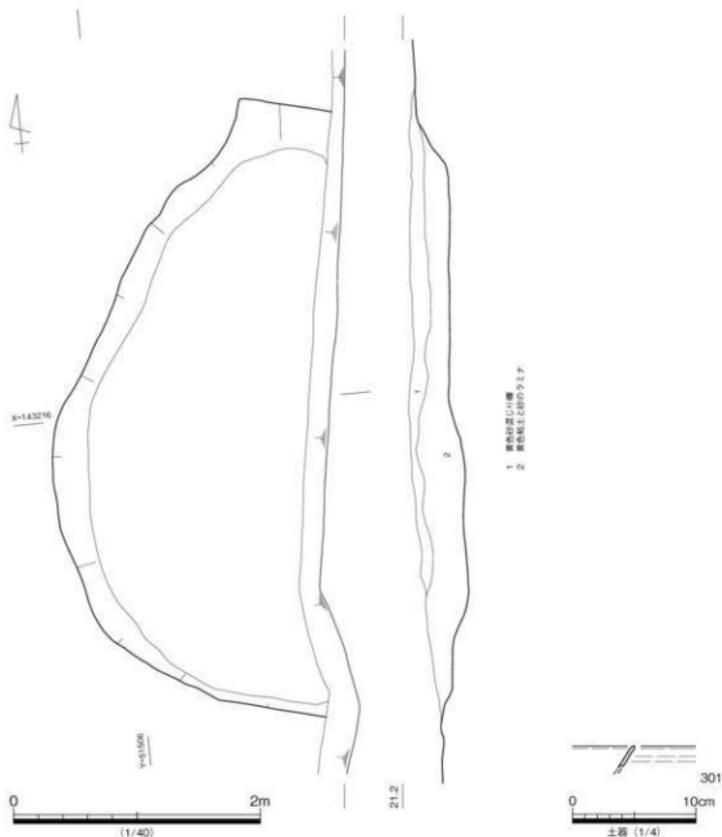
第95図 II-3区 SX13 平・断面図、出土遺物

#### IV-4区SX14

IV-4区屈曲部で検出した不明遺構である。東半は調査区外に延び、全容は不明だが、南北検出長5m、東西検出長2mを測る。埋土は上層に黄色砂混じり礫、下層に黄色粘土と砂のラミナを認める。層序関係からSR02・03分岐部分の堆積土(壁面土層⑩15層)の上位に埋積した低地堆積土(同7～11層)がSX14(同17層)を被覆した状況が想定できる。埋土から水溜め状の施設である可能性が高い。

301は瓦器碗である。二次焼成を受け、器表面の色調は変色する。

帰属時期は出土遺物の年代観から12世紀後半～13世紀中葉頃の所産と考えられる。SR02・03分岐部分は流路埋積後も低地が残り、当該期以降も埋積が緩やかに進行した状況が復元できる。



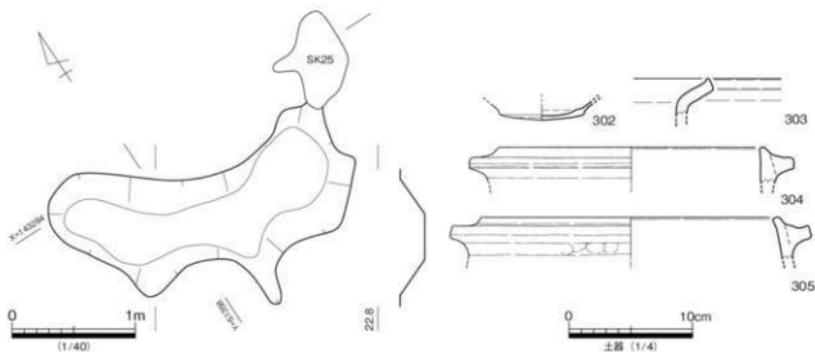
第96図 IV-4区 SX14 平・断面図、出土遺物

#### V-1区SX15

V-1区西部で検出した不明遺構である。不整形な形状を呈し、東西長約2.5mを測る。掘り上がりの断面形状は逆台形状を呈し、底面は平坦となる。

302～305はSX15出土遺物である。302は土師質土器小皿である。底口縁部境に明瞭な段を認め、底部が突出する。二次焼成を受け、赤変する。303は土師質土器甕である。口縁部はくの字形に屈曲し、端部を上方に摘み上げる。304・305は土師質土器羽釜である。口縁部直下に短く太い鋳を巡らす。

以上、SX15出土遺物は11世紀後半頃の様相を呈する。当該期に属する遺構は他には確認できないが、出土遺物が示す年代観を帰属時期と考えておく。

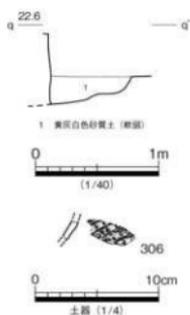


第97図 V-1区 SX15 平・立面図、出土遺物

### Ⅲ-2区SD26 (概報時:SD01)

Ⅲ-2区西辺部で検出した溝状遺構である。当調査地の西辺は坪界線に相当し、直線的な道路が走り、それに平行する溝となる。西側肩部は調査区外にあり、検出最大幅は0.7m前後を測る。断面形状は舟底状を呈し、埋土は黄灰白色砂質土となる。

出土遺物は稀薄ながら、土師質土器足鍋と考えられる細片が出土した(306)。外面には粗い格子叩きを認める。細片であるため、帰属時期は不明だが、粗い格子叩きは13世紀以降みられ、ここでは当該期に位置付けておくが、中世後半期まで下る可能性も残す。



第98図 Ⅲ-2区 SD26  
断面図、出土遺物

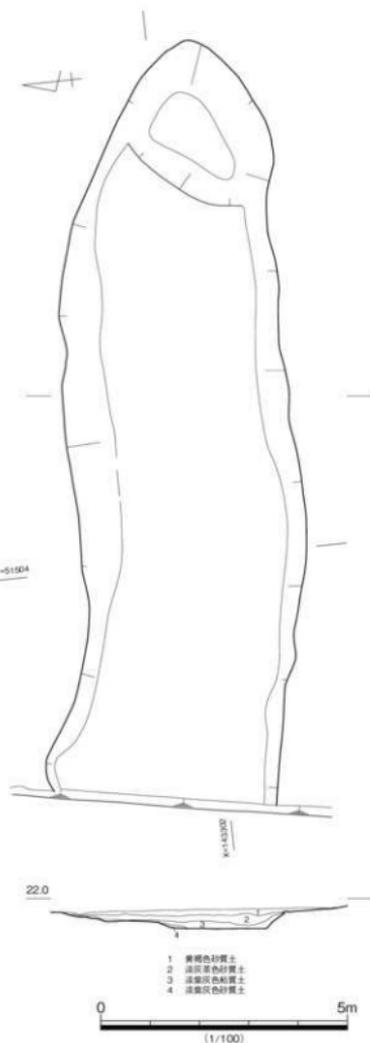
#### 4. 中世後半～近世

調査区の全域に分布するが、I-4区周辺にやや集中する傾向がある。居住域を形成するものではなく、耕作域において開削された遺構と考えられる。

#### I-4区SX16

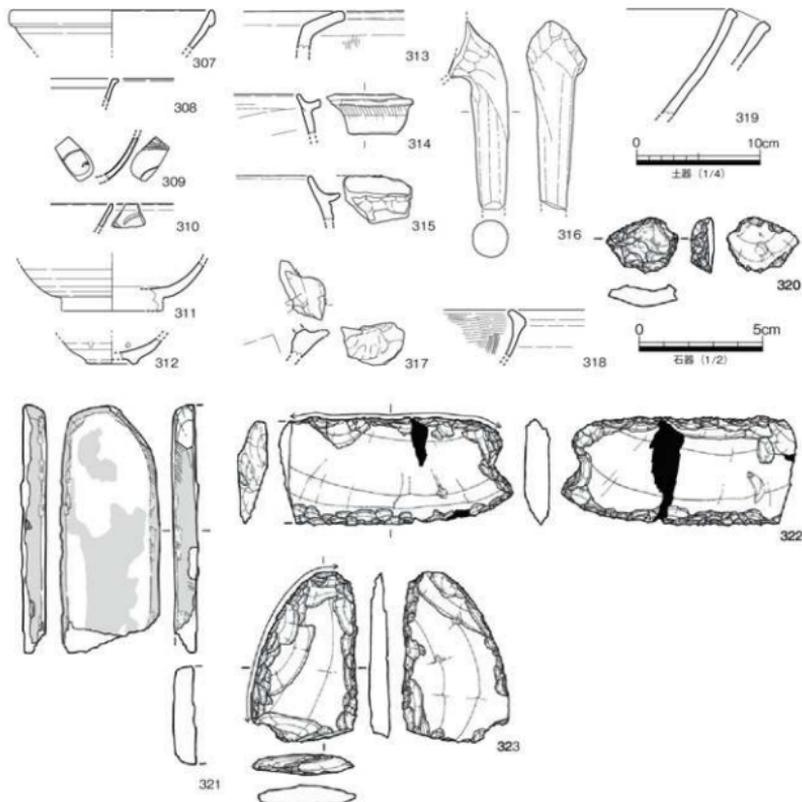
I-4区で検出した不明遺構である。東西検出長約15.6m、幅4.5m前後を測る。主軸方位は周辺地割に合致した方位を呈する。断面は浅い皿状を呈し、南側は逆台形状に一段下がる。東端部は先細り、土坑状に凹む。埋土は色調の異なる砂質土が数層堆積する。検出面は西端部がSR01上面となるが、東側は明黄色粘土（基盤層Ⅲ）となる。

307～323はSX16出土遺物である。307～311は中国産輸入磁器である。307・308は白磁碗で、前者はIV類、後者はVないしVIII類となる。いずれも軸は灰白色を呈し、緻密な胎土となる。309～311は青磁碗である。309は明緑灰色の釉色を呈し、内外面にはヘラによる陰刻文を認める。310の釉色はくすんだ緑灰色で、外面にはヘラによる陰刻文を認める。311は濃い緑灰色の釉色で、素地の色調は灰色を呈する。見込み周縁に沈線状の段を認める。312は肥前系陶器碗である。灰釉は薬灰釉状の色調を呈し、見込みに胎土目を認める。313は土師質土器甕である。器壁は厚い。314～316は土師質土器足鍋である。314は口縁部が短く、短く延びる鈎端部には面を認める。315は比較的長く延び、鈎端部は先細る。いずれも13世紀後半頃の所産か。316は脚部片であり、断面形状は円形を呈する。317は土師質土器外耳付き鍋である。318は土師質土器摺鉢である。口縁部はくの字形に内側に屈曲し、内面にはスリ目を認める。319は須恵器鉢である。片口部。十瓶窯産。端部は四角く収める。320はチャート製火打石である。不定方向の小さな剥離面をランダムに認める。321は柱状片刃石斧である。片岩。欠損により側縁部のみが遺存する。破損面を除く各面は丁寧に研磨されるが、基端の一部には敲打痕による剥離を認める。322はサヌカイト製石庖丁である。背部には潰れを認める。323は石剣としたが、石録の可能性も残す。



第99図 I-4区 SX16 平・断面図

以上、S X 16 出土遺物は 307～310、313、315、316、319 が 12 世紀後半～13 世紀、311 が中世後半期、312、317、318 が近世初頭に属し、かなりの時期幅を有するが、遺構の帰属時期は近世初頭と考えられる。なお、321～323 は混入品であるが、検出面となる S R 01 に含まれていた可能性もある。

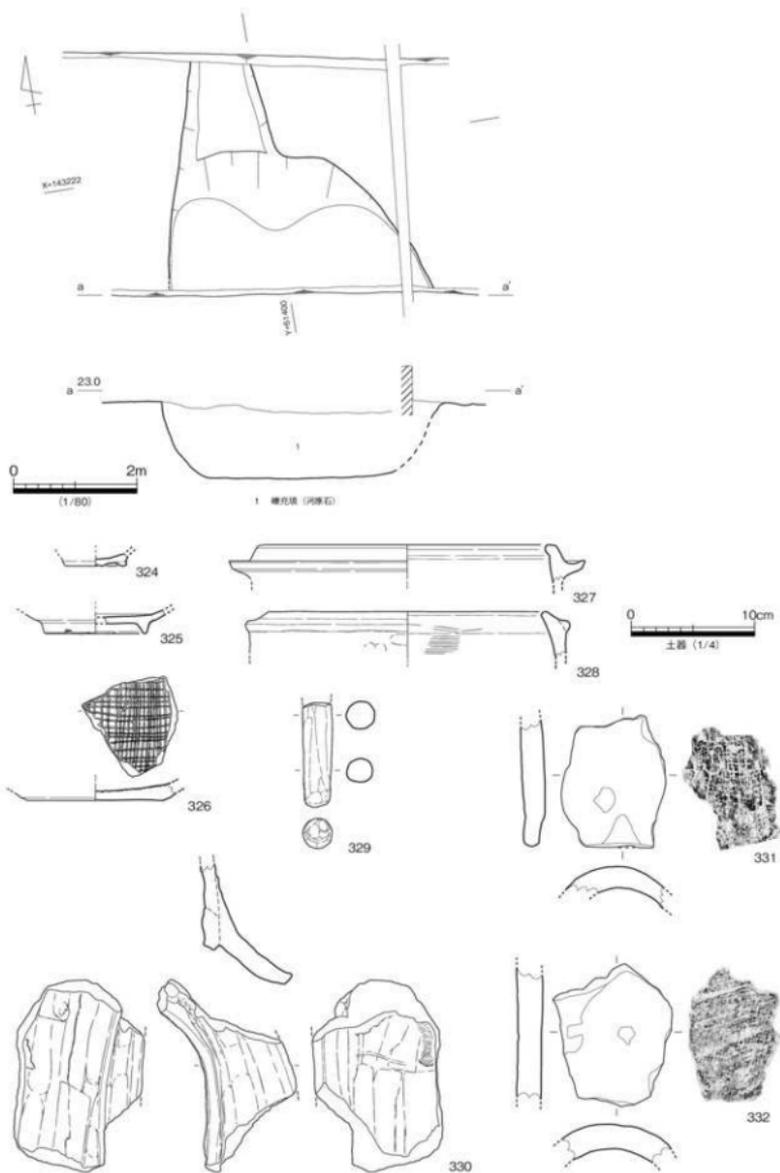


第100図 I-4区 SX16 出土遺物

#### IV-1区 SX 17

IV-1区東部に検出した不明遺構である。約2×4mの円形の土坑状の落ち込みから溝状遺構が延び(溝幅1.5m)、円形部分の深度は1mを超える。全面に砂岩円礫を充填する。水竈等の施設の可能性もあるが、性格は不明である。

324～332はS X 17出土遺物である。324は黒色土器碗である。高台部分と接する底部が円形に遺存しており、円盤状土製品に転用した可能性が高い。12世紀後半～13世紀前葉。325は中国産輸入磁器白磁鉢である。軸色は淡青灰色を呈し、見込み周縁にかすかな段を認める。高台は三角形に高く突出し、



第101图 IV-1区 SX17 平·断面图、出土遗物

登付から内面にかけて窯詰め時の粗い砂粒がまばらに付着する。326は陶器鉢とした。瀬戸美濃産か。見込みに格子状に摺り目を認め、使用により一部磨滅する。327は土師質土器羽釜である。端部は内側に肥厚し、重任な鈿端部を斜め上方に積み上げる。12世紀前葉。328は土師質土器足鍋である。口縁部は内湾し、鈿部の形骸化が著しい。16世紀末～近世初頭。329は土師質土器足鍋脚部である。330は土師質土器移動式かまどである。中世前半期か。331・332は丸瓦である。332の凹面にはコビキAを認める。中世末～近世初頭。

以上、S X 17出土遺物は時期幅を認めるが、328、332から近世初頭の帰属時期が想定できる。

#### I-4区SK 11

I-4区で検出した土坑である。一辺1.4m前後の隅丸方形を呈し、逆台形の断面形状を呈する。埋土は黄色粘質土で、基盤層ブロックを多く包含する。図化していないが、肥前系磁器碗が出土する。二重網目文を認め、18世紀後半の年代観を付与することができる。(第102図)

#### I-4区SK 12

I-4区で検出した土坑である。南北に主軸がある不整形土坑2基が重複した状態で検出されている。断面形状は浅い皿状を呈し、後出する掘り方は黒褐色粘土、先行する掘り方は淡灰褐色粘土を埋土とする。出土遺物がないため、帰属時期は不明であるが、埋土の特徴と周辺に近世期に属する遺構が分布することから、近世後半期の所産と理解したい。(第103図)

#### I-4区SK 13

I-4区で検出した土坑である。径0.6m前後の不整形を呈し、埋土は暗灰褐色粘土となる。埋土の特徴と周辺に分布する近世期の遺構から、近世後半期の所産と理解したい。(第104図)

#### I-4区SK 14

I-4区で検出した土坑である。東半は調査区外へ延長する。東西検出長0.7m、南北検出長0.8mを測り、V字形の断面形状を呈する。埋土は下層に黒色粘土、上層に暗茶褐色粘土が堆積する。埋土の特徴と周辺に近世期に属する遺構が分布することから、近世後半期の所産と理解したい。(第105図)

#### I-4区SK 15

I-4区で検出した土坑である。1.4m前後の不整形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。深度は極めて浅く、淡黄色混細砂粘土を埋土とする。埋土の特徴と周辺に分布する近世期の遺構から、近世後半期の所産と理解したい。(第106図)

#### II-3区SK 16

II-3区南東部で検出した土坑である。長軸長2m、東西検出幅0.8mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深度は極めて浅い。埋土は淡黄色混細砂粘土となり、SK 15に共通する。図化していないが、18世紀代の京・信楽系陶器を認める。帰属時期は出土遺物と周辺遺構の分布状況から近世後半期に想定した。(第107図)

### Ⅲ-1区SK17

Ⅲ-1区で検出した土坑である。一辺2m前後の隅丸方形を呈し、断面形状は逆台形となり、北側のみ一段下がる。埋土は基盤層に酷似した青灰黄色粘土を基調とし、北側に粘質土や砂質土が流れ込む。出土遺物はないが、埋土の特徴から近世期の所産と理解したい。(第108図)

### Ⅲ-3区SK18

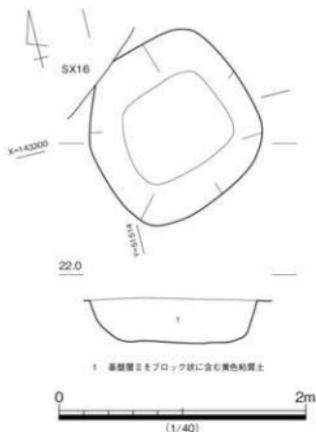
Ⅲ-3区で検出した土坑である。径2.3m前後の円形を呈し、舟底状の断面形状を呈する。深度は0.6mを測り、埋土は灰色砂質土となる。図化していないが、近世期に属する土師質土器を認め、近世期の帰属時期が想定できる。(第109図)

### Ⅲ-3区SK19

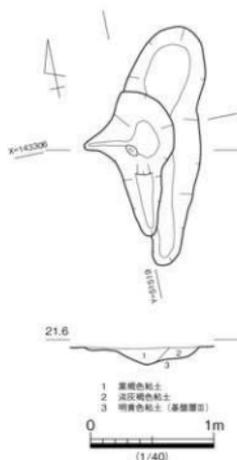
Ⅲ-3区屈曲部で検出した土坑である。北側が調査区外へ延長し、東西幅約0.9m、南北検出長約1mを測る。浅い皿状の断面形状を呈し、埋土は褐色砂質土となる。重複関係と埋土の特徴から近世期に属する可能性が高い。(第110図)

### Ⅲ-3区SK20

Ⅲ-3区北端部で検出した土坑である。1.7×2mの方形を呈し、断面形状は逆台形状となる。埋土は灰色砂質土となる。図化していないが、近世後期に属する遺物に混じり、明治大正期以降の陶磁器を1点認め、当該期として報告するが、近代期の所産と理解できる。(第111図)



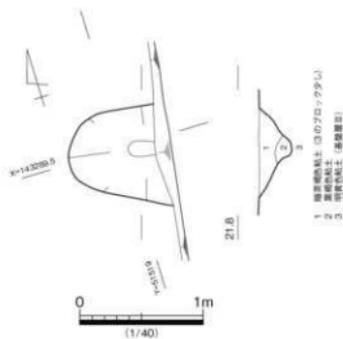
第102図 I-4区 SK11 平・断面図



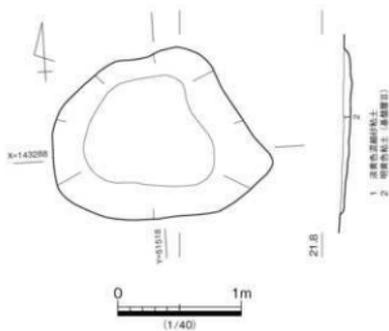
第103図 I-4区 SK12 平・断面図



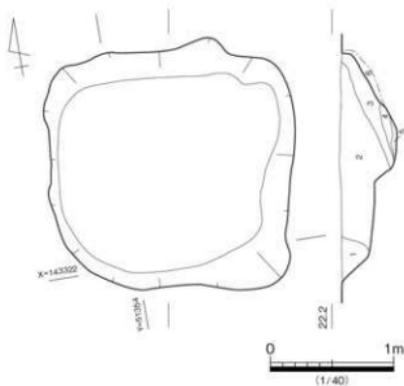
第104図 I-4区 SK13 平・断面図



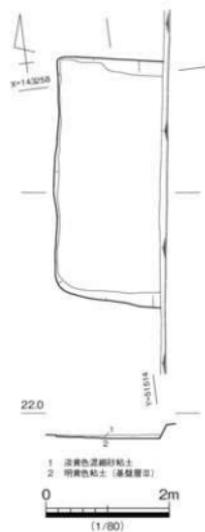
第105図 I-4区 SK14 平・断面図



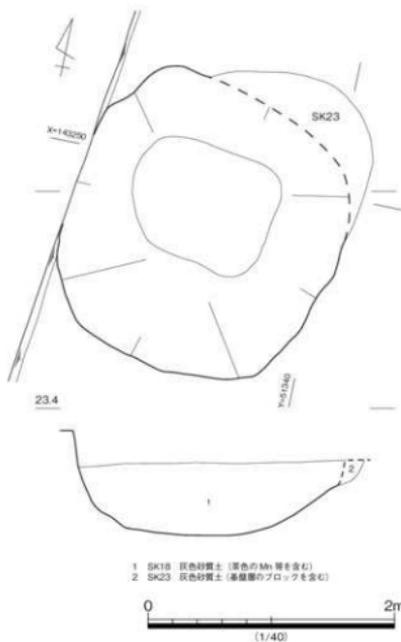
第106図 I-4区 SK15 平・断面図



第108図 III-1区 SK17 平・断面図



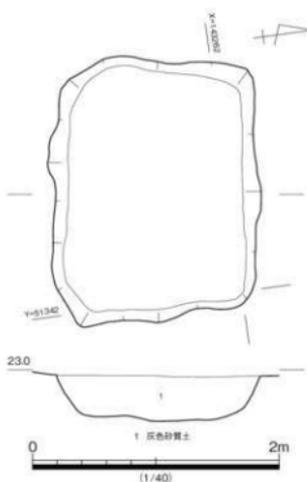
第107図 II-3区 SK16 平・断面図



第109図 Ⅲ-3区 SK18 平・断面図



第110図 Ⅲ-3区 SK19 平・断面図



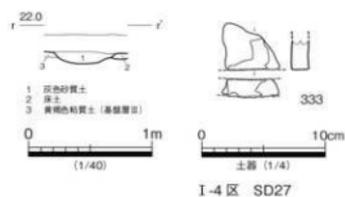
第111図 Ⅲ-3区 SK20 平・断面図

#### I-4区・II-3区 SD 27

I-4区からII-3区に連続する溝状遺構である。周辺地割に合致した南北方位を呈し、検出したすべての遺構に後出する重複関係を有する。浅い皿状の断面形状を呈し、床土上面が検出面となる。333は平瓦である。近代瓦である。当該期として報告するが、近代期の所産と理解できる。(第112図)

#### Ⅲ-2区 SX 18

Ⅲ-2区北部で検出した不明遺構である。東半は調査区外に延びるが、ドーナツ状の平面形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、底面の一部は二段掘り方状に落ちる。埋土は茶白灰色砂質土となる。出土遺物はないが、埋土の特徴から近世期の所産と理解したい。(第113図)



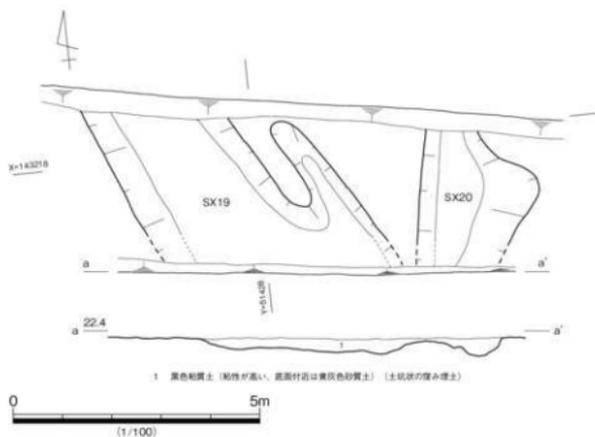
第112図 I-4区・II-3区 SD27  
断面図、出土遺物



第113図 III-2区 SX18 平・断面図

#### IV-2区 SX19・SX20

IV-2区中央部で検出した不明遺構である。SX19は北東方向に溝状に延び、SX20は楕円形状を呈する。南接する多肥松林遺跡(3次)ではSX19の西側肩部とSX20の東側肩部が四角く収束しており、不整形の遺構と理解したい。埋土は黒色粘土となる。出土遺物は確認できず、帰属時期は不明である。

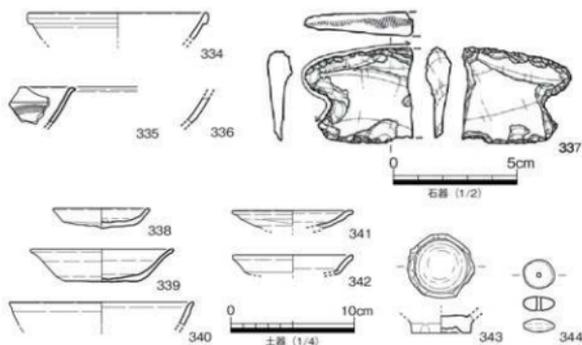


第114図 IV-2区 SX19・SX20 平・断面図

## 5. 遺構外出土遺物

遺構に伴うものではないが、完形品や輸入磁器等を抽出・報告する。

334は中国産輸入磁器白磁碗である。白磁碗Ⅳ類。335は中国産輸入磁器白磁碗である。Ⅴ-4b類。内面に櫛状工具で花文を陰刻する。336は緑釉陶器碗である。胎土はやや軟弱で、橙色の色調を呈する。内外面に濃い緑色の緑釉を施す。337はサヌカイト製石椀丁である。折れ面を認める。338は土師質土器小皿である。口径7.8cm。内底部の中央部が円柱状にかすかに突出しており、S D 19出土の小皿に共通する。出土位置を考慮すると、元来S D 19に包含されていた可能性が高い。339は土師質土器杯である。口径11.6cmを測る小型品である。口縁部は大きく開き、端部付近はさらに外反する。340はⅤ-3区から出土した須恵器杯である。出水が所在した場所であり、重機で表面を掘削した際に出土したようである。Ⅰ-1区S R 03出土遺物との共通性から9世紀末～10世紀前葉の所産と理解したい。341・342は中国産輸入磁器白磁皿である。前者はⅣ-1b類の可能性が高い。343は中国産輸入磁器白磁碗である。ⅡないしⅣ類の高台部分を転用して円盤状土製品とする。344は土玉である。焼成前穿孔の可能性が高い。



第115図 遺構外 出土遺物

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 八稜鏡鉛同位体比分析

株式会社 イビソク

#### 1. はじめに

本稿では、高松市多肥上町に所在する多肥松林遺跡から出土した古代の八稜鏡に関して、鉛同位体比法を用いた材料の産地推定を行い、本資料の意義を自然科学的な側面から推定する。

#### 2. 資料

資料は Table.1 および Photo. 1 で示される八稜鏡の破片で、約 1/4 の大きさに破断された状態で検出されている。質量は 4.7cm × 4.0cm、厚さ 0.1cm である。縁は斜縁、縁の内側に圏線状の僅かな盛り上がり、内区には線状の隆起が見える。しかし腐食・摩滅が顕著である (\*1)。

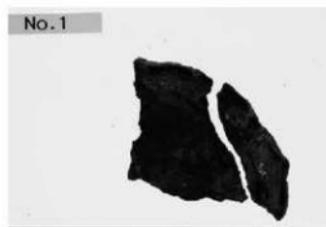


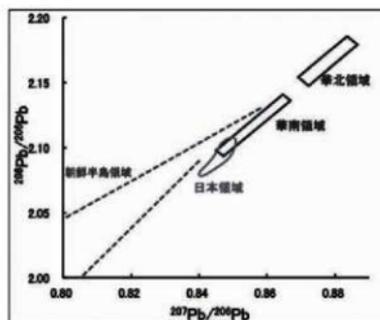
photo.1 多肥松林遺跡から出土した八稜鏡

#### 3. 鉛同位体比法の原理

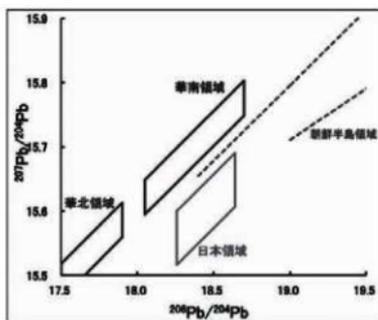
Table.1 分析試料

資料番号	資料名	発掘年代	出土遺跡	出土遺構等	備考・形状等	質量
1	八稜鏡	1994/9/6	多肥松林遺跡 (香川県高松市 多肥上町)	II - 1 区 SK06	約 1/4 に破断され、 破棄された状態	4.7 × 4.0 × 0.1cm

今までの研究から (\*2, 3, 4)、鉛には重さが異なる 4 つの同位体 ( $^{203}\text{Pb}$ ,  $^{206}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}$ ,  $^{208}\text{Pb}$ ) が混在している。そして、 $^{206}\text{Pb}$  は  $^{238}\text{U}$  (238-ウラン) から、 $^{207}\text{Pb}$  は  $^{235}\text{U}$  (235-ウラン) から、 $^{208}\text{Pb}$  は  $^{232}\text{Th}$  (232-トリウム) から自然放射壊変で生成される。それ故地球が生まれて以来、岩石の中で鉛がウラン・トリウムと共存していると、これらウラン・トリウムが自然に原子核壊変して年々減少し、鉛の同位体へ変化する。地球の歴史のあるとき、地殻変動などでこれら岩石から鉛が抽出されて鉛鉱物を生成すると、鉛同位体の量と比が定まる。この時点で鉛はウラン・トリウムから切り離されるので、鉛同位体比はもう変化しない。各地域の鉛同位体比は鉛鉱物を作った岩石中の鉛、ウラン、トリウムの量および地殻変動の時期が異なるので、鉛同位体比は原則としてそれぞれ異なった値となる。東アジア地方では PL.1 (A 式図:  $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ )、と PL. 2 (B 式図:  $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ : B 式図) で示されるような地域毎の領域に分布することが判っている。図にはそれぞれの地域が日本、朝鮮半島、中国華北、華南などとして示されている。新しい資料の鉛同位体比を測定し、これらの図に載せた場合、両方の図で設定された同じ領域に含まれれば、その地域で生産された材料で作られている可能性が高いと示される。もちろん例外はある。また鉛同位体比の表現方法として各種あるが、PL. 1 と PL. 2 の方式で示されることが多いので、本報告でも PL. 1 と PL. 2 の表現方式に従う。この原理で鉛の同位体比から銅や鉛の生産地を推定する方法を鉛同位体比法と称している。



PL. 1 東アジア地域の産地概念図 (A 式図)



PL. 2 東アジア地域の産地概念図 (B 式図)

銅製品中の鉛は銅の精錬時に取り除ききれなかったため少々残存する場合がある。また、銅製品を作る時に金属の性質（铸造温度、硬さ）を変えるために、鉛が主成分の一つとして人為的に加えられることがある。鉛は各地域に割合に普遍的に存在しているため、銅鉱山の近くで採掘されることが多く、鉛の同位体比は銅の生産地を示唆することにもなる。

銅や鉛の利用状況として、日本では古墳時代の資料には馬具、鏡、耳飾り、太刀などの割合に小さな資料が検出されている。この時代の資料には日本産材料が見あらず、朝鮮半島や中国産材料を用いて製品化されている<sup>(4,5)</sup>。奈良時代になると、資料として仏像、仏教用具、墓誌など大きな資料も含まれてくる。これらには日本産の材料が主流で、朝鮮半島、中国華南産の材料が少々含まれることが判っている。

平安時代になると銅鏡（どうわん）、火鍔斗（ひのし）、小仏像、皇朝十二銭などがある。そしてこれら銅製品のほとんどが日本産材料であることが示されている。平安時代末期になると、日本産材料が急に減少し、中国華南産材料が増えてくる。

本資料である八稜鏡は発掘された状態と資料の特徴から古代の製品と位置づけられているので、鉛同位体比から八稜鏡の意義を考えてみる。

#### 4. 調査方法

資料に使われた金属材料の産地を推定するために鉛同位体比法を利用する。本資料は銅鏡で、主成分は銅とスズと鉛である。鉛同位体比の測定には資料に発生した錆を除去し、金属部を利用する。

資料の鉛同位体比を表面電離型固体質量分析計で測定する。測定のために資料から鉛を単離して機器へ導入する。その手順を次に示す。分析用試料を石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解する。この溶液を蒸留水で希釈し、直流 2V で電気分解する。鉛は二酸化鉛として陽極の白金電極上に析出するので、この電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で表面の鉛を溶解する。この溶液の鉛濃度を ICP 法で測定し、0.2 $\mu$ g の鉛を分取する。この鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に載せる。以上のように準備したフィラメントを質量分析計 (Finnigan MAT262) の中にセットし、測定諸条件を整え、1200 $^{\circ}$ C で鉛同位体比を測定する。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料 NBS-SRM-981 で規格化する。なお本資料に関しては 2 回の測定を行い、資料の数値に間違いのないことを確かめる<sup>(6,7,8)</sup>。

## 5. 調査結果と考察

測定された鉛同位体比値を Table. 2 で示し、PL. 3 と PL. 4 に図示する。

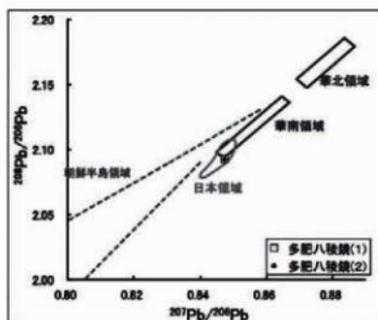
この2つの測定値は一つの試料を溶液化した後、この溶液から鉛同位体比測定用に2つの部分を取り出して測定している。

Table. 2 と PL. 3 と PL. 4 で示される資料番号 (1) と (2) の八稜鏡は完全に一致して日本領域に位置している。2回の測定が一致していることから、資料の測定には問題がなかったことを示している。また図中の位置から本資料は日本産材料で作られていることが示されている。前述した鉛利用に関する日本の大きな時代変化から判断すると、本八稜鏡には日本産材料が利用されているので、平安時代中期以前の典型的な資料の一つと考えることができる。資料の鉛同位体比値から、朝鮮半島や中国の可能性は非常に低い。

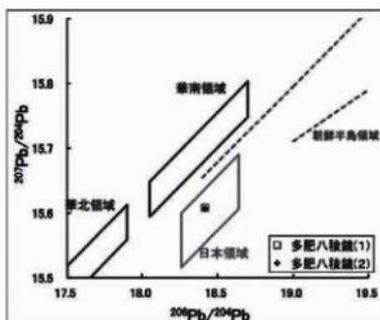
Table.2 高松市の多肥松林遺跡から出土した八稜鏡の同位体比値

資料番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$
1-1	八稜鏡 (1-1)	18.417	15.608	38.536	0.8475	2.0924
1-2	八稜鏡 (1-2)	18.417	15.608	38.536	0.8475	2.0924
	誤差範囲 (1 $\sigma$ )	$\pm 0.010$	$\pm 0.010$	$\pm 0.030$	$\pm 0.0003$	$\pm 0.0006$

比較資料として、奈良時代の資料を取り上げる。薬師寺講堂の薬師三尊像は奈良時代の作とされており、

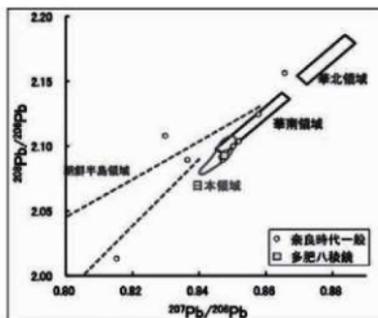


PL. 3 高松市の多肥松林遺跡から出土した八稜鏡が示す鉛同位体比 (A 式図)

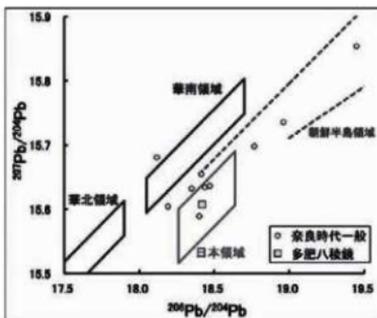


PL. 4 高松市の多肥松林遺跡から出土した八稜鏡が示す鉛同位体比 (B 式図)

り、日本産材料が利用されている。また、東大寺大仏殿前の八角灯籠も奈良時代の作とされており、当初材として日本産材料が利用されていることが今までに示されている (\*9,10)。これらだけでなく、一般的な資料として墓誌、耳環、銅鏡など (\*11,12) 資料に関してまとめてみると、PL. 5 と PL. 6 となる。これらの図から奈良時代の一般資料は日本産材料が主体であるが、なお朝鮮半島産材料や中国産材料の製品が利用されている。大きな寺院の仏像や装飾材料としては日本産材料が利用されているが、庶民が利用できた資料には日本産材料とともになお朝鮮半島産と中国産の材料もしくは製品が利用されているように示される。本資料である八稜鏡の鉛同位体比は必ずしも、これら資料と一致しているとはいえない。

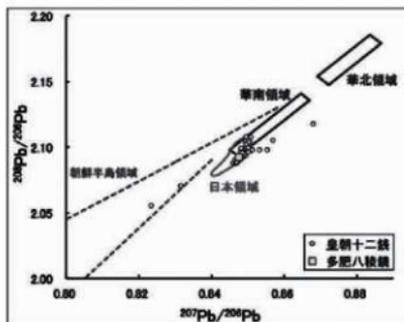


PL. 5 奈良時代の一般資料と本資料の鉛同位体比の比較 (A 式図)

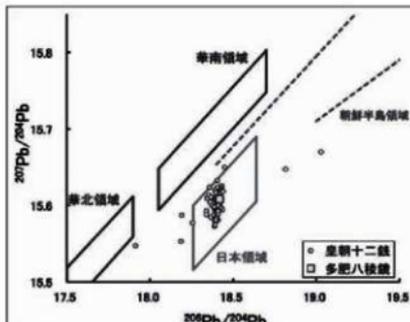


PL. 6 奈良時代の一般資料と本資料の鉛同位体比の比較 (B 式図)

次に皇朝十二銭の材料産地の分布を PL. 7 と PL. 8 で示す。皇朝十二銭の鉛同位体比は今までに測定された資料の中で 118 資料に関して分布を調べて見ると、これらの中で 7~8 資料は日本産の材料領域から外れ、朝鮮半島産材料と中国産材料領域に広がっている (\*13)。しかし、皇朝十二銭の製造には日本産材料が主として利用されたと考えることができる。すなわち、奈良時代から平安時代にかけては日本で十分な銅の生産があったと考えることができる。多肥松林遺跡出土の八稜鏡はまさにこの皇朝十二銭の分布の中で最も頻度が高い領域に含まれている。



PL. 7 奈良・平安時代に利用された皇朝十二銭の鉛同位体比分布と本資料の比較 (A 式図)



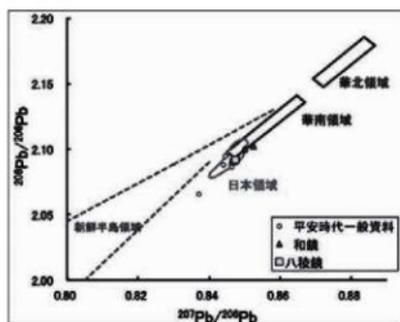
PL. 8 奈良・平安時代に利用された皇朝十二銭の鉛同位体比分布と本資料の比較 (B 式図)

平安時代の一般資料を PL. 9 と PL.10 で示す (\*14)(15)。一般資料とは小仏像、火鬘斗 (ひのし)、銅鏡、帯金具、和鏡など 25 資料である。この中には和鏡が 4 面含まれている。これら資料の殆どは日本材料領域に含まれる。奈良時代の一般資料と皇朝十二銭、平安時代の一般資料を比べてみると、時代が下るにつれて日本産材料がより多く利用される傾向にある。本資料である八稜鏡は PL. 9、PL.10 で資料が最も集まる領域に含まれている。4 面の和鏡の鉛同位体比はばらばらであり、同一材料で作られているとは考えにくい。その中の 1 面は朝鮮半島産材料の可能性もある。

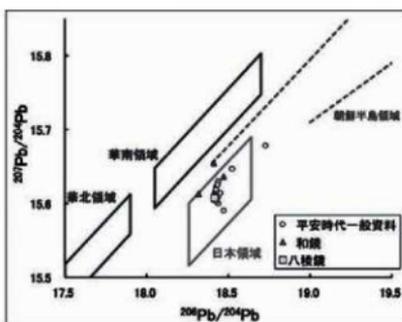
本資料である八稜鏡とこれら資料を比較するために、図を拡大して PL.11 と PL.12 で示す。これら拡大図で示されるように、本資料である八稜鏡は和鏡の1面とかなりよく似た鉛同位体比を示す。その資料は埼玉県内の寺内出土の和鏡の破片と称されている資料である。

鏡作りに共通した材料が利用されていることは鏡造りがかなり集約した形で進んでいたとも推測される。

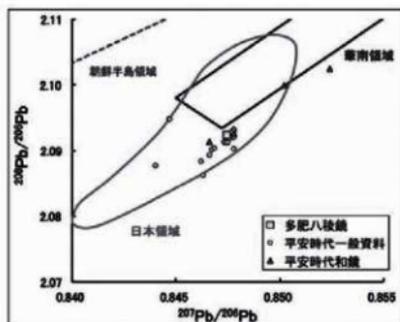
まとめとして、高松市の多肥松林遺跡で検出された八稜鏡は平安時代に典型的な銅材料であると推測される。



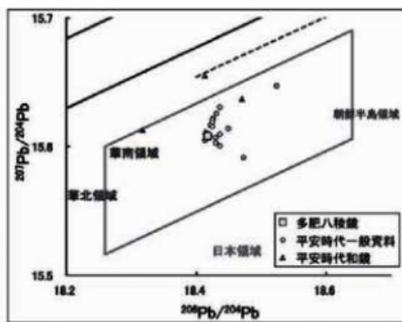
PL.9 平安時代の一般資料の鉛同位体分布と本資料の比較 (A 式図)



PL.10 平安時代の一般資料の鉛同位体分布と本資料の比較 (B 式図)



PL.11 平安時代の資料 (図9) の拡大図 (A 式図)



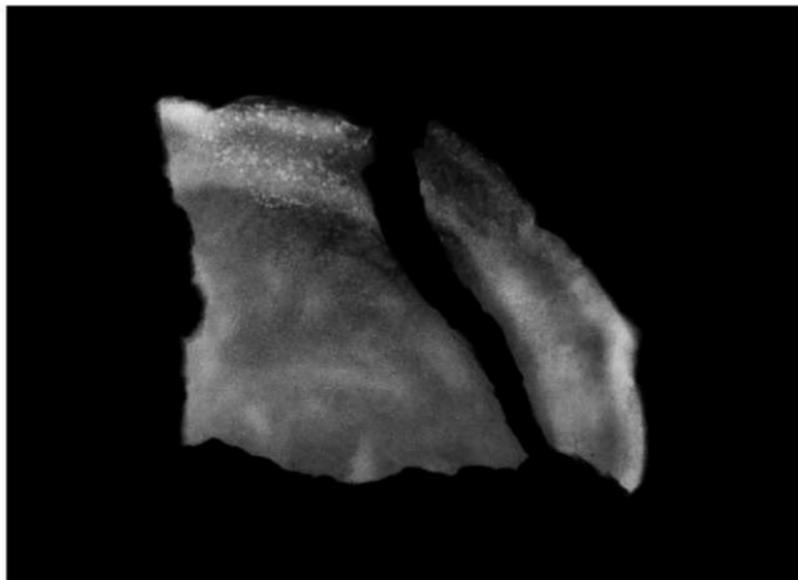
PL.12 平安時代の資料 (図10) の拡大図 (B 式図)

(各種分析は日鉄住金テクノロジー(株) 渡邊親子氏・多田武史氏・隅英彦氏の協力のもとで行った。また本文執筆には別府大学文化財研究所 客員教授 平尾良光氏のご協力をいただいた)

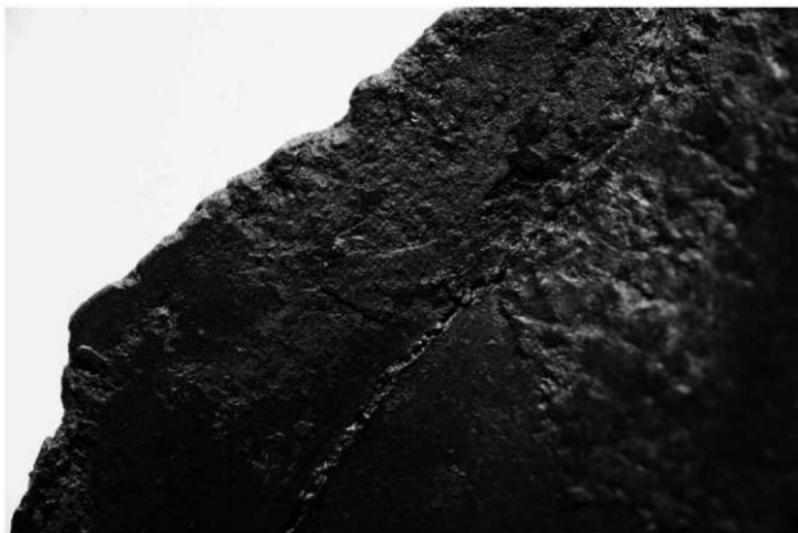
## 引用・参考文献

1. 香川県埋蔵文化財調査センター：「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡」(1999)
2. 平尾良光：鉛同位体比法、「青銅鏡・銅鐸・鉄剣を探る」『文化財を探る科学の眼 - 3』, 平尾良光, 山岸良二編, 国土社(東京), p13-19 (1998)
3. 平尾良光, 山岸良二編, 国土社(東京), p13-19 (1998)
4. 平尾良光, 榎本淳子：古代日本青銅器の鉛同位体比, 『古代青銅の流通と鑄造』, 平尾良光編, 鶴山堂(東京), p29-41 (1999)
5. 平尾良光：中世における鉛の生産・流通・消費, 『金属の中世 - 資源と流通 -』, 編者：小野正敏, 五味文彦, 萩原三雄, 高志書院(東京) p35-63 (2014)
6. 平尾良光, 榎本淳子, 鈴木浩子：古墳時代青銅製品の鉛同位体比, 考古学雑誌 97, 27-62 (2013)
7. 平尾良光, 馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について, 保存科学 28, 17-24 (1989)
8. 平尾良光：鉛同位体比法の応用 - 歴史資料の産地推定 -, RADIOISOTOPES 57, p709-721 (2008)
9. 魯巖<sup>註</sup>, 西田京平, 角川茂, 鶴我公一, 平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定の基礎, 史学論叢 41 1-9 (2011)
10. 平尾良光：6. 鉛同位体比, 『薬師寺講堂重要文化財銅造薬師如来両脇土像修理報告書』(調査編), 薬師寺編集, p52-75 (1997)
11. 平尾良光, 早川泰弘, 鈴木浩子：鉛同位体比の分析, 『東大寺国宝金銅八角灯籠修理報告書』p47-63 (2009)
12. 馬淵久夫, 江本義理, 平尾良光, 北田真吾, 木村幹：鉛同位体比法による太安萬侶墓誌銅板および武藏国分寺付近出土銅造仏の原料産地の推定, 古文化財の科学 28, 65-69 (1983)
13. 早川泰弘, 榎本淳子, 平尾良光：熊の山遺跡出土の天部立像および耳環に関する自然科学的調査, (仮称) 鳥名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 III, 熊の山遺跡(下巻), 茨城県・茨城県教育財団編, 茨城県教育財団文化財調査報告書 第149集, p589-598 (1999)
14. 齊藤努：日本の銭貨の鉛同位体比分析, 『同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究』, 齊藤努編, 国立歴史民俗博物館研究報告 86集, p65-128 (2001)
15. 平尾良光, 早川泰弘, 榎本淳子：前田村遺跡から出土した和鏡の自然科学的研究, 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 4, 前田村井席 G・H・I 区(下巻), 茨城県・茨城県教育財団編, 茨城県教育財団文化財調査報告書 第146集, p883-896 (1999)
16. 平尾良光, 瀬川富美子：長野県御代田町川原田遺跡から出土した銅製火鋸斗の科学的調査, 『塩野西遺跡群川原田遺跡出土火鋸斗の科学的調査 - 長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡科学分析報告書 -』, 長野県御代田町教育委員会編, p5-13 (1997)
17. 平尾良光, 榎本淳子：寺内遺跡出土の金属資料に関する測定結果, 応用地質株式会社へ報告済(1998)

(参考)



X線ラジオグラフィ



有機質（布）付着痕（拡大）

## 第5章 総括

### 第1節 多肥松林遺跡出土の石器について

I-4区SR 01上面でサヌカイト剥片が局所的に集中して出土した状況があり、SR 01上層(上面)出土だが、SX 02として報告した。6点の接合資料を含み、径1mの範囲にサヌカイト剥片が分布し、径0.6mの範囲に集中し、かつ検出レベルが水平であることから、近接地で行われた石器製作後の剥片を投棄した一括資料と理解できる。SR 01出土遺物は弥生時代中期中葉にはほぼ限定でき、その上層に包含されることから、帰属時期は当該期に位置付けられる。10mm以下の剥片を除く破片数は1,002点を数え、総重量は2,813gを量り、SR 01出土の全サヌカイト片では10mm以下の剥片を除く破片数は1,308点を数え、総重量は3,881gを量る(第5・6表)。自然面の特徴から少なくとも2塊の素材を認め、両端が遺存する接合資料2(63-68)から素材の幅は約14cm、最大厚み1.6cmを測り、板状素材であった可能性が高い。接合資料等から石庖丁やスクレイパーを主に製作した状況が復元でき、残核や剥片を両極打法で再利用していく状況も復元できる。

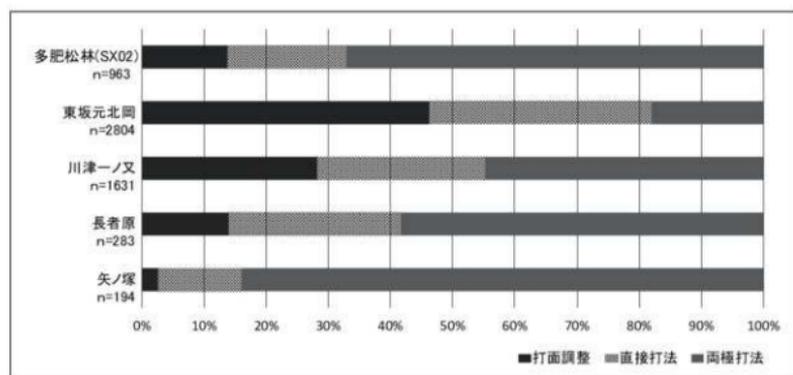
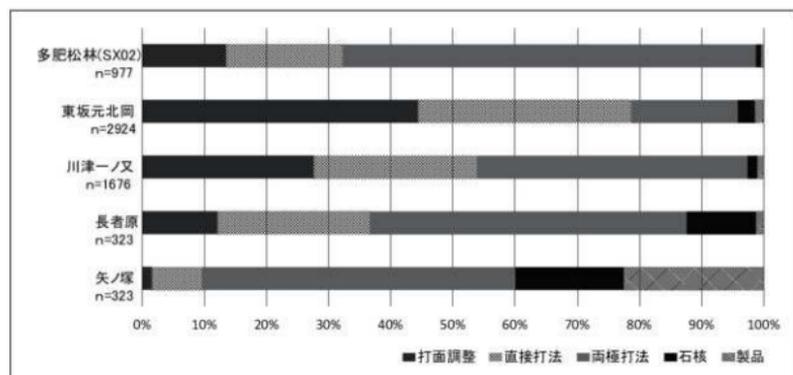
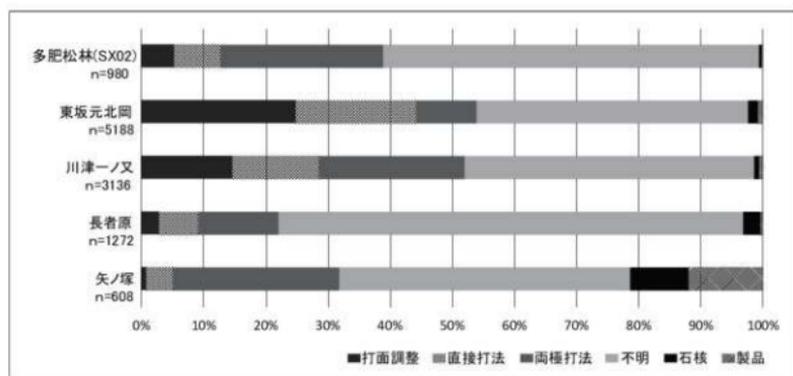
以下、SX 02出土サヌカイト剥片について、直接打法と両極打法の分類に基づく比率を中心にその特徴を抽出する。

#### 1. 比較検討対象

比較する遺跡は原産地に含まれる長者原遺跡、約3km前後の東坂元北岡遺跡、川津一ノ又遺跡、約13~14kmの矢ノ塚遺跡となり、多肥松林遺跡は約17kmを測る(註2)。帰属時期は多肥松林遺跡、東坂元北岡遺跡、川津一ノ又遺跡が弥生時代中期中葉、長者原遺跡が弥生時代中期後半、矢ノ塚遺跡が弥生時代中期中葉~中期後半となる。

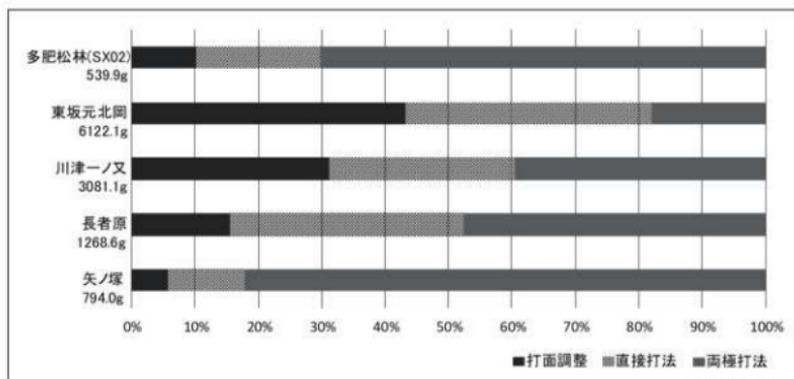
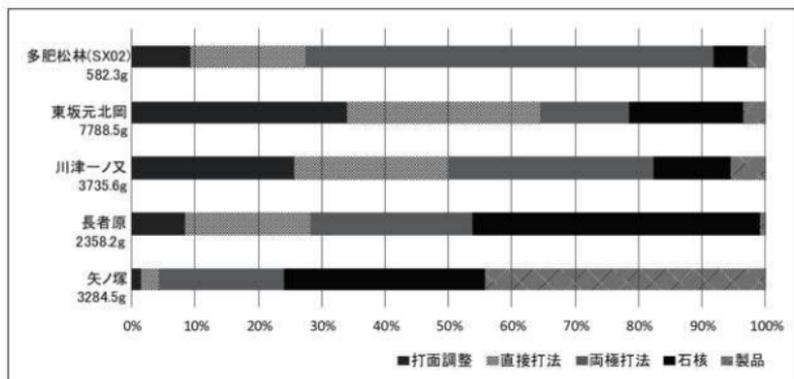
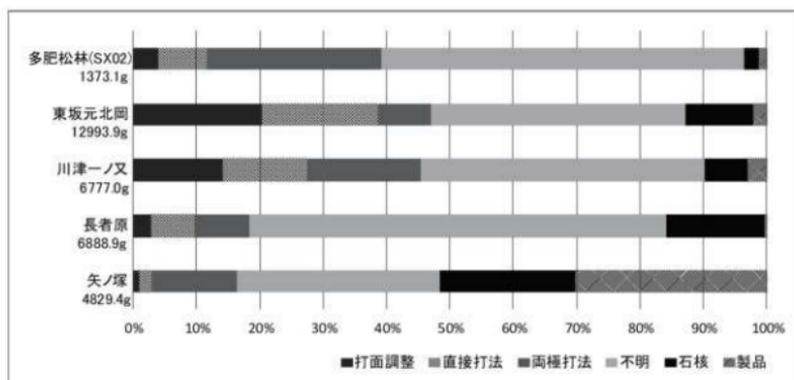


第116図 比較対象遺跡位置図



※横軸は個数

第 117 図 石器分類別数量比 (11 ~ 50mm)



※横軸は重量

第 118 図 石器分類別重量比 (11 ~ 50mm)

## 2. 遺跡間の打撃法・石器サイズの差異比較

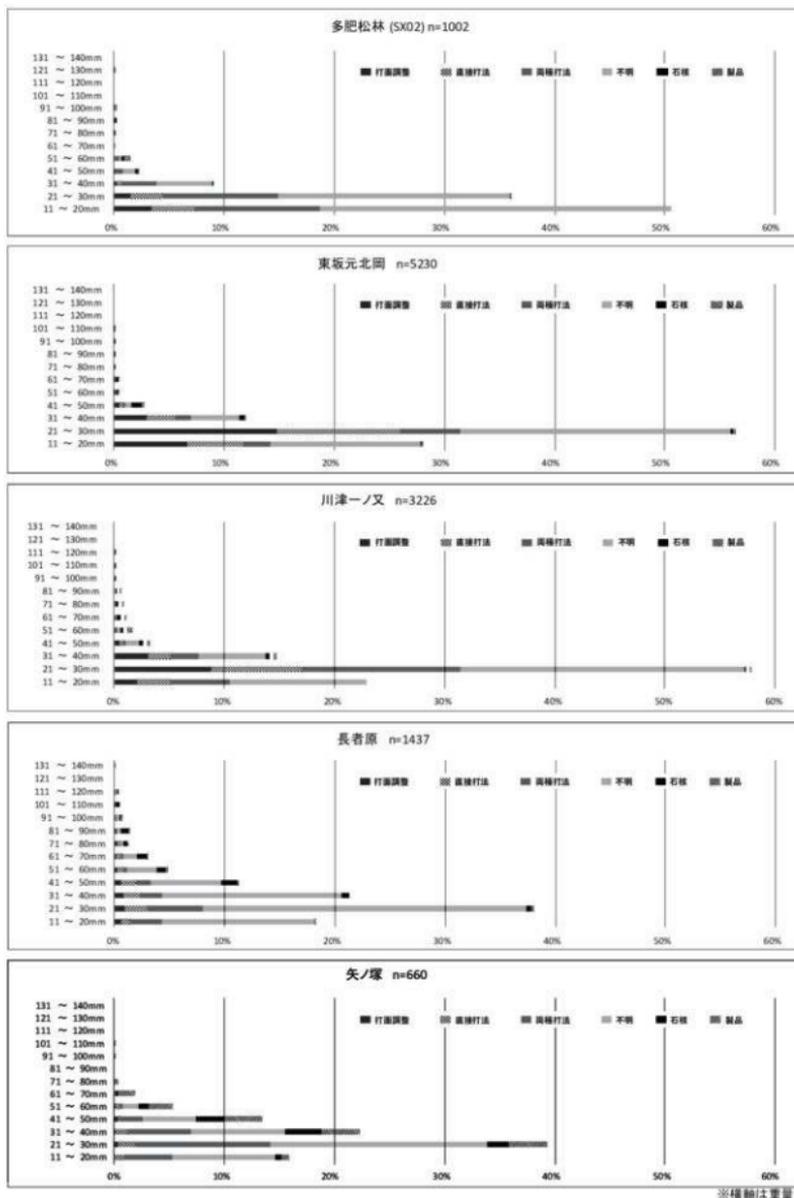
第117図に個数別、第118図に重量別の石器分類グラフを示し、第119図では石器サイズごとの分類とした。分類基準は直接打法による剥片のうち、底面を認める等打面調整剥片を1-1類とし、打面調整剥片以外の直接打法による剥片を1-2類、両極打法による剥片を2類、分類不明を3類、4類が石核、5類が製品・未製品として分類した。グラフでは上段に全分類、中段に3類（不明）を除いた分類、下段に打撃法の対比を意図して1・2類のみの比率を示した。

全分類で見ると、当遺跡では3類（不明）比率が高いため多くのバイアスを含むが、石核や製品・未製品の比率が低い。他遺跡との比較でも石核比率が極めて低い傾向が窺え、石器製作後の剥片類の一括投棄という資料の性格上、製品の比率も低い。打撃法では直接打法と両極打法の割合が個数・重量比ともに3：7程度となり、圧倒的に後者が多い。他遺跡と比較すると、個数比では矢ノ塚遺跡や長者原遺跡に近いが、重量比では長者原遺跡は両打法の拮抗する数値を示し、矢ノ塚遺跡は2：8程度の比率となる。原産地からの距離が15km前後の2遺跡において両極打法が直接打法を大きく上回る状況は注目できる。多肥松林遺跡では直接打法のうち、打面調整剥片を少量ながら一定量認め（1-1類）、直接打法の5割程度の比率を占める。石器サイズは他遺跡が21～30mmが突出するのに対し、多肥松林遺跡では11～20mmが最も多く、グラフから除外した10mm以下の重量は668gを量る（SX02総重量の24%）。20mm以下の石器が多く、呼応して31mm以上の石器が少ないという特徴を認める。11～20mmの内訳は不明を除くと、直接打法と両極打法の割合が2：3程度、21～30mmでは2：4程度の割合となる。

## 3. 多肥松林遺跡 SX02の石器の特徴と石器生産

本資料の特徴は直接打法を凌駕する両極打法と石核や製品・未製品の稀薄性にある。矢ノ塚遺跡の石核比率の高さは、両極打法の多用による残核の多さを示すようだが（乗松2015）、多肥松林遺跡でも両極打法が多用され、残核や剥片も可能な限り利用した状況が想定できる。20mm以下の小型剥片が多い点もそれに連動するものと考えられる。矢ノ塚遺跡の両極打法の多寡を考慮すると、原産地からの距離に応じた石器生産が想定できる（註3）。SX02には石鏃等の小型製品は含まないが、SR01出土資料には石鏃（99・100）や石錐（104）の未製品を認め、両極打法を多用して残核や剥片から小型製品を製作した状況が復元できる。

また、接合資料2の両端には自然面を認め、その幅は14cm前後となり、側面に直線的な自然面を残す石器も多く認め（69・83・84・98・192）、接合資料2の接合状況等を考慮すると、板状素材が集落内に持ち込まれた状況が復元できる。SX02は一回の石器製作後の一括投棄資料と考えられ、その総重量が2813gを量り、石器製作の規模を想定する目安となる。厚さ5cm程度の板状素材が集落に持ち込まれ（森下2005）、接合資料2からは断言できないが、おそらくは金山型剥片剥離技術による横長剥片を連続して剥出して石庖丁やスクレイパーを製作し（註4）、残核や剥片に両極打法を加えて小型石器を製作した状況が復元できる。自然面の特徴から少なくとも2個体の板状素材を認め、その幅は14cm、厚み5cmと考えられ、西末則遺跡Ⅲの板状素材を参考にすると（香川県教育委員会ほか2012）、長さは20cm前後と推測できる（重量は2kg程度か）。SX02に含まれない製品等を考慮すると、本石器製作に3個体分程度の板状素材が使用されたと推測できる。



第119図 石器サイズ別数量比 (11mm～)

## 第2節 多肥松林遺跡出土の墨書土器について

### 1. 多肥松林遺跡出土墨書土器の概要

当調査地から19点の墨書土器が出土した。南北方向に流下するSR 03出土であり、調査地北端部のI-1区から集中して出土するが、出土状況は明らかではない。9世紀末～10世紀前葉に属する。須恵器壺底部を転用した硯(178)、皿を転用した硯(151)が共伴し、調査時には斎串の出土も報告される(註5)。第120図に当調査地出土の墨書土器をまとめた。

須恵器坏・皿、黒色土器椀に認め、坏11点、皿6点、椀2点を数える。いずれも底部外面に墨書される。積文は「本」が3点、「本」の可能性が高い墨書が6点、「原」、「松」の可能性のあるものが各1点、積文不明が8点となる(註6)。いずれも一文字のみの表記で、複数文字を書いた墨書はない。「本」は本の異体字であり、文字バランス等から大と十が別文字になる可能性は低い。底面中央よりやや上方に大きく墨書される個体が多いが(39・40)、41は左上方に書かれ、字の大きさも小さい。止め、跳ね、払いや横書きの流れ、全体のバランスに個体差を認め、異なる筆跡と判断できるが、いずれも手慣れた筆跡となる。42、45は39～41とは異なる筆跡と考えられる。46は左脇に止めと返り状の跳ねがある縦線を認める。明治大学日本古代研究所のデータベースでは、「本」・「本」が250遺跡691点報告されている。8割は東日本出土となり、「本」と「本」が共伴する遺跡も数遺跡で認める。「原」は黒色土器椀の高台内で認める(48)。雁だれの一画目は省略される。文字サイズは小さいが、行書体風の手慣れた美しい筆跡となる。黒色土器への墨書は50でも認め、「本」の一画目の左端の可能性を残す。なお、多肥松林遺跡(1次)で出土した墨書土器も黒色土器椀の底部外面に墨書されたものである。49は「松」としたが、全容は不明である。他に比して、文字幅が極めて狭く、跳ねや止めが単調な筆跡となる。上記以外の8点は積文不明であり、57は他に比して跳ねが稚拙な筆跡となる。

概報では「本」と「原」について検討が加えられ(北山1995)、人名や帰属を示す可能性は低く、遺跡周辺にある「本村」や「宮本」といった小字名に関連する可能性も否定できないとされるが、本村は近世期に成立する地名であり、墨書土器との関連は想定できない。

### 2. 讃岐における墨書土器、刻印、刻印土器、刻書土器

当調査地からは多量の墨書土器が出土する一方、居住施設等が稀薄なため遺跡の性格に言及することは困難である。ここでは県内の墨書土器、刻印、刻印土器、刻書土器を集成し(第121～126図、第7～9表)、比較検討によって遺跡の性格を考えたい。

**墨書土器** 20遺跡87点で認める。発掘調査箇所や大規模調査の偏在性等もあり、大多数は多度郡・那珂郡・鞆足郡・阿野郡・香河郡・山田郡といった讃岐中央付近からの出土となる。南海道沿いに多い傾向を認めるが、大東川河口の津に近い下川津遺跡周辺や屋嶋城の南の小山・南谷遺跡周辺など一定地域への集中も認める。種別は須恵器85%、土師器8%、黒色土器7%の比率となり、須恵器への墨書が圧倒的に多く、土師器と黒色土器は9世紀後半～10世紀前葉の所産となる。器種は坏56%、皿28%、椀8%、蓋6%、壺・甕2%となり、供膳具が98%を占め、壺・甕は各1点のみの出土に留まる。墨書位置は外面95%、内面4%、内外面1%となり、坏・皿・椀では底部外面84%、口縁部外面

13%、底部内面15%、底部内外面15%の比率となる。なお、森広遺跡出土の甕は体部外面に墨書を認め(87)、供膳具に書かれた墨書とは性質が異なり、近隣における正倉の存在も想定できる。

釈文は「大」、「十」、「東」、「北」、「下」等を認め、方位や帰属等を示す通有の釈文が多いが、下川津遺跡の「郷長カ」(17)、郡家原遺跡の「井副」(7)、小山・南谷遺跡Ⅱの「九院カ」(68)、前田東・中村遺跡の「神〇門」(81)は集落の性格を反映する。下川津遺跡は建物配置やその変遷や出土遺物から、河口部の津を控えた在来の地域交易拠点に官衙の性格が整備されていった可能性も指摘されており(佐藤1998)、郷長クラスがそれを担う状況が想定される。郡家原遺跡は出水、小山・南谷遺跡や前田東・中村遺跡は寺院や堂との関連が想定できる。当調査地出土墨書土器との関係では「本」は確認できないが、「原」は郡家原遺跡(6)、前田東・中村遺跡で認め(71)、帰属時期は当遺跡と同時期となる。

時間的には8世紀代が12点(14%)、9世紀代が10点(12%)、8~9世紀代が13点(15%)と顕著な増減はないが、9世紀後半~10世紀前半が50点(59%)と大幅に増加する。8~9世紀代の帰属に問題を残すが、下川津遺跡と前田東・中村遺跡のみ継続的な墨書土器の使用を認める。

出土遺物の多くは低地や流路、溝となり、井戸がそれに次ぐ。滞水密閉という包蔵状況による良好な遺存という側面もあるが、竈申や人形木製品が共伴する例もあり(郡家原遺跡、多肥松林遺跡、木太本村遺跡Ⅱ、前田東・中村遺跡)、水際の墨書土器と竈申を用いた祭祀が執り行われた状況も復元できる。

共伴遺物では官衙的色彩が強いとされる遺物が共伴する傾向を認める。帯金具、硯、土馬、緑釉陶器がその典型となり、さらに暗文土師器や赤彩土師器、蜻蛉・飯蜻蛉、土錘、輪羽口の共伴例も多く、下川津遺跡や川津一ノ又遺跡では畿内系土師器が生産され、下川津遺跡では飯蜻蛉生産や鑄造生産(「郷長」の墨書と共伴)が行われる。

また、讃岐国府跡では墨書土器は2点の確認に留まり、多度郡衙の可能性が高い生野本町遺跡や稲木北遺跡では未確認となる。建物配置や出土遺物の様相から官衙関連遺跡とされる金藏寺下所遺跡、正箱遺跡も墨書土器は確認できない。同様に、讃岐国分寺跡・国分尼寺跡では墨書土器はみられず、中寺廃寺跡でも転用硯を多く認めるが墨書土器は確認できない。調査面積や精度、官衙中央施設からの出土遺物の稀薄性等を含め、特殊遺物の有無の過大評価は慎まなければならないが、当地域の墨書土器の土器の特長を反映する示唆的な内容を示す。

**刻印・刻印土器** 集落への搬入前に押印されるため、集落の性格を反映する可能性は高くはないが、文字資料集成の一環として取り扱った。刻印は4遺跡4点、刻印土器は6遺跡8点で確認できる。刻印は中村遺跡が銅製、杵田八丁遺跡、西末則遺跡Ⅴ、前田東・中村遺跡Ⅱが陶製となり、それぞれ「貞」(註7)、「封印」、「本」、「寶」印となる。杵田八丁遺跡は杵田駅家ないし刈田郡正倉の関連遺物、中村遺跡は私印と評価され(佐藤1998)、報告書では前田東・中村遺跡Ⅱは吉祥語としての私印ないし近隣に所在する宝(寶)寿寺の寺名の可能性が想定される(香川県埋蔵文化財センターほか2005)。西末則遺跡Ⅴの「本」印は当調査地の墨書「本」との関連も想定できるが、内容は不明となる。

刻印須恵器は窯跡出土資料を含み、大多数は8~9世紀代に属する須恵器の底部内面への押印となる。官営工房的な側面も指摘される北条池1号窯跡と庄屋原2号窯跡出土須恵器(無台坏)の底部内面で角枠に「中」の刻印を認める(98・99)。両者は「同判」関係にあり(木印)、「中」は那珂郡を示し、複数の窯場を管理する階層が刻印を保管し、須恵器調納負担の割り当て確認のために押印された可能性が指摘される(中山・佐藤1998)。坪井遺跡では丸枠に「王」の印がある須恵器皿を2点認める(96・97)。金属素材の印と考えられ、「王」を名に含む人物のための特注品の可能性が指摘されるが(小

野 2002)、直線距離で40kmほど離れた川津川西遺跡において同一原体の可能性を残す須恵器を認める(93)。また、西末則遺跡Vでは角枠に積文不明(94)、角枠に人偏の一文字を押印した須恵器を認め(95)、前者は坏B、後者は皿である。十瓶山窯跡群(陶古窯跡群)からは3km前後と近い距離関係にあり、地理条件が搬入の一要因であったと推測できるが、同遺跡からは陶印も出土しており、発注者側の意図的な押印指示の可能性もある。

**刻書土器** 14遺跡20点を数える。時期が判明する遺物は8～9世紀代に属し、須恵器85%、土師器が15%となる。いずれも焼成前のヘラによる刻書であり、須恵器は刻印と同様に、生産地における何らかの目的で付されたしるしと考えられ、8～9世紀代という帰属時期にも共通性を認める。

刻書は「大」が最も多く、「上」がそれに続く。「大」で状況を確認すると、出土遺跡に著しい偏りはなく、発注者側からの意図は認め難い。器種も坏・坏B・壺と多様であり、器種を反映する可能性も低い。壺では器種や量目が異なる底部に刻書されており、量目規格を反映する状況はみられず、生産者側での統一的な記号とも考えられない。「上」2点は森広遺跡からの出土である。いずれも同一型式の可能性が高い須恵器坏蓋の内面に認め、刻書位置も中央やや上方と共通する。縦線が長短の横線を切る筆順となり、かつ縦線下端が下側の横線内に留まる、丁寧な刻書等、同一人物による刻書の可能性が高く、生産者側の目印ではなく、発注者側からの指示と考えたい。「上」の性格は判然としないが、同遺跡では外面に「主」と刻書された土師器蓋を認め(四等官との関係か)、壺外面の墨書土器とともに文字資料が多い遺跡となる。南海道からは比較的近接した位置に所在し、周辺では大型の掘立柱建物が確認される等、官衙施設存在を示唆する。

また、西末則遺跡Iでは「□萩丸」(106)とあり、人名を想起させる。生産者名か。王子の谷遺跡では地名ないし人名と考えられる「大岡」が土師器高坏内面に刻書される。

**その他参考資料** 土器ではないが上西原遺跡で興味深い文字資料がある。板状の流紋岩の両広面を研磨し、そこに「大」字が12文字刻書される。9～10世紀に属する総柱掘立柱建物のうち北東に位置するピットから出土しており、報告書では「大」字は陰陽五行説で最も重視された太歳(大歳)を表象し、地鎮めの儀礼が執り行われた可能性が指摘される(高松市教育委員会2000)。当調査地から直線距離で2.3kmの距離を測り、墨書土器と帰属時期が近似しており、注目すべき内容を提示する。

### 3. 墨書土器と水路維持

以上、讃岐における墨書土器を中心とした文字資料を集成し、その状況をまとめた。当遺跡の墨書土器を検討する際には同時期(9世紀後半～10世紀前葉)に属する郡家原遺跡と前田東・中村遺跡が参考となる。郡家原遺跡は主水源に近接した立地を呈し、水源を独占的に押さえ、水源を確保するとともに、その維持管理がなされる。澁漉水路からは墨書土器と斎申が出土し、「田井」・「井副」・「井」・「□原」という墨書のうち、前3者は出水や供物を示す内容と理解され、墨書土器と斎申を用いた祭祀が復元される(佐藤1998)。前田東・中村遺跡では斎申や人形、刀形が出土する旧河道を含めて律令制祭祀の祓所であった可能性も指摘される(森1995)。なお、同遺跡からも「原」の墨書土器が出土する。

第2章で触れたが、当調査地は高松平野の重要な主水源となる旧河道Aが縦断しており、墨書土器はそれを構成するSR03から出土する。多肥松林遺跡群の平安時代の遺構配置図が示すように(第127図)、旧河道Aの西側に掘立柱建物群が3箇所展開する(北からA～Cと仮称)。掘立柱建物群Aの北東側では護岸部を杭と盛土で補強した幅6mもの溝が開削される(Ⅱ・Ⅲ区SD03)。主水源はSR03から

分岐したⅠ・Ⅲ区SR01で、当該期の水量はかなり減少している可能性が高く、大規模な灌漑水路の整備と理解できる。SD03からは斎申が出土し、主水源のⅠ・Ⅲ区SR01からは刀形・舟形、馬形ないし鳥形の木製模造品が出土する。その西側にはSR03から分岐したⅥ・Ⅷ区SR01・02があり、最上層に当該期の埋土を認め、斎申が出土し、1点のみではあるが墨書土器が共伴する(積文不明)。さらに流路の埋没後に小規模な溝が開削されており(Ⅵ区SD02・Ⅷ区SD06、Ⅷ区SD01～05)、灌漑水路の整備が継続する。Ⅵ区SD02・Ⅷ区SD06からは斎申が出土する。掘立柱建物群Aは60㎡を超える大型建物を含むが、コないしロ字形の建物配置等規格性は認められない。墨書土器19点と斎申が出土した当調査地SR03の東には掘立柱建物群Bが展開する。小規模な調査面積のため建物配置は明らかではないが、規則的な建物配置は認められない可能性が高い。なお、流路上流域側の多肥松林遺跡(3次)では掘立柱建物が数棟集中する箇所を認め、当調査地Ⅳ-1～2区のSR04上面にも同時期の遺構が展開した可能性が高く、掘立柱建物群Cとした。主軸方位が掘立柱建物群A・Bとは異なり、帰属時期の同時性に問題を残す(概報では平安時代後期の帰属時期が想定されている)。近接したSR03からは斎申や木製模造品、墨書土器は認められないが、やや東側の多肥宮尻遺跡SR02からは斎申と人形が出土する。

多肥松林遺跡群では9世紀末～10世紀前葉における主水源の減少に伴って、大規模かつ継続的な灌漑水路の整備が行われ、灌漑水路や主水源となる流路から斎申ないし刀形・舟形等の木製模造品が出土し、墨書土器が共伴する。こうした状況は郡家原遺跡や前田東・中村遺跡と酷似し、墨書土器は斎申や木製模造品とセットで水路の維持に伴う祭祀に使用された可能性が高い。さらに、多肥松林遺跡群では複数箇所では祭祀が行われており、隣接する掘立柱建物群がそれを執り行った可能性も想定できる。

また、3遺跡から「原」という墨書が出土する点は偶然ではなく、郡家原遺跡における「井」を墨書した土器の使用と同様に、意図的な使用が想定できる。「本」の性質は判然としないが、少なくとも9点もの出土を数え、祭祀では「本」を墨書した土器を多量に用いることに意味があったと考えられる。県下の墨書土器では類例はなく、わずかに西末則遺跡Ⅴ出土の陶印に認めるのみであり、文字としての意味は不明である(註8)。ここでは祭祀や用いられる供物等に関係した性質の文字と捉えておきたい。なお、SR03から出土した墨書土器は土器が示す年代観や局所的な出土状況から短期間に投棄された状況が想定できるが、筆跡がそれぞれ異なり、そこに文字の性質や祭祀における墨書土器の使われ方が反映される可能性が高い。

一方、各掘立柱建物群は大型建物を含むものの規則的な建物配置は認めず、官衙施設と考えることはできないが、多肥松林遺跡群からは帯金具や硯、緑釉陶器といった官衙の色彩が強いとされる遺物が出土する。共通した水路維持に伴う祭祀を執り行っており、地方支配の末端的な階層として律令国家体制に組み込まれていた状況も推測できる。



第8表 香川県墨書土器集成一覧2

遺跡番号	遺跡名	所在地	地上遺構	集・期	釈文	標記	器種	記取部位	時期	所存遺物 (調査土器出土遺構)	文獻
44	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	墨書 志*	環	底部外周	9-10世紀		
45	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
46	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
47	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
48	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
49	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
50	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 志*	墨書 志*	環	環	底部外周	9-10世紀		
51	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
52	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
53	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
54	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
55	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
56	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
57	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
58	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
59	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
60	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
61	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
62	多肥長林遺跡(高松上町)	高松市多肥上町	S R 03	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
63	木ノ下村遺跡Ⅰ	高松市木ノ下	S D 19	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
64	木ノ下村遺跡Ⅱ	高松市木ノ下	S D 19	墨書 □	墨書 □	環	環	底部外周	9-10世紀		
65	小川・南万遺跡Ⅰ	高松市南万小川	S E 603	墨書 □	墨書 □	土師 環	土師 環	底部外周	9-10世紀		
66	小川・南万遺跡Ⅱ	高松市南万小川	S E 603	墨書 □	墨書 □	土師 環	土師 環	底部外周	9-10世紀		
67	小川・南万遺跡Ⅲ	高松市南万小川	S E 603	墨書 □	墨書 □	土師 環	土師 環	底部外周	9-10世紀		
68	小川・南万遺跡Ⅳ	高松市南万小川	S E 603	墨書 □	墨書 □	土師 環	土師 環	底部外周	9-10世紀		
69	南田東・中村遺跡	高松市南田東	C F S D 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
70	南田東・中村遺跡	高松市南田東	C F S D 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
71	南田東・中村遺跡	高松市南田東	C F S D 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
72	南田東・中村遺跡	高松市南田東	C F S D 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
73	南田東・中村遺跡	高松市南田東	C F S D 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
74	南田東・中村遺跡	高松市南田東	E F S E 03	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
75	南田東・中村遺跡	高松市南田東	E F S E 03	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
76	南田東・中村遺跡	高松市南田東	E F S E 03	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
77	南田東・中村遺跡	高松市南田東	E F S E 03	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
78	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 02	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
79	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
80	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
81	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
82	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
83	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
84	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G F S R 04	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
85	南田東・中村遺跡	高松市南田東	G 2 F S 06	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	9-10世紀		
86	南田東・中村遺跡	高松市南田東	I ③ S K 12	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8-9世紀		
87	北山遺跡Ⅱ	高松市北山	S D 2801	墨書 □	墨書 □	墨書 環	墨書 環	底部外周	8世紀前半		

※集・期は資料・遺跡別記取部位に「Ⅰ」「Ⅱ」の墨書、8世紀中葉。

## 香川県内 貝印・刻印土器一覽

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土遺構	層・周	釈文	積層	器種	器体	記録部位	時期	共存遺物 (相印土器出土遺構)	文庫
21_88	相印八土器跡	観音寺町相印町	S D 02	印	相印	印	印	印			相輪陶器	25
22_89	中川遺跡	香満寺町中川町	E 6 石区(包含)	印	貝	貝印	印	印				26
23_90	西川遺跡	観音寺町西川町	E 6 石区(包含)	印	貝	貝印	印	印				27
19_91	西川遺跡・中村遺跡	226号中村遺跡	包含層	印	書	貝印	印	印				28
24_92	三浦山遺跡 I	香満寺町三浦町	包含層	相印	書	相思	皿?	皿?	底部外周?			10
10_50	川中川遺跡	観音寺町川中川	J 3 地区(包含)	相印	書	相思	杯	杯	底部内周	9世紀		27
23_94	西川遺跡	観音寺町西川町	J 3 地区(包含)	相印	書	相思	杯	杯	底部内周	8~9世紀		28
23_95	西川遺跡	観音寺町西川町	S D 0_06	相印	書	相思	皿	皿	底部内周	8世紀	へろ文字煎豆器	27
25_96	井田遺跡	観音寺町井田	包含層	相印	王*上〇	相思	皿	皿	底部内周	8~9世紀		29
25_97	井田遺跡	観音寺町井田	包含層	相印	王上〇	相思	杯	杯	底部内周	8~9世紀		
26_98	北条池 1 号塚跡	観音寺町北条池	包含層	相印	中	相思	杯	杯	底部内周	8世紀中葉		30
27_99	日知屋 2 号塚跡	観音寺町日知屋	包含層	相印	中	相思	杯	杯	底部内周	8世紀中葉		

## 香川県内 刻書土器 (文字) 一覽

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土遺構	層・周	釈文	積層	器種	器体	記録部位	時期	共存遺物 (相書土器出土遺構)	文庫
28_100	高瀬内宮跡	観音寺町高瀬町	表採	へろ	无*	相思	壺	壺	天井部内周			21
29_101	石田遺跡	観音寺町石田	S D 06	へろ	生*	相思	壺	壺	天井部内周	8世紀		25
1_102	神保寺	香満寺町神保寺	S D 06	へろ	□	相思	?	?	-			1
30_104	香満寺町遺跡	香満寺町香満寺	S D 06	へろ	木□	相思	杯	杯	底部外周	8~9世紀		32
11_105	香満寺町遺跡 (2 次)	知念町香満寺	包含層	へろ	六	相思	高杯	高杯	外周	8世紀		33
106	西川遺跡 I	観音寺町西川町	B 13 R 8 壁	へろ	□黒丸	相思	皿	皿	底部外周	9世紀?		34
23_107	西川遺跡	観音寺町西川町	B 13 R 区(包含)	へろ	大	相思	高杯	高杯	底部外周	8~9世紀		35
31_109	西川遺跡	観音寺町西川町	S D 0_06	へろ	大	相思	壺	壺	底部外周	8~9世紀	相印煎豆器	27
19_110	西川遺跡	観音寺町西川町	包含層	へろ	大	相思	杯	杯	底部外周	8~9世紀	内周脱、垂金具 (流方)、垂上土脚部、瓦	26
19_111	西川遺跡	観音寺町西川町	I 区(包含層)	へろ	□	相思	壺	壺	底部外周	8~9世紀		23
32_112	相輪村遺跡	高松市相輪町	S D 1006 上層	へろ	大	相思	壺	壺	内周	8~9世紀	内周脱、転用履、穴縁陶器、煎豆器、瓦、鑿り口、土溝、實際 目的の土質(土質より炭化植物)	37
20_114	相川遺跡	高松市相川町	帶遺構区 S D 7801	へろ	上	相思	壺	壺	天井部内周	8世紀		38
20_114	相川遺跡	高松市相川町	帶遺構区 S D 7801	へろ	主	土脚部	壺	壺	天井部外周	8世紀		24
115	相川遺跡	高松市相川町	帶遺構区 S P 7806	へろ	上	相思	壺	壺	天井部内周	8世紀		29
25_116	井田遺跡	観音寺町井田	S D 08	へろ	印*	相思	皿	皿	底部内周	8世紀		29
36_117	王の行跡	観音寺町王の行跡	S D 02・03 2、3、4 周遺構	へろ	大	相思	高杯	高杯	外周	8世紀		41
33_118	北条池北号塚跡	観音寺町北条池	包含層	へろ	□	相思	壺?	壺?	内周	8世紀		
34_119	池田村中号塚跡	観音寺町池田村	包含層	へろ	□、□、□	相思	高杯	高杯	底部外周	8世紀		39

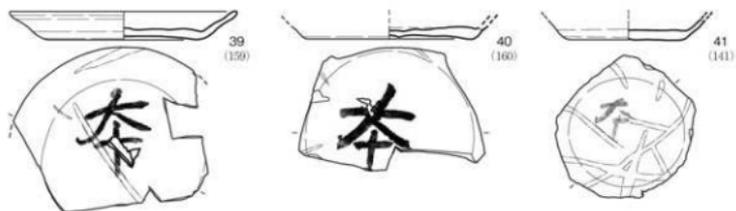
## 香川県内 文字型係

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土遺構	層・周	釈文	積層	器種	器体	記録部位	時期	共存遺物 (相書遺物出土遺構)	文庫
35_120	上野宮遺跡	高松市大野町	S P 01	相書	S 03 7+0	源行石	正成石	正成石	内周	(9~10世紀)	内周陶器	40

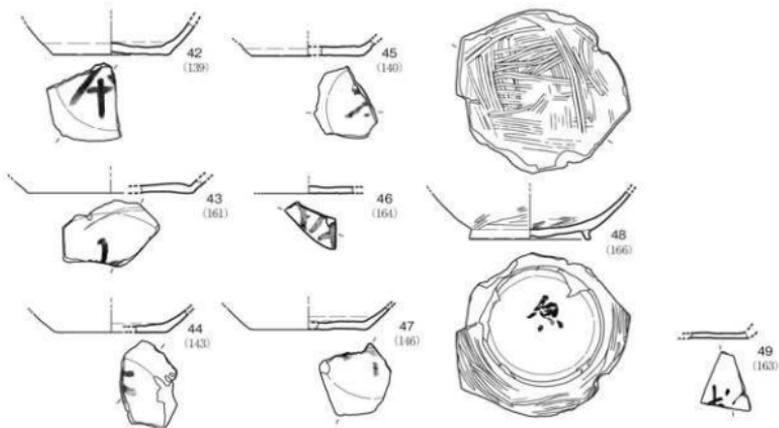
第9表 香川県刻印・刻印土器、刻書土器集成一覽

【墨書土器ほか出典】

- 1 善通寺市教育委員会 1984 『仲村庵寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）』
- 2 香川県教育委員会ほか 1994 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 西碑殿遺跡』
- 3 香川県教育委員会ほか 1990 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊 水井遺跡』
- 4 香川県教育委員会ほか 1996 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第15冊 龍川四条遺跡』
- 5 香川県教育委員会ほか 1993 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』
- 6 香川県教育委員会ほか 1993 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第12冊 郡家一里原遺跡』
- 7 香川県教育委員会ほか 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 下川遺跡』
- 8 香川県教育委員会ほか 1997 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』
- 9 香川県教育委員会ほか 2002 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第41冊 川津東山田遺跡Ⅱ区』
- 10 香川県教育委員会ほか 1999 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第33冊 川津川西遺跡』
- 11 香川県教育委員会 1982 『讃岐国府跡－国庫補助による国府跡確認調査概要－』
- 12 香川県教育委員会 2013 『平成23-24年度 香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概要』
- 13 香川県教育委員会 2014 『県道三木国分寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 瓦塚遺跡』
- 14 香川県教育委員会 2008 『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川原遺跡』
- 15 香川県教育委員会 2008 『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 本郷遺跡』
- 16 香川県教育委員会ほか 1999 『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』
- 17 香川県教育委員会ほか 1996 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』
- 18 香川県教育委員会ほか 1997 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』
- 19 香川県教育委員会 2007 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊 空港跡地遺跡Ⅲ』
- 20 香川県教育委員会 1998 『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太本村Ⅱ遺跡』
- 21 香川県教育委員会 2006 『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅱ』
- 22 香川県教育委員会ほか 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』
- 23 香川県教育委員会ほか 2005 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第55冊 前田東・中村遺跡Ⅱ』
- 24 香川県教育委員会ほか 1979 『森広遺跡Ⅲ』『香川県埋蔵文化財調査年報（昭和53年度）』
- 25 香川県教育委員会ほか 1988 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 杵田八丁遺跡』
- 26 香川県教育委員会ほか 1987 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 中村遺跡』
- 27 香川県教育委員会 2015 『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 西末則遺跡Ⅴ』
- 28 香川県教育委員会ほか 2009 『善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 旧練兵場遺跡Ⅰ』
- 29 香川県教育委員会ほか 2002 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第40冊 坪井遺跡』
- 30 中山尚子・佐藤竜馬 1998 『北条池1号窯跡採集の刻印須臾器』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター』
- 31 瀬戸内海歴史民俗資料館 1987 『瀬戸内海地方墨書・刻書土器一覧』
- 32 香川県教育委員会ほか 1998 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第29冊 龍川五条遺跡Ⅱ』
- 33 香川県教育委員会 2011 『平成22年度 香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概要』
- 34 香川県教育委員会 2005 『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 西末則遺跡Ⅰ』
- 35 香川県教育委員会 2012 『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 西末則遺跡Ⅲ』
- 36 香川県教育委員会ほか 1999 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第31冊 国分寺下日名代遺跡』
- 37 香川県教育委員会ほか 2006 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第56冊 前田東・中村遺跡Ⅲ』
- 38 高松市教育委員会 2006 『都市計画道路京町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第3冊 新田本村遺跡』
- 39 香川県教育委員会 1968 『香川県陶器窯跡群調査報告』
- 40 高松市教育委員会 2000 『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 上西原遺跡』
- 41 東かがわ市教育委員会 2007 『東かがわ市埋蔵文化財調査報告 第3集 王子の谷遺跡』



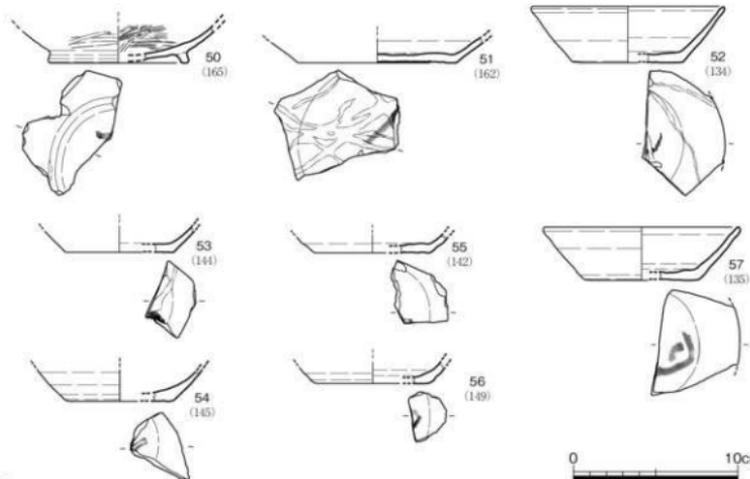
[本]



[本] か

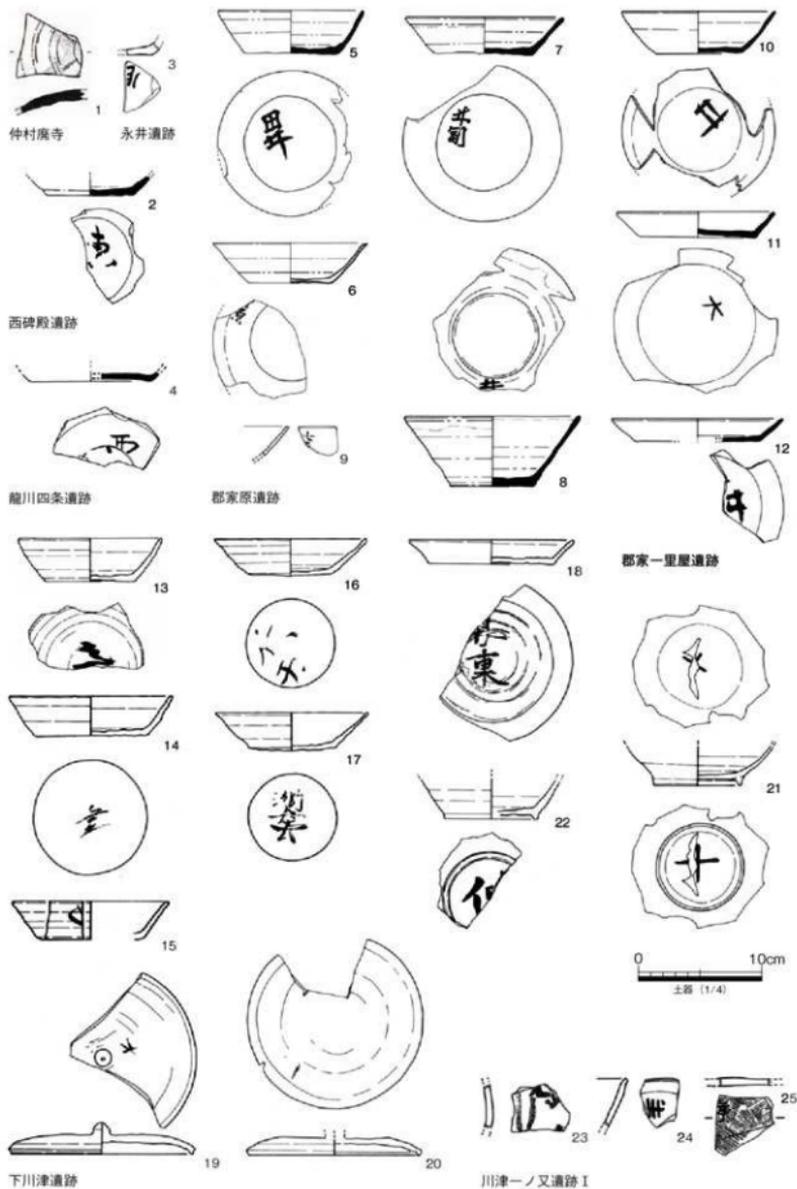
[原]

[松] か

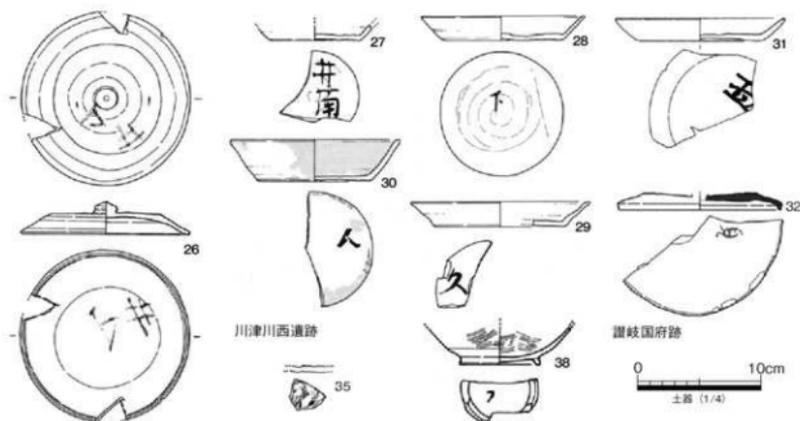


不明





第 121 図 香川県墨書土器集成 1



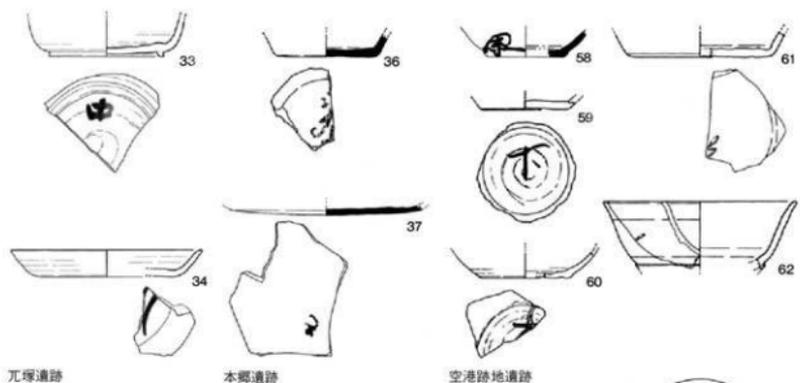
川津東山田遺跡Ⅱ区

川津川西遺跡

川原遺跡

多肥松林遺跡 (桜井高校)

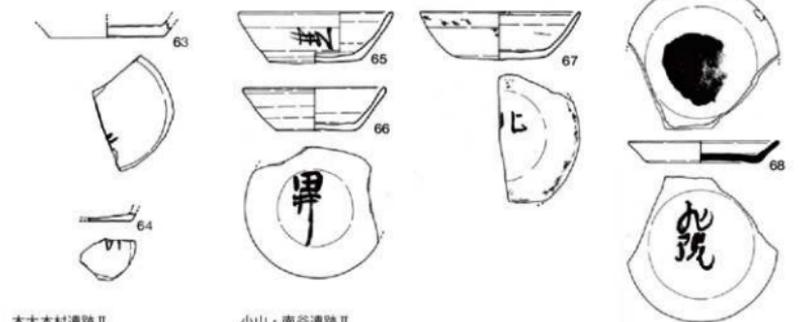
讃岐国府跡



元塚遺跡

本郷遺跡

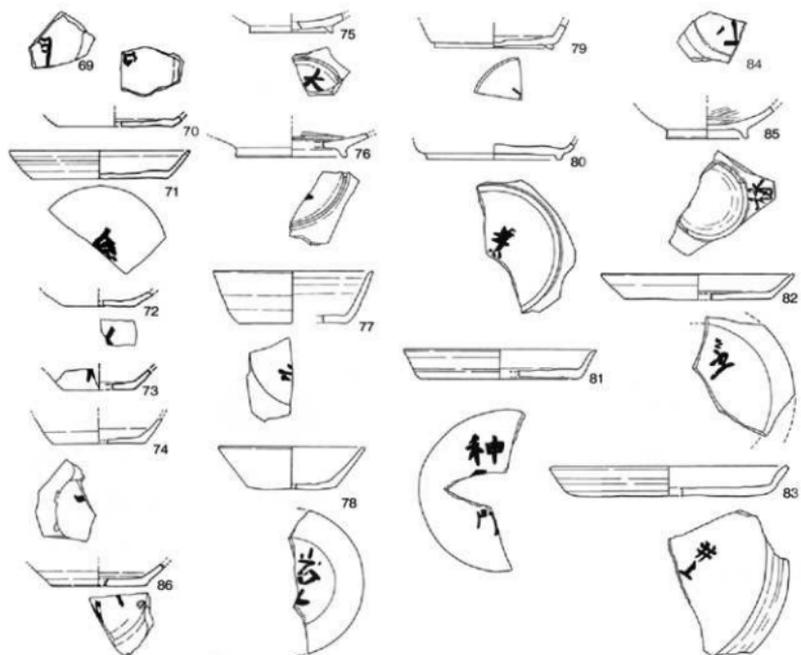
空港跡地遺跡



木太本村遺跡Ⅱ

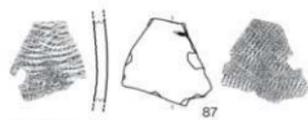
小山・南谷遺跡Ⅱ

第122図 香川県墨書土器集成2



前田東・中村遺跡Ⅱ

前田東・中村遺跡



森広遺跡 (Ⅲ)

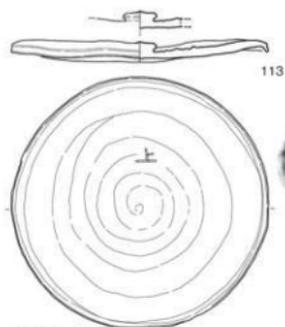
第 123 図 香川県墨書土器集成 3



第124図 香川県刻印・刻印土器集成



第125図 香川県刻書土器集成1



森広遺跡 (Ⅲ)



森広遺跡 (Ⅲ)



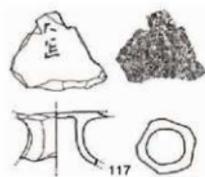
池宮神社南窯跡



森広遺跡 (Ⅲ)



坪井遺跡



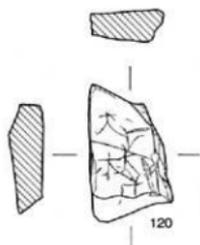
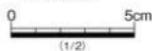
王子の谷遺跡



北条池北岸窯跡

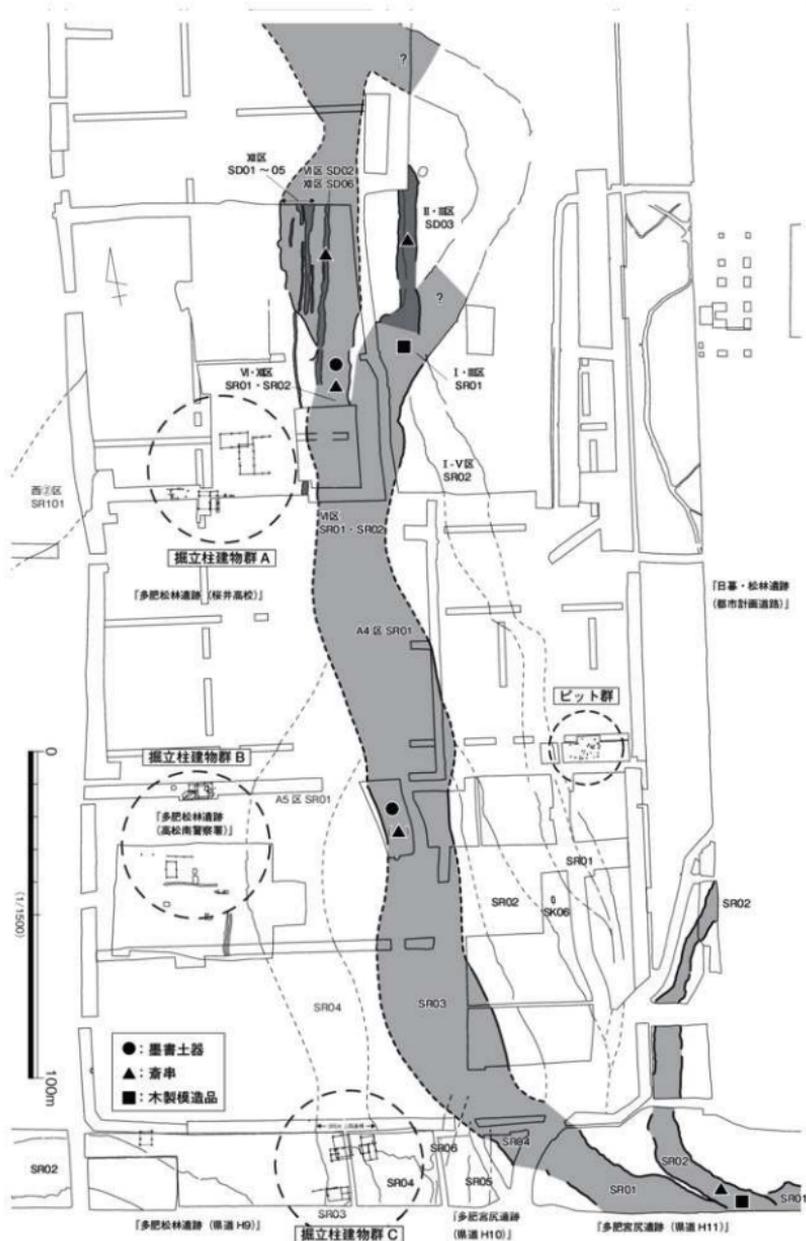


上西原遺跡



120

第 126 図 香川県刻書土器集成 2



第 127 図 多肥松林遺跡における墨書土器・斎串・木製模造品分布状況

### 第3節 陸上交通路と物資流通拠点

SD 19 出土遺物は灌漑水路の最終埋没段階に一括廃棄された一群で、完形に近い和泉型瓦器椀が多く出土し、土器組成の6割を占める。帰属時期は12世紀後半～13世紀前葉となる。瓦器椀の多くは畳付に摩耗を認め、未使用品の廃棄は想定できない。SD 19は東接する日暮・松林遺跡(1次)SD 43に連続した後、分岐派生しており、周辺には耕作域が展開するが、SD 19と重複するように当調査地には掘立柱建物を含むピット群を認め、区画溝を伴わない小規模な居住域が耕作域の一面を占める。

#### 1. 多肥松林遺跡SD 19の土器組成と性格

第10表、第128図に土器組成を示した。積算は全点破片数カウントによる。

瓦器が60%を超えるが、他の搬入品は総じて少なく、対照的な状況を呈する。和泉型瓦器は尾上福年Ⅱ-3期～Ⅲ-1期を多く認め、わずかにⅢ-2期を認める。椀が大半を占め、皿は数点に留まる。吉備系土師器は15%を占め、銅のみで椀は確認できず、東播系須恵器は鉢に限られる(0.2%)。輸入磁器も0.6%と低い。白磁碗Ⅳ類とⅡないしⅦ類を認め、青磁は未検出となる。須恵器も5.3%と少なく、壺1点のみ亀山窯産となるが、それ以外は十瓶窯産須恵器となる。椀はわずか2.5%に過ぎないが、すべて西村窯産須恵器椀となる。多肥松林遺跡と十瓶窯は直線距離では10km前後と近いが、それに比して出土量は極めて少ない。

在地産土師質土器は30%程度の比率を占める。小皿形態は均質的だが、坏にはバリエーションを認め、京都系土師器と考えられる坏も認める(250・251)。土師質土器の8割以上が供膳具となり、小皿21%、坏37%、椀22%の比率となる(壺甕類20%)。なお、小皿・坏に煤痕を認める個体が多く、燈明具としての使用が想定できる。

また、供膳具と煮沸・貯蔵具の比率は9:1程度の割合となり、供膳具が極めて多く、燈明具の存在とともに遺構ないし遺跡の性格を反映する。

隣接する日暮・松林遺跡(1次)SD 43やSR 02出土遺物もおおむね同様の組成となるが、中国産輸入磁器は白磁に加え、同安・龍泉窯系青磁を認め、吉備系土師器には椀も認める。

#### 2. 高松平野の各集落等との比較

第10表、第128図に和泉型瓦器の二次的集積地となる港湾施設と高松平野で土器組成の積算がなされた集落出土資料のデータを示した(註9)。

第10表上段は海浜部に位置し、港湾施設ないしその隣接地と考えられる遺跡である。いずれも瓦器組成が40%前後を占め、完形に近い復元が可能であり、畳付等の摩耗も認めないことから、未使用品に近い状態で廃棄されたと考えられる。出土遺構内容等から、積み荷として荷揚げされた和泉型瓦器を選別廃棄した状況が復元でき、高松城跡(西の丸町地区)は和泉型瓦器の二次的集積地と考えられる(佐藤2003)。高松城跡(東町奉行所跡)では舟入状の施設を認め、多量の和泉型瓦器が出土する。遺構や遺物の状況が高松城跡(西の丸町地区)に酷似し、物資運搬に用いた舟入を完備した港湾施設と考えられる(小川2005)。海浜部に位置する木太中村遺跡でも荷揚げの際に破損品や不良品を選別廃棄した状況が想定される(木下2009)。いずれも和泉型瓦器の二次的集積地となる港湾施設の可能性が高く、高

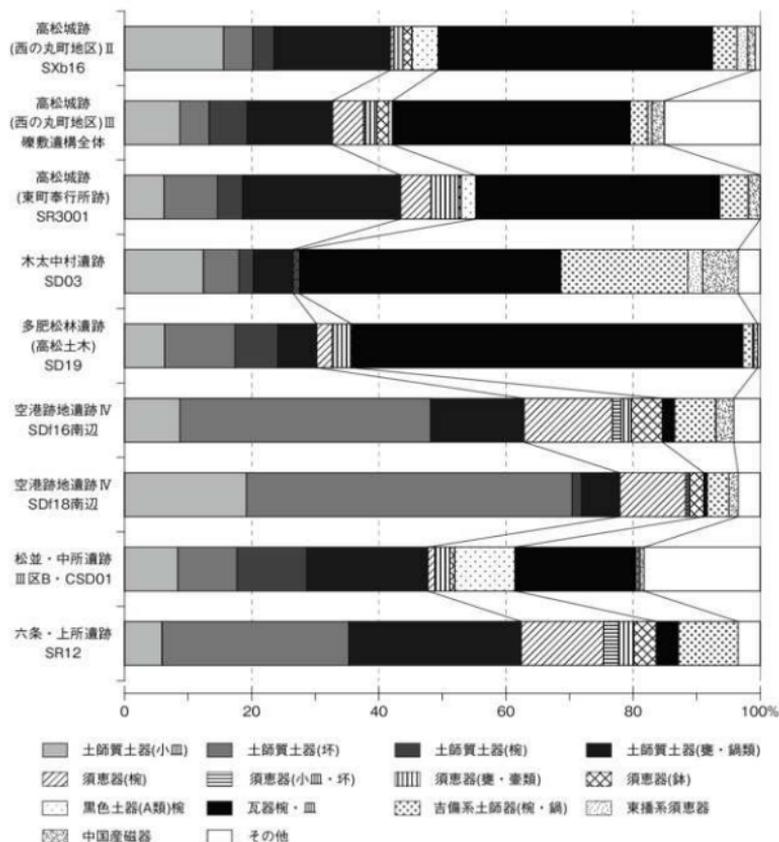
器種	遺跡名(遺構名)		高松城跡 (西の丸町地区)Ⅱ		高松城跡 (西の丸町地区)Ⅲ		高松城跡 (東町奉行所跡)		木太中村遺跡	
	所属時期	SX b 16	12世紀前半～中葉	12世紀後半～13世紀前半	12世紀～13世紀初頭	SR 3001	12世紀後半～13世紀前半	SD 03	12世紀後半～13世紀前半	SD 03
土師質工器	小皿	15.6	8.7	6.2	12.4					
	坏	4.6	4.6	8.4	5.6					
	碗	3.3	6.0	4.0	2.3					
須恵器	罌・罌類	18.3	13.4	24.8	6.2					
	碗	0.5	4.9	4.8	0.3					
	小皿・坏	0.1	0.3	0	0					
黒色土器(A類)碗	罌・罌類	1.4	1.8	4.3	0					
	鉢	1.4	1.8	0.4	0					
	五器類・皿	4.1	0.6	2.3	0.3					
吉備系土師器	五器類・皿	43.2	37.4	38.4	41.2					
	吉備系土師器	3.8	2.8	4.5	2.0					
	東播磨須恵器	1.7	0.7	0	2.6					
中国産磁器	白磁	1.1	1.5	1.2	0.3					
	青磁	0.1	0.4	0.7	5.3					
	その他	0.8	15.1	0	3.5					
遺物点数		2,584	4,017	693	306					

和泉型瓦器の二次的集積地(兼湾橋設)の土器・陶磁器組成

器種	遺跡名(遺構名)		多肥松林遺跡		日暮・松林遺跡		空塔跡地遺跡Ⅳ		空塔跡地遺跡Ⅳ		松笠・中所遺跡		六家・上所遺跡	
	所属時期	SD 19	12世紀後半～13世紀前半	SR 02	12世紀後半～13世紀前半	SD f 46 街並	13世紀代	SD f 18 街並	13世紀代	12世紀後半～13世紀前半	SR 12	13世紀代	13世紀代	SR 12
土師質工器	小皿	6.3			8.7		19.2		8.4			5.9		
	坏	11.1			39.4		51.2		9.3		29.4			
	碗	6.7	38.6		0.1		1.5		11.0		0			
須恵器	罌・罌類	6.1			14.6		6.0		19.0		27.1			
	碗	2.5			13.9		10.4		1.1		12.9			
	小皿・坏	0.1			1.4		0.3		0.1		2.1			
黒色土器(A類)碗	罌・罌類	2.7			1.6		0.3		2.2		2.4			
	鉢	0			4.9		2.2		0.8		3.5			
	五器類・皿	0.2			0		0		9.5		0			
吉備系土師器	五器類・皿	61.6			49.7		1.9		19.0		3.5			
	吉備系土師器	1.5			2.2		3.4		0.4		9.4			
	東播磨須恵器	0.2			1.5		0		0.3		0			
中国産磁器	白磁	0.6			1.7		2.8		1.5		0			
	青磁	0			0		4.2		18.3		0			
	その他	0.4			0		4.2		3.5		3.5			
遺物点数		1,125			635		598		1,575		85			

高松平野に所在する遺跡の土器・陶磁器組成

第10表 高松平野の港湾施設及び遺跡の土器・陶磁器組成表



第128図 土器・陶磁器組成グラフ

松城跡下層で確認した港湾施設は古・高松湾の西側の先端部、木太中村遺跡は最奥に位置する。

第10表下段には集落の組成を示した。松並・中所遺跡は石清尾山塊の東に位置し、高松城跡(西の丸町地区)からは直線距離で4kmを測る。積算遺構は屋敷の区画溝の一面となる。空港跡地遺跡IVは多肥松林遺跡の東1.6kmに位置し、海浜部からは直線距離で3.2km前後を測る。SD16は居館西面溝、SD18は居館外周溝となる。両者の組成に明瞭な差異はみられず、土師質土器の高比率は頻繁な「使い捨て」を示す可能性が指摘され、居館としての特性を反映する。六条・上所遺跡は汀線から3km前後に位置し、土鍾の出土量や種類が多いことから、漁業にも従事した集落と想定できる。日暮・松林遺跡(1次)は当調査地に東接する。海浜部からは直線距離で3.5km前後を測る。

瓦器組成は空港跡地遺跡Ⅳ、六条・上所遺跡では0.5～3.5%と低いが、松並・中所遺跡では19%と高く、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡は突出し(61.6%、49.7%)、各集落で組成比率に顕著な差異を認める。多肥松林遺跡の瓦器組成は高いが、使用状況から高松城跡(西の丸町地区)のように破損品の選別廃棄という状況は想定できない。吉備系土師器は多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡、松並・中所遺跡では数%に留まるが、空港跡地遺跡Ⅳや六条・上所遺跡では6.5%、9.4%と高く、各遺跡で組成比率に差異を認める。須恵器は椀に差異を認め、空港跡地遺跡Ⅳ、六条・上所遺跡では一定量の比率を占めるが(10.4～13.9%)、多肥松林遺跡、松並・中所遺跡では数%に留まる。大多数は西村窯産須恵器椀であり、集落ごとに搬入状況が異なる一方、壺・甕・鉢には顕著な差異はなく、椀の意図的な入手が想定できる。土師質土器では空港跡地遺跡Ⅳで小皿・坏がかなりの組成比率を占めるが、前述したように「使い捨て」の結果と理解できる。椀には組成比率差を認め、吉備系土師器椀の誤認の可能性も残すが、多肥松林遺跡や松並・中所遺跡では6.7%、11%の組成を占めるが、空港跡地遺跡Ⅳや六条・上所遺跡では極めて少ない。東播系須恵器や中国産輸入磁器は各集落ともに未確認ないし微弱な出土量となり、集落ごとに顕著な差異は認められない。

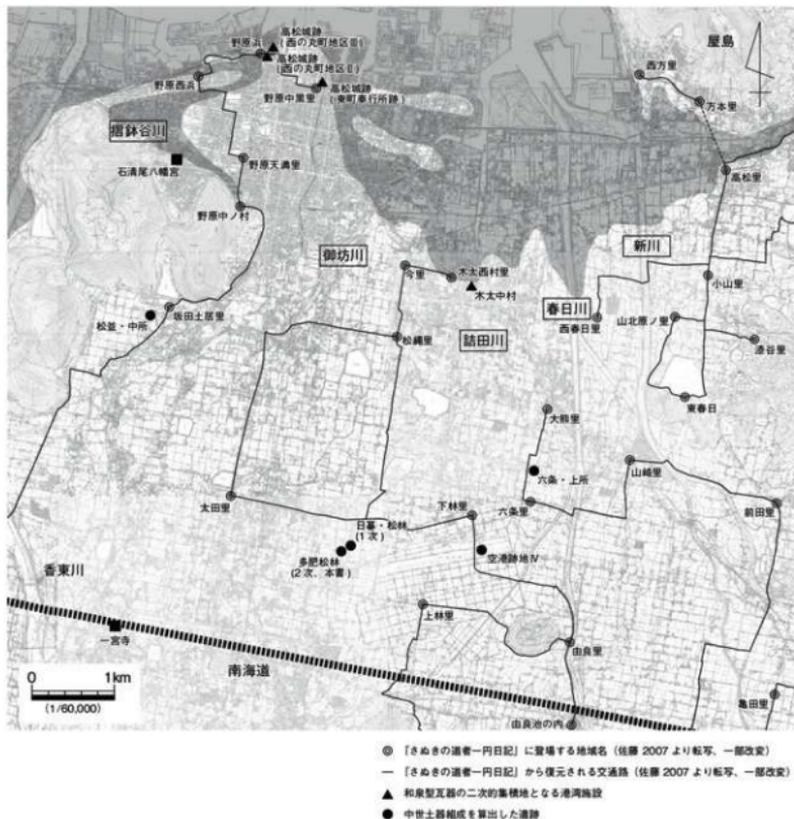
### 3. 土器・陶磁器の流通形態

各集落の土器・陶磁器組成を概観すると、瓦器や吉備系土師器、須恵器椀の比率が集落ごとに異なる点が指摘できる。瓦器組成比率が高い集落では西村窯産須恵器椀や吉備系土師器は少なく、瓦器組成比率が低い集落では西村窯産須恵器椀や吉備系土師器がやや高い組成比率を占め、別産地の土器がセットで流通し、集落に搬入された想定も可能となる。しかし、高松城跡(西の丸町地区)は和泉型瓦器椀の二次的集積地ではあるが、吉備系土師器は荷揚げされた主要な積み荷ではなく、西村窯産須恵器椀や十瓶窯産須恵器がここに集積され、搬出された状況も認められない。

瓦器の流通については、瓦器組成比率が高い集落と石清水八幡宮と皇室領荘園の関係に着目し、在地領主から荘園領主への貢納物の運搬を梶取として石清水八幡宮が担い、帰り荷として安価な商品として瓦器を入手し、運搬・搬入された可能性が想定でき(松本2004、2006)、瓦器は主体的に流通するものではなく、異なる流通システムでもたらされる副次的産物と考えられる(松本2007)。吉備系土師器の流通システムは明らかではないが、高松城跡(西の丸町地区)の土器組成を考慮すると、瓦器とセットで流通した状況は想定できない。十瓶窯産須恵器(西村窯産須恵器椀)も野原湊から搬出されるものではなく、陸路を中心に単独流通した可能性が高い(註10)。よって、瓦器、吉備系土師器、在地産須恵器は異なるシステムで流通するものと理解できる。先に見た相関関係は必要数の椀の入手に際し、産地ではなく、数の確保が重要視された結果と考えられる。なお、東播系須恵器や輸入磁器は各集落ともにごくわずかな出土であり、流通システムは判然としにくい。

### 4. 多肥松林遺跡における瓦器の多寡

瓦器流通システムにおいて二次的集積地からの在地流通システムは明らかではないが、「主要な港に一括して搬入され、南海道など主要道路や河川交通を介して拡散するが、各所に中継点とも呼べる場を有していたと考えられる。港から振売り等で無秩序に拡散したのではなく、畿内からの物資の管理された流れに乗って内陸の中継地に至り、そこから拡散した」とされ、瓦器組成比率の高い日暮・松林遺跡は陸上交通の要所の中継地であったという指摘がある(佐藤重2004)。中継地の認定や陸上交通網の復元は困難な課題であるが、限られた資料等からその復元を行いたい。



第 129 図 『さぬきの道者一円日記』に見る移動ルートの遺跡分布

第 6 図に古代の南北道を 2 本復元した。発掘調査での検出状況に基づき (乗松 2015)、南端部の起点に南海道、北端部に津を想定し、陸海交通網の結節点となる津と最重要陸上交通路を繋ぐアクセス道としての機能を有する南北幹線道路と考えられる。少なくとも 8～10 世紀代に機能した状況が想定できる。日暮・松林遺跡や多肥松林遺跡は東側の南北道路沿いに位置する。

中世期では高野山の阿闍梨・道範の紀行文である『南海流浪記』の記述が参考になる。仁治 3 (1242) 年～建長元 (1249) 年の経験や見聞が記録され、13 世紀中葉の道の推定が可能となる。近年、洲崎寺本の解説と分析がなされ (高橋ほか 2012)、京都から淡路・阿波を経由し、国府・守護所、普通寺、伊予という往路で進んだ道範が辿った経路がほぼ古代南海道に沿うことが指摘されており、中世前半期においても南海道は主要幹線道路として機能したことが窺える。

高松平野内の陸路については、中世後半期の資料だが、『さぬきの道者一円日記』が参考になる。永祿8(1565)年に伊勢御師の岡田大夫の御師職を譲渡ないし質入れする際に作成されたと推される資料である(田中・藤井1996)。伊勢御師が讃岐中・東部に檀那へ赴き、伊勢土産の代価として初穂料を徴収した記録で、地域名、人物名、伊勢土産の種類、初穂料が整然と記録された帳簿的な資料である。御師の旅程が復元されており(佐藤2007)、そのルートと御師が訪れた地域を第129図に転写した。中世末期の資料であり、前半期まで道や集落が廻る可能性は担保されないが、中世期における高松平野の交通網や集落動向を垣間見ることができる。注目すべきは今里から松縄里を経て、太田里へ至るルートである。海浜部の津ないし集積地と南海道を繋ぐ古代の南北幹線道路に近接しており、その南北軸に沿ったルートの存在は、多少のずれはあるが、南北の主要な軸線として古代から継続するものと理解できる。多肥松林遺跡はその軸線に隣接する。一方、和泉型瓦器の二次的集積地である高松城跡(西の丸町地区)付近の海浜部集落から坂田土居里を経て、国分寺に抜けていくルートは近世丸亀街道に合致したものである。近世期に整備された街道だが、中世末期には存在した可能性が高い。さらに、ルート沿いに瓦器組成の高い松並・中所遺跡が所在する点には留意したい。かつて河川水運による物資流通による瓦器の多寡を想定したが(松本2004)、高松城跡(西の丸町地区)に荷揚げされた和泉型瓦器が松並・中所遺跡に搬入されたと理解できるならば、本ルートは物資流通網を構成する主要道として中世前半期まで廻る可能性が高い。

こうした状況から下記のような想定ができる。中世前半期において古・高松湾には物資集積地となる港湾施設が複数あり、そこを起点に水運や陸上交通網に乗って在地流通していく。後者の大動脈として東西幹線道路である南海道があり、海浜部の物資集積地と南海道を連結させるアクセス道として、近世丸亀街道の前身となる西側ルートと高松平野中央部を南北に繋がる伝統的な中央ルートが復元できる。これらの主要幹線道が基軸となり陸上交通網が整備されたと考えられる。また、要所ごとに物資流通の中継地があり、そこを経由して物資は各地に拡散していく。

多肥松林遺跡における瓦器の多寡は中央ルートに近接し、南海道に近い位置関係という立地を考慮すると、佐藤氏が指摘する中継地としての位置付けも可能である(註11)。燈明具の使用は中世期に属する遺跡では寺院や官衛施設のほか、物資流通と漁業を経営基盤とした浜ノ町遺跡等に限られ、多肥松林遺跡に特殊性を示し、直接的な言及は困難であるが、中継地としての性格を反映するかもしれない。同様に、9割を占める供膳具比率も遺跡の特殊性を示す。なお、大規模な居住施設が認められない点も看過できない。倉庫群が立ち並び、物資を管理するような拠点的な中継地ではなく、場所の重要性に支えられた簡易な施設を伴う中継地という姿を想起させる。

## 第4節 遺構変遷

前節までの検討を踏まえつつ、遺構変遷についてその概要を記す。

### 1. 弥生時代

旧河道Aを構成する4条の自然流路が調査地中央を縦断し、東西に安定した微高地が広がる。SR 01～03は遅くとも弥生時代中期中葉、SR 04は弥生時代前期には流下しており、その幅は110mを測り、東西に安定した微高地が広がる。SR 01・02は中期中葉、SR 04は中期後半～後期中葉の埋没

となるが、旧河道Aの主要流路としてSR 03は幅や流路を変えながら平安時代前期末～中期初頭まで流下する。旧河道Aの両脇には安定した微高地が展開し、西側の微高地Aで稀薄ながらV-1区、Ⅲ-3区では弥生時代後期末頃に属する居住施設を認める。V-1区SX 01は竪穴建物とは断言できないが、居住施設の可能性が高く、多肥松林遺跡（4次）で検出された掘立柱建物や竪穴建物とともに、小単位の居住空間を形成する。Ⅲ-3区では掘立柱建物群2棟ないし3棟確認できる。東側の微高地Bでは当該期に属する遺構は展開しないが、微高地Bの縁辺部に位置するSR 01からは石器製作後に一括廃棄されたサヌカイト剥片を認め、近隣の石器生産が想定できる。第1節で述べたように、厚さ5cm程度の板状素材を集落に持ち込み、おそらくは金山型剥片剥離技術による横長剥片を連続して剥出して石庖丁やスクレイパーを製作し、残核や剥片に両極打法を加えて小型石器を製作した状況が復元できる。

## 2. 平安時代前期末～中期初頭

SR 03から墨書土器が19点出土した。第2節で県内の墨書土器等を集成したが、県下で最も多い墨書土器出土数となる。9世紀末～10世紀前葉に属し、流路出土ながら時期的な一括性を認め、転用硯や斎車も共存する。積文は「本」が最も多く、「原」、「松カ」も認める。郡家原遺跡や前田東・中村遺跡での類例から墨書土器は斎車や木製模造品とセットで水路の維持に伴う祭祀に使用された可能性を想定した。また、遺跡群として周辺との関係を整理すると、複数箇所墨書土器と斎車や木製模造品を使用した祭祀が行われ、水量が減少しつつあったSR 03を主水源とした水路の維持が大規模に行われた状況が復元できる。なお、隣接箇所に掘立柱建物群が展開し、祭祀を執り行った可能性も想定できる。これらの掘立柱建物群は建物配置や規模等から官衙施設とは考えられないが、帯金具や硯、緑釉陶器といった官衙的色彩が強いとされる遺物が出土しており、地方支配の末端的な階層として律令国家体制に組み込まれていた状況も推測できる。

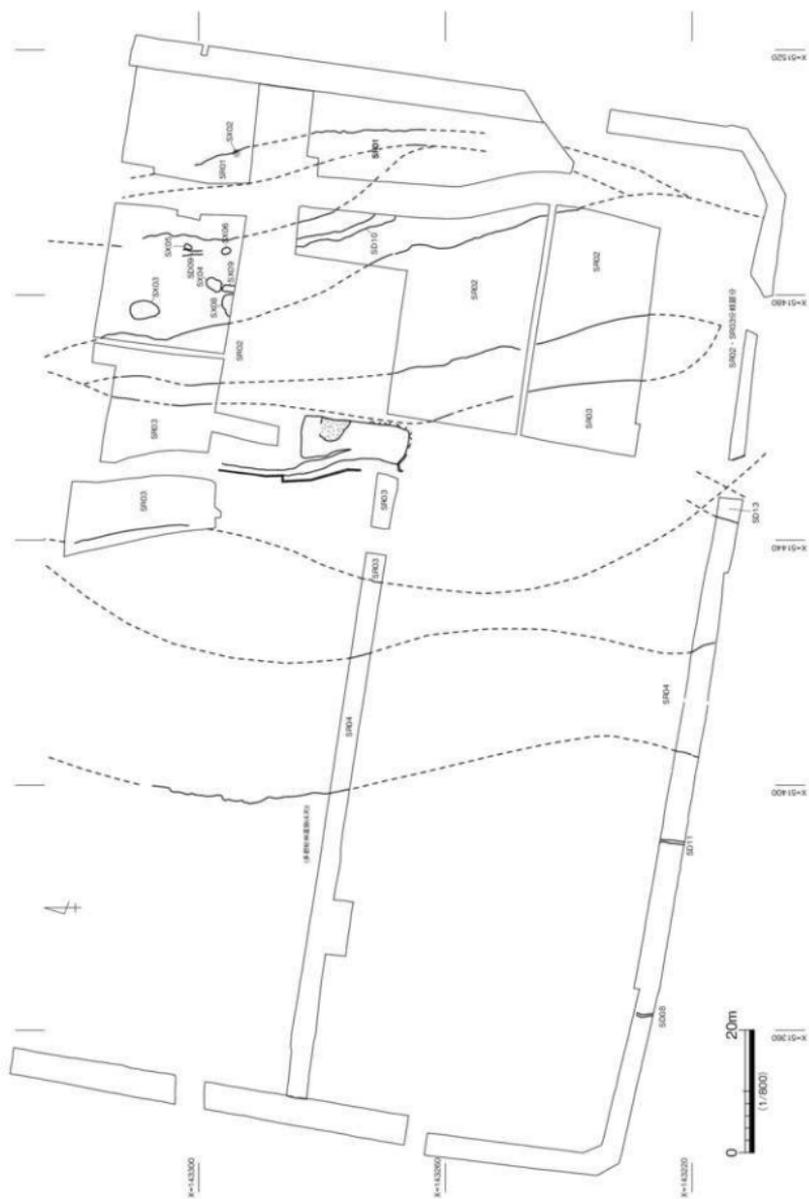
また、言及できなかったが、居住施設が展開しない一画で八稜鏡と管玉が共存する土坑を認め（SK 06）、水路維持に伴う別形態の祭祀が行われた可能性も残す。

## 3. 鎌倉時代初頭（12世紀後半～13世紀中葉）

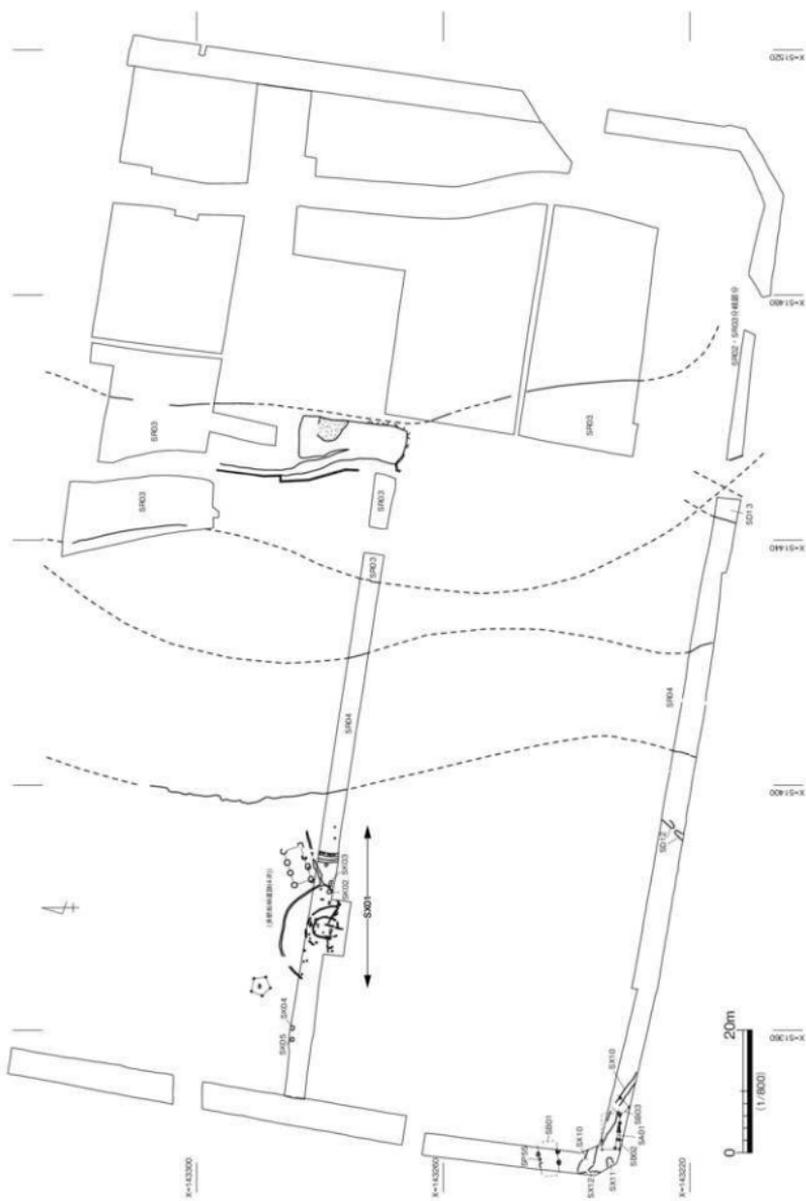
当該期の遺構は当調査地の東部（I-4区、II-3・4区）、南端部の一部（IV-1区）で確認できる。対象地東端部で掘立柱建物を含む当該期のビット群が展開し、小規模な居住域を形成するが、灌漑水路となるSD 19も隣接ないし重複する。同溝は東接する日暮・松林遺跡（1次）に連続した後、分岐派生する（居住域は未確認）。SD 19からは多量の和泉型瓦器が出土し（61.6%）、9割を超える供膳具比率、土師質土器小皿・坏の燈明具としての使用等、他の集落ではみられない特徴を有する。第3節で検討したように、海浜部の物資集積地と南海道を連結させるアクセス道に隣接した中継的な位置付けが可能である。

## 4. 中世後半～近世

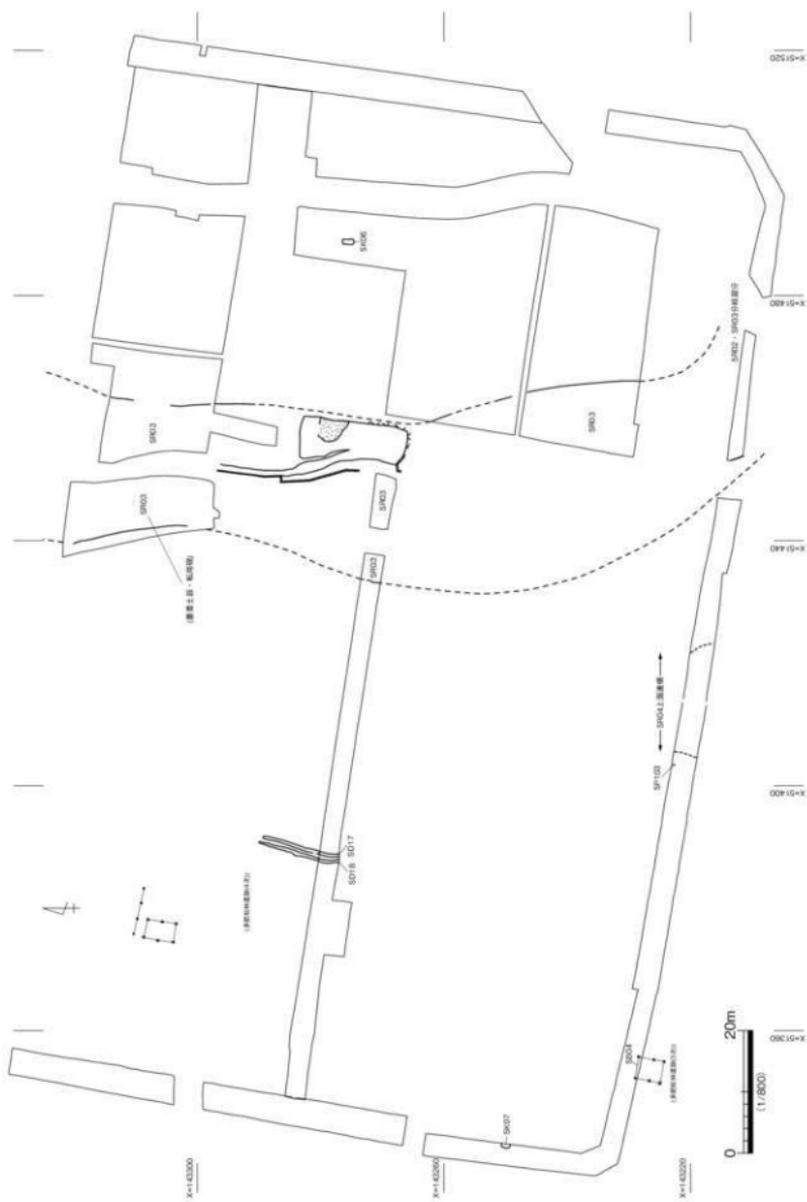
調査区の全域に分布するが、I-4区周辺にやや集中する傾向がある。居住域を形成するものではなく、耕作域において開削された遺構と考えられる。



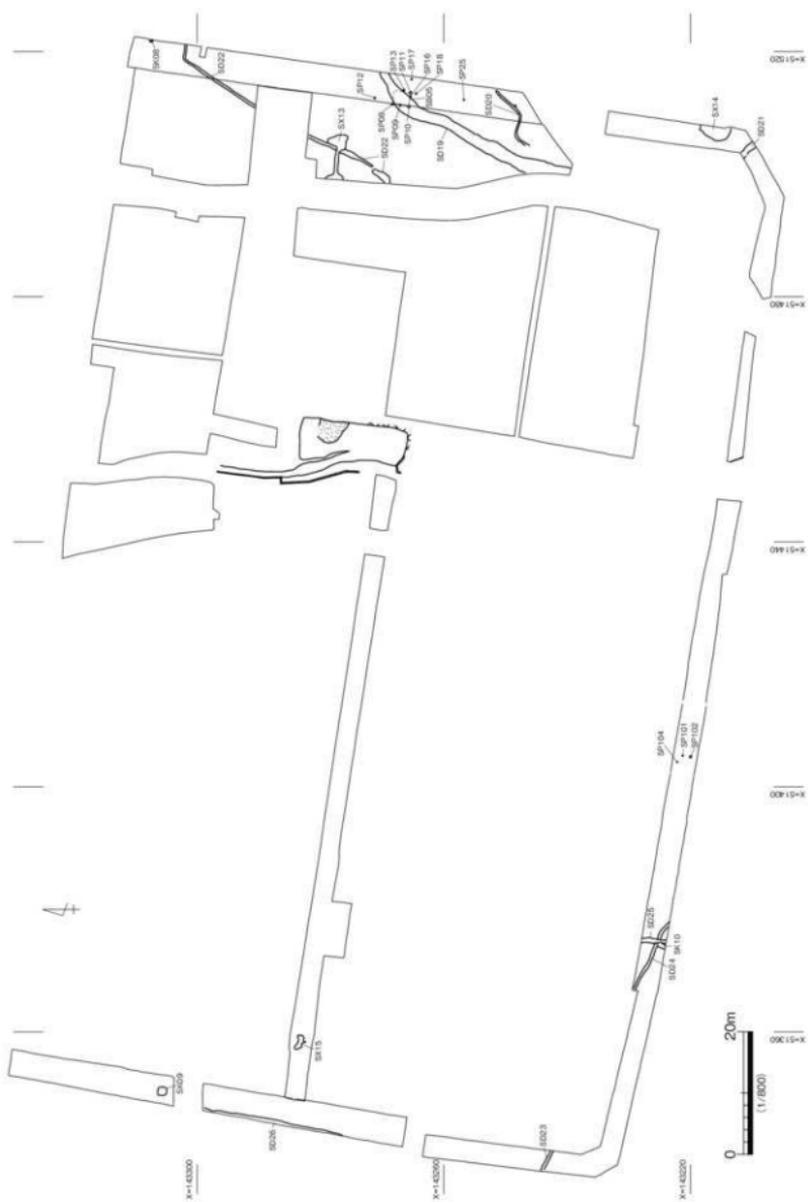
第130図 遺構変遷図1 (弥生時代中期中葉)



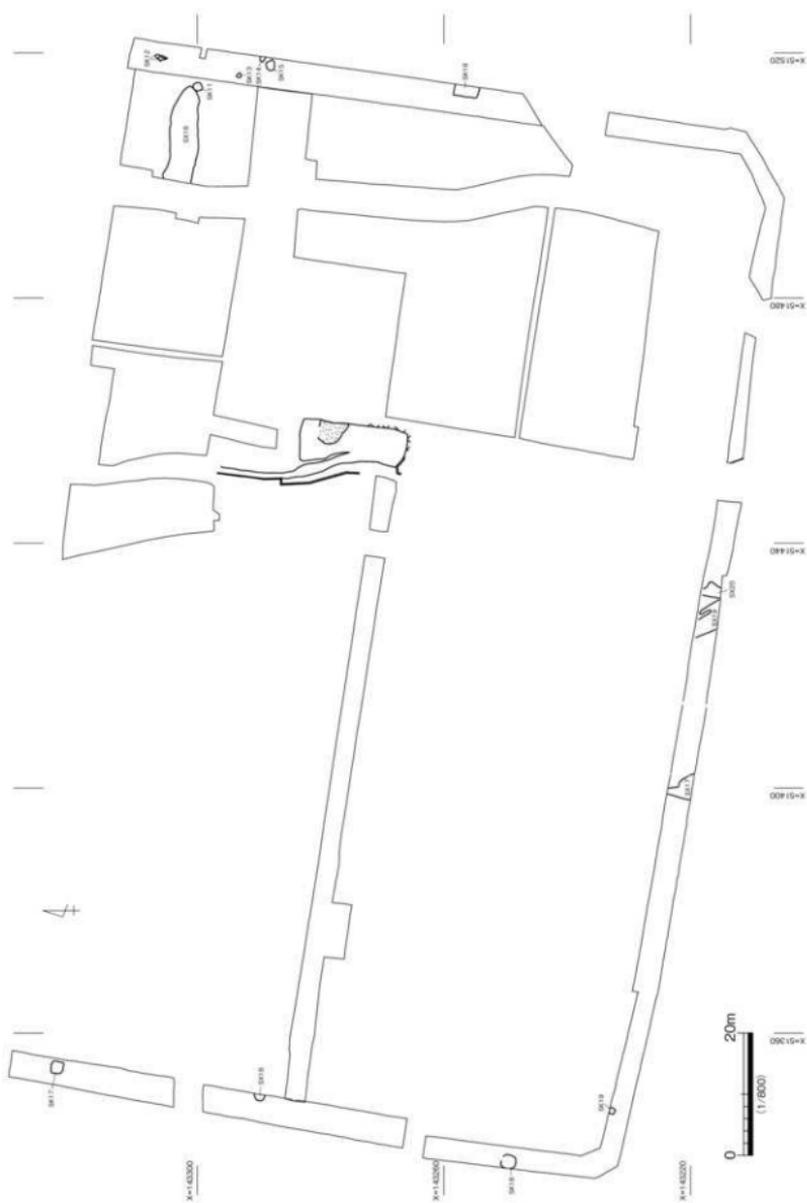
第 131 図 遺構変遷図 2 (弥生時代後期～終末期)



第 132 図 遺構変遷図 3 (平安時代前期末～中期中頃)



第 133 図 遺構変遷図 4 (鎌倉時代前期)



第 134 図 遺構変遷図 5 (中世後半～近世)

【註釈】

- ※1 SX 02 出土サスカイトの分類は乗松真也氏（香川県教育委員会）の手を煩わせた。原産地である金山に近い東坂元北岡遺跡の報告書作成に際し、サスカイト剥片資料を複数遺跡で分析されており、同手法・視点による分析を試みるものである。なお、その成果は下記報告書に掲載される予定である。  
乗松真也 2016「金山型剥片剥離技術の復元」『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 3 冊 東坂元北岡遺跡』香川県教育委員会ほか
- ※2 本報告書とはほぼ同時に東坂元北岡遺跡の報告書が刊行された（平成 26 年度に整理作業が実施）。同遺跡はサスカイトの原産地の金山の北東約 3km の地点に所在し、金山産のサスカイト製の石器が多量に出土する。註 1 で示したように報告書では弥生時代中期に属する石器の流通が検討され、周辺遺跡出土の石器分類別の数量・重量が計測・提示され、打撃法の差異や剥片サイズ等による各遺跡の石器製作ないし石器素材の流通が検討される。当遺跡は弥生時代中期中葉に属し、一定量の剥片量を伴い、接合資料も含むことから、乗松氏による分析に追記する形で定量分析結果を提示し、その特徴について検討した。なお、他遺跡については報告書から抜粋した数値となる。
- ※3 残核や剥片を両極打法で可能な限り利用する一方、SX 02 では別製品への加工が可能なサイズの未製品や石核を投棄しており、ある種の矛盾を認める。
- ※4 当初は接合資料 2 を金山型剥片剥離技術による連続した横長剥片の剥出と想定し、それに伴う接合資料と理解していたが、最終的には接合資料 2 への同技術の採用根拠はないと判断した。しかし、板状素材から横長剥片を取り出す際の打面調整剥片が一定量出土し、同技術による連続した剥出と考えられる横長剥片等から（98）、当遺跡では同技術による石器製作が行われたと理解しておきたい。
- ※5 概報では齋車・杭が出土したとあるが、現存する資料では確認できない。調査から 20 年以上が経過しており、木製品の多くは乾燥ないし膨張し、旧状を留めない。また、概報では墨書土器は 24 点出土とあるが、19 点しか確認できない。火葬の認識等の要因が想定できるが、詳細は判然とし難い。
- ※6 釈文解説には香川県立ミュージアム渋谷啓一氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
- ※7 榎田遺跡の報告で、「乙貞」と解説できる墨書の存在から、中村遺跡の貞の両脇にある波状の装飾は「乙貞乙」をデザインした可能性が指摘されている。  
長野県教育委員会ほか 1999「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12 -長野市内その 10 - 榎田遺跡」
- ※8 本稿では「本」は一字として認識したが、上西原遺跡における「大」を 12 文字も石材に刻書して埋納した状況は示唆的である。除陽五行説の太歳との関連が指摘されるが、「本」は大と十に分解でき、多量の十を表象する記号的な文字の可能性も想定はできる。ただし、文字として熟練・洗練された筆跡であり、その可能性は低いと考える。
- ※9 積算データは下記報告書による。  
高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ：佐藤竜馬 2003「第 7 面出土土器・陶磁器」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会ほか  
高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ：松本和彦 2003「中世礫敷遺構について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 5 冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会ほか  
高松城跡（東町奉行所跡）：小川 賢 2005「高松城跡（東町奉行所跡）」高松市教育委員会  
木太中村遺跡：木下晴一 2009「SD 03 出土遺物について」『都市計画道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 太中村遺跡』香川県教育委員会  
日暮・松林遺跡：佐藤亜星 2004「西日本における土器流通 - 12 ～ 13 世紀の讃岐を中心として -」『中近世土器の基礎研究 X V Ⅲ』日本中世土器研究会  
空港跡地遺跡Ⅳ：佐藤竜馬 2000「中世林地域の村落景観」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか  
松並・中所遺跡：松本和彦 2000「Ⅲ区 B・C S D 01 出土遺物組成について」『都市計画道路錦町町分寺線南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』香川県教育委員会ほか

六条・上所遺跡：佐藤竜馬 2000「中世林地域の村落景観」「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ」香川県教育委員会ほか

- ※10 十瓶窯産須恵器は綾川河口の松山津（国府津）が二次的集積地となる可能性が高く、そこを本拠とした拠取によって、輸入磁器とセットになった在地流通の可能性も想定される（佐藤 2003）。
- ※11 なお、多肥松林遺跡の南西3kmの地点に讃岐一宮が所在する。国府や国分寺とともに地域支配の拠点となるものであるが、直接的な関係は明らかではない。

#### 【主要参考文献・報告書】

- 石上英一 1992「高松平野の古代社会」「讃岐国弘福寺領の調査」高松市教育委員会
- 小川 賢 2005「高松城跡（東町奉行所跡）」高松市教育委員会
- 尾上 実 1983「南河内の瓦器検」「藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢」
- 木下晴一 2009「S D 03 出土遺物について」「都市計画道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太中村遺跡」香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2004「西日本における土器流通 - 12 - 13 世紀の讃岐を中心として -」「中近世土器の基礎研究 X V Ⅲ」日本中世土器研究会
- 佐藤竜馬 1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」「古代学協会四国支部第12 回大会発表資料 律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題 - 南海道を中心に -」
- 佐藤竜馬 2003「中世鎌敷き遺構と野原郷」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ」香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 2007「戦国期伊勢御師の軌跡をたどる」「港町の原像 - 中世港町・野原と讃岐の港町 -」四国村落遺跡研究会
- 高橋徳・安藤みどり・佐藤竜馬 2012「資料紹介「南海流浪記」洲崎寺本」「香川県埋蔵文化財センター 研究紀要Ⅷ 特集 讃岐国府を考える」香川県埋蔵文化財センター
- 田中健二・藤井洋一 1996「冠禰神社所蔵永祿8年「さぬきの道者一円日記（写本）」について」「香川大学教育学部研究報告 第1部 97号」香川大学
- 信里芳紀 2008「大溝の検討 - 弥生時代の灌漑水路の位置付け -」「香川県埋蔵文化財センター 研究紀要Ⅳ」香川県埋蔵文化財センター
- 乗松貞也 2004「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 浜ノ町遺跡」香川県教育委員会ほか
- 乗松貞也 2015「高松平野における8 - 107 世紀の道路と敷設目的」「県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡」香川県教育委員会
- 松本和彦 2003「中世鎌敷遺構について」「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ」香川県教育委員会ほか
- 松本和彦 2004「中世土器産地別組成について」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第48冊 大山遺跡」香川県教育委員会ほか
- 松本和彦 2006「瓦器検の多寡が意味するもの」「田村久雄先生追善記念文集 十瓶山Ⅱ」田村久雄先生追善記念会
- 松本和彦 2007「野原の景観と地域構造」「港町の原像 - 中世港町・野原と讃岐の港町 -」四国村落遺跡研究会
- 森 格也 1995「前田東・中村遺跡出土木製模造品をめぐる二、三の問題 - 齋串を中心に -」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡」香川県教育委員会ほか
- 森下英治 2002「石器の生産と流通」「第16 回古代学協会四国支部研究大会 弥生時代前期末・中期初頭の動態」
- 森下英治 2005「弥生時代における金山サササイト原産地の利用状況について」「第19 回古代学協会四国支部研究大会 原産地遺跡から時代を読む」
- 山本悦世 1998「岡山南部における土器器調の変遷」「岡山大学構内遺跡発掘調査報告書 第11冊 鹿田遺跡4」岡山大学埋蔵文化財研究センター
- （主要報告書は第4・7～9・10表に伴う報告書は本文中で記したため除いた）

調査年度 調査番号	調査区名	遺構名	層位	種類	図様	調整(外)	調整(内)	色皿(内)・釉色皿(外)・釉色	口径	口径	器高	底径	現存	備考
1	V-1K-SPT45			弥生土器	葉	ヨコナテ	板ナテ→ヨコナテ	5YR5.6明赤褐	中・普	20(0)		1.8	1.8	
2	V-1K-S006			弥生土器	葉	マメツ	マメツ	5YR5.6明赤褐	中・普	(14.2)		小片	外周二次焼成	
3	V-1K-S007			弥生土器	高杯	板ナテ	ハラケズリ	5YR5.6明赤褐	中・中・普			1.8	円形の穿孔	
4	V-1K-S008			弥生土器	高杯	マメツ	ハラケズリ	5YR5.6明赤褐	中・中・普	(16.8)		1.8		
5	V-1K-S009			弥生土器	高杯	マメツ	ハラケズリ	5YR5.6明赤褐	中・普	(8.0)		小片		
7	III-3K-S006			弥生土器	皿	朝日皿	ナテ	5YR5.6明赤褐	中・中・普			小片		
9	I-3K-S009			弥生土器	葉	マメツ	マメツ	5YR5.4に赤・黄	中・普	(22.4)		小片		
10	I-3K-S009			弥生土器	葉	マメツ	ナテ	5YR5.4に赤・黄	中・普	(20.0)		小片		
11	I-3K-S001	上層		弥生土器	葉	マメツ	マメツ	5YR8.4に赤・黄	中・少			小片		
12	I-3K-S001	上層		弥生土器	葉	マメツ	マメツ	5YR8.4に赤・黄	中・中・普			小片		
13	I-3K-S001			弥生土器	直口壺	朝日壺	ナテ	5YR8.2灰白	中・少			小片		
14	I-3K-S001			弥生土器	直口壺	ヨコナテ→板ナテ	マメツ	5YR8.3浅黄緑	中・少	(8.8)		小片		
15	I-3K-S001			弥生土器	直口壺	マメツ	マメツ	5YR8.2灰白	中・普	(12.0)		小片		
16	I-3K-S001			弥生土器	直口壺	マメツ	マメツ	5YR6.4に赤・黄	中・中・普	(12.6)		1.8		
17	I-3K-S001			弥生土器	直口壺	マメツ	マメツ	5YR6.4に赤・黄	中・少	(11.6)		1.8	胴部に穿孔	
18	I-3K-S001			弥生土器	葉	板ナテ→朝日笠	朝日さき	5YR8.2灰白	中・中・普	(18.8)		小片		
19	I-3K-S001			弥生土器	葉	マメツ	マメツ	5YR7.3に赤・黄	中・中・普	(17.4)		小片		
20	I-3K-S001			弥生土器	葉	マメツ	朝日さき	5YR6.3に赤・黄	中・中・多		6.0	器高 8.8		
21	I-3K-S001			弥生土器	葉	板ナテ	朝日さき	5YR5.2灰褐	中・中・多		(7.2)	器高 1.8		
22	I-3K-S001			弥生土器	葉	板ナテ	朝日さき→ハラケズリ	5YR4.2灰黄褐	中・中・多		(7.2)	器高 2.8		
23	I-3K-S001			弥生土器	葉	板ナテ	朝日さき→ハラケズリ	5YR5.4に赤・黄	中・中・多		(7.2)	器高 2.8		
24	I-3K-S001			弥生土器	葉	ハラミガキ	朝日さき→ハラケズリ	5YR6.2灰黄褐	中・少		(5.4)	器高 4.8		
25	I-3K-S001			弥生土器	葉	朝日笠	ナテ	5YR6.4に赤・黄	中・中・少		(7.2)	器高 2.8		
26	I-3K-S001			弥生土器	葉	ハラミガキ	朝日さき→ハラケズリ	5YR4.1黄灰	中・普		5.7	器高 8.8		
27	I-3K-S001			弥生土器	葉	板ナテ	板ナテ	5YR7.4に赤・黄	中・中・少		(8.8)	器高 6.8	底面に若干の上り底	
28	I-3K-S001			弥生土器	鉢	板ナテ	板ナテ	5YR5.4に赤・黄	中・中・少	(16.6)		2.8		
29	I-3K-S001			弥生土器	朝日笠	マメツ	マメツ	5YR6.3に赤・黄	中・中・少		(11.0)	器高 1.8		
30	17 I-3K-S001			弥生土器	板ナテ	板ナテ	マメツ	5YR6.4に赤・黄	中・中・普		0.8	6.2	一	
35	17 I-3K-S001	周知の事例		弥生土器	朝日笠	朝日笠	ヨコナテ→朝日笠	5YR6.4に赤・黄	中・中・少			器高 3.8	照 36 三河一御体	

第 11 表 土器観察表 1

番号	器物名	調査区名	遺跡名	層位	種類	器種	調査(内)	調査(外)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	土質	石質	形状	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底厚(mm)	備考
36	1-3K-SR01	同好館跡	弥生土器	同好館跡	横ナテ→連柄付文	横ナテ	横ナテ→ハタミガキ→ 片直文	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/4に赤褐色	75YR5/2灰褐色	中・少	中・少	継・少	21.6		8.0	底厚 3.8 口縁部 7.8	継35と同一体 継38と同一体
37	1-3K-SR01	同好館跡	弥生土器	同好館跡	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR7/3に赤褐色	75YR7/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
38	1-3K-SR01	同好館跡	弥生土器	同好館跡	横ナテ→ハタミガキ→ 片直文	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/6暗褐色	75YR5/6暗褐色	継・中・多	継・少	継・少			8.0	底厚 7.8 口縁部 8.8	継35と同一体 継38と同一体
44	1-4K-SR01	下層	弥生土器	下層	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3に赤褐色	75YR6/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
45	1-4K-SR01	下層	弥生土器	下層	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3に赤褐色	75YR6/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
46	1-4K-SR01	下層	弥生土器	下層	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3に赤褐色	75YR6/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
50	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/4に赤褐色	75YR5/4に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少	25.8			口縁部 1.8	
51	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR4/4褐色	75YR4/2灰褐色	継・中・多	継・少	継・少	21.8			口縁部 1.8	
52	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/6暗褐色	75YR5/2灰褐色	継・少	継・少	継・少				口縁部 1.8	
53	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/4に赤褐色	75YR5/4に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少	15.0			口縁部 2.8	
54	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/4に赤褐色	75YR6/4に赤褐色	継・中・少	継・少	継・少			9.1	底厚 8.8	
55	1-4K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR7/4に赤褐色	75YR7/4に赤褐色	継・中・少	継・少	継・少			(13.3)	口縁部 2.8	
89	1-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR4/4褐色	75YR4/4褐色	継・中・多	継・少	継・少	18.2			口縁部 5.8	
90	1-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR7/3に赤褐色	75YR6/2灰白	中・多	継・少	継・少	10.4			口縁部 5.8	
91	1-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3に赤褐色	75YR6/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少				口縁部 5.8	
92	1-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR4/2灰褐色	75YR4/1褐色	継・中・多	継・少	継・少	13.2			底厚 3.8	
93	2-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3浅黄褐色	—	継・少	継・少	継・少			6.8	底厚 3.8	小脚部無し
94	2-3K-SR01	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3浅黄褐色	—	継・少	継・少	継・少			最大径 3.6 最大高 2.8	—	小脚部無し
105	2-4K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR7/3に赤褐色	75YR7/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少			3.2	2.0	—
106	1-2K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR7/6褐色	75YR7/6褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
107	1-3K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/3に赤褐色	75YR6/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少					継35と同一体 継38と同一体
108	1-3K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/4に赤褐色	75YR5/4に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少			(5.5)	底厚 2.8	
109	1-4K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/3に赤褐色	75YR5/3に赤褐色	継・中・多	継・少	継・少	24.0			口縁部 1.8	
110	1-4K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/4に赤褐色	75YR5/3に赤褐色	継・少	継・少	継・少			(6.0)	底厚 2.8	
111	1-2K-SR02	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/6褐色	75YR6/6褐色	継・中・多	継・少	継・少	13.8			口縁部 2.8	
112	1-1K-SR03	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/6褐色	75YR6/6褐色	継・中・多	継・少	継・少				口縁部 2.8	
113	24-1-1K-SR03	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR5/4に赤褐色	75YR5/2灰黄褐色	継・中・多	継・少	継・少				底厚 8.8	
114	2-4K-SR03	同好館中	弥生土器	同好館中	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	75YR6/2灰黄褐色	75YR6/2灰黄褐色	継・中・多	継・少	継・少	12.0			口縁部 2.8	

第12表 土器観察表2

調査年度 調査番号	調査区名	遺構名	単位	種類	図様	調整(外)	調整(内)	色調(外)・種	色調(内)・粘土	石質	形状	積層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 部位	備考
115	15-2E-SR03	弥生土器	壺	板ナテ→ヘラミガキ	板ナテ→ナテ	マヌテ	板ナテ→ナテ	10YR4/2灰青黒	10YR4/2灰青黒	板・中・多	細・少		7.2		7.2	全体部	
116	1-1E-SR03	弥生土器	壺	マヌテ	マヌテ	マヌテ	マヌテ	10YR7/3に灰・黄緑	10YR7/3に灰・黄緑	細・中・少					5.8	5.8	
117	1-1E-SR03	弥生土器	無蓋鉢	マヌテ	板ナテ?	マヌテ	板ナテ?	2Y5R7/4に灰・黄	2Y5R7/4に灰・黄	細・中・少		(9.2)			5.8	5.8	口縁部に穿孔, 36cm 内径
118	1-1E-SR03	弥生土器	直立鉢	ヨコナテ	マヌテ	マヌテ	マヌテ	2Y5R5/4に灰・黄緑	2Y5R5/4に灰・黄緑	細・少					小片	二次焼成	
119	25-1E-SR03	弥生土器	甕	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R6/4に灰・黄	2Y5R6/4に灰・黄	細・中・普	細・少		(16.4)		2.8	口縁部	
120	25-1E-SR03	弥生土器	甕	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R5/3に灰・黄	2Y5R5/3に灰・黄	中・普	細・少		(16.0)		2.8	口縁部	
121	25-1E-SR03	弥生土器	甕	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R5/4に灰・黄	2Y5R5/4に灰・黄	細・少			(14.0)		1.8	口縁部	
122	1E-2E-SR03	弥生土器	壺	ヘラミガキ	マヌテ	マヌテ	マヌテ	10YR7/3に灰・黄緑	10YR7/3に灰・黄緑	細・中・多			(14.6)		5.8	全体部	
123	1-1E-SR03	弥生土器	鉢	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	10YR7/3に灰・黄緑	10YR7/3に灰・黄緑	中・少	細・少				小片	口?	
124	1-1E-SR03	弥生土器	鉢	ヘラミガキ	マヌテ	マヌテ	マヌテ	2Y5R4/4黄	2Y5R4/4黄	細・少	細・少		(47.0)		2.8	口縁部	
125	1-1E-SR03	弥生土器	鉢	山形文	マヌテ	マヌテ	マヌテ	2Y5R5/3に灰・黄	2Y5R5/3に灰・黄	細・少			(20.6)		小片		
126	25-1E-SR03	弥生土器	部合いし 器	板ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	10YR6/3に灰・黄緑	10YR6/3に灰・黄緑	細・中・普					2.8	口縁部	
127	1-1E-SR03	弥生土器	製土器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	10YR4/2灰青黒	10YR4/2灰青黒	細・中・多				3.2	2.8	口縁部	
128	1-1E-SR03	弥生土器	製土器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R7/4に灰・黄	2Y5R7/4に灰・黄	細・普	細・少				2.8	口縁部	
129	1-1E-SR03	弥生土器	製土器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R7/4に灰・黄	2Y5R7/4に灰・黄	細・普	細・少			(3.6)	2.8	口縁部	
130	25-1E-SR03	土器	甕	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	10YR5/3に灰・黄	10YR5/3に灰・黄	細・普	細・少		(16.1)	26.05	17.7	口縁部	内面腹付着
131	25-1E-SR03	土器	高坏	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R5/4に灰・黄	2Y5R5/4に灰・黄	細・中・少			16.5	13.4	(11.5)	口縁部	
132	1-1E-SR03	須恵器	甕	板ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	N4/灰	N4/灰	細・少	細・少				1.8	口縁部	
133	25-1E-SR03	須恵器	須恵器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	細・少	細・少	(12.0)	3.4	7.1	5.8	口縁部	内面に火傷
134	25-1E-SR03	須恵器	杯	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	細・少	細・少	(11.6)	3.5	(6.8)	2.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
135	25-1E-SR03	須恵器	杯	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	細・少	細・少	(11.8)	3.3	(7.0)	1.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
136	1-1E-SR03	須恵器	杯	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	N5/灰	N5/灰	細・無	細・無	(12.6)	3.2	(8.0)	1.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
137	1-1E-SR03	須恵器	杯	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R6/2灰黄	2Y5R7/3灰黄	中・無	中・無	(13.0)	4.5	(8.0)	1.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
138	1-1E-SR03	土器	杯	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	2Y5R7/3灰黄	2Y5R7/3灰黄	中・少	中・少	(12.6)	3.0	(7.0)	2.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
139	26-1E-SR03	須恵器	須恵器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	N6/灰	N6/灰	中・少	中・少			(7.2)	2.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷
140	26-1E-SR03	須恵器	須恵器	板ナテ	板ナテ	板ナテ	板ナテ	10Y8/1灰白	10Y8/1灰白	細・少	細・少			(6.8)	2.8	口縁部	底が内面に黒着 灰が内面に火傷

第13表 土器調査表3



調査年度 調査番号	調査区 調査名	調査区 調査名	層位	種類	器種	調整(外)	調整(内)	色調(外)・種	色調(内)・胎土	行英 長口	形状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	容量 (ml)	備考
165	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	ヘラミガキ	ヘラミガキ	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒	色調(内)・胎土 10782/1黒		細・少			底径 5.8	容量 3.8	器高(外)に黒書 取付(欠)
166	27	1-1区	SR03	黒色土器	分脚ヘラミガキ	分脚ヘラミガキ	分脚ヘラミガキ	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			7.4	底径 7.8	底径(内)に黒の黒書
167	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 75782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少	(14.8)		(7.4)	底径 4.8	
168	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			(8.5)	底径 3.8	内面の裏は一部消失
169	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			(7.0)	底径 4.8	
170	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			(8.0)	底径 2.8	内面の裏は一部消失 一部破欠
171	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			(7.0)	底径 1.8	
172	1-1区	SR03		黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			6.0	底径 7.8	二枚破欠?
173	28	1-1区	SR03	黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		細・少			6.0	底径 5.8	
174	28	1-1区	SR03	黒色土器	A脚碗	マメツ	マメツ	00785/2灰青緑 10782/1黒	00785/1に赤・黄緑 10782/1黒		中・多			6.0	底径 5.8	
175	28	1-1区	SR03	須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		中・黒	(7.6)		(7.6)	底径 3.8	
176	28	1-1区	SR03	須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		中・黒	(13.0)	4.5	(6.4)	2.8	器高(外)に黒い黒書 取付(欠)
177	28	1-1区	SR03	須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・黒			5.8	底径 5.8	同転ナデに赤・黄緑 取付(欠)
178	28	1-1区	SR03	須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少	8.5	1.7	8.4	底径 0.8	器高(外)に黒い黒書 取付(欠)
179	28	1-1区	SR03	須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		粗・少			7.4	底径 6.8	内面に赤・黄緑 取付(欠)
180	1-1区	SR03		須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少					器高(外)に黒い黒書 取付(欠)
181	1-1区	SR03		須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少			10.6	底径 6.8	
182	1-1区	SR03		須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少			(9.6)	底径 2.8	内面に自然釉付
183	1-1区	SR03		須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		中・少			(12.4)	底径 2.8	
184	1-1区	SR03		須恵器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少	(8.8)			底径 2.8	内面に自然釉付
185	1-1区	SR03		土師質土器	筒	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・多					小片
186	29	1-1区	SR03	土師質土器	筒	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・多	(23.4)				口縁部に黒い黒書 取付(欠)
187	1-1区	SR03		土師質土器	筒	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少	(20.0)				口縁部に黒い黒書 取付(欠)
193	IV-3区	SR03 SR03 SR03		須恵土器	椀	同転ナデ	同転ナデ	2577/1灰白	2577/1灰白		細・少	(15.8)				口縁部に黒い黒書 取付(欠)

第15表 土器観察表5

調査区 番号	調査区 番号	遺構名	層位	種類	記述	調査(外)	調査(内)	色調(外)・植	色調(内)・植土	柱礎 長石	礎石	礎脚	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 草	備考
194	IV-3K	S202-S200 5層	厚土層5	弥生土器	高平	マメツ	マメツ	75786.6 靑	75786.6 靑	細・中・少	細・少	中・少	(23.0)			小片	
195	IV-3K	S202-S203 5層	厚土層5	埴器	坏	口縁部:同様ナテ 底部:同様ヘラナテ	同様ナテ	5771.1 灰白	5771.1 灰白	細・中・多		中・少				小片	外周に土障?
196	IV-3K	S202-S200 5層	厚土層5	埴器	不明	同様ナテ	同様ナテ	10784.2 灰黄緑	10784.2 灰黄緑	細・中・多						小片	
198	IV-1K	SR04	下層	弥生土器	壺	胴部:同様ナテ 口縁部:同様ヘラナテ	同様ナテ	5785.41 土・黄	5785.41 土・黄	細・中・多			(13.8)			2.8	
199	IV-1K	SR04	中層	弥生土器	壺	マメツ	マメツ	10785.6 靑	10785.6 靑	細・中・多			(18.0)			2.8	
200	IV-1K	SR04	中層	弥生土器	壺	胴部:同様ナテ 口縁部:同様ヘラナテ	同様ナテ	5785.6 明緑	5785.6 明緑	細・中・多						2.8	
201	IV-1K	SR04	中層	弥生土器	壺	ナテ	ナテ	5785.6 明緑	5785.6 明緑	細・中・多	?					1.8	
202	IV-1K	SR04	中層	埴器	円底器	同様ナテ	同様ナテ	7577.1 灰白	7577.1 灰白	細・中・多			(20.0)			小片	外周に土障
203	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	ナテ	ナテ	7577.1 灰白	7577.1 灰白	細・中・多						小片	外周に土障
204	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	ナテ	ナテ	7577.1 灰白	7577.1 灰白	細・中・多						小片	外周に土障
205	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	同様ヘラナテ	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
206	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	同様ヘラナテ	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
207	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	同様ヘラナテ	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
208	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
209	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多			9.7	17.5	8.2	小片	
210	IV-1 ~2K	SR04	中層	埴器	壺	不明	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
211	IV-1 ~2K	SR04	中層	埴器	壺	不明	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
212	IV-1 ~2K	SR04	中層	埴器	壺	不明	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
213	IV-1 ~2K	SR04	中層	埴器	壺	不明	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多						小片	
214	IV-1K	SR04	中層	埴器	壺	不明	同様ナテ	10786.2 灰白	10786.2 灰白	細・中・多			(13.4)			小片	
216	I-3K	SX04		弥生土器	壺	マメツ	マメツ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多			(17.0)			小片	
219	V-1K	SD18		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	2577.2 灰黄	2577.2 灰黄	細・中・多						小片	
220	II-3K	SP08		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多			(14.0)			小片	
221	II-3K	SP09		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多			7.8	2.3	6.4	小片	
222	II-3K	SP09		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多						小片	
223	II-3K	SP10		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多			(12.4)			小片	
224	II-3K	SP11		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多						小片	
225	II-3K	SP11		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多						小片	
226	II-3K	SP11		埴器	壺	同様ナテ	同様ナテ	75786.2 靑	75786.2 靑	細・中・多						小片	

第16表 土器調査表6

製品区分 番号	商品名	種別	仕様	調整 (外)	調整 (内)	色調 (外)・種	色調 (内)・粒土	石英 灰白	純度	叩石	砕	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	貯存 量	備考
227	II-3K-SP12	中国産輸入 磁器	白磁	不明	不明	種: 75Y81 灰白 ベタミガキ	粒土: 10Y71 灰白		無	無	無			小片	内底面にピンホール	
228	II-3K-SP13	瓦器	白	不明	ベタミガキ	N2 黒	N2 黒		無	無	無			小片		
229	II-3K-SP25	磁器	白	ヨコナテ	ヨコナテ	N8 灰	N8 灰白		無	無	無			小片		
230	IV-1K-SP101	土師質土器	小皿底面	マツ	マツ	5Y82/3 に赤・黄	5Y86/6 黄	無・少	無・少	無・少	無・少	(7.0)		底面 1.8 器高より小皿底 面より		
231	IV-1K-SP102	土師質土器	小皿	マツ	マツ	75Y83/3 浅黄緑	75Y83/3 浅黄緑	無・少	無・少	無・少	無・少			小片		
232	IV-1K-SP103	黒色土器	A 磁肌	マツ	マツ	75Y84 に赤・黄	10Y81 黒		無・少	無・少	無・少			小片		
233	I-4K-SK08	瓦器	筒形	同様ナテ	同様ナテ	N8 灰白	N8 灰白		無・少	無・少	無・少			小片		
234	III-1K-SK09	土師質土器	筒	ヨコナテ	ヨコナテ	5Y87/4 に赤・黄	5Y87/4 に赤・黄		無・少	無・少	無・少			小片	二穴成	
235	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	75Y81 灰白	75Y81 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	9.0	1.6	4.6	41% 完存	内底面中央径 3cm 程 ボタノ状に突出
236	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	75Y82 灰白	75Y82 灰白	無・少	無・少	無・少	無・少	9.2	1.6	5.4	10% 6.8	内底面中央径 3cm 程 ボタノ状に突出
237	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y82 灰白	10Y82 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	9.0	1.4	4.5	10% 7.8	内底面中央径 3cm 程 ボタノ状に突出
238	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y83/3 浅黄緑	10Y83/3 浅黄緑	中・少	無・少	無・少	無・少	9.9	1.8	4.5	完存	内底面中央径 3cm 程 ボタノ状に突出
239	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y83/3 浅黄緑	10Y83/3 浅黄緑	中・少	無・少	無・少	無・少	9.5	1.6	4.5	完存	
240	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	25Y81 灰白	25Y81 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	(8.2)	1.1	(6.4)	10% 3.8	内底面中央径 3cm 程 ボタノ状に突出
241	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y82 灰白	10Y82 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	9.4	2.2	7.2	完存	
242	II-3K-SD19	土師質土器	小皿	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y82/1 に赤・黄	75Y87/2 明灰	無・少	無・少	無・少	無・少	(8.2)	(6.6)		10% 2.8	底面外周に凹線 3cm 程 長位置
243	II-3K-SD19	土師質土器	杯	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	75Y87/1 明灰	5Y88/1 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	(11.0)	3.1	(7.3)	10% 3.8	二穴成
244	II-3K-SD19	土師質土器	杯底面	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	5Y88/3 黄	75Y82 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	(13.0)	3.6	(10.0)	10% 2.8	二穴成
245	II-3K-SD19	土師質土器	杯	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y82/1 に赤・黄	10Y82/1 に赤・黄	無・少	無・少	無・少	無・少	(14.0)	3.8	(8.1)	10% 3.8	凹線にて印
246	II-3K-SD19	土師質土器	杯	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y81 灰白	10Y81 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	15.6	4.3	4.7	10% 6.8	底面中央に横溝
247	II-3K-SD19	土師質土器	杯底面	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	10Y83/3 浅黄緑	10Y83/3 浅黄緑	中・少	無・少	無・少	無・少	15.4	4.5	7.1	10% 8.8	
248	II-3K-SD19	土師質土器	杯	同様ナテ 同様ナテ 同様ナテ	同様ナテ	75Y82 灰白	10Y81 灰白	中・少	無・少	無・少	無・少	(15.6)	3.8	8.9	10% 4.8	二穴成

第 17 表 土器観察表 7



番号 調査 年度	調査区	遺構名	種別	認識	調査(外)	調査(内)	色調(外)・種	色調(内)・土	白灰 長尺	砂粒	埋石	厚さ (cm)	底径 (cm)	残存 率	備考	
268	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ→ ヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N6/灰	N6/灰		細・無		15.0	5.5	5.1	口縁部 7/8	
269	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ→ ヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N5/灰	N5/灰		細・少		14.8	5.5	4.3	口縁部 7/8	
270	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ→ ヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N5/灰	N5/灰		細・無		15.5	5.2	5.0	口縁部 6/8	
271	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N5/灰	N5/灰		細・無		15.2	5.3	4.6	完好	
272	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ→ ヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N4/灰	N4/灰		細・無		15.2	6.4	5.0	口縁部 4/8	
273	II-3IK	SD19	瓦器	横	指押まき→ヨコナデ→ ヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ 見込み：指押痕状へ ラミガキ	N6/灰	N6/灰		細・無		15.2	4.1	5.1	口縁部 5/8	
274	II-3IK	SD19	中国産輸入 磁器	白磁碗	同底→ラケズリ	不明	藍：25Y8/3 淡青	藍土：25Y8/2 灰白		微・無		16.2	6.4	7.9	高台 4/8	
275	II-3IK	SD19	中国産輸入 磁器	白磁碗	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ?	藍：25Y8/1 灰白	藍土：5Y8/1 灰白		微・無					小片	白磁碗初期
276	II-3IK	SD19	中国産輸入 磁器	白磁碗	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ?	藍：25Y8/2 灰白	藍土：25Y8/2 灰白		微・無					小片	白磁碗初期
277	II-3IK	SD19	朝鮮産磁器 鉢	青磁鉢	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ	5Y6/1 灰	N6/灰		粗・多					口縁部 2/8	白磁碗Ⅱ 欠し、初期
278	II-3IK	SD19	須臾器	壺	指押まき→ナデ	舌こ貝根(無文)→ ナデ	N5/灰	N6/灰		細・少					口縁部 2/8	十載灰産
279	II-3IK	SD19	須臾器	壺	指押まき	舌こ貝根(無文)	N5/灰	N6/灰		中・少					口縁部 2/8	十載灰産
280	II-3IK	SD19	須臾器	壺	指押まき	舌こ貝根(無文)→ ナデ	N6/灰	N7/灰白		中・少					口縁部 2/8	十載灰産
281	II-3IK	SD19	須臾器土器	鉢	指押まき→ヨコナデ	同底→ラケズリ	25Y8/2 灰濁	25Y8/3 に染濁	中・普	細・普		128.0			小片	覆行着
282	II-3IK	SD19	須臾器土器	鉢	指押まき→ヨコナデ	同底→ラケズリ	25Y8/2 灰濁	10Y8/2 灰濁	細・普	細・少					小片	覆行着
283	II-3IK	SD19	土師質土器	壺	マメフ	マメフ	25Y8/4 に染濁	25Y8/4 に染濁	細・多						小片	
284	II-3IK	SD19	土師質土器	壺	指押まき→ナデ	同底→ラケズリ	25Y8/2 灰濁	25Y8/2 灰濁	細・中・多						小片	同底→覆行着
289	II-3IK	SD22	土師質土器	小皿	マメフ	同底→ラケズリ	10Y8/3 淡青	10Y8/2 に染濁	細・中・少			9.0	1.3	(6.2)	口縁部 2/8	
290	II-3IK	SD22	土師質土器	杯	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ	25Y8/4 淡青	25Y8/4 淡青	中・少	細・普		13.2	3.8	7.5	口縁部 2/8	
291	II-3IK	SD22	土師質土器	杯底部	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ	25Y8/4 に染濁	10Y8/2 に染濁	細・中・普	細・少					口縁部 2/8	
292	II-3IK	SD22	土師質土器	碗底部	マメフ	マメフ	10Y8/3 淡青	10Y8/3 淡青	細・中・少	細・少			6.0	5.6	5.6	片断系土師質碗小
293	II-3IK	SD22	須臾器	横	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ	N8/灰白	25Y8/1 灰白		細・無		15.0	5.1	5.0	口縁部 5/8	覆行着
294	II-3IK	SD22	須臾器	横	同底→ラケズリ	同底→ラケズリ	25Y8/1 灰白	25Y8/2 灰白		細・少					高台 3/8	覆行着
295	II-3IK	SD22	須臾器	横	マメフ	マメフ	N8/灰白	N8/灰白		細・少					高台 2/8	覆行着

第19表 土器観察表9

展示区画番号	調度名	通称名	単位	種類	図様	調度(外)	調度(内)	色調(外)・輪	色調(内)・貼土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	保存 状態	備考
296	II-3区 SD22	瓦器	瓦器	指押さえ→ヨコナテ	マメフ	NS 灰	NS 灰	NS 灰	NS 灰	(140)		細・黒	口縁部 1.8	
297	II-3区 SD22	土師瓦土器	瓦器	ヨコナテ	板ナテ	75YB4.2灰黒	75YB4.2灰黒	10Y57.01に赤・黄緑	10Y57.01に赤・黄緑			細・少	小片	
298	II-3区 SD22	埴土器	埴土器	同板ナテ	同板ナテ	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白		中・多 (29.4)	中・多	小片	土師瓦器
299	II-3区 SX13	埴土器	埴土器	板ナテ	指押さえ→ウケケズリ	5YR6.4に赤・黄	5YR6.4に赤・黄	75YB6.2灰黒	75YB6.2灰黒			細・少	口縁部 1.8	
300	II-3区 SX13	瓦器	瓦器	指押さえ→ヨコナテ→ ヘラミダキキ	同板ナテ	口縁部：ヘラミダキキ 足元のみ：竹筒灰・ フミダキ	同板ナテ	NS 灰	NS 灰	15.4	5.2	7.0	口縁部 4.8	
301	IV-4区 SX14	瓦器?	瓦器?	ヨコナテ	マメフ	75YB5.3に赤・黒	75YB5.3に赤・黒	75YB5.3に赤・黒	75YB5.3に赤・黒			細・少	小片	二次焼成
302	V-1区 SX15	土師瓦土器	土師瓦土器	同板ナテ	同板ナテ	75YB7.4に赤・黄	75YB5.3に赤・黒	75YB5.3に赤・黒	75YB5.3に赤・黒			細・少	(6.8)	二次焼成
303	V-1区 SX15	土師瓦土器	土師瓦土器	ヨコナテ	板ナテ	10Y58.3に赤・黄緑	10Y58.3に赤・黄緑	10Y58.3に赤・黄緑	10Y58.3に赤・黄緑			細・小	小片	
304	V-1区 SX15	土師瓦土器	土師瓦土器	板ナテ	板ナテ	10Y57.01に赤・黄緑	10Y57.01に赤・黄緑	10Y57.01に赤・黄緑	10Y57.01に赤・黄緑			細・少	小片	
305	V-1区 SX15	土師瓦土器	土師瓦土器	マメフ	板ナテ?	75YB6.4に赤・黄	75YB6.4に赤・黄	10Y57.01に赤・黄緑	10Y57.01に赤・黄緑			細・少	小片	
306	III-2区 SD26	土師瓦土器	土師瓦土器	格子型	板ナテ?	10Y58.3に赤・黄緑	10Y58.3に赤・黄緑	5YR6.6 黄	5YR6.6 黄			細・少	小片	
307	I-4区 SX16	下層	中国産輸入 磁器	同板→ウケケズリ	不明	不明	不明	単：5Y7.2灰白	貼土：5Y7.1灰白			細・黒	小片	白磁器片類
308	I-4区 SX16	下層	中国産輸入 磁器	同板→ウケケズリ	瓦器	不明	不明	単：5Y7.2灰白	貼土：75Y7.1灰白			細・黒	小片	白磁器Vないし黄緑
309	I-4区 SX16	下層	中国産輸入 磁器	ヘウ積み支	ヘウ積み支	不明	不明	単：10Y5.1灰白	貼土：75Y6.1灰			細・黒	小片	
310	I-4区 SX16	下層	中国産輸入 磁器	同板→ウケケズリ	同板→ウケケズリ	不明	不明	単：10Y5.1灰白	貼土：75Y6.1灰			細・黒	小片	
311	I-4区 SX16	上層	中国産輸入 磁器	同板→ウケケズリ	同板→ウケケズリ	不明	不明	単：75Y7.6成黄	貼土：75Y7.6成黄			細・少	(7.0)	小片
312	I-4区 SX16	下層	肥前産陶器	同板→ウケケズリ	同板→ウケケズリ	不明	不明	単：75Y7.6成黄	貼土：75Y7.6成黄			細・少	(4.2)	高台 2.8
313	I-4区 SX16	下層	土師瓦土器	マメフ	マメフ	5YR7.6 黄	5YR7.6 黄	5YR7.6 黄	5YR7.6 黄			細・多	小片	
314	I-4区 SX16	上層	土師瓦土器	板ナテ→ナテ	板ナテ	10Y58.4に赤・黄緑	10Y58.4に赤・黄緑	10Y58.4に赤・黄緑	10Y58.4に赤・黄緑			細・中・青	小片	
315	I-4区 SX16	上層	土師瓦土器	指押さえ	指押さえ	75YB5.3に赤・黒	10YR4.2灰黄緑	10YR4.2灰黄緑	10YR4.2灰黄緑			細・多	小片	
316	I-4区 SX16	下層	土師瓦土器	板ナテ	マメフ	10Y58.2灰白	10Y58.2灰白	10Y58.2灰白	10Y58.2灰白	現存長 15.4		一	一	
317	I-4区 SX16	下層	土師瓦土器	同板→ウケケズリ	指押さえ	ナテ	ナテ	75Y7.6成黄	75Y7.6成黄			細・中・青	小片	
318	I-4区 SX16	上層	土師瓦土器	ナテ	板ナテ→目目	不明	不明	10Y58.3成黄	75Y7.6成黄			細・少	小片	
319	I-4区 SX16	埴土器	埴土器	マメフ	マメフ	25Y7.1灰白	10Y58.2灰白	10Y58.2灰白	10Y58.2灰白			中・少	小片	口 土師瓦器
324	IV-1区 SX17	黒色土器	黒色土器	マメフ	マメフ	10Y58.3成黄緑	NS 灰	10Y58.3成黄緑	NS 灰			中・少	4.7	高台 交存 可能出土品?
325	IV-1区 SX17	中国産輸入 磁器	中国産輸入 磁器	同板→ウケケズリ	同板→ウケケズリ	単：25Y7.8 1灰白	NS 灰	NS 灰	NS 灰			細・黒	高台 2.8	高台の層に1.2層 貼土の層・砂付層
326	IV-1区 SX17	陶器	陶器	同板→ウケケズリ	目目	25Y8.3成黄	25Y8.3成黄	25Y8.3成黄	25Y8.3成黄			細・少	(11.0)	底径 2.8
327	IV-1区 SX17	土師瓦土器	土師瓦土器	マメフ	マメフ	10YR4.2灰黄緑	10YR4.2灰黄緑	10YR4.2灰黄緑	10YR4.2灰黄緑			細・少	小片	
328	IV-1区 SX17	土師瓦土器	土師瓦土器	指押さえ→ナテ	板ナテ	不明	不明	75YB6.4に赤・黄	75YB6.4に赤・黄			細・少	口縁部 1.8	

第20表 土器観察表 10

調査年度 調査番号	調査区名	遺跡名	層位	種類	器種	調整(外)	調整(内)	色調(外)・輪	色調(内)・胎土	石灰 灰白	形状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	備考
329	Ⅱ-1区	SK17	土師質土器	足筒	ナデ	—	不明	0052/4に赤黄緑	—	細・中・普	細・少	8.5			—	
330	Ⅱ-1区	SK17	土師質土器	修飾ハカ ナデ	ナデ	不明	不明	75Y85/4に赤黄 胎土:75Y81/灰白	75Y85/4に赤黄	中・普	細・少	(14.4)			小片	白磁質土器
334	Ⅱ-1区	遺構外	中国産輸入 磁器	同形へラケズイ	同形へラケズイ	花紋(飾)	不明	胎土:75Y81/灰白 胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白		細・無				小片	白磁質V-4b類
335	Ⅱ-1区	遺構外	中国産輸入 磁器	不明	不明	不明	不明	胎土:75Y81/灰白 胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白		細・無				小片	
336	Ⅱ-1区	遺構外	土師質土器	小皿	同形ナデ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	細・中・普	細・少	7.8	1.6	4.0	完好	
338	Ⅱ-1区	遺構外	土師質土器	小皿	同形ナデ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	細・中・普	細・少	(11.6)	2.6	(6.2)	口縁部 3.8	
339	Ⅱ-1区	遺構外	土師質土器	杯	同形ナデ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	細・少	中・少	(15.0)			小片	
340	Ⅱ-1区	遺構外	土師質土器	杯	同形ナデ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	細・少	中・少	(15.0)			小片	
341	Ⅱ-1区	遺構外	中国産輸入 磁器	同形へラケズイ	同形へラケズイ	花紋(飾)	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白		細・無				口縁部 2.8	
342	Ⅱ-1区	遺構外	中国産輸入 磁器	同形へラケズイ	同形へラケズイ	花紋(飾)	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白		細・無				小片	分断不明
343	Ⅱ-3区	遺構外	土師質土器	土玉	マメツ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	中・普				4.8	高付 交互	胎土 交互
344	Ⅱ-3区	遺構外	土師質土器	土玉	マメツ	同形ナデ	不明	胎土:75Y81/灰白	胎土:75Y81/灰白	中・普				最大長 2.4	最大厚 1.1	交互

第21表 土器観察表11

調査年度 調査番号	調査区名	遺跡名	層位	種類	器種	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(胎土)	色調(内)	形状	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	備考
197	Ⅱ-4区	SR02・SR03 分岐部分	土師質土器	15層瓦	平瓦	平行印あり?マメツ	布目?マメツ	5YR6/8黄	5YR6/8黄	5YR6/8黄	細・中・少	5.2	7.1	2.6	破片	胎土 交互
285	Ⅱ-3区	SK19	土師質土器	瓦	平瓦	布目	布目	N 5/灰	75Y81/灰白	75Y81/灰白	細・少	8.6	7.9	1.9	破片	胎土 交互
286	Ⅱ-3区	SK19	土師質土器	瓦	平瓦	布目	布目	75YR2/1黄	75YR2/1黄	75YR2/1黄	細・少	10.9	10.0	2.0	破片	胎土 交互
331	Ⅱ-1区	SK17	土師質土器	瓦	丸瓦	マメツ	布目	75YR5/1黄	75YR5/1黄	75YR5/1黄	細・少	10.8	8.5	2.0	破片	胎土 交互
332	Ⅱ-1区	SK17	土師質土器	瓦	丸瓦	マメツ	布目	75YR5/1黄	75YR5/1黄	75YR5/1黄	中・少	11.6	9.7	2.1	破片	胎土 交互
333	Ⅱ-4区	SK27	土師質土器	瓦	平瓦	マメツ	マメツ	N 8/灰白	5YR7/1黄	5YR7/1黄	細・無	3.3	4.6	1.4	破片	胎土 交互

第22表 瓦観察表

種別	区分	回数番号	調査区名	遺構名	部位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石種	備考
6			V-1区	SK05		石礎丁	31	46	9	14.86	中スカイト	
8			Ⅱ-3区	SK08		石礎	24	15	4	1.64	中スカイト	凸蓋式
31			Ⅰ-3区	SR01		石礎未製品?	28	25	6	4.16	中スカイト	
32			Ⅰ-3区	SR01		石礎未製品?	48	36	11	25.02	石礎	
33			Ⅰ-3区	SR01		石礎	22	17	2	0.61	中スカイト	凹蓋式
34			Ⅰ-3区	SR01		石礎	74	71	22	120.67	中スカイト	
39/17			Ⅰ-3区	SR01	灰化材包拵	石礎	46	25	4	3.38	中スカイト	凹蓋式
40/17			Ⅰ-3区	SR01	灰化材包拵	石礎	45	14	5	3.21	中スカイト	凹蓋式
41			Ⅰ-3区	SR01	灰化材包拵	スズレイバー未製品?	55	57	7	21.25	中スカイト	凸蓋式
42			Ⅰ-3区	SR01	灰化材包拵	スズレイバー未製品	36	23	4	3.04	中スカイト	
43			Ⅰ-4区	SR01	上層	石礎	33	14	3	1.64	中スカイト	凹蓋式
47			Ⅰ-4区	SR01	下層	石礎	25	15	4	1.34	中スカイト	凹蓋式
48			Ⅰ-4区	SR01	下層	石礎	25	8	4	0.72	中スカイト	
49			Ⅰ-4区	SR01	下層	石礎丁未製品?	46	29	10	14.46	中スカイト	
56/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	44	20	9	0.45	中スカイト	1-1期、複合資料1
57/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	21	14	9	2.26	中スカイト	1-1期、複合資料1
58/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	42	14	9	1.19	中スカイト	1-1期
59/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	47	21	13	4.08	中スカイト	1-1期
60/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	37	25	14	4.83	中スカイト	1-2期
62/18			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	25	20	12	2.53	中スカイト	1-2期
63/18・19・20			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		打面調整削片	22	13	7	0.83	中スカイト	1-2期
64/18・19・20			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	26	18	4	1.22	中スカイト	複合資料2
65/18・19・20			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	103	56	17	61.8	中スカイト	複合資料2
66/18・19・20・21			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	66	48	8	16.93	中スカイト	複合資料2
67/18・19・20・21			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	18	21	5	1.57	中スカイト	複合資料2
68/18・19・20・21			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	41	52	7	12.91	中スカイト	複合資料2
69/21・22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	127	67	8	61.78	中スカイト	複合資料2
70/21・22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	63	42	7	13.39	中スカイト	複合資料3
71/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	52	40	5	9.72	中スカイト	2期、複合資料4
72/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	29	26	4	2.12	中スカイト	2期、複合資料4
73/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	41	27	3	2.67	中スカイト	2期、複合資料5
74/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	20	19	10	0.5	中スカイト	2期、複合資料5
75/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	72	46	6	16.7	中スカイト	2期
76/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	56	37	5	9.86	中スカイト	2期
77/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		削片	34	27	5	4.07	中スカイト	2期
78/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		石礎	40	29	9	12.78	中スカイト	4期
79/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		石礎	30	20	6	4.9	中スカイト	4期
80/22			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		石礎	46	39	6	9.46	中スカイト	4期
81/23			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		スズレイバー未製品	66	43	6	17.49	中スカイト	5期
82/23			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		スズレイバー未製品	68	37	5	13.16	中スカイト	5期
83/23			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		スズレイバー未製品	66	47	6	16.44	中スカイト	5期
84/23			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		スズレイバー未製品	104	64	9	53.78	中スカイト	5期
85/23			Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		スズレイバー未製品	60	31	7	11.07	中スカイト	5期

第23表 石器観察表1

標文 番号	回収番号	調査区名	遺構名	部位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
86/23		Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		磨製銅片 (スズレインバー未製品)	103	76	10	86.88	ササカイト	接合部材6
87/23		Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		磨製銅片	59	63	9	22.62	ササカイト	接合部材6
88/23		Ⅰ-4区	SX02 (SR01内)		銅長銅片	157	101	17	196.21	ササカイト	5
89/23		Ⅱ-3区	SR01		銅平片/石片	39	34	11	44.4	片岩	風通直上継ぎ
90		Ⅱ-3区	SR01		火打石	21	16	5	1.39	ササート	風入?
97/24		Ⅱ-3区	SR01		磨製銅片	84	60	11	53.43	ササカイト	
98/24		Ⅱ-3区	SR01		銅長銅片	121	41	11	42.46	ササカイト	
99/24		Ⅱ-3区	SR01		石鏝未製品	47	27	6	6.72	ササカイト	凹底式
100/24		Ⅱ-3区	SR01		石鏝未製品	44	29	6	5.14	ササカイト	
101/24		Ⅱ-3区	SR01		石鏝未製品	36	33	10	9.63	ササカイト	
102/24		Ⅱ-3区	遺構外(SR01の可能性が高い)		石鏝	35	23	6	4.23	ササカイト	凹底式
103/24		Ⅱ-3区	遺構外(SR01の可能性が高い)		石鏝	30	18	6	2.38	ササカイト	凹底式
104/24		Ⅱ-3区	遺構外(SR01の可能性が高い)		石鏝未製品	32	16	7	4.25	ササカイト	
188/29		Ⅰ-1区	SR03		本分銅片/石片	75	43	35	153.48	片岩?	広面に顕著な付着痕跡及び腐蝕痕
189/29		Ⅰ-1区	SR03		砥石?	78	49	23	124.34	頁岩?	凹底式
190/29		Ⅰ-1区	SR03		石鏝	25	14	4	1.24	ササカイト	
191/29		Ⅰ-1区	SR03		石鏝丁未製品	79	59	8	45.82	ササカイト	
192		Ⅰ-1区	SR03		磨製銅片	25	47	10	29.79	ササカイト	
213		Ⅰ-1区	SR04		石鏝	25	21	3	2.3	ササカイト	
218/29		Ⅱ-1区	SK06		碧玉	25	10	10	4.16	碧玉	
287		Ⅱ-3区	SD19		石鏝	23	16	5	1.48	ササカイト	
288/32		Ⅱ-3区	SD19		砥石	73	53	39	205.75	不明	各面に腐蝕痕有
320		Ⅰ-4区	SX16		火打石	28	22	7	5.23	ササート	
321		Ⅰ-4区	SX16		柱状片/石片	101	40	40	75.48	片岩	
322/32		Ⅰ-4区	SX16		石鏝丁	69	44	10	62.96	ササカイト	
323		Ⅰ-4区	SX16		石鏝丁未製品	69	43	8	31.26	ササカイト	
337		Ⅰ-3区	遺構外		石鏝未製品	44	39	9	151	ササカイト	

第24表 石器観察表2

標文 番号	回収番号	調査区名	遺構名	部位	器種	調整(外)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	残存率	材質	備考
217/29		Ⅱ-1区	SK06		八幡鏡	鏡背(華文文)	47	42	2	2.8	青銅	凹底

第25表 青銅器観察表





対象地遠景 南より



対象地遠景 東より



対象地近景 南より



対象地近景 北より



I-1区全景  
南より

※SR 03 西肩付近



I-2区全景  
南より

※左：SR 03 東肩  
右：SR 02 西肩



II-1区・I-3区全景  
北より

※左：SR 01 西肩  
右：SR 02 東肩



I-3・I-4区全景  
北より

※SR 01 北端部付近



II-1区全景  
北より

※SR 02



I-3区・I-4区・  
II-1区・II-3区全景  
南より

※中央：SR 01  
左：SD 10、右：SD 19



Ⅱ-3区 SR01・SD19  
南より

※中央：SR01、右：SD19



Ⅱ-3区全景  
東より

※手前：SB05  
中央：SD19、奥：SR01



V-1区全景  
東より

※手前：SR03西肩  
中央：SR04、奥：SX01



Ⅲ-3区全景  
南から

※手前：SX10、中央：SB01



Ⅱ-3区南半全景  
北から

※中央：SD19



Ⅳ-2区中央付近  
北西より

※SX19・20



Ⅲ-2区全景  
南より



Ⅳ-1・2区全景  
西より

※SR 04



Ⅳ-2・3区全景  
西より

※手前：SD 13  
奥：SR 02・03分岐部分



I-1区南壁土層断面  
北より

※壁面土層③ (SR03)



I-2区南壁土層断面  
北より

※壁面土層⑦ (SR03)



I-2区北壁土層断面  
南東より

※壁面土層④ (SR03)



I-3区南壁土層断面  
北より

※壁面土層⑩ (SR 02)



I-3区南壁土層断面  
北より

※壁面土層⑩ (SR 01)



I-4区南壁土層断面  
北東より

※壁面土層⑬ (SR 01)



Ⅱ-2区南壁土層断面  
北西より

※壁面土層⑨ (SR 02)



Ⅱ-3区北壁土層断面  
南より

※壁面土層 (SR 01)



Ⅳ-1区南壁土層断面  
北西より

※壁面土層 (SR 04)



Ⅳ-2区南壁土層断面  
北より

※壁面土層 (SD 14)



Ⅳ-3区南壁土層断面  
北西より

※壁面土層  
(SR 02・03分岐部分)



Ⅳ-4区中央部  
北西より

※壁面土層 (SD 21)



V-1区南壁土層断面  
北西より

※壁面土層  
(S R 04 西肩付近)



V-1区南壁土層断面  
北西より

※壁面土層  
(S X 01 西側付近)



V-2区北壁土層断面  
南西より

※壁面土層 (S R 03)



Ⅲ-3区SP 51 (52)  
(SB 01) 土層断面  
北より

※掘り方未掘削



Ⅲ-3区SP 53 (54)  
(SB 01) 土層断面  
北より

※掘り方未掘削



Ⅲ-3区SB02・SA01  
西より



I-3区SR01  
炭化材出土状況  
北より

※SR01上層



I-4区SX02(SR01内)  
サヌカイト出土状況

※SR01上層



I-4区SX02(SR01内)  
サヌカイト剥片出土状況

※SR01上層



I-4区 SX02(SR01内)サヌカイト剥片出土状況 北より



V-1区 SX 01 西より



V-1区 SX 01 北より



V-1区 SX01中央ビット 北より



IV-1区 SD11・12 北より



I-1区 SR 03 遺物出土状況 (130)



I-1区 SR 03 遺物出土状況 (131)



I-1区 SR 03 墨書土器出土状況 (166)



Ⅳ-1区 SR04 土器出土状況 (209) 東から



Ⅱ-3区 SB 05 西より



Ⅱ-3区 SD 19 全景 南より



Ⅱ-3区 SD 19 土層断面 北より (f-f')



Ⅱ-3区 SD 19 断面 南西から (g-g')



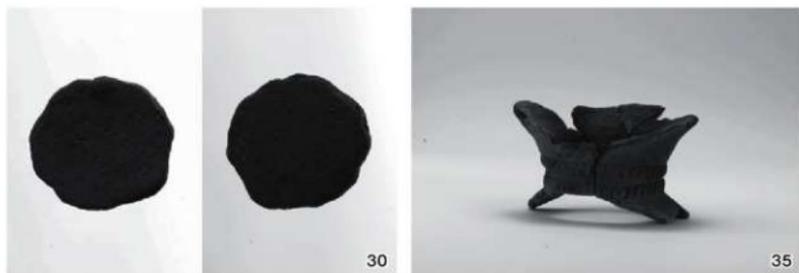
Ⅰ-4区 SD 22 南より



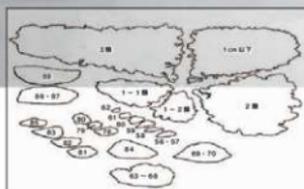
Ⅴ-1区 SD17 (偶跡目足跡検出状況) 北より

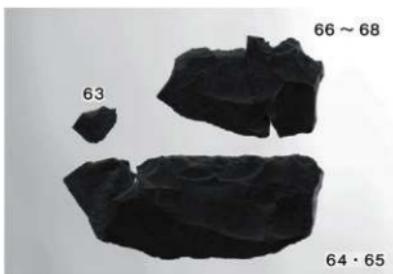
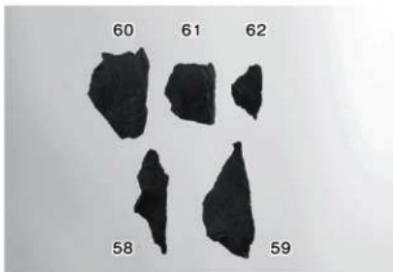
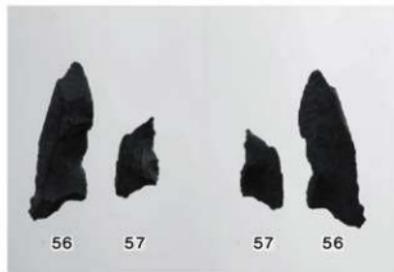
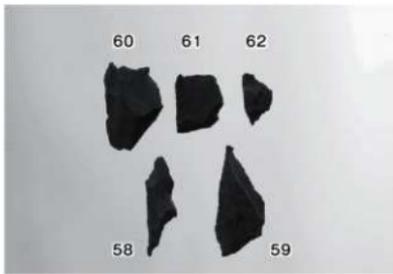


Ⅳ-1区 SX 17 北より

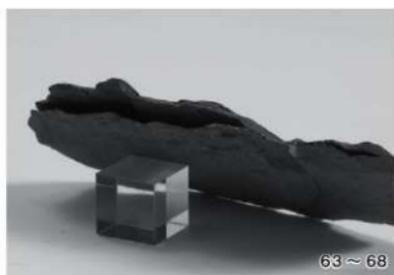
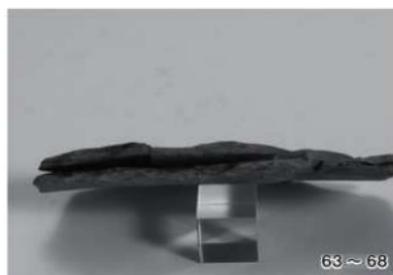
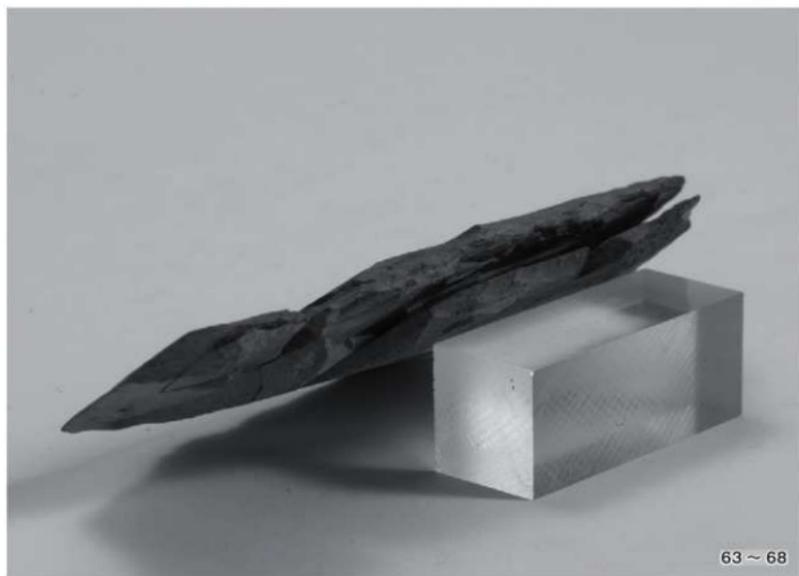


石器集合  
出土遺物 1

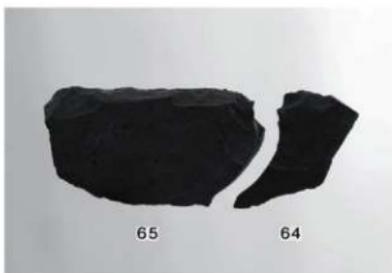
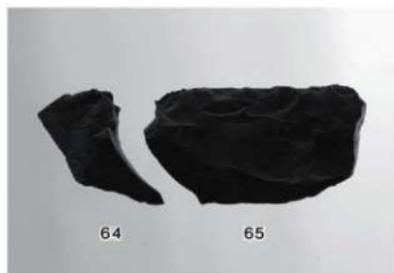
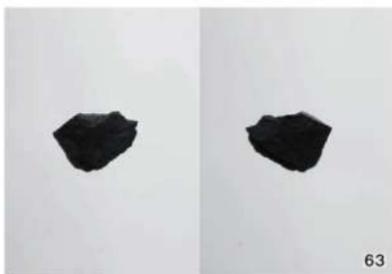
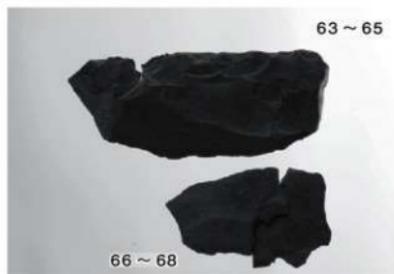
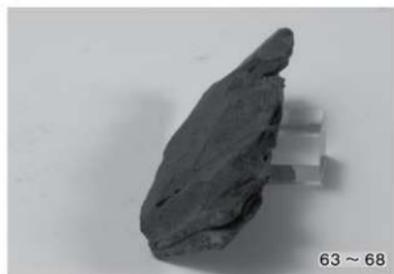




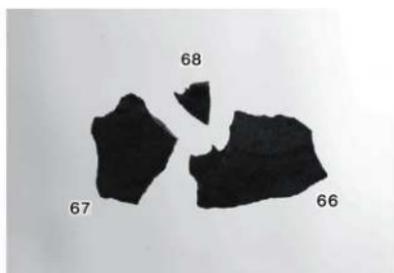
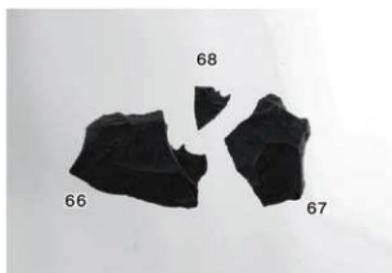
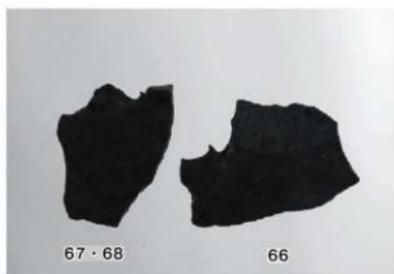
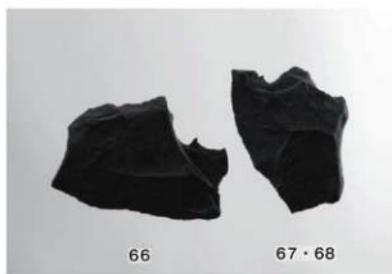
出土遺物 2



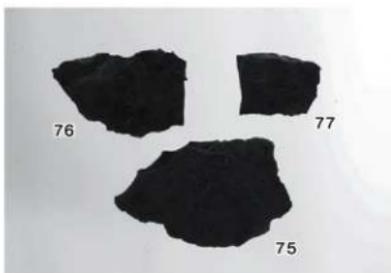
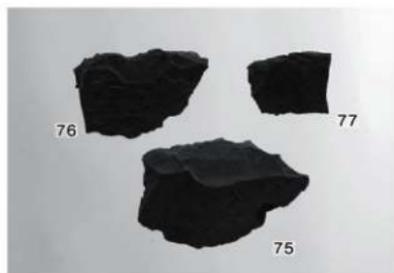
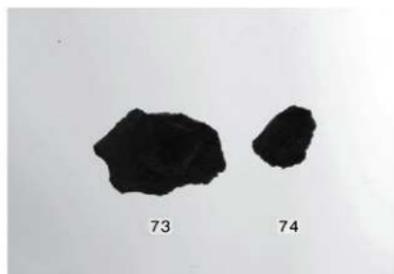
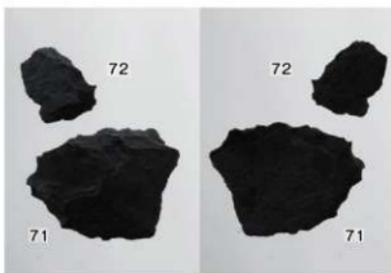
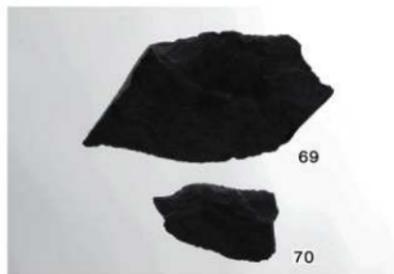
出土遺物 3



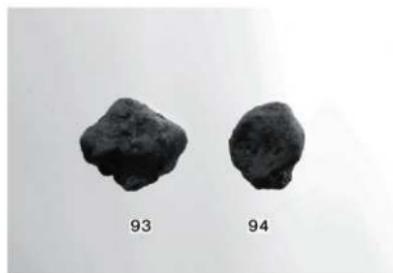
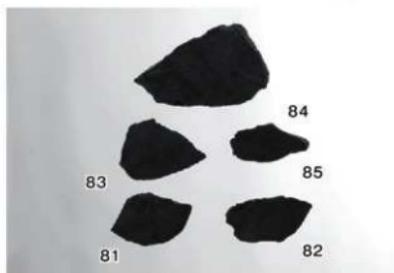
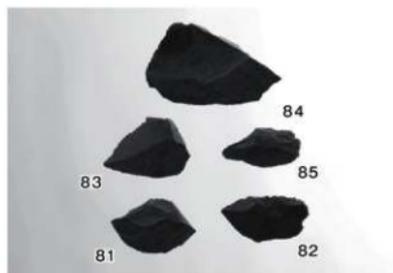
出土遺物 4



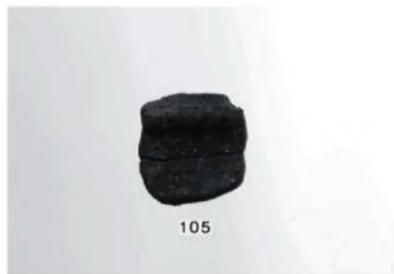
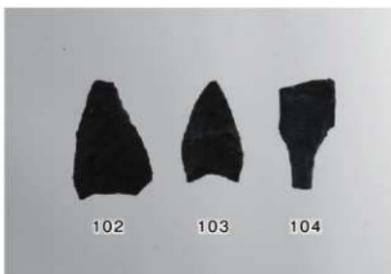
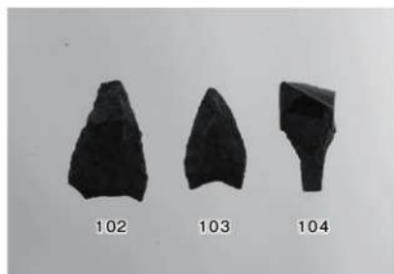
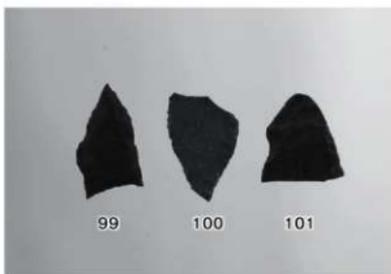
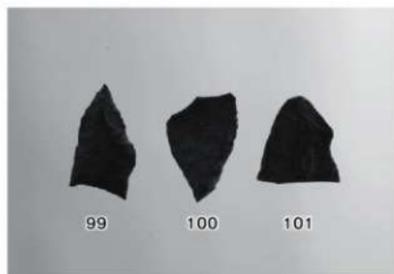
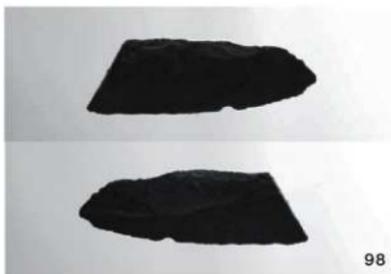
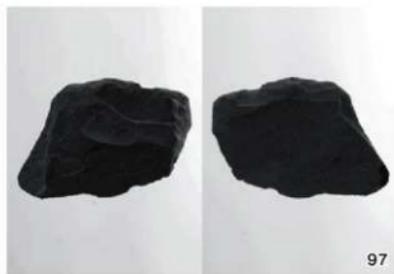
出土遺物 5



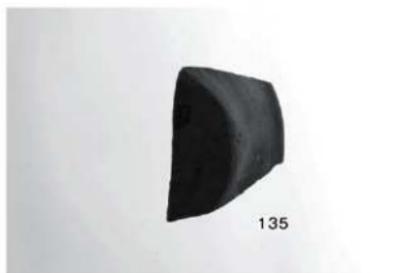
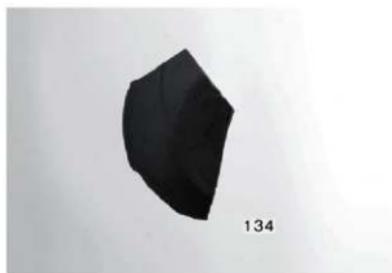
出土遺物 6



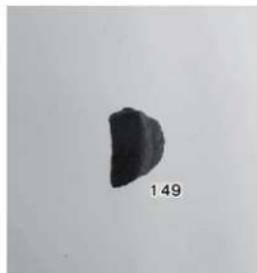
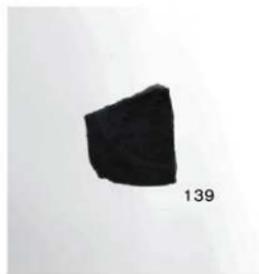
出土遺物 7



出土遺物 8



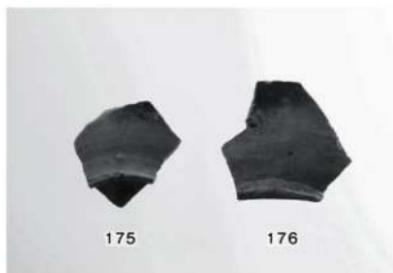
出土遺物 9



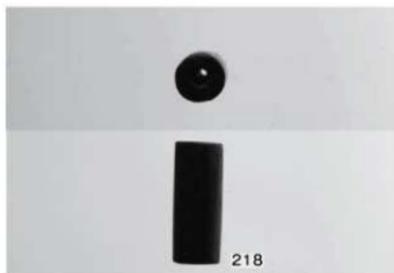
出土遺物 10



出土遺物 11



出土遺物 12



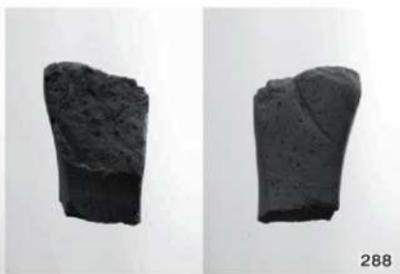
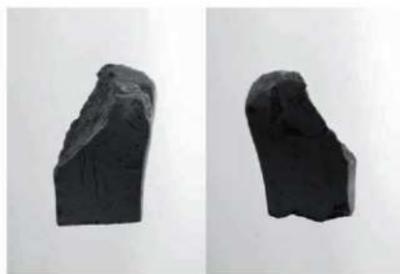
出土遺物 13



出土遺物 14



出土遺物 15



出土遺物 16

# 報告書抄録

ふりがな	たひまつばやしせいせき							
書名	多肥松林遺跡							
副書名	高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松本和彦(編), 株式会社 イビソク							
編集機関	香川県教育委員会							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 TEL. 0877-48-2191 FAX 0877-48-3249							
発行年月日	2016年2月29日							
総項数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	
216頁	14頁	150頁	14頁	38頁	134枚	184枚	1枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふりがな 多肥松林遺跡	かがひけんたかまつし 香川県高松市 たひまつばやし 多肥上町	37201	775	34° 17' 39"	134° 03' 16"	19940601 ～ 19950331	5,900	高松土木 事務所新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
多肥松林遺跡	集落	弥生時代/ 平安時代/ 鎌倉時代	掘立柱建物 2(3)、堅 穴建物? 1、自然流 路 4/ 掘立柱建物 1、八稜 鏡埋納土坑 1/ 掘立柱建物 1	弥生土器、石 器、土師器、 須恵器、黒色 土器、土師質 土器、瓦器、 吉備系土師器	石器製作後のサヌカイト剥片の一 括投棄(弥生時代中期中葉)。 県下では最多となる墨書土器 19 点 が出土(平安時代前期末～中期初 頭)。 多量の瓦器出土(鎌倉時代初頭)。			
要約	調査地中央部を旧河道が縦断し、4条の自然流路を検出した。弥生時代から流下し、埋没時期は異なるが、最終的には平安時代中期初頭に埋没する。S R 01の上層からは弥生時代中期中葉に属し、石器製作後に一括投棄したサヌカイト剥片が出土し、接合資料は6点を数える。S R 03からは9世紀末～10世紀前葉の墨書を認める須恵器・黒色土器19点を検出した。釈文は「本」「原」等がある。流路は灌漑水路の主水源となり、齋申等の木製品と墨書を用いて水路維持に伴う祭祀を執り行った可能性が高い。また、鎌倉時代初頭の溝からは多量の瓦器が出土した。遺物組成の6割を占め、高松平野では極めて高い組成比率を示す。供膳具比率が9割を占め、燈明具を使用とする等、他の集落とは異なる生活スタイルが想定できる。陸上交通網の要所に位置し、物資流通の中継地としての機能を有した場所であったと考えられる。							

高松土木事務所新設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

## 多肥松林遺跡

2016年2月29日

編集 香川県埋蔵文化財センター  
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4  
Tel 0877-48-2191  
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp  
発行 香川県教育委員会  
印刷 株式会社 成光社

